ＩＳサードな幼馴染？

鎧竜機

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳサードな幼馴染？

【Ｎコード】
Ｎ６６３１Ｓ

【作者名】
鎧竜機

【あらすじ】
死んで転生したら性転換してるわＩＳの世界に行ってオリ主が奮闘する物語です作者は初めてなので文が短いのであと原作やキャラの崩壊は避けようと思います原作道理かつオリジナルでいきたいです暖かい目で見てください

プロローグ（前書き）

初説です楽しんでいただければ幸いです

プロローグ

「ここは、何処だ？」

そこは真っ白い空間。俺はポツンとそこに座っていた。

たしかおれは、仕事帰りに車に引かれて死んじまったはずなんだが……

もしかしてあの世ってやつか？

「その例えで結構だ」

後ろから声がした振り向くと、黒髪の少年がいた歳は大体１５歳ぐらいか？

見覚えのある顔だ。

「おまえは誰だ？」

おれは、そう少年に質問した。

少年は答えた。

「おまえらが言う、神（かみ）みたいなものだ」

「……神だと？」

……意味がわからん、本当にこいつが神なのか？そもそも本当にここはあの世なのか？

どうして俺はここに連れてこられたんだ？俺はいったいどうすれば……

「考え事多いなぁ……まあ、いいかじゃあそれに答えてやるよ」

心を読まれた!?本当に…神…なのか…?

「お前が言う、神様っつうの俺で間違いねえよ。あとここは俺の聖室だ」

「ここでは病気や寿命、事故なんかで死んだ人間を天国か地獄に送る場所だ
まあ、簡単にいうと閻魔の判決下すとこだとおもってくれ」

なるほど、ここは死んだ人間をおくる場所なんだな……じゃあ、おれは……

「天国か地獄に行くのか?」
「答えは、NOだ」

……なに?じゃあおれはなんの為にここにきたんだ?

「うちの部下が失敗してな……本来死ぬはずじゃなかった人間を死なせてしまったんだ……」
「……ということはおれは死なないはずだったてことか?」
「そういうことだな」

うおい!?じゃあなにか、おれは間違って殺されたんかい?!

「あ~すまん部下には罰則言い渡したからそれで許してくれ」

神はめんごめんごしながら謝ってきた、おい、よけい許せなくなっ

てきたぞ

「わりぃってお詫びといっちゃあなんだが転生させてやるよ」

転生？

「そ、転生だ」

転生ねぇ……

「ランダムでいいやあとお任せで」

投げやりにいった

「うおおおぉい！！？？それでいいのか！？ハーレムやチートボディとか決めなくていいのか！！？？」

急に大声だすな、だいたい

「チートとかあまり好きじゃあねえしよ、女がいても幸せにできるかわかんねぇ……」

生きてた頃は、頭悪いしヘタレだったしなぁ

「……本当に俺が決めていいのか？」

神がちょっと不安そうにいってきた。

「別にいいさそれに……」

おれは、神を見ながら言った

「あんたとは長い付き合いになりそうだし、信用できそうだ」

神が口をぽかんとあけたあと大声で爆笑した

「あっはははははははー！！！お前みたいなの初めてだぜ！！いいぜ、任された！！！！」

「たのむ」

「じゃあ、さっそく」

「え？」

ブゥン！！！

「は？」

「行って来い」

おれの下にぽっかりと空いた穴できて、おれは……

「てっいきなりかよぉおおおお！！！！！！？？？？」

「第二の人生楽しんでこ～い」

神が穴の上から手を振っていた、いまさら気づいたが神の容姿って……

「ＩＳの一夏じゃねぇかあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

こうしておれの意識は、闇に落ちた……

プロローグ（後書き）

なにかと不器用なところはありますが長く書けるよう頑張ります

第一話「落とされた先は……」（前書き）

なんとか一話つくりました短いですが……
とにかく長く書けるように努力します

第一話「落とされた先は……」

突然だが聞いてくれ、俺は今第二の人生を歩んでるところだ……
と、いっても歩むどころかはいはいもできない状態だ、なぜかって？

「ぁあぅううあっぁぅう、《赤ん坊だからさ！！！！》」

「あなた～元気な赤ん坊ですよ～」

おお～この人が俺の新しい母さんか～ネ○まの○雨に似てるな～

「千雨。俺にも娘の顔を見せてくれ」

てっ名前も同じかい父さんのほうはなんかガンシューの○ョルジョ・○ルーノに似てる

「はい、どうぞ」

おお～父さんの顔、近くでみると渋いなぁ…ん？
父さん、さっきなんていった？

「千雨。俺にも娘の顔を見せてくれ」……

あれ？おれ、女なの？

「千雨似にてこの子は美人になるぞ～」

「まあ、あなたったら♪」

マジだった……
まさか女になるとは思いもしなかった
神に任せたの失敗だったか？

「千雨。娘の名前は決まったのか？」

お？

「ええ、もう決めてあります」

俺の名前か～なんだろう？

「千夏、千夏（ちか）・棗（なつめ）・ガッティーノよ」

……な、なげぇ…てかおれ、外国人のハーフなのね……

「千夏か……いい名だ…」

そういって父さんは、俺を抱き上げた
父さん背たけえなぁ

「いいかい千夏、今日からお前はイタリア共和国大統領エンリコ・ガッティーノの娘だ！」

マジですか！？

第一話「落とされた先は……」（後書き）

いかがでしたが少し楽しめたらいいんですけど……

第二話「いきなりの出会い」（前書き）

作者「すいませんオリ主に苦労をかけます」

千夏「いや、あたしはまあいいんだけどよ…短すぎねえか？」

作者「これが今の作者の限界です……」

千夏「…まあ、今は転生ライフを楽しむさ」

作者「読者皆様も気軽に見てもらえると嬉しいです」

千夏「よろしくな～」

第二話「いきなりの出会い」

「あれから六年の月日が流れ、あたしは六歳になった。
最初は、何処の世界に落とされたか分からなかったけど、ここがＩＳ（インフィニット・ストラトス）の世界であることが分かった。
なぜならある時、世界中のミサイルが日本へと降り注いだからだ。
この事件を、ミサイル全てたたき落とすっつー力技で解決したのが、今まで見向きもされていなかったＩＳだ。
当然、世界中が新兵器ＩＳに注目し、こぞって手に入れようとした。
勿論、我が母国イタリアもだ。
てな訳で、うちの国にもＩＳコアが送られてきたらしい。
正直言って、こんなカオスな兵器を作らないで欲しいよ。
篠ノ之博士……。

「…さて、どうなる事やら……」

ああ、そうそうあたしが最初は女であることに戸惑ったが、もうだいぶ慣れた。あたしが自分のことを俺といったらなぜか母さんが怒った。なして？
母さんがいうには、女の子は俺とは言わんらしい母さんは父さんが教えたと思って父さんはしかられてへこんでいた。父さんマジごめん！
まあ、母さんを怒らせたくないので直すことにはしたが……

「まだ、慣れないんだよなあ、これが…」

いまは女なので慣れるしかない。父にも母に迷惑かけたくねえしなそれに……

「原作介入はどうしよう？」

そう、『原作の介入である。』たしか原作ではイタリアの候補生はいなかったと思う。

ということは、原作ではイタリアは目立ったＩＳは開発されてないということになる。

となればあたしが、ＩＳ学園に行く可能性は、無くなるかもしれない。

まあ、父は、わたしにあまあまだから何とかなるだろう。

だが、ＩＳはどうする？

「う～ん、どうすれば……？」

原作に介入したくてもＩＳがなければ話にならない。

「まあ、なんとかなるかな？」

いろいろとポジティブ思考のオリ主だった……

部屋で考えこととしてると…

「千夏～ご飯よ～降りてきなさ～い」

と、母さんの声が聞こえた。

「は～い、今行きま～す」

まあ、考えるのは飯くったあとでいいか、

あたしはいま日本に住んでいる、なぜかはおいおい説明するとして。

下に降りると台所では、母がキッチンで唐揚げをあげていた。うん、

うまそうだ
テーブルには、日本の和食が並んでいた。

「千夏〜ご飯よそって〜」

わたしはうなずいて

「わかりました、母さん」

なぜ敬語なのかは、体は六歳とはいえ中身は二十六はこえているからだ
年は母や父より上だけど、実質両親なので敬意は払う、近所じゃあ礼儀正しいと評判だし、
いい子にしてて損はない

「それじゃあいただきます」

「いただきます」

あたしはごはんを食べたあと、母はあたしを幼稚園につれていった六歳の頃の記録である

六年後……

あたしは中学生になった、え？飛ばしすぎだって。いやいやあたしの小さい頃より早く原作に行きたいという作者の意向なのだ勘弁してくれ。
まあ、日本で生活してるのは母が日本人だからだ。父は、イタリアの大統領なので。
そうそう日本には来てくれない。てかこれない。父はなにかとマフィアやギャングと戦っているので、
これないのだ。何処の大統領魂だよ。〇タルウ〇フはもってないけど……
あたしと母が日本にいるのも、これが関係している。犯罪者達から家族を守るために、故郷に住ませたんだと思う。いい父親をもったもんだ。うん
とまあ、こんな感じであたしはジャパンライフを楽しんでいる中学校に行くと、新しく入る新入生が
ぞろぞろと学校の中に入っていく。あたしも式に遅れない為、小走りで向かったその時……

ドンっ

「うわっ」

「おっと」

やべ、だれかにぶつかっちまったあやまらねぇと…！

「す、すみません…ぶつかっちゃ…て…」

あたしは信じられないもの見た。だってぶつかってしまったのは……

「いや、俺も急いで走ってたからおあいこだ」

この先の物語で、主人公になる

「お…織斑…一夏？…」

織斑一夏だったからだ。

第二話「いきなりの出会い」（後書き）

そういえばオリ主の容姿説明してないような……？

第三話「知り合いから友達へ」（前書き）

感想に書いてあったアドバイスをもとに読みやすくそして分かりやすくして、
見たのですが。感想お願いします！！！！！！

第三話「知り合いから友達へ」

……え?、マジ?、な、なんでここに一夏が?
あれ~?もしかして、こいつは中学の頃ここに在籍してたのか?!
ど、どどどどうしよう、どう返事をすれば!?

「…なあ」

「は、はい!?、なんでしょう?!」

やばい…何か気に食わない事を、したのか!?
それとも変な奴だと、思われてしまったか?!
と、とりあえず、謝ったほうがいいかな?!それがいい。そうしよう!!

「え、え~とごめ「なんで、俺の名前、しってるんだ?」んなさ…
…へ?」
「いや、だから、なんで名前しってるんだ?」

……しまったあああぁぁぁぁ!!!!!!!!!
なに、してたんだあたしは!!!!
こっちはしってても向こうは知らないだろうがぁ!!!!
ど、どうごまかせば?!

「…もしかして、小学生の頃同じクラスだったか?」

ううぅ、どうすれば~…ん?
「く、クラス?」

「そ、同じクラスだったか？」

……光明が、見えた！！！！！

「そ、そうなんだよ。前のクラスで同じだったんだ。覚えてない？」

まあ、ごまかす為にいったから、覚えてるわけないよな…

「ああ、たしか名前の長い女子だったよな？たしか千夏・なんとかガッティだっけ？」

マジで同じクラスだったんかい！！！！！気づけよあたし！！！！！

「あ、アハハ、正確には千夏（ちか）・棗（なつめ）・ガッティーノな？」

覚えるならちゃんと覚えろよなぁ。

そんなんだから鈴が怒ったり、泣いたりすんだぞ、

てか、一夏は本当に女たらしだな。

ヒロイン達が苦労するのが目に見えてくるよ。無駄カッコいいし

」

「わりぃ、俺の事は、名前しってたからしってるよな？え～と……。

「ああ、あたしの事は千夏でいいぞ」

「わかった、じゃあ、俺の事も一夏でいいぜ」

「わかったよ、一夏」

うむ、仲良くなることには成功したぞ。

そういえば一夏が。この学校にいるということは、
鈴もいるってことだよな？

「じゃあ、よろしくな、千夏」

「よろしく、一夏」

挨拶をして握手をした
おお～まさか、原作開始前に友達になれるなんてあたしは、運がいい…って

「まずい、入学式に遅れる？！」

「いっけね、急ぐぞ！千夏！」

「お、おい！？」

いきなり手をつかまれてあせったがまあ、そこが一夏。朴念仁の極みというのか。
あまり気にしないのか一夏は、すたすたとあたしをひっぱって学校にはいった。
毎回こんな事が起きそうなので、もう気にしないでおこう、うんそうしよう

「ハア、こんなんだから一夏は苦労すんのに。自分で気づけよ……」

話込んでしまってもう正門には人っ子一人いなかったそのあと。
遅れてしまって先生にお叱りをうけたのは、
言うまでもない。

視点・「織斑一夏」

中学の入学式、おれは、正門の前で立っていた。

「今日から中学生かぁ…」

何となく吹いた言葉だったが、誰も素通りするだけで答えない。
セカンド幼馴染の鈴も先に行ってしまったせいか店にはいなかった。

「つーか、幼馴染の俺をおいて先にいくなよなぁ…」

ハァっとため息をつく、たくっなんで俺のまわりには　普通の女子がいないんだ……
まあ、ここで立ち止まっても仕方ないので、さっさと入学式終わらせて帰ろう。
と、走った時……

ドンっ

「うわっ」

「おっと」

だれかが、俺にぶつかってきた。てか入学式そうそう災難だぞ、ぶつかった方を見ると
女子だった。服装を見ると俺が通う学校の制服だった。同じ新入生か？
顔は日本人だが薄い茶髪にブルーの瞳が印象的な女性だ、ハーフだろうか？
と、おもってると。

「す、すみません…ぶつかっちゃ…て…」

「いや、俺も急いで走ってたからおあいこだ」

「お…織斑…一夏？」

ん？俺の名前をしってるのか？知り合いだったっけ？聞いてみるか。

「…なあ」

「は、はい！？、なんでしょう？！」

…なんか怯えているようで驚いてる顔だな、と、

「え、え～とごめ「なんで、俺の名前。しってるんだ？」んなさ…
…へ？」

ん？なにか言いかけたような…。

「いや、だから。なんで名前しってるんだ？」

女子は驚いた顔をした後、急に泣きそうな顔になった。
てっ俺、何かしたか？！入学式そうそう同じ新入生、泣かしたら洒落にならんぞ！？
て、この子どこかで見たような……あ。

「…もしかして、小学生の頃同じクラスだったか？」

「く、クラス？」

「そ、同じクラスだったか？」

その子はそれを聞くと花が咲くような笑顔になった。…うっ、結構可愛いな……

「そ、そうなんだよ、前のクラスで同じだったんだ。覚えてない？」

ふう～正解だったようだ、同じクラスだったのに忘れられるのは、悲しいもんな。……

「ああ、たしか名前の長い女子だったよな？たしか千夏・なんとかガッティだっけ？」

こいつの名前は、長いから覚えにくかったんだよなあ。

すると、そいつは苦笑いしながらも名前を教えてくれた。

「あ、アハハ、正確には千夏（ちか）・棗（なつめ）・ガッティーノな？」

うん、長い名前だ。とりあえず謝っとくか

「わりぃ、俺の事は名前言ってたから、知ってるよな？え～と……。」

「ああ、あたしの事は千夏でいいぞ」

「わかった、じゃあ、俺の事も一夏でいいぜ」

「わかったよ、一夏」

千夏は、笑顔で返事をした。うっこいつ、なんつーいい笑顔してんだ。
照れながらもなんとか握手をして。

「じゃあ、よろしくな、千夏」

「よろしく、一夏」

うむ、入学式で知り合いに会えたのはいいことだ。
すると千夏が回りを見回したあと顔を青くした。

「まずい、入学式に遅れる?!」

その、言葉にハっとして俺も周りを見ると千夏と俺以外誰もいなかった
俺はあわてて千夏の手を握ると

「いっけね、急ぐぞ1千夏!」

「お、おい!?」

千夏は少し顔を赤くして下を向いてしまった。風邪か?
と、それよりもいそがねえとっ!

「・・・、こん・・・から一夏は・・・のに。自分・・・けよ……」

千夏がなんかいったような気がしたが、いまは急ぐことだけを考えよう。

全力で走ったが結局遅れ、先生に怒られ、セカンド幼馴染には、ネタにされたのは言うまでもない。

第三話「知り合いから友達へ」（後書き）

母に句読点を少しならって書いてみたのですがどうでしょう？

第四話「乙女の気持ち？」（前書き）

第五話つくりました～けっこう長く出来たと思います

第四話「乙女の気持ち？」

入学式が終わり、あたし達新入生は、
クラスに分けられて教室に向かった。
教室に向かう為、歩いていると……

「千夏っ！」

「ん？」

後ろから声をかけられて、振り向くと。

「ああ、一夏か、」

一夏は小走りでこっちに向かってきて
あたしは一夏が来るまでまった、
そういえば挨拶してなかったな……

「おはよう一夏、どうしたんだ？」

「ああ、おはよう千夏お前はどこのクラスになったんだ？」

どうやらどこのクラスになったのか、聞きに来たらしい
とりあえず答えた。

「あたしは一年一組だ、」

あたしがそういうと一夏は

「そうか、俺と同じなんだな」

そういった。クラスは同じらしい。

「じゃあ、一緒にいくか？」

あたしは一夏を誘うと、

「ああ、いこうぜ」

と、言ってあたしの横に並んで教室に向かった……

教室に着くと、一夏が

「入学式なのに災難だったな」

「そうだな、入学初日で怒られたなんて初めてだ」

一夏は、自分の席に座りながら吹いた。

ちなみにあたしの席は一夏の隣だ。あたしは今、

一夏の机に寄りかかりながら喋っている

先の事を思い出して、前世でもそんなことなかったのに、

まったく恥をかいたと心の中で愚痴る

「だな…と、そういえばあいつはどこいったんだ？」

ん？あいつ？

「誰の事を言ってるんだ？」

「ん？ああ、幼馴染の事だ。あいつもここに入学したはずなんだが……」

あいつ、というのは鈴のことか？

まあ、たしかに原作でも一緒の中学だったからいるはずだよな？

あたしが、そう思っていると……

「イ～チカ！」

ドンっ！

「うおぉ！？」

「む？」

一夏の後ろから首にエルボーを繰り出されて机に突っ走った、うん痛そうだ

「鈴！！、いきなり何するんだ！？」

一夏が怒りながら、振り向くと……

「それ位耐えなさいよ男でしょ？」

男は関係ないだろ。と心で突っ込む

「無茶、いうな！首が取れるかとおもったぞ！！」

それは、あたしも思った。とまあ、これぐらいにして……

「一夏、大丈夫か？」

あたしは、一夏の首に手をおいてさすった。

「え？ああ、え、えとだ、大丈夫だ！大丈夫！！全然平気だ！！」

すこし顔が赤いなぁ、保健室いったほうがいいかな？

「無理するな、あとが残ったら大変だぞ？」

「ほんとに大丈夫だって！あととか残らないから安心してくれ！」

「そ、そうか？大丈夫ならいいんだが……」

とは、いうものの原作をしっている身としては、
一夏にあまり怪我してほしくないんだよなぁ。
なにかの手違いで原作が狂うと誰かが傷つくかもしれんし
なにより。

あたしが納得しない。
もうここは、小説の中の世界じゃない、現実だ
だから、あたしはこの世界で出来た友達を守る

そう決意を胸に刻んでいると

「ちょっと、アンタ」

「うん？」

声のした方に向くと……

「……」

「…え～と……」

ものすっっごく、あたしを睨んでいる原作のヒロインこと、凰・鈴（ファン・リンイン）音がいた

あれ？あたしまだなにも言ってないし、してないよね？

なんで睨まれてるんだ？。

「おい、鈴どうかしたか？」

一夏が鈴に話かけたおかげで、殺意混じりの目から解放された。一夏！グッジョブ！

「だれ……」

「は？」

「だれなのこの女はっ！？」

うおぉい、大声でいったら教室に響くだろ、

ほれ見ろ、何人かこっち見てヒソヒソしてるぞ

ハアっまったく入学初日から災難ばっかだ……

「リ、鈴落ち着け。な？」

一夏が、なだめると鈴は、

「……ふん！！」

鈴はそっぽを向いてしまった一夏は、面倒くさそーに頭をかいていた、

「…でっあんたは、誰なの？」

鈴があたしにいってきた若干目は睨んでいるが……

「え～と、千夏・棗・ガッティーノです」

恐る恐るあたしが言うと鈴は、

「ふ～ん、で？」

「はい？」

「あんたは、一夏の何なの？」

一夏のなんなのといわれても…

「えと、一夏とは……」

「一夏ぁ？」

本人が名前でいいって言ったんだよ!?

「あ、あのっえ～と」

怖い、マジで怖い……一夏の苦労がわかった気がする。
その頃一夏はというと……

視点「織斑・一夏」

な、なんで鈴は、あんなに千夏を睨んでるんだ?小学生の頃千夏と何かあったのか?
と、とにかく喧嘩になる前に止めないと……

「鈴、なんで千夏を睨んでんだよ?」

「……一夏、こいつとはどういう関係よ?」

矛先がこっちに向いてしまった…
千夏が若干涙目になりながらもこっちを向いて助けを呼んでいた。
ううん、そんな目で見るなよ。助けないわけには行かなくなるだろ?
俺は、勇気を振り絞って鈴に声をかけた。

「どうもこうも、友達だけれど?」

鈴が俺の回答を聞いたあと、再び視線を千夏に戻した
千夏は、一瞬ビクッとして鈴の目を見たそして

「……まあ、いいわ」

なにがいいんだよ、なにが。

と、俺は心の中で突っ込む

「はい」

「え？」

鈴が千夏に向けて手を差し出した、これはいったい？

「凰・鈴音（ファン・リンイン）よ、よろしく」

「あっああ、よろしく？」

鈴と千夏が握手をした。あれ？さっきの険悪なムードは？

「はあ、いちいち一夏の周りを気にしてたら気が滅入るからやめたのよ」

「あ、なるほど」

「おい、それはどういうことだよ？」

「「秘密よ《だ》」」

いったいなんだってんだ？

まったく女子の事は分からない。

俺は、仲良く話をしている二人を見ながら、

帰りに鈴の店で飯を食べようか考えた

第四話「乙女の気持ち？」（後書き）

ちょっと無理やりに仲良くさせちゃったでしょうか？
鈴ってこういう性格でいいのかな？

第五話「ＩＳと選択」（前書き）

やっと千夏のＩＳの話がだせました
この勢いにのってがんばります

第五話「ＩＳと選択」

学校の帰り、あたしは先に帰り一夏は鈴と、
そのあとすぐに知り合った五反田弾と一緒に鈴の店に行った。
一夏は誘ってくれたが母が夕飯をつくってくれてるので
また、今度誘ってくれといっておいた。
まあ、鈴が一夏を想っているのであまり邪魔すると
悪いしね、そしてあたしは家に帰った。

ガチャっ

「ただいまー」

玄関のドア開けて、帰宅を知らせた。

「お帰り千夏、学校は楽しかった？」

と、母が学校での事を聞いてきた。

「はい、楽しかったです三人ぐらい友達もできましたし」

母に学校での事を報告した

「そう、よかったわ♪」

母は、自分の事のように嬉しそうだ。

「あっそうそうお父さんから電話あるから後でかけてあげてね？」

父から電話？

「わかりました」

そう返事をした。

あたしは自分の部屋に戻って、すぐに携帯で父に電話をした。

何秒かして父とつながった。

「久しぶりだな千夏、元気にしてたかい？」

「お久しぶりです。父さん」

父が元気そうで何よりだ。携帯から聞こえる銃声が気になるが…

「で、父さんなにかあたしに用事があるんですか？」

と、聞いた、あっいま爆発音が聞こえたような……

「ああ、実はなそろそろ第三世代のＩＳが試験機が完成間近なんだ」

「本当ですか！？」

驚いた、まさかもう第三世代の運用までこぎつけたんだ……ん？まてよ。

「たしか、まだイメージ・インターフェイスができてなかったのでは？」

そう、その問題もあったせいかいまだ、第三世代は完成してなかったはずだ

それに、燃費の方も解決しないといけない。

「そうだったんだが、あるイタリア国内の企業が名乗りを上げたんだ」

「ある企業？それは？」

第三世代の開発に着手できる企業ってうちの母国にあったっけ？

「企業の名前は、オーメル・サイエンス社だ」

……あれ？どこか聞いたことある名前だぞ？

たしか、悪い意味で、何だろう？う～ん……

くっ！メインブースターがいかれただと！？

ハッ!?いまの電波はなに!?

「ん?どうかしたのか?千夏」

「いえ、なんでもありません電波を受信してしまっただけです、はい」

「そ、そうかい?」

「ほかにご用件は?」

「いや、要件はこれだけだ」

「そうですか、分かりました」

「ああっ千夏、体には気をつけるんだぞ?」

「父さんも怪我せず生き残ってくださいね?」

てか、父はいつも職場で戦ってんなぁ……
カラビニエリにいた頃が懐かしいのかな?

「またな、千夏」

「またです、父さん」

父とこうして話終えてあたしは、ベットに寝転んだ

「さて、準備は整ったってことかな?」

原作介入に必要なＩＳが手に入る、
あとの問題は……

「一夏の誘拐を阻止すべきか否か……」

一夏が誘拐されなくては、ラウラの入学フラグが立たない。
だからって今はもう友達である一夏を見捨てたくない。

「ままならないなぁ…本当に…」

こんなことなら、真面目に能力選ぶんだった

「本当にどうすれ…ば…いいん…だ…ろ…」

疲れがたまったのか、あたしは眠気に勝てずそのまま眠りについた。

第五話「ＩＳと選択」（後書き）

神が決めちゃったからどんなＩＳになるのかは千夏は、知らない
千夏は、はたしてこの問題にどーするのかそれじゃノシ

第六話「セカンド幼馴染の恋」（前書き）

作者「う～んキャラ達の性格って難しいですね」
千夏「お前が下手なだけだ」
　鈴「上手く書きなさいよ、バカ。
一夏「まあ、初心者だししかたないんじゃ？」
千冬「だからといって書きすぎだ……」
弾・蘭「「たしかに」」

作者「……鬱だ、死のう…」○ＴＬ

第六話「セカンド幼馴染の恋」

入学式から半年がたち、あたしは
学校で勉学に励んでいる。
そうそう、鈴とは名前で呼び合う仲になった。
いろいろあったが。いい仲に、なれてよかったよかった。
一夏も弾と結構仲良くしてたっけ。
授業が終わり。帰り仕度をしてると

「なあ、千夏の父親ってさあ」

「ん～？」

一夏が話かけてきた。

「イタリアの大統領なんだよな？」

「そうだけど？」

「どんな人なんだ？」

「どんなっていわれてもな～」

あたしが生まれた後、母にすぐに日本につれて来られたから
よく、わかんないんだよな～

「う～ん、まあ、武闘派、かな？」

「なんだそれ？」

「父さんは昔、カラビニエリに居て結構マフィアやギャング相手に戦ってたから、職場が恋しいんじゃないかな？」

「へえ、すごいんだな。千夏の父親は……」

「アハハ、まあ、そのせいで一緒にいれないんだよね……」

母もときどき父が恋しいのか物思いにふけってるんだよな…母と早く一緒に住めればいいのに……

「千夏…」

「あ～ごめん、暗い話して」

あまり一夏に心配をかけるわけにはいかないな。

「いや、大丈夫だ、じゃあ母親は？」

「母さんの話？」

「そ、どんな人なんだ？」

「そうだね～」

母さんの話か～、そうだな。

「母さんは日本の外交官で、その仕事先で知り合ったらしいよ？」

「へ～そうなのか」

「うん」

てか大統領の父を落とすとは……さすが母、ただもんじゃない。あ、そうだ

「ねえ、一夏、一夏のお姉さんの事教えてよ」

「千冬姉（ちふゆねえ）のことを？」

「そ、おしえて？」

実は千冬さんの事を結構知りたかったりする。
前世では好きなキャラだったし。

「そうだな、家じゃだらしないな、服も脱ぎっぱなしだな」

「へえ～案外、だらしないんだ」

原作を見て知ってはいたが、やはり家ではだらしないんだな。
一度一夏の家に招いてもらったけど、うん、すさまじいの一言だ。
あそこまでひどいのか！って思ったし千冬さんも見れたし。

「一夏、何を話してるの？」

「お、鈴か」

鈴がやってきた

「千冬さんの話をしてたんだよ」

「げ、千冬さんの話？」

あ～そういえば、鈴は、千冬さんが苦手だったっけ？

「まあ、鈴はよく千冬姉に怒られてるからな」

「う、うるさい！」

「まあまあ」

まったく一夏は、まいどまいど鈴を怒らせるんだから

「一夏、いちいち鈴を怒らせるなよ」

「わるい」

「まったく」

仲裁に入るあたしの身にもなれっての

「むぅ…まあ、いいわ一夏」

「なんだ？」

「帰りさ、ウチの店にいかない？」

一夏は、鈴からお誘いを受けた。

「ああ、いいぜ」

と、一夏は答えた。

「よし、じゃあさっさと行くわよ！」

急に上機嫌になった、ほんとに嬉しそうだ。だが一夏は、

「千夏も一緒に行かないか？」

うおぉい！？一夏、鈴が一夏を誘ってんだぞ！それ位察しろよ！！
ああぁ、鈴が見る見るうちに不機嫌に！？

「鈴もいいよな？」

「……別に」

「あは、あはははは……」

あ～鈴、頑張れ、あたしは応援してるぞ。
たく、一夏はどうしてこう毎回鈍いんだ。まったく……
あたしは苦笑いしながら鈴と一夏と一緒に鈴の店にいった。

視点・「凰・鈴音《ファン・鈴音》」

ここは、ウチの店の店内。
なのだが……

「……」

「……」

「……」

なんで無言で食ってんのよ!?
なにか言いなさいよ、一夏!!
そしてなんで千夏を誘うのよ!?
せっかく、あたしがさそったのに!!
……はあ、まあ、一夏の鈍感は今始まったわけじゃあないしね。

……ガタッ

一夏が席を立った。

「…あ～鈴？」

「なによ？」

一夏があたしに話しかけた。

「ちょっと手洗いにいってくる」

「勝手に行ったら？」

「あ、ああ」

一夏は返事かえして手洗いへ向かった後。あたしは千夏に聞いた。

「ねえ」

「なんだ？」

「アンタ、ほんとに一夏の事何とも思ってないの？」

「あたしと一夏はただの友達だっていったろ？」

「でも……」

あいつが千夏に向ける視線は、なんか違うのよね…
あたしが千夏に初めてあった時も、あいつが千夏に向ける視線は、
なんというか、暖かい目をしてたんだよね。

「安心しろ、お前の想い人を取る気はねえよ」ニヤニヤ

「な！？」

こ、こいつ何言ってるのよ！？

「まあまあ、否定すんなよ鈴」

「あ、あたしは別に……あいつなんか……」

「素直にならねえと何時までたっても振りむいてくれないぞ？」

「うっ」

た、たしかにそうだけど……

「素直になってもあいつが気づいてくるとは思えない…」

「あ～そりゃあ、たしかにな」

あの朴念仁の極みが簡単に振り向くとは思えない。

「告白した方が早いんじゃねえの？」

「そ、そんなことできないわよ！？」

「積極的にやらないと振り向いてくれないぞ、あいつは、」

「だ、だけど…」

「まあ、焦ってもしかたねえか」

「うん…」

はあ、なんであたしは、あいつを好きになっちゃったのよ……

「ま、頑張れ乙女」ニヤニヤ

「ううう…」

「ふう～ただいま、なにを話してたんだ？」

声を聞いて振り向くと一夏が戻ってきた。

「別に……」

「なんでもねえよ」

「？」

まったく、こっちは、アンタの事で悩んでんのに……

「朴念仁」

「は？」

「なんでもない」

あたしは、箸を持って、冷めちゃった料理を食べ始めた。

第六話「セカンド幼馴染の恋」（後書き）

どうでしたか？うまくかけてればいいのですが……

第七話「二人の朴念仁」（前書き）

千冬の姉さん初登場です！後半にですけど…

第七話「二人の朴念仁」

店で鈴の恋愛相談をしたあと、鈴と別れ一夏と店を後にした、
あたし達が家路を歩いていると、一夏が話しかけてきた。

「なあ、千夏」

「なんだ？」

「鈴と何を話してたんだ？」

「…え～と」

言えるわきゃねえだろ！鈍感一夏！！

「あ～たわいない話だ、気にすんな」

「そうか」

「そうだ」

「……」

「……」

「なあ、千夏」

「こんどはなんだ？」

「おまえは……その……」

「？」

「え～と、だな…」

「なんだ？」

「その…」

何を言いたいんだ？

「…一夏？」

「…千夏は……好きな奴は、いるのか？」

「は？」

何を行ってるんだ？一夏は……

「一夏や鈴、弾や蘭の事は好きだぞ？」

「いや、そういう意味じゃなくてだな…」

「じゃあ、どういう意味だ？」

「あ～え～と、だな……」

「？？」

「その～……」

なんか、顔が赤くなってるなぁ風邪か？

「大丈夫か？ちょっと顔を貸せ」

「へ？なんでだ？」

「いいから、」

あたし右手で一夏の顔を抑えると左手で一夏の前髪をかき上げた。

「ち、千夏！？な、なにを！？」

「ええい、動くな一夏、熱を測れないだろ」

あたしは、一夏のおでこと自分のおでこを当てて熱を測った。

「…なんだよ熱、ないじゃないか」

「あう…えと…あの…」

あれ？前より赤くなってしまったような…夕焼けのせいか？

とにかく早く一夏を家に帰らせた方がいいな。こりゃ

「一夏、熱があるなら早く帰った方がいいぞ？」

「あ、ああ、そうする……／」

「うん、ところでさっきの話は？」

「いや、もういい。なんでもない」

「そっか。あ、あたしこっちだから。また学校でな～」ノシ

「ああ、じゃあな」

あたしは、走って帰って行った。後ろ振り向くと、
肩を落とした一夏がトボトボと帰って行った。
やっぱり熱があったんだろうか、送って行った方がよかったかねぇ？
あたしは少し、心配しながら家路についた。

視点・「織斑・千冬」

私は、ある女子の事で考えている。
その女子の名は、千夏（ちか）・棗（なつめ）・ガッティーノだ。
その女子の事を知ったのは半年前。一夏が中学の入学式に行って帰ってきた時だ。
一夏が、漏らした一言でその女子の存在を知った。

「あの千夏って子、結構かわいかったなぁ……」

私は驚いた。あの一夏を惚れさせる女が存在するとは、
夢にも思わなかった。そして、一夏に聞いた

「フッ、入学式そうそういい女でも見つけたか？」

私はそう言って、一夏をからかうと、一夏は、

「な、なにいってんだよ千冬姉！！？？」

「結構可愛かったのだろう？」

「な、なななにをっ！！！？？？」

これは、面白い。一夏の反応も面白いが、
一夏を惚れさせた。女子にも興味が湧いた。

「フッ冗談だ。さあ一夏、その女子の事を話してもらうぞ？」

「な、なんでだよ！？」

何を、当たり前の事を…

「なに、もしかしたら義理の妹になるかもしれんしな」

「なっ！？なななな、なー！！！？？？」

ククク、本当に面白い反応をするなあ。私の弟は、

「まあ、半分冗談だ」

「半分!?」

「で、どんな娘なんだ?」

「え?え〜と……」

私は、一夏からどんな出会い方だったとか何処に惚れたのか。洗いざらい吐かせた。

第七話「二人の朴念仁」（後書き）

千冬さんもこれで安心して御嫁にいけますね
相手がいればですけど……

第八話「後悔先に立たず」（前書き）

千夏「ううぅ…なんでお任せにしちまったんだあたしは、…」

作者「まあ、ドンマイ？」

神「自業自得じゃね？」

千夏「元凶共がほざくなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

第八話「後悔先に立たず」

視点・「千夏・N・ガッティーノ」

「ふひぃ～」

あたしは家に帰り夕飯を食べて、風呂に入った後、
タンスを開けてパジャマに着替えた。

「うう～母のお願いじゃなければこんなパジャマ着ないのに～……」

そのパジャマは、全身真っ白でお尻には何故か、尻尾がありその先は黒かった。
フードもついていてフードには、くりっとした目と何故かピンとした耳があった。そう……

オコジョパジャマである。

母がこれを着て寝てほしい悲願したので仕方なくきてるが。

「ぜってぇ家は○雨の先祖だろ……」

少し確信めいていた。

「はあ、まあいいか、家だけで着る分には問題ないだろ…」

この時の千夏は忘れていた。ＩＳ学園でクラスメイトになる珍獣の事を……

「ふ〜」

ボフッ

あたしはベットで寝転がった。

「…一夏は、何を言いたかったんだ？」

何か言おうとしたが、熱がありそうなので帰らせてしまったが。

「ま、大した用事でもないだろ」

言っとくが千夏は、一夏並みに朴念仁だったりする。

「ん〜寝ようか「パサッ」な…ん？」

上から紙が落ちてきた、それを拾うと。

「！、神からか？」

神があたしにメッセージを送ってきたようだ

「神が紙で手紙を送った、てか？」

くだらんダジャレは、これぐらいして。

「何だろう？」

あたしは、手紙を開けて中を読んだ。

久しぶりだな、そっちの世界はどうだ?と、言っても俺はお前を何時も見てるから
俺にとっては久しぶりじゃあ、ないんだよな。

「いつもって、あたしが風呂やトイレに言ってるのも見てるのか?」

いやな予感がした。

イィエェス!!!!!

「見てんのかよ!?」

なかなか美人でいいプロポーションになったな、ニヤニヤ

「変態がっ!!!!!」

男のロマンだ！！！！

「捨ててしまえ！！！！！そんなロマン！！！！」

ハッ！？なにあたしは、手紙にツッコんでんだ。
落ち着くんだ！！あたし！！！！！

わりぃって、そんじゃま本題に入るか

「最初からそうしろ最初から」

で、本題なんだか、お前の体とＩＳについてだ。

「あたしの体とＩＳ？」

そうだ、最初にお前のチートボディについて説明するぞ？

「ふむ」

お前の体に付けた、チートは、

「チートは？」

爆乳だ

「いらねえぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！？？？？」

なんだよそれ！？ＩＳと関係ないじゃん！？何の意味があんだよ！！！！

てかっこの頃、でかくなってきたな～、てっ思ったがお前の仕業か！！？？

いやいや、必要だぞ？特に一夏には？

「なんで、一夏に必要なんだよ！？必要なのはＩＳに関する技能と戦術だろうが！？」

あ～そういや、お前気づいてなかったか？

「ああ！？なにをだよ！？」

いや、なんでもない、まあこの話はおいといて。

「おい、こら、おいとくんじゃねえ！！！！」

……話しを進めるぞ？

「クっ……」

いい子だ、爆乳の他にお前に与えたのはなんでもスキルとＩＳのセンス
…そして、魔力だ。

「魔力？」

そう、魔力だ。

「なんで魔力なんか？」

魔力ってネ○まやリ○カルなら分かるけど、

「ＩＳがあるから必要ないんじゃ？」

普通はな、だがお前には必ず必要になる。

「？、あたしに？」

正確にはＩＳにだ。

「ＩＳに？」

なんであたしのＩＳに必要何だ？

まさか、白式と同じで何か欠点が？

そんな感じだ、とりあえず集中して魔力を体に込めてみろBランクぐらいはあるはずだ。

「お、おう」

あたしは、魔力を体に込めるイメージをしてみた。すると……

「ンぅ…」

体に力漲って来た。これが魔力か……ん？

「なんか、頭とお尻に違和感が…？」

頭を触ってみると…

モフッ

「モフ？」

まさかと思い、パジャマの上からお尻を触ってみると…

フサッ

「フサぁ！？」

あたしはパジャマを慌てて脱ぎ棄て、下着姿になると。

「なんで耳と尻尾が生えてんだよ！？」

そお、そこには頭とお尻に狐の耳と尻尾がはえていた。

「な…なな…なんで……？」

あたしは、慌てて手紙を見ると、

クックック……プーっあっはははははは！！！！！

ククククっどうだ？気に入ったか？

俺も、なかなかのセンスだろ？

「ふっざっけんなあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！！！」

あたしは大激怒した。

「なんだよこれ！？ネ○まやリ○カルじゃなくてスト○ンじゃねえか！！！！！」

そう、○ンツじゃないから恥ずかしくないもんのあれである。

ククククッそお怒るなよ意味あっての能力何だからな。

「お前の言葉は、信用できねぇ！！！！！」

あの空間でいったこと忘れたのか？

「くっ！！」

おのれ前世の俺、迂闊なことを！！！！

とにかく、その魔力はお前にもＩＳにも必要だ。

「なんでだよ？」

それは、おまえの手元にＩＳが来てからのお楽しみだ

「何時から、乗れるんだよ？」

原作開始時に届く

「おい、それじゃあ意味ねえだろ！？練習もできねえのかよ！？」

その為のなんでもスキルとＩＳのセンスだ

「……クソ……」

この神野郎、楽しんでやがるっ

そお、怒るなってちゃんとやれてるか結構心配したんだぜ？

「……どうだか」

フッまあいい伝えたかったのはこれだけだ。

「そうかい……」

あたしは、うんざりぎみに吹いた。
あっとそうだった。

「おい神…」

なんだ?

「アンガト……」

…ふっどういたしまして、だ。

神から届いた手紙は、粒子となって消えた…

「ふぅ…」

あたしはベットに寝転がり。

「ねるか…」

そういってあたしは、深い眠りについた。

第八話「後悔先に立たず」（後書き）

こういう設定ってありでしょうかね？

第九話「突然の別れ…」（前書き）

むう、弾のキャラは、扱いにくいですねぇ

第九話「突然の別れ…」

時がたち、あたし達は中学二年になった。そして別れの時も訪れた……

空港の受付ロビー、あたしと一夏と弾は、中国行きの便の搭乗口にいた。鈴を見送る為に。

「鈴、向こうに行っても元気でやれよ」

「風邪ひくなよ？」

「向こうに着いたら手紙くれよ…」

「うん、ありがとう…」

鈴は寂しそうにそしてどことなく嬉しそうに微笑んだ。
一夏たちは知らないが、原作じゃあ、両親の離婚が原因で中国に行くことに
なったんだよなぁ……
「鈴がいなくなると、寂しくなるな…」

「だな、鈴ともっといたかったんだがな」

「たしかに、騒がしい奴がいなくなると寂しくなるぜ」

「やめてよ、そんなこといったら行きたく無くなるじゃない…」

あたし達が別れを惜しむと鈴は、こまったように笑った。

「鈴…」

「？、あ…」

あたしは、鈴を抱きしめた。

「あたし達は待ってるから、必ず会いにこいよ？」

「そうだぞ鈴、俺達待ってるからな」

「まっててやるから、早く会いに来いよ？」

「…うん…」

鈴は、静かにあたしの胸で泣いた……ん？

「鈴？」

「……」

モニュ

「へ？」

モニュモニュ

「え？あ、ちょ、んんぅ！！」

モニュモニュモニュ！！

「ちょ！鈴！！待て！！ひゃあ！！？？」

「なんで！二年だけで！！こんだけ！！！大きく何のよ！！！！！アンタの胸はー！！！！！」

モニュモニュモニュモニュモニュモニュモニュモニュモニュモニュ！！！！！！

「ちょ！？まて！？あたしのせいじゃなくて神が、うひゃあああぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

ちょ、まてって鈴！？あたしのせいじゃないんだって！

「て、一夏！！弾！！見てないで助けろよ！！！」

「えええ！？い、いやあの、ど、どどどうすれば」

「んな、こといわれてなぁ」

一夏は、なぜか顔を真っ赤にオロオロし、弾はなんだかめんどくさそうに騒動を見ていた。

「一夏ぁ！！！なに、あんたは、千夏の胸ガン見してんのよ！！！！！！」

「み、みてない！みてないぞ！！」

「嘘つくな！！ゴルアァ！！！！！」

「ひいいいいいい！！？？」

鈴はあたしの胸から手を話すと一夏を追いかけた。

「待ちなさい！！一夏ぁ！！！」

「た、助けてくれ！！！千夏ぁ！！！！！」

「大丈夫か?千夏」

「はぁ、はぁ、うぅ〜変な気分……」

胸をもまれたせいか、体に力があまり入らない、

「くぅ〜あたしのせいじゃないのに〜」

まったく神も変なご加護を加えたもんだ。でも

「…フフフ、あは、あははは、」

「ち、千夏?」

やっぱり、あたしや一夏や鈴や弾は、こうじゃねえとな。

「辛気臭い顔で別れるのは性に合わないしな…」

「…だな…」

あたしは、顔を青くしながら逃げる一夏と顔赤くして追う鈴を、弾と笑いながら、見守った……。

第九話「突然の別れ…」（後書き）

展開は、早くないですか？感想お願いします。

第十話「友人の恋」（前書き）

希望があったので作ってみましたどぞ～

第十話「友人の恋」

視点・「五反田弾」

あれから、鈴は笑顔で別れを告げて、中国へ旅立った。

「いっちまったな……」

「ああ……」

「…そうだね」

まったく、台風のような別れ方だったが。

「悲しい別れた方せずにすんでよかったよ…」

「まあ、騒がしいお別れだったけどな」

「クス、そうだな」

今の俺達は、微笑みながら、鈴が乗った飛行機を見送った。

「…んじゃ帰りますか」

千夏がそういうと。

「ああ、」

「だな」

俺と一夏は、歩く千夏を追うように歩いた。
空港からでて、俺達は俺の実家の店で飯を食うことになった。
道路を歩いていると……

「なにおごって貰おうかな～食べようかな～」

「おごり前提かよ……」

たく、千夏は抜け目のねぇ女だな…

「おごるのは、売れ残った定食だぞ？」

「ええ～じゃあ一夏、何かおごって？」

「て、おれかよ！？」

どうやら、千夏は一夏を標的にしたみたいだ。

「今、金少ないぞ？」

「じゃあ、割り勘でいいや」

「それじゃあ、量の少ないのしか食べれねえだろ？」

「そうだな…それじゃあ一つの定食を一緒にたべるか」

ピクッと一夏が揺れた、

「い、一緒に？」

「そうだが、いやか？」

「い、いやじゃないそれでいこう！そうしよう！うん」

「？まあ、いいけど」

「……」

一夏も朴念仁だが千夏は、それを超える朴念仁だな、こりゃ

「…弾、今何か失礼なこと考えてなかった？」ジロリ

おっと、あぶねぇ

「いんや何も」

「そお？」

「ああ、」

あぶねぇ、あぶねぇ千夏は鈍感だが鋭いなあ

と、そうだった。

「なあ、一夏」

「ん？なんだ？」

俺は、一夏に小さな声で話した。

「お前、千夏にいつ告るんだ？」

「ぶ！？」

「？」

千夏は、吹いた一夏を不思議そうにみていた。

「な、なにいってんだよ！？弾！！！」

「いや～親友の恋愛相談にのってやろうと思ってな？」

「い、いらねえよ！？」

「遠慮すんなって、なあ？」

「一夏は好きな人がいるのか？」

「へ？！あ、いやそれは、…」

「何だいるのか？相談に乗るぞ？」

「い、いや、だからその…」

はぁ～たく、一夏は、何時モジモジするような生き物になったんだ？しかたねぇ

「実はだな千夏、一夏が好きなのは、千「うわぁ！？いうなぁ！！」
モガッ！」

いきなり、一夏に口を押さえられた。おい！息ができねぇよ！

「モガッ！モガッ！」

「お、おい一夏？弾がギブ、ギブって手を叩いてるぞ？」

「あはは！大丈夫だ！弾はこれくらいで根を張る男じゃあ、ないぞ
？」

「だ、だけど顔が…」

「へ？わあああ！？」

多分、今のおれは顔真っ青になっていただろう

「ゲホッ！ゲホッ！い、一夏！俺を殺す気か！？」

「わ、わりぃってお前が言おうとしたのが悪いんだろ！？」

「うっせぇ！おめーが何時までもウジウジしてるのが悪いんだろ！
？」

「お、おい喧嘩は――」

「う、ウジウジなんてしてねぇ！」

「いーや！してたな！」

「だ、だから喧嘩は、やめ――」

「なんだと!?」

「なんだよ!?」

俺達が喧嘩をしていると。

「……うぅ……」

「「え?」」

千夏が目に涙を貯め、今にも泣きだしそうにしていた。

「ち、千夏!?どうしたんだよ!?」

「どこか具合がわるいのか!?」

俺たちがそお言うと、

「け、喧嘩は、駄目だ…よ…」

「「あ…」」

どうやら、俺らの喧嘩がいけなかったらしい。

「うう…グスっ…」

「ち、千夏俺らが悪かったから泣くなよ、な!?」

「そ、そおそお仲直りするから泣きやんでくれ、な？」

「グスっ…ほんと？」

「「ぐはっ！！！」」

ぐおおおおっ涙目と上目ずかいのコンボは、反則だろ！？

「「ほ、ほんとだ！」」

「…ほんとにほんと？」

「「ほんとにほんとだ！」」

「んじゃあ！さっさといこ～う！」

「「え？」」

まるで手のひら変えしたようにけろっと笑顔を向けてきた。

「はやくいくぞ～」

「「ち、千夏？」」

「ん？なんだ？」

「え～とさっきまで泣いてたんじゃ？」

一夏が千夏に問いかけた。

「ああ、あれは喧嘩を止める為にやった嘘泣きならぬ、泣き真似だぞ？」

「「だあぁぁぁぁぁ……！！！！！！！」」

な、泣き真似って……こいつ、女優になれるぞ……○ＴＬ

「さあ、店の料理がまってるぞ～♪」

「お、おい……」

「…一夏」

「な、なんだ？」

「お前が千夏を落とすのは、容易じゃないぞ？」

「うっ……」

まあ、なにはともあれ、

「がんばりな男子」

「お、おう……」

俺達は手を振りながら待っている千夏を追い、歩きだした。

第十話「友人の恋」（後書き）

弾のキャラってこれでよろしかったでしょうか？

第十一話「専用機」（前書き）

とうとう専用機をだせた……
まあ、ネタ機で試験機なんですけどね。
水色さんにご指導していただき書き直しました。
読者様の皆様に、不潔感を与えてすいませんでした。

第十一話「専用機」

あたしは今、母国イタリアにいる。それは……

「あたしがイタリア代表候補生に？」

「ああ、そうだよ」

あたしは今、父と電話をしている。その内容は
あたしがイタリアの代表候補生になり。ＩＳ学園に入学するというものだ。

「それで、千夏には今すぐイタリアに戻り。適性試験を受け、
ＩＳの技能を学んでほしいんだ。」

「今すぐですか？」

急な話だった。あたしがイタリアに行けば、一夏の誘拐を阻止できない。いや、
もとから阻止なんてできない。何せＩＳが、原作開始時に届く事になっているからだ。

「えーと、母さんはどうするんですか？」

「…まだわたしを狙う者が多い…千雨には悪いが、安全な日本の残ってもらう…」

「そうですか…」

悲しいかな、父と母が一緒に住めるのはまだまだ先になりそうだ。
それにしても、

「急な話ですね…」

「すまない、何分こちらもせっぱつまってるからね」

「…分かりました」

「本当にすまない。すこし時間があるから、日本で友達に――」

「いえ、そのままそちらに戻ります」

「…いいのかい？友達に別れを告げなくて…？」

本当は、いやだけど……あたしは鈴のように強くない。
友達に泣き顔は見せられないからだ。

「はい」

「…わかった、それじゃあ千雨には、父さんから言っとくから千夏は荷造りを
　しておいてくれ」

「わかりました」

「またな、千夏」

「はい、イタリアで会いましょう」

そうして、千夏は電話を切った。

「……ゴメンな、一夏……弾…」

二人の親友を思い出し、千夏は…

「……うん、守ろう、今度こそ…絶対に一夏は、俺が守る…！」

千夏は再度、決意を新たにし、イタリアへ行く仕度をした。
その後、モンド・グロッソ決勝戦が開催され、千冬さんの不戦敗を知り、
同時に一夏の誘拐も知った……

イタリアの空港に着いた。父さんが用意した自家用ジェット機から降り。
イタリアの大地を踏みしめた。

「戻ったのはあたしが生まれた日以来だな…」

あたしはイタリアでの思い出がない。赤ん坊の頃すぐに日本に渡ったからだ。

「さてと、早く父さんの所に――ん？」

あたしの前方に黒い車が走って来て止まった。そして、車から、ＳＰのような服装をした男達が出てきた。

「千夏お嬢様ですね？」

と、男があたしに聞いてきた。あたしは、

「はい、そうですけど……？」

「大統領からの命令でまいりました。どうぞ、車に乗ってください。御父上様がお待ちです」

どうやら父の使いで来た人たちみたいだ。

「分かりました」

あたしはそう言い車に乗って、父が待っている、ＩＳ研究所に移動した。

目的地に着き、あたしは車から降りて、ＩＳ研究所施設の中に入って行った。
ここは、欧州連合の第三次イグニッション・プランの為に開発したイタリアの次期主力機、
テンペスタ?型とオーメルがあたしの専用機を開発しているところである。

「久しぶりだな千夏、大きくなったな」

「ありがとうございます。そしてお久しぶりです。父さん」

初めて父に会った。てか写真やテレビでみたけど、

『全然変わってないな……』

と、心でそう思っていると、

「さて、千夏、積もる話もあるだろうが、さっそく適性試験と開発中の専用機を見ないかい?」

「はい」

わたしは、専用機のあるラボへむかった

「これが……あたしの専用機…」

「そう、これがオーメルのＩＳ、ステイシスだ」

「う～ん何というか…」

これは――――――

「細いですね」

「ああ、細いな」

そう、細いのである。足はハイヒールのような脚で、腕の装甲も薄い、
そして背中には、中型と思われるブースターがついていて、その左右には
何かの武器だろうか、横に並んだ細長い箱のような物が四つずつついている。
こいつ……思いっきり高機動戦闘型だ。

「これで戦えるんですか……？」

「……」

「目・を・そ・ら・さ・な・い・で・く・だ・さ・い！」

「いや、私が設計した訳ではないからな……」

「だからってこれは……」

「ううむ…」

特化機すぎだろ……

第十一話「専用機」（後書き）

実は、千夏のＩＳは、一機目は、ネタの為に用意していたり……

修正させていただきました、ご不満をおかけします。

第十二話「離れても、あたし《俺》達は―」（前書き）

大幅な修正をしました。
ご不便をおかけします。

第十二話「離れても、あたし《俺》達は―」

専用機を見て、適性試験を終わらせたあたしはひと段落ついて。
父のセカンドハウスに居る。あたしは走ってすぐに電話のあるリビングに行って
ある人に電話をかけた。

「～～～、早くつながれ……！」

あたしは繋がらない電話にいら立ちながら待っていると…

「はい、もしもし？」

「一夏か！？無事か！？」

「え？もしかして、千夏か！？」

「ああ……そうだ」

あたしは、安堵して床にへたり込みそうになった。

「一夏……誘拐されたって聞いたぞ…大丈夫か？」

原作じゃあ、無傷だったが、今はあたしというイレギュラーがいる。
それによる不確定要素で一夏が怪我をしていないか心配だった。

「え？千夏、どうして俺が誘拐されたってしてるんだ？」

「イタリアのカラビニエリが情報をつかんだんだよ」

「そうだったのか…こっちは大丈夫だ、怪我してないし千冬姉に助けて貰ったしな…」

「そうだったのか……」

あたしはそれを聞き、今度こそ床にへたり込んでしまった。

「ほんとによかった…無事で」

「ああ、わるい、心配かけた。ありがとな千夏」

「いいって、友達だろ？」

「…いや、幼馴染、だろ？」

「え？」

「中学は、一緒だったんだから幼馴染だよ」

「…あたしが幼馴染でいいのか？」

「もちろんだ」

「…一夏」

「ん？」

「ありがとう」

あたしは、感謝を込めてそう返事をした。

「!?、お、おうどういたしましてだ」

一夏は、電話の向こう側で照れくそうにしていた。

「て、それよりも千夏、どうして何も言わず外国へ行っちまったんだよ!?」

「す、すまん…どうも、鈴のように笑って行ける自信が無くてだな…」

「だからって手紙ぐらい渡したっていいだろ?」

すまん一夏、どうも、あたしは、涙もろいところがあって手紙書くことすら泣きそうだったから。

「ほんとにすまん!あたし、泣きながらの別れはしたくなかったんだ…」

「…そうか、たしかに千夏の泣くところは見たくないしな」

「アハハ…まあ、あたしの泣き顔なんて、変だよね……」

まあ、男が泣くところなんて――――っていまあたしは女だったか……

「そんなことない!千夏の泣き顔は、変なんかじゃない!」

「い、一夏?」

「あ――いや、えーとだな…」

一夏は、なぜか急に声が小さくなった？

「一夏？」

「え！？ああ、えーとだな…そ、そうだ！千夏はどうして急に外国に行くことになったんだ？」

「ん？ああ、そうか説明してなかったか……」

せめて、説明くらいしとくんだった……

「ああ、どうして外国に？」

「あたし、ＩＳ操縦者になる為にイタリアにもどったんだ」

「ＩＳ操縦者に？」

「そう、あたしはイタリア代表候補生になる為に母国に戻ったんだよ」

「そうだったのか」

「うん、それでな、あたしはＩＳを学んだあと、ＩＳ学園に向かうんだ。」

「ＩＳ学園？」

「そうだ、それでな、あたしはそこに入学するためにまた日本にいくから」

「本当か！？」

「お、おう」

な、なんだ？急に元気になったような…

「何時こっちに戻るんだ！？」

「あ、ああＩＳが完成すればすぐにでも日本にいくぞ」

「そうか…！」

妙に機嫌がよさそうだな？

「一夏？」

「ん？なんだ？」

声が弾んでるな、一夏は、

「そんなにあたしが戻るのが、嬉しいか？」

「へ！？」

そのあと、電話の向こうからボンッという音が聞こえた気がした。

「一夏？どうした？」

「な、ななななんでもない！！！！」

「？」

意味がわからない……

「まあ、とにかく一夏とはまた会えるから、楽しみにしてな」

「お、おう、た、楽しみにし、してる」

あたしは、一夏に国帰った理由を話し、そして再開の約束した。
そして…

「一夏」

「ん？なんだ？」

「ゴメンな…誘拐されたとき、側に居れなくてゴメン…」

「なっなに、言ってんだよ千夏は何も悪くないだろ？」

違うんだ一夏…あたしは…

「それでも…ゴメン…」

「千夏…？」

知っていたのに、あたしは…俺は…

「守れなくて……ごめんなさい…！」

「千夏……」

幼馴染を守れなかった……！

「…ありがとう、千夏…」

「え？」

「俺を心配してくれて…」

「一…夏……？」

「千夏…」

「な、なに？」

「俺さ、誘拐されて千冬姉に助けだされた時、思ったことが、あったんだ……」

「思った事？」

なんだろう？

「ああ、俺は……千冬姉のように…誰かを守りたい…」

「あ…」

一夏…お前…

「そ、それでな…千夏」

「な、なに？」

「もし、俺が誰かを守れるようになったら……」

「なったら…？」

「その…えーと…」

ん～？なんだ？

「お、お前を…千夏を守らせてくれ…！」

「え……？」

あ、あたしを守るって……

「だ、駄目か？」

ちょっ！なんで急にそんな不安そうな声になるんだ？

「…一夏」

「お、おう」

「あたしは、守られるだけは嫌だ…」

「千夏…？」

「さっき言ったよな？守れなかったって…だからあたしも…」

今度こそ、今度こそあたし(おれ)は……

「一夏を守らせてくれ……」

「千夏……」

今度こそ俺は、迷わず守る！

「…ああ、よろしく頼む…千夏」

「こちらこそ、だ…一夏」

お互いを守ると約束し、あたし達は電話を終える

「じゃあ、またな一夏」

「おう、またな、千夏」

そういって、あたしは電話をきった。

「……ふぅ～一夏が無事で、よかった……」

あたしは、そういってリビングにあるソファーに寝転がった。

視点・「織斑一夏」

千夏から電話があったあと、俺はいい気分いや、かなり上機嫌になっていた。

「また千夏に会える…！」

そう思うと嬉しくて、顔がにやけてしまう。
それに千夏を守ると言う約束も出来たのだ。

「おっと、千冬姉に見られたら変に思われる」

そう思っても、顔のにやけは治らない。

「と、とにかくこの顔を何とかしないと」

「ほう？何をどうするんだ？」

ビクッと震わせ、ギギギッと振り向くと…

「だれから電話があったんだ？」

姉こと千冬姉がいた。

「えーと、ま、間違い電話だぞ？」

「間違い電話でにやける馬鹿はいないぞ？」

ごもっとも……

「さあ、全部吐いて貰おうか？」

「りょ、了解……」

俺は、白状して、千冬姉に内容を教えた……

第十二話「離れても、あたし《俺》達は―」（後書き）

キャラの成り立ちって難しいです、はい……

第十三話「お節介と再開」（前書き）

読者様のイメージ壊さず、千夏さんを書いて見せます。
読んで見てください、お願いします。

第十三話「お節介と再開」

あたしはＩＳの勉強を終え、日本のＩＳ学園に行くために空港に向かっている。
その道中で、あたしは車の中で電話をかけた。

「――――あ、一夏か？」

「千夏か？どうかしたか？」

「ああ、ちょっとな。受験は大丈夫か心配でな」

そう、今は二月の真ん中。一夏は中学三年で受験の真っただ中なのだ。

「心配性だなあ、大丈夫だ、ちゃんと勉強したし受かるって」

「そ、そうか、そうだな」

「千夏は、大丈夫か？ＩＳの事はぜんぜんわからないけど、やっぱりいろいろと難しいんだろ？」

「そうだな、最初はチンプンカンプンだったが、もう慣れたよ」

主になんでもスキルのおかげで、覚えが早かったのだが、
ＩＳのスキルは初めて使ったのに、
すぐ慣れてしまった。この二つの能力は役に立つ。
三つめの能力は、役に立つかは分からないけど……

「一夏はもう試験会場に着いたか？」

「ああ、ここ多目的ホールなんだが分かりにくい構造を…」

「そんなに分かりにくいのか？」

「ああ、これは『常識的に作らない俺カッコいい』的な物だ」

そのせいで、一夏は迷ってＩＳ学園の受験会場に行っちまったんだよなぁ……

「迷子になって、間違えてＩＳ学園の会場に行くなよ？」

「いや、中学三年にもなってそれはねえよ」

ほうほう、聞いたぞ？

「じゃあ、迷子になって間違えて受験用のＩＳ起動させたらなんでも言うこと聞いてな？」

「おいおい、男がＩＳ起動させられるわけないだろ？」

「ククク、分からないぞ？世界は何時も不確定要素だからな」

「まあ、いいぜ、そうなったらなんでも言うこと聞いてやるよ」

「男に二言はねえな？」

「おう！」

ふむふむ、言いきったな、

「いい返事だ、受験頑張れよ？」

「おう、千夏もな？」

「ああ、」

『…試験会場でその努力は、無駄になっちまうんだけどな……』

一夏が受験用のＩＳに触ってしまってＩＳ学園に行くことになるからだ。

「ん？なにかいったか？」

「い、いやなんでもない」

「そうか」

「そうだ」

まあ、何にせよ。

「一夏」

「なんだ？」

「受かれよ」

「おう！」

「じゃあ切るぞ？」

「ああ、お、そうだ」

「ん？」

「こっちに来たら、家に来いよまた遊ぼうぜ？」

「ああ、わかった」

「じゃあな、千夏」

「またな、一夏」

そういって、電話を切り。あたしは空港に着いた。

「さて、こっちも頑張りますかね！」

あたしは、空港ターミナルに入って行った。
その後、ニュースで初めて男性ＩＳ操縦者が現れたと、世界中に知れ渡った。
二月の肌寒い、季節の事である。

さて、あたしは、イタリアから日本に来て、空港から車と電車を行きついで、
今ＩＳ学園にいる。そして今学園内の１年１組にいるのだが。

「……」ダラダラダラ…

「…はぁ」

あたしの隣の席で顔を青くし、汗をダラダラ流しながら、俯いている主人公こと、織斑一夏がいる。
まあ、気持ちは分からんでもないが……

『もう少し気をしっかり持てよ…』

この先の苦労を考えると同情してしまうが……

『一夏はもうちょっとラッキーだと思えばいいのに……』

女子の花園こと、ＩＳ学院に入学出来たのだから、もう少しポジティブに
考えろってんだ。
ちなみに一夏は、隣にあたしがいるのを気づいてない。
前は髪を下ろしていたが、今は髪を一つに結んで伊達メガネをかけている。
それに一夏の今の状況はそれどころでは無いようで、

まったく気づいていない。

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲ（ショートホームルーム）はじめますよー」

黒板の前方から、声がしたので見てみると副担任の山田真耶先生がそこにいた。

『おおー山田先生だ』

原作で知っていたがなかなかの――

『いいものを持っている…！』

どこを見ているんだ。この女オリ主は……

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

だが、教室の中は変な緊張感に包まれていて反応はなかった。

『そりゃあ、クラスに一人だけ男子がいればな……』

そう、男子こと一夏がＩＳを動かしてしまった為、
ＩＳ学園に強制入学させられたのだ。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

副担任は、少しうろたえていたが自己紹介は、始められそうだ。
一夏は全然気づいてないが…

『あ』から『え』までの自己紹介が終わり、一夏の順番が来た。

「はい、じゃあ、次は織斑くん……織斑くん？」

一夏は何か考え事をしているのだろうか、無反応だった。

あちゃーやっぱり聞いてないか、今の状況が落ち着かないのは分かるが。

ホームルームはちゃんと聞かないとだめだぞ？

「織斑くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ！？」

呼ばれたことに驚いたのか、声が裏返っていた。

後ろからはクスクスと、笑い声が聞こえた。

『おいおい、しっかりしろよ……』

さすがは我が幼馴染、動揺しまくりである。

「あ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？

自己紹介してくれるかな？だ、駄目かな？」

うわー先生が、高速ヘッドパッド並みに頭を下げてるよ…

一夏は少し焦ってから返事をした。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しま

すから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

山田先生が一夏に熱心に詰めよってるよ……

一夏は席を立ち、後ろを向いた。

「えー……織斑一夏です。よろしくお願いします」

……うん、これだけか？一夏、これだけなんだな？一夏

他のクラスメイトももっと聞きたそうにしていた。

「…仕方ない…」

あたしは、幼馴染を助ける為、あるものを用意した……

視点・「織斑・一夏」

『ま、まずい、どうすれば…！』

俺は、何をしゃべればいいか分からなかった。
頼みの綱のファースト幼馴染こと篠ノ之箒も助けてくれない。

『くっマズイこのまま黙ってると『暗い奴』のレッテルを貼られる…！』

意を決し、喋ろうとしたその時、――――

「ん？」

左手の甲に何か当たったような感じがした。
左に視線を向けると……

『え？』

先生やクラスメイトに見えないように、俺にカンペのような物を取り出し見せた。
そのクラスメイトの女子は後ろで髪を縛ってメガネをかけた人だった。

『あれ？どこかで見た記憶が……』

俺は記憶から探してみたが、わからなかった。
いや、今は――――

『これのとうりに喋ればいいのか？』

意思が伝わったのか、メガネの女子はうなづいた。

『こ、これで何とかなりそうだ…！』

俺はカンペをチラ見しながら自己紹介を再開した。

第十三話「お節介と再開」（後書き）

ご感想、お待ちしております
句点を修正しました

解説プロフィール　最新（前書き）

むう、プロフィールは、こんな感じでいいんでしょうか？
感想待ってます。すこし設定を加えました。

解説プロフィール　最新

千夏のプロフィールを説明させていただきます。

千夏（ちか）・棗（なつめ）・ガッティーノ

イタリア大統領と日本外交官の両親を持つ、ハーフ少女です。

原作開始時は、ぶっちゃけ長谷川千雨です。
顔は日本人で薄い茶髪にブルーの瞳ですけど。
伊達メガネ（注ＩＳの待機状態です）髪は後ろで縛ってます。
制服は両袖をひじの付け根あたりまでまくっています。
スカートは普通で、下にはスパッツをはいてます。というよりＩＳスーツですけどね。
ＩＳスーツは一体型で首周りで、服を固定していて背中はぱっくりと開いてます、
肩とかも出してて下半身はスパッツに似た、アンバラスなスーツになってます。
そして神から無駄にもらった胸で、千夏と一夏を悩ませています。
ここんところ、男の精神が引っ込んだせいか、
ちょっとおしとやかなにはなっている。
原作開始時には男の精神がところどころで、出てきます。

ＩＳ紹介

イタリアもとい、オーメル社製のＩＳ『ステイシス』

ステイシスは、イタリアが引き入れた外国人技術者で作り上げた。
試験機です。

武装は実弾の銃剣着き突撃ライフル（カルカノ）、レーザーバズーカ（ファブラム）、
そして後ろ左右に着いている、ＰＭミサイルポットです。

ステイシスの特徴は、軽量化による高機動戦闘です。
オーバードブースト時は、ＩＳでは、考えられないスピードに達し、
クイックブースト時の回避性能はずば抜けてます。
でもかなり癖のあるＩＳになっていて
装甲も薄くシールドエネルギーは、百式の半分というお粗末な物の
になってしまっています
ですが、これは、ＢＴＳ（ビースト・トランス・システム）使うことで補っています。
本来の能力は、視覚、聴覚、感覚を鋭くする能力（獣人化（ビーストモード））を使う
発動時には、体に動物的特徴が見られる第三世代型のＩＳなのです。
まあ、神が面白半分で千夏に与えたネタ機なのは、千夏はしらない。
待機状態は伊達メガネです。

解説プロフィール　最新（後書き）

説明は、難しいですね。日本人なのに、
漢字と用語が難しいです

第十四話「ファースト・コンタクト」（前書き）

さて、ヒロイン達と千夏は、どう関わるのか……
どうしよう…？

千夏「決めてないんかい……」

第十四話「ファースト・コンタクト」

一夏が自己紹介を無事終えて、椅子に座った。一夏はあたしに小声で礼を言った。

『助かったよ、ありがとう』

『気にするな、幼馴染を助けるのは当然だ』

『え？幼馴染って…』

『担任が来る、また後でな』

その後、担任の織斑千冬さんが来て、自己紹介を終えると、クラスメイトから黄色い声が上がった。

「ううむ、さすが千冬さん…人気絶頂だな」

ここまで人気だともうアイドルだな。

すると一夏が、ポカーンと口を開けながら

「……千冬姉？」

「ちょ、まて」

スパァン！！

遅かったか……

「織斑先生と呼べ」

「うぅ…はい、織斑先生」

結局叩かれてしまったか、それに…

「え…？織斑くんって、あの千冬様の弟？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『ＩＳ』を扱えるっていうのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなぁっ」

姉弟であることがばれたようだ。

一夏の苦労が増えたな……ん？

「……」

「え、え～と…？」

千冬さんがこっちを見ていた。なんだろう？

「久しいな、ガッティーノ」

「あ、はいお久しぶりです」

あたしは、反射的に挨拶をしていた。

「え……ガッティーノって…まさか」

「なんだ一夏、気づかなかったのか？」

「あ～まあ、これだけイメチェンしてれば気づきませんよ」

あたしはメガネをはずし、一夏に笑いかけた。

「っ…千夏…なのか？」

あたしは、ふてくされたようにそっぽを向いて。

「まさか一年足らずで幼馴染の顔を忘れられるとはな…」

あたしはワザと顔を俯いて、悲しそうにした。

「い、いや千夏の事忘れた事はないぞ！」

「しらん」

一夏をからかって遊んでいると

「え？ガッティーノさんって、織斑くんの知り合い？」

「それにさっき、幼馴染ってガッティーノさんが言ってたよね？」

「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなぁ」

……なんだ、このデジャビューは？

そして、幼馴染であることもばれた。

「……」ギロッ

「…！？」ゾクっ

「？どうした？」

「い、いやなんでもない」

なんだ、今の殺気は！？
視線を一夏の隣の向こう席を見ると。

「……」

「え、えーと…」

ファースト幼馴染こと篠ノ之箒が何故かあたしを睨んでいた。

「千夏？大丈夫か？顔が青いぞ？」

一夏が心配して声をかけてくれた

「いや……大丈夫だ…」

「そうか？無理はするなよ？」

「わかった」

と、言うもののいまだに睨む箒がいる。

『たくっあたしが何をしたってんだ…』

いまだ千夏は、一夏と同じ朴念仁だった……
そして、織斑先生の声がして

「さあ、ＳＨＲ（ショートホームルーム）はおわりだ。諸君らにはＩＳの基礎知識を半月で覚えて貰う。
その後実習だが、基本動作は半月で沁みこませろ。いいか。いいなら返事をしろ。よくなくても返事を、
私の言葉に返事をしろ」

うへぇ…すげー鬼教官。さすが元日本代表、言うこともすげぇ…
そして一夏は……まだあたしに忘れたことを謝っていた。

「席に着け、馬鹿者」

と、織斑先生に言われ一夏は渋々席に座った。

「…ま、許してやるか…」

あたしは、そう言い次の授業の為にノートを取り出した。

視点・「篠ノ之箒」

箒は、不機嫌だった。それもかなり不機嫌だ。

『なんなんだ、あいつは！？』

そう、幼馴染であるはずの一夏に別の幼馴染がいたからだ。

『一夏も一夏だ！何をへこへこと謝っている！？』

一夏は、忘れた事を理由で謝っているのだが、
今の箒には、知るすべはない

『私がいないあいだに軟弱者になりおって…！』

軟弱者かどうかはさておき、

『あとで問いただされねば……』

標的が一夏に変わり、一夏はビクッと体を震わせあたりを見回した。

『まったく！なんでこう一夏は、――』ブツブツ…

箒は、まだ知らないが、幼馴染は、千夏だけでは無いことを……

第十四話「ファースト・コンタクト」（後書き）

千夏「なあ、あたし何かしたか？」

箒「べ、別に何もしてはいない…！」

一夏「あいつら仲、いいなぁ」

作者「一夏、それ違う……」

第十五話「英国女子襲来」（前書き）

千夏「今回は、長いような気がするが？」
一夏「そうだな、結構、出演時間長かったし」『俺は千夏が側にいればそれでいい』
作者「切りのいいところがなくて長くなったんだと思う…」

第十五話「英国女子襲来」

一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わり、今は休み時間。
あたしは、次の二時間目の為にノートを用意していると。

「千夏」

「ん？」

一夏が話しかけた

「千夏、さっきは悪かった…」

「え？ああ、さっきの事か…」

一夏は、あたしに気づかなかった事に謝っているのか…

「もう、怒ってねえよ」

「ほ、本当か？」

「ああ、だから気にすんな」

「そうか…ありがとな…」

「いいって」

あたしが怒ってない事を伝えると安堵したように微笑んだ。
すると

「……ちょっといいか」

「「え？」」

突然、話しかけられたと思ったら

「箒？」

「……」

ファースト幼馴染こと箒がいた

そして……

『むむ、箒もなかなか……』

だから、どこ見ていってるんだ。このオリ主は…

「……」

「……えーと…？」

なぜ、あたしを睨む……？

「箒、どうしたんだよ？」

「…来てくれ」

「え？どこに？」

「…いいから、早くしろ」

箒は、すたすたと廊下の方へ向かった。

「一夏、あたしの事は気にするな行ってやれ」

「え？あ、わかった…」

一夏は、すこし迷いながらも一夏は、箒を追いかけて行った。

「まったく、一夏は本当に鈍感だな……」

あたしは、ノートを取り教科書を開いて準備をした
そしてすこしたってから、チャイムがなり、
一夏と箒が帰ってきた。若干一夏がやつれていたが…

「さて、勉強しますか…」

このあと、二時間目で一夏が参考書を捨てるというボケをして、千冬さんが突っ込みを入れる展開になったのは、言うまでもない。

二時間目の休み時間

「一夏、大丈夫か？」

「いてて、大丈夫だと思いたい…」

千冬さんに突っ込みという名の出席棒アタックをされて、
一夏は、机で突っ伏していた。

「はあ、まったくなんで参考書を間違えて捨てるかな…」

「うう、面目ない…」

一夏は、反省してるようだ。

「まったく、世話の焼ける幼馴染だよ、一夏は…」

そう、いいながらあたしは、一夏の叩かれた頭をやさしく撫でた。

「え？ち、千夏？」

「ふむ、こぶは、出来てないようだな」

「あ、あああありがとう…」

一夏は顔を赤くして俯いた。どうしたんだ？
すると…

「ちょっと、よろしくて？」

「「ん？」」

声が聞こえてあたしと一夏は、聞こえた方へ振り向くと
そこには、金髪の女子がいた。
そう、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットだ

『むう……箒とまでは、行かないが…これは…！』

だから本当にどこ見て言ってるんだ。このオリ主は……

「聞いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう要件だ？」

と、一夏は答えた。すると。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、
それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「……」

上から目線でいってきた、はあ、こういう手合いは、苦手だな
一夏もそうらしく目では苦手そうにしていた。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

まあ、千冬さんが担任だった事が一夏にとって大きく、
他の事は耳に入らなかったらしいしな。

「わたくしをしらない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして、
入試主席のこのわたくしを！？」

な～んかワザとらしいなぁ…いや、ワザとか…

「代表候補生？国の代表みたいなものか？」

「その通りですわ！わたくしセシリア・オルコットはイギリスの女性の中から選ばれた代表候補生……いわば、エリートなのですわ！」

ふむふむなるほど～て、しってるけどな

「そういや、千夏もイタリアの代表候補生だよな？」

「ん？ああ、そうだ、まあ、代表つっても候補生だから予備みてぇなもんだ」

「それでも、イタリアの女性の中から選ばれたんだろ？すごいじゃないか！」

「そ、そうか？」

「おう！」

な、なんか一夏に褒められると照れるなあ、

「ちょっと――」

「そういや、千夏って専用機ってＩＳ持ってるんだろ？」

「ああ、ステイシスっていうんだ」

「あの――」

「へえ、なあ千夏、今度見せてくれよ？」

「いいぜ、放課後見せてやるよ」

「話を――――」

「サンキュー！千夏！」

「おう、楽しみにまってろ」

「ああ、楽しみにしてる」

「ちょっと！！！あなた達、聞いてますの！？」

「「なんだようるさいなぁ…」」

振り向くと顔を赤くして肩で息をしているセシリアがいた

「わ、わたくしを無視しないで頂ける！？」

「おお、すまんすまん」

「わりい、わりい」

と、一夏と一緒に謝っておいた

「っ――――――ふん。まあいいですわ、わたくしは慈悲深いですから許して差し上げてもよろしくてよ？」

おおーさすが代表候補生、器広いなぁ…広いのか？

「まあ、話を戻しまして…ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

ほう、教官をねぇ……だけど…

「入試って、あれか？ＩＳを動かして戦うってやつ？」

「それ以外の入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は？……」

セシリアは、目を見開き驚いていた。

「わ、わたくしだけと聞きましたが……？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ、おおう、なにかヒビ割れた音がしたぞ？

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、しらな――いや、もう一人いたな…」

「誰ですのそれは！？それにあなたも教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ、たぶん」

「たぶん!?たぶんってどういう意味かしら!?」

「えーと、落ち着けよ。な?」

「こ、これが落ち着いていられ――――」

キーンコーンカーンコーン。

「お、三時間目のチャイムだ一夏戻ろう?」

「ん?ああ、そうだな」

「っ……!また後で来ますわ!逃げないことね!よくって!?」

一夏は、めんどくさそうにうなずいた。
それを見たセシリアは、顔を赤くして自分の席に戻った。

「はぁ~休み時間なのに疲れた……」

「アハハ…えと、ドンマイ」

そういいながら一夏の頭を撫でた。
一夏は、気持ち良さそうに目を細めて

「ん、サンキューな千夏」

「どういたしましてだ」

その後、織斑先生が来て三時間目の授業が始まった。

第十五話「英国女子襲来」（後書き）

千夏「一夏、まだ頭は痛むか？」
一夏「いや、大丈夫だありがとな、千夏」
千夏「気にするなあたしと一夏の仲じゃあねえか」
一夏「千夏……」
千夏「一夏……」
作者「お～い、ここでラブコメするな～」

箒・セシリア「……」ムカムカ

第十六話「一夏強化プラン」（前書き）

うむ、どう一夏を勝たせましょう？

第十六話「一夏強化プラン」

三時間目の授業の時、織斑先生が差来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めるといった。
そして原作通り、一夏が代表に選ばれようとしたが、ここでイギリス代表候補生ことセシリア・オルコットが猛反対して、セシリアが発言した言葉で一夏が怒り、セシリアも一夏の発言で怒り、決闘することになった。そして何故かあたしも参加することになってしまった。織斑先生が言うには、
『お前も専用機持ちなのだから参加しろ』とのお達しだ。そんなこんなで授業は終わり、放課後になると…

「千夏、頼みがある……」

来たか……

「ＩＳについて教えてくれ、だろ？」

「ああ、よくわかったな？」

「そりゃ、幼馴染の事だ、一夏の考えくらいわかるぜ？」

「さすがだな」

「それほどでも」

と、話してると……

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

「山田先生？どうしたんですか？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

どうやら、一夏の部屋が決まったらしい

「俺の部屋ですか？」

「はい、本当なら一週間は自宅から通学してもらうって話だったんですけど
事情が事情なので一時的な処置として無理やり変更したらしいんです。…織斑くん、そのあたりのことって政府から聞いてます？」

「あーたしか聞いてたような聞いてないような……」

「一夏、大事な事なんだから聞かないとだめだぞ？」

ちゃんと一夏にも危機管理してもらわんと困る。

「ガッティーノさんの言うとうりですよ？ちゃんとしないと」

「うっはい、すみません……」

一夏は、うなだれる様に謝った
前に一夏に早く会いに行こうとして入学前に一夏の家に遊びに行こうとしたら、
マスコミだの各国大使だの果ては遺伝子工学研究所の人間までいて。

研究所の人間が言った言葉にあたしは……キレたな……
『ぜひとも生体を調べさせて欲しい』
ふざけんな、一夏は実験動物(モルモット)じゃねぇ俺の幼馴染だ。
俺はステイシスの超高機動での害虫駆除を開始し研究所の人間をばれない様に
一人ずつまた一人ずつと減らしていった（注；死んではいない半殺しだ……多分
一夏は急に話していた相手がいなくて驚いていた、野次馬もいたせいで一夏に帰ってきた報告もできずそのまま帰ってしまったが……
まあ、邪魔物を排除出来たので良しとする。

「ち、千夏？」

「ん？なんだい？」

「か、顔が怖いぞ？そ、そんなに怒る事だったか？」

どうやらさっきの思い出してた事が顔に出てきてたようだ
そんな怖い顔してたか？

「ああ、わりぃ別に一夏に怒ってたわけじゃあ無いんだ気にしないでくれ」

「そ、そうなのか？」

「そうだ、それに一夏もそんな怖がるなよ…悲しくなるじゃねえか怖がられるのは……」

前世ではそんなこと無かったのに…結構面倒見のいいお兄さんだったんだぞ？これでも

あ、今は女か……

「す、すまん！！そこまで怖がってたわけじゃあないんだ！」

「いいよ、どうせあたしは怖い奴なんだ…」

「ち、千夏、なあ元気だしてくれ……」

「ツ～ン……」

「うぅ…どうすれば…」

「ふふ、仲がいいですね二人ともお似合いですよ？」

「や、山田先生！？な、なにを言ってるんですか！？」

お似合いって何がだろ？漫才コンビか？

「あら、そんな否定しなくてもいいんですよ？」

「ち、ちがうんです！千夏とはまだそういう仲では――」

「まだ、なんですね？それじゃあ、いずれは……」

「あ……ううぅ…えと……」

一夏は何故か顔を赤くし山田先生は『こういうタイプは新鮮ですね～』と言いながら笑みを浮かべていた。新鮮？刺身の話だったっけ？

「せ、先生！は、話を戻しましょう！」

「え？あ、はいそうですねそれでですね。政府特命もあって、寮に入れるのを最優先にしたみたいです。一ヶ月もすれば個室の方が用意出来ますのでから、しばらくは相部屋で我慢してください」

「はい、分かりました！」

「一夏～後で部屋教えろよ～」

「おう、てっ千夏、お前元気なかったんじゃ……」

「あれは、一夏をからかう為の演技だぞ？」

「え、演技だったのか？」

「おう、そうだぞ」

「そ、そうか」

なんか一夏はあきれたような、安堵したような顔をして苦笑いしていた。

「ふふ、あっそれと荷物の事でお話が――」

「それなら私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

お？この声は……

「お、織斑先生……」

と、一夏は引きつっていた、ちなみにあたしは千冬さん襲来で脳内BGMを流している
曲はダースベーダーにしようか。それともターミネーターか…いや、ここはあえてジェイソンか……
そんなくだらないこと考えていると

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

おおう、すげぇ大雑把……一夏の為にいろいろ玩具を忍ばせといてよかった……

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑くんは今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

一夏…お前だけ男だというのを忘れたのか？

「アホかお前は。同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

おいおいあたしは、別に見られても何ともないが、（問題大ありだ一夏にとっては）
他はヤバいぞ事故でも……

「おっ、織斑くんっ、女子と入りたいんですか！？だっ、駄目です

よ！」

「い、いや、そういう訳では……」

「え？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のような……」

む、山田先生がまた勘違いをしてるようだ、そしてその言葉を廊下で聞いた生徒は……

「織斑くん、男にしか興味がないのかしら……？」

「それはそれで……いいわね」

「中学時代の交友関係を洗って！すぐにね！明後日までには洗っといて！」

なんつー話題をしてるんだここの女子は……

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草食っちゃダメですよ」

山田先生がそう言いあたしも一夏と帰ろうとしたら

「あ、山田先生」

「はい？なんですか」

一夏が山田先生を呼びとめた

「実は千夏にＩＳについて教えもらおうと思って最初に話してたんです」

「そうなんですか？ガッティーノさん」

「あ、はいそうなんですそれで一夏に教えようと思っています」

「そうなんですか、それでそれがなにか？」

「放課後に千夏のＩＳを見せてもらおうと思ってたんですがいいですか？」

「そうなんです、それで第三アリーナを貸してほしいのですが、いいですか？」

「そうですか……う～んどうなんでしょう……」

「それなら、私が許可しとこう」

「織斑先生？」

「織斑、ガッティーノの戦い方は、お前にとって大きな参考になる、ちゃんと学んで来い」

「わ、わかりました」

「任せてください、織斑先生」

「ふ、それではな、行こう山田君」

「あ、は、はい！」

織斑先生がそういって教室を出で行き山田先生も織斑先生の後を追いかけるように教室を出て行った。

残されたあたし達は

「それじゃ、いこうか？」

「ああ、そうだな」

あたし達は、一緒に教室から出て、第三アリーナに向かった。

第十六話「一夏強化プラン」（後書き）

ステイシスと白式って同じ高機動型ですね。うん

第十七話「お隣はサムライガール」（前書き）

一夏もなかなかすみに……置けるでかさじゃねぇ……

第十七話「お隣はサムライガール」

あたし達は廊下を歩き外に出て第三アリーナに向かった。

「一夏、あたしはＩＳスーツに着替えるから先に行っててくれ」

「ん、わかった」

そう言いあたしは更衣室に行きＩＳスーツに着替えた

「オーメルがデザインしたオリジナルＩＳスーツだけど、これは……はずい……」

そのＩＳスーツは、何というか背中が丸見えで
前は、首に固定している布だけでふくよかな胸を隠している
下半身は千夏が粘ったのかスパッツタイプになっている一体型だ

「前の面積が胸を隠すだけしかないって…これ、大丈夫なのか？」

前はノーマルスーツを来てたけど、なんでこれに変えたんだ？

「き、機能性を重視するためとはいえ…これはなぁ……」

い、一夏に見せられないぞ。これ……
この後、それをしった千夏パパは、オーメルに制裁を下したことを千夏はしらない。

「は、早く行かないとまずいな……早くいこう！」

そういい、あたしは恥ずかしながら、駆け足で一夏のいるアリーナへ向かった。

アリーナに着くと一夏が待っていた。

「一夏！待たせたな」

「おお、千夏そんなにまっ――――」

一夏は何故か驚いた顔をしたあと、顔を赤くして後ろを向いてしまった。

「ち、千夏！？そ、そそその服は……！？」

「ん？ＩＳスーツだけど？」

「な、ななんでそんなに……」

「？なにがだ？」

なにをいってるんだ？一夏は……

「い、いやだからその……」

？ああ、もしかして……

「これか？これはあたしの国が作ったオリジナルだよ。専用機の為に作られたらしいぞ？」

「いや、そうじゃなくてだな……」

んん～？じゃあいったい……？

「は、肌を見せすぎじゃあ、ないか……？」

「……いうな」

「……すまん」

これを着るには、かなり抵抗したんだぞ……

「まあ、いいか一夏さっさとＩＳについて教えるぞ？」

「あ、ああ、よろしく頼む……」

その後、あたしはステイシスを動かし一夏に分かりやすいようにレクチャーをして訓練をした。

何故か一夏はあたしばかりを見て顔を赤くしてたが、一夏、人の顔見て聴けというが、ＩＳの動きも見て貰わんと見せてる意味がないぞ？

訓練が終わり、一夏と寮に帰ることにしてアリーナを出たその道中、

「すごい速さだったな」

「凄いだろ？なにせ高機動型のＩＳだしな」

「ああ、」（それに千夏のＩＳスーツもある意味で――）

「ん？あたしのＩＳスーツがなんだって？」

「い、いやなんでもない！」

「？そうか……」

あたしのＩＳスーツって……変なのか？

「一夏」

「な、なんだ？」

とりあえず聞いてみるか……

「あたしのＩＳスーツって変か？」

「え？あ、えと、へ、変じゃあないぞ？」

「いや、だって一夏目をそむけてたぞじゃあねえか……」

「あ、あれは、目のやり場に困って――」

「目のやり場……ね」

「あ…その……」

また、一夏は顔を赤くして俯いた

「まあ、いいや……と、とりあえずこの話はおわりだ」

あたしは一夏の手を引っ張ってあるいたその時一夏は顔をさらに赤くしたのは謎であるが……

寮に行き、あたし達は、部屋に着いた

「えーと、ここか。１０２５号だな」

「あたしはどうやらお隣さんのようだな」

あたしがそういうと一夏は、

「お、そうかよろしくな」

「ああ、よろしく」

一夏は部屋に入り、あたしも自分の部屋のカギを開けてなかに入った。
はいったのだが……
「あれ？ベットが一つしかない？」
そう、この部屋にはベットが一つしかなかった。
「なして？……おろ？」
ベットの上に紙が置かれていた。
とってみると…
「なになに……ふむ、なるほど……」
どうやらこの部屋は、どうしても一人じゃないといけない人用らしい。つまり……
「あたしって貧乏クジを引いたのか？」
そう思うと肩をがっくりさせた。
「ま、まあいいか。一人のほうが何かとゆっくり出来「ズドン！」る？」
な、なんだ？
ズドン！
「隣の部屋か？」

たしか一夏の部…屋…あ……
そうだったたしか、一夏のルームメイトは……
あたしは思い出し、部屋を出てみると……

「ち、千夏か!?た、助けてくれ!」

幼馴染こと一夏がラフな服を来た女子に囲まれていた。

「何をやってるんだ…まったく……」

あたしは女子をかきわけ一夏に寄る。

「それで?どうした?」

とりあえず聞いてみると、

「ほ、箒が同じ部屋だったんだ、そ、それで……」

あ~なるほど、ね

「箒?篠ノ之が同じ部屋にいるのか?」

「そ、そうだ……」

「つまり、入ったら篠ノ之がいて、自分もこの部屋だと言ったら追い出されたと?」

「そ、そうなんだよ!助けてくれ!」

なるほど…てか、あたしの部屋を一夏と交換すればいいんじゃ？でも政府の思惑もあるんだろうなぁ…

……はあ、仕方ない……

「わかったよ、まかせろ……」

「ほ、ほんとか？頼む！」

さて、あの手で行くか……

『一夏』

『え？なんだ？耳打ちなんかして』

『今からあたしの言う通りに喋ろ、いいな？』

『わ、分かった』

『よし、いい子だ』

あたしは、一夏の頭を撫でた後、作戦を説明した。

「一夏、篠ノ之が部屋に入れてくれないならさ……」

「あ、ああ、なんだ？」

「あたしの部屋に来るか？」

「「「「「「！？」」」」」」ガタッ

おうおう、部屋の中の箒も動揺してるな……ついでにクラスメイトも……

「い、いいのか？」

「ああ、あたしは幼馴染だからな、織斑先生に頼めば何とかなるだろ」

「そ、そうか、助かる……」

「おう、あ、あと問題が一つある」

「なんだ？」

「あたしの部屋は大きさは同じでも一人部屋の設計なんだよ。だから――」

「だから？」

「あたしと同じベットになるけどいいか？」

「！！！！！！？？？？？？？」

「「「「「「えええぇぇぇぇ！！！！？？？？」」」」」」

よし！箒もめちゃくちゃあせってるな……だから何故女子まで驚く……

「へ！？お、同じベット！？」

「おう、駄目か？」

「い、いやえっと……」

一夏は赤くなった。なして？

「ガッティーノさんっずるーい！」

「私達も織斑くんと同じ部屋がいいー！」

「ねえねえ、織斑くんっ私の部屋に来ない？歓迎するよ！」

と、女子が割り込んできた

「え、えーと……」

「「「「「織斑くん！ぜひ私達の部屋に！！！！」」」」」

ふむふむ、作戦は最終段階に入ったな……後は……

ドカンっ！！！！

「おお！！？？」

「計画どうり」ニヤリ

うっし、あたしが実行した作戦で箒をおびき出せたぞ！

「……入れ」

「え？えと……」

「いいから……」

「あ、ああ」

こうして一夏は、部屋に入れてもっらったが、一夏の顔はすごく名残惜しそうにしていた。なんでだ？

その後、となりの部屋から爆音が聞こえたのは言うまでもない。

第十七話「お隣はサムライガール」（後書き）

千夏「まったく、世話が焼ける……はあ」
一夏「なんか損したような気が……」
箒「ほう……？」チャキッ……
作者「し、篠ノ之さん！？刀は、危ないっすよ！」

第十八話「六年ぶりの絆」（前書き）

千夏も怒る時は怒りますね。うん

第十八話「六年ぶりの絆」

隣の部屋から爆音が聞こえた次の日。
あたしは、一年生寮の食堂に一夏と箒と一緒に食事をとっている。
いるのだが……

「なあ……」

「……」

「なあって、いつまで怒ってるんだよ」

「……怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

「……はあぁぁぁ」

おい、こら、誘ってくれたのはうれしいがこれはねえだろ……
なんでこんなことになってんの？

「なあ、一夏」

ギロッ

何故あたしを睨む、箒？

「ん？なんだ？」

「あーえと、どうしてこうなった？」

「そ、それはだな……」

どうやら一夏はまた、箒の逆鱗に触れたようだ。

懲りないなあ…一夏は……

「なあ、篠ノ之、何時まで怒ってる気だ？」

「怒ってなどいない」

「それをいうならその不機嫌な顔はなんだ？」

「生まれつ「嘘つけ」む…」

なんでこう箒は素直じゃねえんだ……

「…おい」

「ん？」

「私はお前の事を知らないぞ」

「あーそうだった……」

そういやあたしの事、説明してなかったな……

「と、いうわけで一夏、説明よろ」

「て、俺か！？」

「一夏が説明したほうが、篠ノ之もよろこ――じゃなくて分かりやすいだろ？」

「まあ、それは……」

「ということで頼む」

「わかった」

一夏はあたしが、一夏の幼馴染であることを話した。

「と、いうわけで千夏は、俺のサード幼馴染なんだ」

「なるほどな……」

と、一夏は箒に説明した

「中学からの仲なのだな」

「まあな」

「それでな、箒――」

「な、名前で呼ぶなっ」

「……篠ノ之さん」

「……はあっ」

ほんっっっとうに素直じゃないぜ、ファーストは……
そう思っていると

「お、織斑くん、隣いいかなっ？」

「へ？」

見ると、朝食のトレーを持った女子が三名いた。

「ああ、別にいいけど」

一夏がそう言い話かけた女子は安堵のため息をもらし、
後ろの女子二人は小さくガッツポーズをしていた。
後ろで妙なざわめきが聞こえた気がしたが気にせず食事を取る

「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ」

向かい席に座った女子がそういった

「俺は夜少な目に取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

まあ、一夏らしいといえば一夏らしいのか？たしか千冬さんの習慣を真似したと聞いたが…

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

「わ、わたしたちは、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

「お菓子よく食べるしー」

お菓子って…まあ、女子は何かと気を使うからなぁ…まあ、あたしは…

「ふーんってそれじゃあ千夏は大丈夫なのか？俺の倍食ってたぞ？」

「「「え？」」」

「ん？おう、もう食べて何も残ってないけど、一夏よりも得盛りで食ったぜ」

そう、あたしの胃袋はブラックホールってな

「ふ、太らないの？」

「さあ？昔一夏と行ったステーキバイキングで店の料理全部食いつくしたら店長に泣きつかれたっけ」

「あはは、たしかにそうだったな、あれは俺もビックリしたな……」

店長に『もう食べないでください！！店がつぶれてしまいます！！』と言われ、

代金返上されて追い出されたっけ？

「い、いいなぁ」

「そんなに食べれるなんて……」

「それでいてそのスタイルを保つなんて…」

「「「羨ましい……」」」

と、いった女子三人、ほんとに羨ましそうだ。

「……織斑、私は先に行くぞ」

「ん？ああ。また後でな」

そういい、箒は先に行ってしまった。

「ふう、まあいいか、一夏あたしも先にいくな？」

「ああ、また後でな」

「おう」

あたしは朝食の入っていた二つのトレーを持って席を離れた。

さて今、三時間目を終え休み時間になった。
二時間目開始の時、織斑先生が一夏に専用機が用意されるという話を聞いた。
そして篠ノ之が篠ノ之束の妹ということもバレて、ちょっとした騒動になった。
そして今に至るのだが……

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

二度目の襲来が来たようだ。

「まあ？一応勝負は見えてますけど？さすがにフェアではありませんものね」

「ああ、そうかい」

ふむ、一夏も専用機を持つことになったしこれで対等に立ち会えるな

「フッたしかにな」

「え……千夏？」

ええい、なぜそこで裏切られたような顔をする！？

「ええ、そのとう「青いガチョウは狩られるもんさ」な！？」

「千夏？」

一夏が不思議そうにあたしを見た

「わ、わたくしのＩＳは、ガチョウと言う名前ではありませんわ！！」

「だれも、お前のＩＳとはいってないが？」ニヤニヤ

「！？っ――――」

セシリアは顔を真っ赤にした

「あ、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

セシリアはそのままわれ右をして、立ち去った。

「千夏」

「なんだ？」

「ありがとな」

そう言いながら、あたしに笑顔でいった。

「お、おう気にするな」

なんかすこし、照れるなぁ…

「と、とにかくさっさと飯食いにいこうぜ」

「ああ、そうだな箒も誘って行こうぜ」

「わかった」

そう言ってあたし達は、箒の席に来たのだが…

「箒」

「……」

「篠ノ之さん、一緒に飯食いに行こうぜ」

「……私は、いい」

「またか……」

いい加減、素直になれっての…まったく

「まあそう言うな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おいっ。私は行かないと――――う、腕を組むなっ！」

おおう、一夏強引だなー

「なんだよ歩きたくないのか？おんぶしてやろうか？」

「なっ……！」

箒の顔が赤くなった。おおー初めて見た、

「は、離せ！」

「学食に着いたらな」

「い、今離せ！ええいっ――」

「うわ！？」

「！？」

あたしは能力を発動して素早く動き地面に一夏が着く前に受け止めた……お姫様だっこで

「一夏、大丈夫か？」

「――――て、あれ？千夏？」

「大丈夫そうだな」

ふう、よかったよかった。どこも怪我してないな、うん……さて……

「篠ノ之箒、どういうつもりだ？」

あたしは無表情で箒を厳しい目で見た

「っ――――……」

だんまりか……

「まあいい、一夏が無事ならそれでいいさ…だけど……」

あたしは言葉を区切りそして

「次、こんなことがあるなら一夏の部屋割を変えて貰うし、今後一切一夏には近づかせない」

「な！？」

「ち、千夏？」

たとえ幼馴染だとしても、限度を超えればそれはただの暴力だ

「な、なんでお前がそんなことを決める！？」

「幼馴染だからだ」

「そ、それならわたしとて――――」

「さっきの態度と行為が幼馴染のすることか？」

「っ……」

「どうなんだ……？」

……まったく、なーんでこう俺が怒らにゃならんのだ……

「ち、千夏？さっきのはただのじゃれあいなんだ、だっだから気にしないでくれ」

「……はあ」

たくこの幼馴染は……
あたしは一夏を下ろし箒の前に立った。

「な、なんだ？」

箒はあたしを睨んだが、あたしはそれをどこ吹く風で受け流した。

「……」

「……」

睨みあいこと数秒……

「飯、食いに行くか！」

「「は？」」

あたしは箒に向けてニカっと笑い箒を引っ張った……首根っこを

「な！？ちょ、待て！く、首を引っ張るな！離せ！」

「うるせえなぁ…黙ってついてこないと固結びにするぞ？」

「どこをだ！？」

「それはもちろん、篠ノ之のポニーテールを――――」

「本気でやめろ！！」

ほんとにいやそうだな。

「えーと、ち、千夏？」

「なんだ？そこで固まってないで早くいこうぜ？」

「え？あ、ああ」

「おい、見てないで助けろ！」

「えーと……」

「はっはっはっーさー食堂にレッツゴー！」

「お、おー？」

「わ、わかった！わかったから離せ！行くから離せ！はーなーせー！」

その後、廊下に大声がこだました。

廊下移動中

「まったく…制服が乱れたではないか！」

「はは、わりぃわりぃ」

いま、一夏と篠ノ之と一緒に食堂に移動中である。

「お前もお前だ。なぜ助けん？」

箒は、一夏を睨んだ

「い、いや、えーと…あは、あははは……」

一夏は笑ってごまかした。

「ふん、まったく何故こんなことに」

「まあ、そう愚痴るなよ箒っ」

「な、名前で呼ぶ――――」

「いいじゃねえか、どうせ何時かは呼ばれるんだ。一夏も箒の事を名前で呼びたいよなぁ？」

「え？ああ、そうだな俺も篠ノ之さんの事を名前で呼びたいな」

「え？そ、そうか？」

なんだか箒は少し嬉しそうだ。

「ああ、駄目か？」

一夏が箒に駄目か聞く

「……す、好きにしろ」

「サンキューな！箒！」

「アンガトーな！箒！」

「なっ……」

箒が顔を赤くしてたじろいだ

「「イエーイ！」」

あたしと一夏は妙にハイテンションでハイタッチした。そりゃあ昔の幼馴染と仲直りできたんだから嬉しいわな…

「っ――さ、さっさと行くぞ！「一夏！」「千夏！」」

「「お？」」

どうやらあたし達も名前で呼んでもらえるようだ。

「ところで千夏」

「ん？なんだ一夏」

「その耳と尻尾はなんだ？」

「へ？…あ…」

あちゃーしまうのわすれてた……

「たしかに私も気になっていた、何なんだそれは？」

箒も気になったようだ

「あーこれはあるＩＳのシステムの影響だよ、うん」

「へーそうなのか、大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ体の身体強化みたいなもんだし、特に害はないぜ」

「身体強化、か…私を引きずった力もその力なのか？」

「ああ、そうだぜ。まあ、詳しい事はまた後でな？」

「ああ、わかった」

「そうしよう」

「うし！じゃあいくか」

「おう」

「わかった」

ふぅーいろいろあったが何とか仲直りできてよかった

「……千夏、頼みがある」

「ん？なんだ？」

一夏の頼みごとか、なんだろう？

「奇遇だな一夏、私も千夏に頼みたい事があるんだ」

「ほえ？」

箒まで？

「なんだ？あたしに出来る事があれば何でもするぞ？」

ふむ、友達のお願いは聞かねえとな！

「「千夏」」

「おうなんだ？」

「「尻尾と耳を触らせてくれないか？」」

「はい？」

え？なに？耳と尻尾を触らせてくれだ？

「「だ、だめか？」」

う、なんでもするといった手前…断ることができない！

「……後でね…」

「「よし！」」

そんなに喜ぶ事か？

「んじゃあさっと食堂いこうぜ！」

「うむ！そうだな！早くいこう！」

なんでそんな元気になったの？

「意味がわからん……」

二人は意気揚々に歩き私もそれに続いた。

その後、箒と一夏に耳と尻尾をモフモフされて痙攣を起こしている千夏が発見されたような。

店長に（もう　～　！！！）と言われ
→ここの（　）も変えた方が良いと思います
ガチョウは【駆られる（狩られる）】もんさ
地面に一夏が着く前【、（に）】受け止めた
【方結び（固結び）】にするぞ？
お前もお前だ（。）なぜ助けん？
そう【愚痴の（愚痴る）】なよ「箒」っ
→「箒」の部分の「　」は強調しているみたいなので
“　”等にしないと千夏以外が言った様に感じてしまいます
嬉しい【はな（わな）】…
ああ、そうだぜ（。）まあ、

第十八話「六年ぶりの絆」（後書き）

千夏「だ、駄目だって一夏…付け根は――ひゃあ！？」
一夏「おおーすげーモフモフだー」
千夏「だ、だから、駄目だって――ひぃぅ！？」
箒「こ、これはなかなか……！」
千夏「だ、誰か、助けてくれーーーーーー！！！！！！！！

作者「ズズーーーっ（↑お茶啜る）若いっていいねぇ……」

第十九話「仲良しトリオ」（前書き）

作者「いやー一夏の苦労を書くのは面白いな～」
一夏「殺っていいか？」
千夏・箒「「塵も残さずな？」」
一夏「零落白夜！うおぉぉぉぉぉ！！！！！」
作者「ぎゃあああああああああ！！！！！？？？？？

第十九話「仲良しトリオ」

さて、あたし達は今道場にいるそれは……

「てやぁぁぁぁぁ！！！！！」

「はあぁぁぁぁぁ！！！！！」

「二人ともガンバレー！」

そう、今一夏は、箒と手合わせをしているのだ

「めぇん！！」

バシィン！

「うわ！？」

「いっぽーん！」

そして箒にめん打ちされ、一夏の負けになった。

「くうぅぅやっぱり勝てないか…箒は強いな……」

「一夏もなかなかだぞ？私がいなくなっても鍛錬はやってたんだな」

「ああ、千夏に言われて、男は強くなきゃいけないぞっていわれてな」

「そうか…強くなることはいいことだ」

そうなのだ、原作じゃあ三年連続帰宅部だったから、説得して剣道部に入部させたんだ。

その見返りにあたしも剣道部に入ることになったのだがな。

「そうか？」

「ああ、」

箒と一夏は顔具を外し、二人は微笑みながら互いを褒め称えた。

『う～ん、なんか羨ましいなぁ……』

と、思っていると……

「きゃー！織斑くんカッコいい！」

「すごい！つよーい！」

「織斑くん！私と付き合ってー！」

外野はうるさいなぁもう、それと最後に言った奴、あとであたしのところに来いお・は・な・し・だ！

「ふん、いい身分だな？」

「あ、いや…ほ、箒！もう一試合やろうぜ！」

「む、いいだろう受けて立つ」

「二人とも～怪我すんなよ～？」

「「おう！！」」

箒はほんとに楽しそうだ。一夏も嬉しそうにしてるしよかったよかった。

寮への帰宅中

「ふう、なかなかいい試合だったぜ」

「そうだな私も久しぶりに一夏とやれてよかった」

「そこを嬉しかったと言わないのが、箒ちゃんである」

「な！？こら、千夏！！」

顔を赤くして箒が怒った

「あははは、冗談だよ冗談」

「まったく千夏は…私をからかうな」

「ごめんって、な？」

「ふん」

「ありゃ？すねたか？」

「すねてない」

「お前ら仲いいなあ」

「むう…」

「それほどでも」

いやーなかなかいい試合を見れたぜ。これならセシリア戦も勝つことが出来るぞ

「箒に一夏の師を頼んで正解だったな」

「ああ、箒がいれば百人力だな」

「そ、そんなに褒めるな、反応に困る…」

「そう言うなよ、箒が俺の戦闘時の感覚作りして、千夏にＩＳの勉強を見て貰えばもう大丈夫だ」

「そうだぜ箒？いま一夏の師をやってるんだから持ちっと無駄にあ

る胸張れよ」

「な!?ち、千夏!?何を言って!?」

おーおー赤くなった赤くなった～

「まあ、冗談はこれぐらいにして、」

「冗談ですませるな!」

「だからわりぃって」

「まったく!」

箒はそう言い、そっぽを向いてしまった

「…明日だな」

「ああ…そうだな」

「イギリス候補生との試合……」

ここまで、一夏を鍛えたんだ、絶対に勝つ!

「「一夏」」

「ん?」

「「勝てよ?」」

「おう！」

一夏はニカっと笑って答えた。
そしてあたし達は、寮に着きあたしは一夏を部屋に呼び相手の対策について話し合った。

そして、試合当日
あたし達は第三アリーナ・Ａピットにいるいるのだが……

「ないなＩＳ」

「ないようだな」

「ないな…本当に」

そう、一夏のＩＳが来てないのである

「ど、どうしよう？」

「わ、私に聞くな……」

「まあ、落ち着けって」

「「むう」」

もうそろそろ来るはずなんだけど……

「お。織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

おおー山田先生がきたぞそれに……

『むぅ…左右別々に動くさまもなかなか……！」

だめだこいつ…早く何とかしないと…！

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す～～は～～、す～～は～～」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

「そのまま胸を張って、顎を引いてください」

「うぅっ」

わたしも悪乗りしてやったら本当にしたよ……それに

『こ、この突き出された二つの凶器は！』

なんかもう突っ込みに疲れたよ、パト◯ッシュ……

「……ぷはあっ！う、けほ！けほ！ま、まだですかぁ？」

うん、見惚れてて止めるの忘れてた。

「目上の人間には敬意を払え馬鹿者共」

スパパァンッ！！

「グ！？」

「きゃん！？」

ううー！いてー！これがＩＳ学園名物、出席棒アタックの威力か……！

「うぅ…いたい…」

予想外に痛く涙が出そうになった

「大丈夫か千夏？」

一夏がそう言いぶたれたところを撫でてくれた

「うー…一夏、ありがと……」

「！？っき、気にするな」『涙目で上から目線は反側だろ…！』

「うん……」

なんか一夏が赤くなりそっぽを向いてしまった、あたし何かしたかなぁ……？

「そ、そ、それでですねっ！来ました！織斑くんの専用ＩＳ！」

「！？、来たんですか！？」

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナの使用できる時間は限られてるからな。ぶっつけ本番で物にしろ」

「おう！」

「この程度の障害、乗り越えてみせろ。一夏」

「ああ！」

「一夏！見てるからな！」

「まかせろ！」

「「「がんばれ！」」」

一夏がピットの前に立ち防壁扉がゆっくりと開いてゆくその向こう側には――――

――――――あたしが……俺が待ち望んだ始まりがあった。

第十九話「仲良しトリオ」（後書き）

作者「うぅ…痛い…」

　箒「痛いで済むのか？あれで……」

千夏「化けモンじゃあねえの？」

作者「うっさい！デカ乳シスター――」

千夏・箒「「ち・り・になれぇぇぇぇぇ！！！！」」

作者「ぎゃあああああああ！！！！！？？？？？？？

第二十話「飛び立つ白」（前書き）

戦闘書くの難しいですね……

第二十話「飛び立つ白」

とうとうあたしは、一夏のＩＳ……白式を見ることが出来た。

「これが……」

「一夏の……」

「はい、織斑くんの専用ＩＳ『白式』です！」

一夏は、白式に近付いた。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

そういわれ、一夏は白式に触れた。

「あれ……？」

「一夏？どうした？」

「…馴染む…理解できる。これが何なのか。何のためにあるのか。――――わかる…」

「…背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後のシステムが最適化をする」

一夏は白式に体を任せ、白式は一夏を装甲で包み『繋がった』

「ＩＳのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

千冬さんは一夏に大丈夫か聞いた。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

千冬さんはほっとしたように声をした

「箒、千夏」

「な、なんだ？」

「おう」

「言ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

「勝てよ、一夏」

一夏は頷くと、そしてピット・ゲートに進んだ。

そして一夏は――――飛び立った……

視点・「織斑一夏」

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。
セシリアが乗るＩＳ、蒼い雫（ブルー・ティアーズ）
第３世代型ＩＳ。射撃を主体とした機体。第３世代兵器「ＢＴ兵器」のデータをサンプリングするために開発された実験・試作機という意味合いが濃いと千夏から聞いた。
さすがにセシリアの弱点までは知らないらしい

『千夏の奴、カラビニエリの情報だって言ってたけどやけに詳しかったな……』

それは千夏は原作をしっている為、そして弱点を教えなかったのは一夏の成長の為である。

「最後のチャンスをあげますわ」

千夏の情報通について考えてると声をかけられた。

「え？なんかいったか？」

「な！？――一っチャンスを上げようと思いましたけど、やめですわ！」

――――――警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。さて千夏に教わった戦い方をするか……

「なんだよ、怒りっぽいなぁ青いガチョウは……」

俺は相手を挑発した。

「なあ！？わたくしのＩＳの名はブルーティアーズですわ！！」

「だから誰もお前のＩＳとは言ってないぞ？」

まあ、こっちはＩＳの初戦なのだ。不本意だが挑発も立派な戦術だ……と、千夏が言っていた。

「っ――――――もう、許して差し上げませんわ……！」

――――警告！敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

あれ？挑発しすぎたか？

「落ちなさい！」

キュインッ！

「クッ！！」

俺は紙一重でレーザーの直撃を避けた。

「あっぶねぇ！！」

箒と千夏の教えがなかったら初撃を貰ってた……！

「千夏と箒に感謝だな…！」

その千夏が行った訓練内容は……

回想中……

「回避を中心にした訓練？」

「そうだ、箒にはそれを一夏にやって貰う」

「それはいいが、攻撃や防御はいいのか？」

「一夏にそれは望めん」

「……」がくっ…

千夏の言葉で俺のダメージは大きかった……

「わ、わかった回避中心に訓練すればいいのだな？」

「ああ、オルコット相手なら回避を磨くべきだろう」

「なるほど、中距離射撃型に挑むなら回避が妥当だろうな」

「そういうことだ、多分一夏のＩＳは接近戦オンリーの機体だろうからな」

「なんでわかるんだ？」

俺、復活

「千冬さんが近距離格闘装備以外を一夏に使わせるとは思えん」

「な、なるほど」

ほんとは、原作を知っててアドバイスを出来る千夏だった

回想、終わり

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

くそ、避けてはいるがバカスカ撃ってきやがる！

俺が白式の反応にも追いついていないのに！

「さっさと装備を呼びだそう…！」

白式に問うと、すぐさま現在展開可能の一覧が現れる。

「う、千夏の言ってた通り『近接ブレード』しかない……」

俺は軽く落ち込んだが、持ち直しブレードを展開した。

「いくぞ！」

俺はセシリアのブルーティアーズに接近した。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうなんて……笑止ですわ！」

すぐさまセシリアの射撃、それをひねってかわす。

「あたらねえよ！」

「く、ならばこれで！」

セシリアが右腕を横にかざすと、

セシリアのＩＳから、自立起動兵器が飛び出した。
千夏の言ったとうりだ！
俺はピットからの上下からの攻撃を避けて、
セシリアに再度接近した。

『そういや、千夏が言ってたな……』

回想『一夏、相手の動きや癖、隙を見逃すな、それが勝利に繋がる」

『あいての動きをみる……ん？』

俺はあることに気がついた

『あいつ…ピットを動かす時、動いてない？』

セシリアはピットを動かす時、制止していた……

『もしかして…？いや、試す価値はある！』

俺は放たれるレーザーを潜り抜け、一閃。重い金属を切り裂く感触が手のひらに伝わる。
真っ二つにされたビットは断面に青い稲妻を走らせ、一秒後に爆散した。一つ目！

「なんですって！？」

驚愕するセシリアに向けて、俺は上段打突の構えで切り込む。

「くっ……！」

後方に回避するセシリア、そしてまたその右手を振るう。そしてビット2と3が飛んでくる。

「わかったぜ！この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！しかも――――」

軌道を先読み、ビットの後部推進機（スラスター）を破壊して落とす

「その時、お前はそれ以外の攻撃が出来ない。制御に意識を集中させてるからだ。そうだろ？」

「……！」

ひくくっとセシリアの右目じりが引きつった。図星だな残りビットは二機。しかも軌道は読めた――

――あれは必ず俺の反応が一番遅い角度を狙ってくる。

『勝てる……！』

俺は始めて勝利出来る可能性に、わずかに胸を躍らせた。

「はぁぁ……すごいですねぇ織斑くん」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた山田真耶がため息混じり

につぶやく。確かに一夏はＩＳの起動が二回目とは思えないほどの戦いだった。
しかし、千冬と千夏は対照的に忌々しげな顔をする。
「「あの馬鹿者（バカタレ）。浮かれてるな」」
千冬と千夏の声が被った。
「む？」
「え？」
千冬は千夏と被った事にすこし不思議そうにしてた。
「あ、えと、どうしてわかるんですか？」
「ふむ、さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう」
「あれは、一夏の昔からの癖だ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」
「へぇぇぇ……。さすが御姉弟と幼馴染ですねーそんな細かいことまでわかるなんて」
なんとなくそう言った真耶に、千夏はフンっと胸を張り、けれど千冬はハッとする。
「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」
「あー、てれてるんですかー？照れてるんですねー？」

「……」

ぎりりりりっ。千冬のヘッドロックが炸裂した。

「いたたたたっっ！！」

「私はからかわれるのは嫌いだ」

「はっ、はいっ！まかりました！わかりましたから、はなし――――あううううっ！」

「……口は災いのもとってね…」

千夏はぎゃあぎゃあ騒ぐ真耶から視線を外し、箒とモニターを見た

「……」

『……勝てよ、一夏……』

そう、願った時試合は大きく動いた。

『――――獲った！』

セシリアの間合いに入った俺は、振り下ろした刀でビット３を撃墜。そのままＩＳ独自の無重力機動でビット４に回し蹴りをして吹き飛ばす。

セシリアのライフルは間に合わない。確実に一撃入るタイミングだった。だが……

『なんだ？何か忘れている……』

そう、ブルー・ティアーズの兵装でなにか大事な事を忘れているような気がした。

『思い出せ！千夏が言った絶対大事な事だ……！」

俺は必死に思い出した。そして……

回想『いいか、ティアーズのビットは４機がレーザー型で後の２機が――――』

――――――！？、まずい！！

「――――かかりましたわ」

にやり、と。セシリアが笑うのが見えた。――――しまった！？気づいて距離を置こうとするが間に合わなかった。

ヴンッ――――

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

回避が間に合わない。しかも、さっきまでのレーザー射撃を行うビットではない。これは『弾道型（ミサイル）』だ

ドガァァァンッ！！

赤を超えて白い、その爆発と光に俺は呑まれた。

第二十話「飛び立つ白」（後書き）

一夏「ち、千夏、俺の戦いどうだ？」

千夏「おう！カッコいいぞ！」

一夏「そ、そうか！」

作者「でも、最後被弾し「「割り込むな！」」ぐふっ！？」バタンッ

第二十一話「白い閃光、爆誕！」（前書き）

とうとう白式の真の姿が！

第二十一話「白い閃光、爆誕！」

「一夏っ……！」

モニターを見つめていた箒は、思わず声をあげた。
さっきまで騒いでいた二人も爆発の黒煙に埋まった画面を真剣な面持ちで注視する。

「「ーーーふん」」

黒煙が晴れた時、千冬と千夏は鼻を鳴らした。千夏は微笑み、千冬は安堵の色がある。

「「機体に救われたな馬鹿者《一夏》め」」

「む？」

「え？」

また、被った事に千冬は不思議がっていた。
モニターから黒煙が消えた、そしてその中からあの純白の機体があった。――――――――――――

――――――――――――そう、真の姿で……

――――――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

「これは……千夏が言ってたやつか？」

千夏は、一夏にフォーマットとフィッティングについても話していた。

「これを押せばいいのか？」

俺は確認ボタンを押した。その直後、膨大なデータが整理された。それが感覚的にわかる。そして、変化は劇的に訪れた。

キィィィィン……。

高周波な金属音。けれどそれはどこか優しいものに感じられた。刹那、俺の全身を包んでいる――――いや、今や我が身そのもののＩＳが光の粒子に弾けて消え、そしてまた姿を成す。

「これは……！」

新しく形成されたＩＳ装甲はまだうすぼんやりと光を放ち。そしてより洗練された形へと変化する。

「ま、まさか……一次移行（フォースト・シフト）!?あ、あなた、今まで初期設定だけの機体であそこまで戦ってたっていうの!?」

「どうやらそうらしいな……」

まあ、とにかく…

「この機体はやっと俺専用になった！」

機体を見ると、どこか中世を思わせる鎧に変わっている。
そして変わったのは姿だけじゃなかった。

――――接近特化ブレード・（雪片弐型）。

「これは……千冬姉が使ってた武器だよな……ふっ」

まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

三年前も、六年前も、そしておそらく十五年前も。あの人は何時でも俺の姉だ。でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしよう。
これからは――――――――

「俺も、俺の家族を守る」

「…は?あなた、何を言って――――――――」

「とりあえず、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表の、その弟。それが不出来では、格好が付かない。それに……

「俺はあいつを守ると約束したんだ……！」

俺はその守りたい人がいるピットへ視線を向けた。

あいつは忘れているかもしれないが。俺は昨日の事のように覚えている。

『あいつが見てるんだ……かっこ悪いところは見せられない！』

俺はそう決意し、セシリアに向き合った

「いったいさっきから何の話を…ああもう、面倒ですわ！」

再装填したビットが二機、セシリアの命令で飛んでくる。またあの多角形直線機動だ。だが――

『見える……！』

右手を握りしめ。答えるように、低い機械音を鳴らす（雪片）。使い方ならわかっている。

千冬姉に隠れて何度も見た試合の映像。そこでどう使っていたかを覚えている。

ギンッ――――――！

横一閃。両断されたビットは俺の真横を通り過ぎて、そして爆ぜた。

俺は振り向くことなく再度セシリアへと突撃する。

「おおおおっ！」

手の中でエネルギーがその密度を増していくのを感じる。刹那、雪片の刀身が光を浴び、
より強い力の存在を俺に伝えてきた。

『俺は…勝つ！」

セシリアの懐に飛び込んだ俺は、下段から上段への逆袈裟払いを放った。
セシリアに斬撃が当たりセシリアのＩＳのシールドエネルギーを切り裂いた。
そして、決着を告げるブザーが鳴り響いた。

「試合終了。勝者――織斑一夏」

その試合結果に第三アリーナに詰めかけたギャラリーが、一瞬沈黙したあと
アリーナを轟かす、大きな賛唱が響いた……

「そ、そんな……わたくしが…専用機持ちのわたくしが…負け…た……？」

セシリアが信じられないという顔をしていた。
その目には悔しさからか涙が浮かんでいた。

「……オルコット」

「！？っ……」

セシリアは無言で一夏を睨む

「……ありがとな」

「え？……」

俺は右手を差し出したそして、セシリアには少し分からない行動だったようだ

「オルコット…良い戦いが出来た、サンキューな！」

「え……あ……」

セシリアは一夏が差し出した手を握手した

「……ふぅ、これじゃあ、むきになったわたくしが馬鹿みたいじゃありませんか…」

「え？なにが？」

「なんでもありませんわ」

そういい、セシリアは目に溜まっていた涙を拭いた

「…そろそろもどるか、じゃあなオルコット！」

「あ、あの！」

「ん？」

セシリアは何故かモジモジしていた。

「セ――リ――です…」

「え？」

「せ、セシリアとお呼びください……！」

「え、あ、ああ、わかったよセシリア」

「は、はい！」

セシリアは嬉しそうに微笑んだ

「じゃあもう戻るな」

そういい、俺はセシリアから手を離した

「あ……」

「ん？どうした？」

「あ、いえ！…なんでもありません」

「？そうか、またなセシリア」

「はい！」

セシリアは何故か名残惜しそうにして自分のピットに帰っていった。

「さて、俺も帰るかな…」

俺は白式を動かし自分のピットに帰った。

「千夏は俺を褒めてくれるよな……？」

千夏が俺を褒める事を考えるとたまらなく嬉しくなった。

「早く戻ろう！」

俺は最高の気分でピットに戻って行った……

第二十一話「白い閃光、爆誕！」（後書き）

千夏「いやー良い戦いしたな、セシリア」
セシ「ええ、一夏さんとの戦いは心躍るものでしたわ！」
箒「さっきまで目の敵にしてた癖……」
作者「まあまあ、落ちついて篠ノ之さん」

第二十二話「お節介は絶えない」（前書き）

もうそろそろあの子も登場ですかね？

第二十二話「お節介は絶えない」

一夏がピットに帰ってきた。そして待っていたものは……

「浮かれてたな？まったく」

「ちゃんとあたしの教えを忘れてなければミサイルにも当たらなかったのに、まったく」

「……すみません」

試合の後、一夏を待っていたのは説教に近い教えだった。

「ち、千夏？お、織斑先生も一夏は勝てたんですからそのぐらいに……」

「そ、そうですよ！織斑くんも頑張りましたし…ここは、ね？」

「「むぅ…」」

千夏と千冬はすこし黙り、そして

「まあ、一夏も頑張った方だし、いいかな」

「ふむ、まあこれ位にしとこう」

「うう…勝ったのに……」

一夏、頑張れ、

「ところで次の相手はガッティーノだったな」

「はい、そうです」

「ふむ、ならば一時間の休憩の後、織斑とガッティーノの試合を開始する」

「「はい」」

「一夏、手ぇ抜くなよ？」

「千夏もな？」

二人は握手をして、千夏は向こうのピットへ向かった。

一時間後……

アリーナ中央

「やっと来たか…」

「ああ、待たせて悪いな」

一夏の白式と千夏のステイシスが向かい合った。

「始めようぜ？一夏」

「何時でもいいぜ、千夏」

そう言い、両者が動いた！

「はあああああっ！」

一夏は千夏に雪片を振り下ろす。

「あまい！」

千夏は後方に避け、回避し、銃剣着き突撃ライフル「カルカノ」を撃った。

ズドンッ！ズドンッ！ズドンッ！

「くぅ……！」

一夏はそれを回避したが、一発貰ってしまった。

「おまけだ！」

千夏はそう言い、左手に展開したレーザーバズーカ「ファブラム」をぶっ放した。

「うおあぁ！？」

一夏はそれを間一髪で避けた

「やるじゃん」

「そりゃどうも！」

そう言い、二人は高速戦闘を繰り返した。

「なかなか、様になったな一夏。あたしは嬉しいよ」

「俺も千夏と戦えて嬉しいぜ」

二人はお互いを褒めた。そして試合は終盤に入る。

『さーてと、一夏は……気づいてないな…まったく、シールドエネルギーは小まめに見ろっていったろう……』

一夏のシールドは残り少なかった。千夏のシールドもほとんどないのだが……

『よし、そろそろ使うか……』

千夏は意識を集中したそして

ピョコンッニョキッ

耳と尻尾が生えた

「!?それは……!」

一夏は驚いた、そして

「いくぜ？」

千夏は後ろに搭載された、ＰＭミサイルを一斉発射した。

「！？、うおおおおおおおっ！！！！！！！！」

一夏はミサイルを切っては避け、切っては避けを繰り返した

「あれで行くか……」

千夏はライフルの銃剣を一夏に向け、構えると。

「オーバードブースト！」

背中に搭載された中型ブースターが点火し、千夏は爆発的な加速を見せ、そして……

「うおりゃあああああああああっ！！！！！！！！」

一夏に突撃し、直撃して一夏と地面に激突した。そこで勝負はついた。

「試合終了。勝者――――千夏・Ｎ・ガッティーノ」

そう、審判は告げた。

視点・「千夏・Ｎ・ガッティーノ」

試合が終わり。翌日のＳＨＲ。あたしは当然のごとく代表を辞退し一夏に譲った。
一夏は何故辞退したのかを聞いてきてあたしは、

「一夏が代表になったら安心するなぁ……」

と、言ったら一夏は急に元気になりだした。そんなに代表になりたかったのか？
ああ、それとセシリアとも仲良くなった。
同じ射撃型とかもあってか、名前で呼び合う仲になった。
箒とは何故か一夏の訓練で少しもめてたようだ。
そんなこんなでＳＨＲが終わり、授業が開始された。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行訓練を実施してもらう。織斑、オルコット、ガッティーノ。試しに飛んで見せろ」

あたしはステイシスを呼びだし展開した。
一夏やセシリアのＩＳを展開した二人とも昨日の試合で損傷した機体は治っていた。

「よし、飛べ」

そう言われあたし達は飛んだ。

「一夏、飛ぶのにはなれたか？」

「いやーまだ感覚が掴めなくて」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「そういわれてもなぁ。空を飛ぶ感覚自体まだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ」

「難しい話になるぞ？」

「反重力力翼と流動派千の話になりますもの」

「わかった。説明してくれなくていい」

一夏には難しすぎたか？

「そう、残念ですわ。ふふっ」

「くくくっ残念だ」

あたし達は楽しそうに微笑んだ。

あの日以来、セシリアは一夏の訓練を手伝ってくれるようになり

箒とも…まあ、訓練内容とかで喧嘩することはあるが……

上手くやっている

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。

そのときはふたりきりで――――」

「ほーセシリア、大胆だな？」にやにや

あたしはセシリアをからかう。

「な！？ち、ちがいますわ！そういうふしだらなことではなくてですね！純粋に一夏さんに強く――――」

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

おおう、箒がご乱心か？

「織斑、オルコット、ガッティーノ、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

織斑先生から指示が来た

「「了解」」

「はやくいかねえと箒がすねそうだな」

「クスッそうですわね」

「ああ、いこう」

「でわ、わたくしから、一夏さん千夏さん、お先に」

セシリアが先に行き急降下していった。そして完全停止を難なくクリアした

「うまいもんだなぁ」

「あれが普通だ、一夏」

まあ、一度もやったことのないあたしが言うのも何だけど。

「よし、次は俺が行く」

「気をつけてな」

「おう！」

そう言い、一夏は急降下していった。

『さて、原作によればだけど……』

あたしは一夏を追いかけるように急降下した。そして案の定……

「ま、まずい！？早すぎる！？」

『……はあ、まったく世話のやける幼馴染だ……』

あたしはそう思い一夏の背中に抱きつくように受け止め。オーバードブーストで吹かし、地上に激突する前に一夏を受け止めた。――――二度目のお姫様だっこである

「ふう、織斑先生の指示どうりに地表十センチで出来た…」

「――――――ってあれ？千夏？」

「おう、お目覚めか？王子様」

一夏にそういったら顔を赤らめた。なして？

「まったく馬鹿者が……すまんなガッティーノ愚弟が迷惑をかけた」

「いえいえ、幼馴染ですから」

そういって織斑先生は苦笑いを浮かべた

そして何故かクラスメイト達は……

「織斑くんをお姫様だっこ……アリかも……」

「いや、まって、逆に織斑くんを……きゃ♪」

「いいなぁ羨ましいなぁ……」

聞こえない。あたしは何も聞こえない。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

あれでか？

「二人とも何か失礼なことを考えているだろう」

「「イエ、ナニモ」」

「なぜ、カタコトなんだ…？」

「「サア？」」

「はあ、大体だな一夏、お前というやつは昔から――――――」

本当に箒はするどいなぁ。すると

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

セシリアが箒の声を遮るように前に現れた。

「あ、ああ、大丈夫だ」

「そう。それはなによりですわ」

無事な事がわかって、セシリアは楽しそうに微笑んだ

「……ＩＳを装備していて怪我をするわけがないだろう、それに千夏が止めたのだから…」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然の事。それがＩＳを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮を被っているよりマシですわ」

おおーバチバチッと火花とんでるなーおっとそれより

「一夏、ほんとに平気か？気持ち悪くないか？」

「あ、ああ、大丈夫だむしろ心地よいというか――――――」

「え？」

「い、いや、なんでもない」

一夏はまた顔を赤くして俯いた。だからなして？

そんなこんなでセシリアと箒の睨みあいは千冬さんに止められ。授業を再開した

そしてその後、あたし達はもう一人の幼馴染と再開する……

第二十二話「お節介は絶えない」（後書き）

どうだったでしょうか？感想お願いします

第二十三話「再会した相方？」（前書き）

鈴「何よこの回！？漫才モドキばっかじゃない！！」
作者「いやーなんか書きたくてー」
千夏「あたし達ってこんなだっけ？」
一夏「だいたい合ってるんじゃないか？」

第二十三話「再会した相方？」

授業を終えあたし達は、一夏のクラス代表就任パーティーを終えた次の日……

「一夏、噂は聞いたか？」

「噂？」

朝、あたしは一夏に噂についてきいた

「そうだ、二組に転校生が来るって話だぜ」

「転校生が？この時期に？」

「ああ、何でも中国の代表候補生らしいぞ？」

「へえーそうなのか」

一夏はあんまり興味なさそうだな……

「中国って言えばさあ」

「ああ、なんだ？」

「鈴を思い出さねえか？」

あたしは、一夏に鈴の話をした。

「あー鈴か……元気にしてるかな……」

「しているだろ？あいつが元気じゃないとこなんて見た事ねえぞ」

まあ、もうすぐこっちに来るころだと思うがな……

「もしかして、その候補生が鈴だったりして……」

「あはは、まさかそんな――――」

「――――その、まさかよ」

「「え？」」（来たか……）

声のした方向に顔を向けるとそこには……

「「鈴？」」

「久しぶりね、千夏…そして一夏！」

そこには仁王立ちで立っているセカンド幼馴染こと凰鈴音（ファン・リンイン）がいた……

「鈴？お前なのか？」

「おおー鈴か、久しぶりだな」

「あんたらもね」

そういって鈴はあたし達に近付き

「一夏！」

ズビシッ！と音が出るくらい指さしで一夏を指差した

「お、おう？」

「あんた、クラス代表なんでしょう？」

「え？あ、ああ。まあなんというか、成り行きでな」

「ふーん……」

鈴は一夏を見たあとあたしの方に向いた

「ん？どうした？鈴」

「……いや、何でもないわ」

「？」

なんだったんだ？

「とにかく、あたしは中国の代表候補生になったのをあんた達に宣言しに来たのよこの凰・鈴音がね！」

ドドーンっと鈴が胸ない胸を張り。宣言した

「何カッコ付けてんだ？似合わないぞ？」

「な！？」

鈴はすこしずっこけた後、驚きの声をあげた。

「な、なんで人がせっかくやってるのになんてこというのよ！」

「「いや、そんなこと言われても……」」

「そんなことじゃないわよ！て、いうかハモるな！」

「「いやーそれほどでも」」

「褒めてないわよ！？」

「「そうなのか？」」

「だから、ハモるな！このダブルサマーコンビがぁー！！」

ウガァーッと声に出てそうな声で突っ込みをした鈴だった。

「おい」

「なによ！？」

「「あ……」」

バシィン！

うわーいつもながらの威力だなー千冬さんは…今ので鈴の身長が２センチ下がったか？

「ち、千冬さん……」

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「す、すみません」

そういい鈴はすごすごと退散すると……

「また来るからね！逃げないでよ、一夏！千夏！」

「「無・理」」

「だからハモるな！即答するな！無理いうなぁー！！」

また鈴からの突っ込みキター！

「突っ込みしてないでさっさと戻れ！馬鹿者が！」

「は、はいぃぃぃ！？」

鈴は千冬さんに怒られ今度こそ退散した

「……千夏」

「なんだ？一夏」

「お前の言ったとうりだな…」

「ああ、そうだろ？」

「「鈴で遊ぶと面白い！」」

そんなこんなで足りなかった突っ込み分と再開した一夏と千夏は、
箒とセシリアに鈴との関係を聞かれた。

ここは、食堂。そして

「待ってたわよ！一夏！千夏！」

凰・鈴音参上！

「鈴、分かったからどいてくれ他の人に鈴が見えずにぶつかっちまうぞ？」

「そうだぞ鈴、他の人に鈴が見えずにぶつかっちまうぞ？」

「それはあたしが小さいと言いたいのかアンタらはー！！」

「「まあまあ、モチツケ」」

「アンタ達がボケたんでしょ！？」

鈴の突っ込みはいいねぇ…癒されるわ…

「鈴で遊ぶのはこれぐらいにして……」

「遊び!?あたしで遊んでたの!?」

「鈴、とりあえず座ろうぜ?」

「うっ……わかったわよ…」

鈴は納得いかないような顔をして一夏とあたしと同じテーブルに着いた

「それにしても一年ぶりか!鈴は元気にしてたか?」

「ま、まあねアンタ達も元気そうで何よりよ……」

そういいながら、鈴はラーメンをズルズル食べていた

「ありがとよ、鈴。それにしても急な転校だなぁ?鈴」ニヤニヤ

「な、なによ?」

「いやー?別にー」

あたしはプライベートチャネルに切り替えて

『一夏への告白の準備はできたか?』

ブブーッ！！

「うわ！？きたね！？何してんだよ！？鈴！！」

「ゲホ！ゲホ！ち、千夏！？アンタ何言って――――――！？」

「いやーここまで反応するのは面白いなー」

あははー鈴は可愛いなぁもう

「あ、アンタね！いい加減あたしで遊ぶの止めなさいよ！？」

「「え？だめなの？」」

「当たり前でしょ！」

ふむ、仕方ない

「「わかった、今は止めよう」」

「いまは！？」

「さーさっさと飯食おうぜー」

「おうそうだな、さっさと食おう」

あたし達は食事を再開した

「あたしをむしするな！」

「鈴、食事中は静かにだぞ？」

「そうだぞ鈴、静かにしないと駄目だぞ？」

「アンタらのせいでしょうがぁー！！！！」

鈴の声がこだました。

「うるさいわよ！そこの女子！！」

ビュン！！パカーン！！

「あいた！！」

「「おおーおばちゃん必殺のおたま投げ」」

どうやら、うるさくし過ぎたな

「あー鈴、悪かったやり過ぎた」

「からかって悪かった」

「うう……なんでこんな目に…」

「「まあまあ」」

「あんたらねぁ……」

うわー鈴が怒ってるよマジいなこれ

「あーゴホン！ゴホン！」

「ンンンッ！一夏さんわたくし達をお忘れでは？」

あ、わすれてた

「わるいな、久しぶりに会った幼馴染に、な？」

「……まあ、いいですわ…」

「わりいわりい」

その後、一夏の訓練を鈴が受け持つという、話題になりまた騒がしくなっておたまが飛んで来たのは言うまでもない。

第二十三話「再会した相方？」（後書き）

千夏「こんなんでいいのかよ……」
作者「うーん、たぶん」
セシリア「わたくし達の出番は……」
箒「無いというのか……」

第二十四話「素直になれない親友」（前書き）

神「ところで俺の出番は？」
作者「まだまだ先です、ご了承を。
千夏「いや、一生でてこなくていい」
神「そんなこというなよー」だきだき
千夏「こら！抱きつくな！頬ずりすなー！！」
一夏「……これが、殺意か……！」

第二十四話「素直になれない親友」

あたしは今、一夏と箒の部屋にいる。それは……

「だから部屋変わってあげるっていったでしょ？」

「ふざけるな！なぜ変わらなければならない！？」

ということである。

鈴が一夏と箒の部屋に押し入り、幼馴染だから部屋を変わってということらしい。

てか一夏、あたしを呼んで巻き込むな。

『そんなこと言わずに助けてくれ！』

『アホタレ、お前がまいた種だろ』

『幼馴染だろ！？』

『む、それを出されると困る……』

たしかに幼馴染だから助けたいが……

『あたし幼馴染だけど。そこまで一夏と同じ部屋じゃなくてもいいけどなぁ』

幼馴染だから同じ部屋ともいえないしなぁ……

『そ、そんな……』ガクッ

一夏は首を垂れた。どうしたんだ?

「一夏はあたしが同じ部屋にいる方がいいわよね?」

「一夏っ!私と同じ部屋の方がいいな!?」

「いや、えと、あの、その……」

二人に言い寄られて困ってるな一夏は……仕方ない…

「おめーら落ち着け、一夏が困ってるじゃねえか」

「うぐ……」

「ふん」

「た、助かった……」

「まったく、鈴、一夏と同じ部屋というのは難しいぞ?」

「どうしてよ?」

「ここの寮の管理人、千冬さんだぞ?」

ビクッと鈴が固まった。そんなに怖いか?いや、怖いか、あたしチビッたし……

「ふん、そう言う事だ」

箒がふふんっと鼻を鳴らした

「箒、オメーもオメーだ、問題起こせば部屋割変えられるかも知れないんだから自重しろ」

「うぐっ……」

そう言うと箒も固まった。

「で？話はそれだけか？」

あたしは自分の部屋で寝たいんだよ……

「ま、まだあるわよ！」

「え？」

「まだほかにあるのか……？」

ファースト、そう邪険にするなよ。幼馴染仲間だろ？

「で、なんだ？鈴」

とりあえず聞いてみた

「あ、うん一夏、あたしとの約束覚えてる？」

「約束？」

「そ、約束」

んー？鈴と一夏が約束をしたといえば……

「ああーあれか？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――――――」

「そ、そうっ、それ！」

ハッ！思い出した！

「い、一夏待て！ちゃんと考えて――――」

「――――酢豚をおごってくれるってやつか？」

お、遅かったたか……

「……はい？」

「一夏……それ、当たってるけど遠からずだぞ？」

「へ？そうなのか？」

あーもうこの朴念仁はー……

「鈴、いったんあたしの部屋にいこう、な？」

「……」コクッ

鈴は何とかうなづき、あたしは鈴のカバンを持って一緒に出た。

「――――――――一夏……」

「お、おう……」

一夏に一言言っといた。

「約束を覚えていられない男、あたしは嫌いだな……」

そう言い残し部屋を出た、あと後ろから絶句が聞こえたような気がしたが気のせいだろ。

「鈴、大丈夫か？」

「……うん」

そうは言ったがかなり辛そうだな、鈴は……

「鈴、一夏は思い出してくれるさ、な？」

「……うん」

うわーめっさ暗い、少し泣きだしそうだし……はあ、仕方ない……

「ほら、鈴、胸また貸してやるから、あたしの部屋にいこう？」

「うん……アリガト……」

あたし達は部屋に行き、鈴はあたしの胸で静かに泣いた……一夏、これは言わせてくれ。

「象に蹴られて星になれ」

次の日、鈴はいつものように元気になった。

「まったく！一夏はなんでちゃんと覚えて無いのよ！？」

「落ちつけよ鈴、みんなの注目の的になってるぜ？」

「うっ……」

いまは食堂、鈴はラーメン食いながら文句を言っていた。
あたしは、鈴の愚痴を聞いていた。

「むう、それにしてもよく食べるわね……お腹壊さないの？」

「あたしは平気だ、何なら今からデザート全種いくか？」

「やめて、見てるこっちが気持ち悪くなる」

失敬な、気持ち悪いと何だ、

「……まあいい、それよりも仲良くなれそうか？」

「……まだ…無理……」

「だよなぁ……」

あたしはガクッと肩を落とした、

なーんでこう修羅場にしてくれるんかなー、一夏は……

「はあ…、鈴、来週のクラス対抗戦（リーグマッチ）、はどうする？」

「もちろん出るわよ？ぜったい一夏を倒して謝らせて思い出させてあげるわ！」

おおう、やる気十分だな、おい

「まあ、好きな人と戦えるんだからそりゃ嬉しいか」

これで鈴と一夏の距離が縮まればいいんだけどな……

「ち、千夏！からかわないでっていったでしょ！？」

「わるいわるい」

「もうっ……ねえ、千夏」

「ん？なんだ？」

「……本当に一夏とは何もないの？」

またそれか……

「なにもねえって、一夏とはただの幼馴染だぜ？セカンド」

「本当にそうなの？サード」

お、サードと呼ぶか……

「そうそう、あたしはサード幼馴染だ。あったとしても手遅れだぜ？」

なにが、手遅れか分からんがな……

「あっそ、と、そうだ千夏、あんたあたしの練習に付き合ってよ」

「それはいいが…いいのか？一夏の事は…」

「大丈夫、対抗戦が終わったらちゃんと仲直りするわよ？」

「本当だな？」

「本当よ」

ならいいか、一夏にも負けてほしくないが、鈴にも負けて欲しくないしな……

「わかった、その申し出受けよう」

「ありがと、千夏！」

「いいって親友だろ？」

「そうね！」

やっと笑顔になってくれたよ。
やっぱ笑うと可愛いねえ、鈴は……

「お持ち帰りしてえなぁ……」

「ん？なんか言った？」

「いやなんも」

「？」

はうっ！首をかしげる様は、まるで猫じゃねえか！
ヤバい！我慢できなくなる！ってあたしは変態か！

「ち、ちがう……あたしは…」

「ちょ、ちょっと千夏？大丈夫？」

ハッ！鈴近づくな！狼になってしまう！いや、モデルは狐だったっけ……

「な、なんでもない！じゃ、じゃあたしは終わったから次はアリ

ーナでな！じゃ」

「あ、ちょ――――――」

あたしは限界突破する前に食事を終わらせ、食堂を出た。
その後、鈴と模擬戦したり鈴に耳と尻尾を触られて遊ばれたり、一夏の訓練を少し見てやったりとしていた。
何故か、一夏は後方二回宙返り一回ひねり土下座を繰り出して、あたしに謝ってきた。
うーん見事な土下座だ。同情をそそられるって一夏はあたしに何かしたか？
まあ、思いつかないが別にいいと言ったら満面の笑顔でお礼を言って握手して赤くなっていた。
本当になんだったんだ？まあいいか……、そして時が進み、対抗戦の日がやって来た。
原作があってるなら、あの自立可動（スタンドアローン）が来るはず……
とりあえず鈴のピットで待機して二人を援護しようと思う。
二人に出だしはさせない……！
そして、一夏と鈴の試合が始まろうとしていた……

第二十四話「素直になれない親友」（後書き）

鈴「ううー千夏にみっともない所見せちゃった……」

千夏「別に良いって、頼れよ？親友なんだから」

鈴「……うん、わかった…アリガトね千夏……」

千夏『はうっ！？もう駄目、我慢が――――！』

作者「おめーも自重しろ」

第二十五話「現れた敵《イレギュラー》（前書き）

作者「いやーこれ、千夏っちにいわせたかったんだよね～」
千夏「ひどい……作者がいじめる」シクシク
一夏「……零落白夜……」
鈴「……竜砲……」
作者「え!?まって!これには――――あぁぁぁぁぁぁぁ……
……」

第二十五話「現れた敵《イレギュラー》」

いよいよ、鈴と一夏のクラス対抗戦が始まる。
あたしは今、鈴のピットにいる

「鈴、あたしは一夏に甲竜（シェンロン）の情報を教えてしまったから初めから本気で戦えよ」

「なんで教えちゃったの？」

「すまん、ついな……」

わるい鈴、一応一夏の師を任されているからな

「まあいいわ、どっちにしても叩きのめしてあげるけど」

鈴は鼻を鳴らし、余裕そうだ。

「で？あたしにも教えてくれるんでしょ？」

「ああ、それはもちろん」

「ん、ありがと」

鈴にあたしは白式の特性を教えた。

「よし、それじゃあいってくるわ」

「気をつけてな？」

「わかってるわよ」

鈴はそう言い、甲竜でピットからアリーナへ飛んだ

「……さーてと、あたしも準備だな……」

あたしはそう言って、ステイシスを何時でも呼び出せるように待機した

視点・「織斑一夏」

「一夏、謝るなら痛めつける程度で許してあげてもいいわよ？」

「結構だ、全力でいく」

いきなり来てそれかよ……

「あっそ、なら――――――」

ガキンッ！

鈴の巨大な青竜刀、二刀が繋がり……

「泣かせてあげる！！」

俺に切りかかってきた

「くうっ！」

俺は鈴の重い攻撃を篠いだ。

「やるじゃない」

「そりゃどうも」

口では余裕だが、かなり重い攻撃だ

『あと、竜砲っていう衝撃砲もあるんだよな……』

これは厳しくなりそうだ……

「どんどん行くわよ！」

「来い！」

ガキンッ！キンッ！ガキィンっ！

俺は剣を構えて、鈴の青竜刀を受け流す
切られては受け流し、ある時は避けて対処した

「へえ、じゃあ、これはどおっ！」

そう言うと鈴は肩の横に浮いていた甲竜の肩アーマーがスライドした。

『！？くる！！』

俺はぎりぎりで体を横にし、衝撃砲の直撃をギリギリ避けた

「！、竜砲を避けた！？」

「備え無しだったら何発か貰ってたぜ！」

ほんと、千夏には感謝だな…あと箒とセシリアにも……
その備えとは……

回想中

「衝撃砲？」

「そうだ、まあ、空気砲だと思ってくれ」

「なるほど」

俺は千夏に鈴のＩＳについて教えて貰っていた。

「空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出す衝撃砲。砲弾だけではなく、砲身すら目に見えないのが特徴だ。砲身の稼動限界角度はないから気をつけろよ？」

「な、なんか勝ちめなくないか？」

「大丈夫だ、どんなに強力な兵器でも人間にも弱点はある」

「そのとうりですわ！ブルーティアーズの弱点を突き、わたくしに勝利したのですから一夏さんが負けるはずありませんわ！」

「それは、お前の力量不足なのではないか？」

腕を組んだ箒がそう言った。

「なんですって！？」

「なんだ」

また、始まった……

「とりあえず、あっちは放っておくぞ？」

「あ、ああ、わかった」

よしよしいい子だ。

「いいか、一夏さっきも言ったが兵器を扱っているのは人間だ。どれだけうまかろうと隙はある。
お前も浮かれなければ、勝つ方法はあるんだ。気張れよ？」

回想終了

『千夏が俺の為に教えてくれた物……無駄にはできない！』

一夏は自分にそう聞かせて奮い立たせた。

「鈴」

「なによ？」

「勝たせてもうぞ」

一夏はそう言い、雪片を構えなおした。

「な、なによいきなり……ふん！こっちだって簡単に勝たせてあげないんだから！」

鈴は青竜刀を一回転させ構えなおし、俺は衝撃砲が来る前に距離を詰めようと、

千夏に習った「瞬時加速（イグニッション・ブースト）」を発動した

「はあああああああっ！！！！」

チャンスは一度、シールドエネルギーはまだ余裕だがこれで決まらなければあの衝撃砲で削られて終わりだ。俺は千夏に抜刀術について教わった技を繰り出す

回想『一夏、刀は最後までおさめとけ。敵の懐に入る瞬間に切りつけるんだ。攻撃は最大の防御ってね』

『攻撃はギリギリのところまで抜かない……！」

雪片二型は懐に入るまでエネルギーを蓄え。攻撃の瞬間に放つ！

「！？はや――――――」

「もらっ――――」

その時……

ズドオオオオンッーーーーー！！！！！

「！？」

「な、なんだ！？」

アリーナが衝撃で揺れた。鈴の衝撃砲じゃない、桁違いの威力だ
それにステージ中央から黒煙が上がっている、なにかが降って来たのか？
その時、ＩＳのハイパーセンサーが緊急通知を行った。

――――ステージ中央に。所属不明機のＩＳと断定。ロックされています。

ロックされた!?なんなんだいったい!!

「一夏!来るわよ!!」

「!?クソ!考える暇もなしか!!」

鈴との試合を中止し俺は突然現れた敵に構えた。

視点・「千夏・N・ガッティーノ」

くそ!どういう事だ!?
あたしは焦っていた。なぜなら……

「あの無人ＩＳ……あの背中の装備はなんだ!?」

その無人ＩＳには背中に黒い板のような物が左右二つに付いており、
その板には球体のような物が六個ずつめり込むようについていた。

あんなもの原作になかったぞ！！！

「なんだあれはどこかで見た事あるぞ……」

たしか母国の研究員が見てた様な気がする……

それよりも……

「早く助けにいかねえと……！」

あたしはステイシスを呼び出し展開、すぐさまアリーナにいった。

「一夏！鈴！」

「千夏か！？どうして！？」

「それは後だ！来るぞ！」

あたしは一夏と鈴のところに到着し戦闘を開始した。だが

「！二人とも！あいつの背中の装備が展開されたわ！気をつけて！」

「なに？」

「気をつけろ一夏…あの背中の装備、何かきな臭いぞ！」

「わ、わかった」

そう、喋っていると……

ガチャ！パシュシュシュシュシュウン！！！！

「な、何よあれ！？」

「な、なんだあれ？丸い球が……飛んだ？」

「分離飛行…だと！？」

なんだあれは……そう、思っていると

キュィィィン……ドドドドドドオォンッ！！！！！！

「きゃあ！？」

「うわ！？撃ってきた！！」

「くそ！避けろ！あんなもんに当たったらただじゃすまないぞ！！！」

そう言い、一夏達に注意を呼び掛けた相手のＩＳは腕に搭載されたビーム砲とさっきの背中の球体からの攻撃で劣勢に立たされた。
しかもその球体一つ一つにさっきアリーナを打ち抜いた威力が備わっているようだ、
その数、六個。

「あんな物を飛ばして楽しいか、変態が！！」

あたしはそう愚痴り、一夏達と共に戦闘を再開した……

第二十五話「現れた敵《イレギュラー》（後書き）

千夏「これも神の仕業か？」

神「さーてね」

第二十六話「幼馴染の悲劇」（前書き）

鈴「作者ぁっ！！！どういうことか説明しろ！！！」

一夏「場合によっては俺でも……切る！」

作者「お、おおおお落ち着いてく――ぎゃあああああ！！！？？？？」

第二十六話「幼馴染の悲劇」

あたし達は今、謎のＩＳと交戦していた……

「一夏！千夏！下がって！」

「おう！」

「了解！」

あたしと一夏は下がり、鈴が衝撃砲を打ち込んだ。

「くそ！また避けられた！」

「またかよ！」

「あ～もう！むかつくわね！なんなの！？」

モチツケ、鈴

「作戦を変えるか……」

「そうね……」

「……なあ、二人とも」

「なんだ？」

「なによ？」

「あのＩＳ、変じゃないか？」

やっと、気がついたか……

「なにがだ？」

「いや、なんつーか、動きが機械じみてないか？」

「ＩＳは機械よ」

「そう言うんじゃなくてだな、えーと……あれって人乗ってるのか？」

これで、話を切り出せるな……

「独立可動（スタンドアローン）とでも言うのか？」

「いや、分かんないけど……でも」

「まって、もしかしたら千夏の言うとうりかもしれないわ」

鈴も可能性を見出したか。

「どういう事だ？」

「あいつ、あたし達が話してる時あんまり攻撃してこなかった。今だってそう。あたし達会話できてるし」

たしかにそれは原作どうりだが、あの背中の装備は本当に何なんだ？

『あたしという、イレギュラーがいたから、変わったのか？』

そう思うと、怖くなってきて……

そう考えていると、どんどんあたしは震えてた。

『あたしのせいで、一夏や鈴、セシリアや箒に何かあったら……』

嫌だ、絶対に失いたくない……

そう思っても腕の震えは止まらなかった。すると

「――――千夏」

「！？」

左手を握られた、マニュピュレーターなのになぜかとても暖かった。

優しくそして何故か安心できる、そんな声も聞こえて。

あたしは声のする方へ向けた。

「千夏…大丈夫だ、俺が…付いてる……」

「一…夏？」

一夏があたしの手を握っていた。

「俺達が付いてる……だから…勝とう！」

っ――――――――、本当にあたしは、一夏の友達でよかったと、心の底から思える……

いつの間にか、腕の震えも止まっていた。

「一夏」

「ん？」

「――――ありがとう……」

あたしが出来る、言葉で一夏にお礼を言った

「！？――――っき、きき気にするな……！」

一夏は顔を赤くしてそっぽを向いた。

「フッそうする」

あたしは笑ってうなずいた

「ち、千夏」

「ん？なんだ？」

「お、おれは……千夏の事」

ん？なんだろう？

「す「一夏っ！！！いつまでこいつの相手させてる気よ！？」なんだ！」

なんか鈴の言葉で遮られてしまった。

「え？なんだったんだ？」

「え、いや、えーと……何でもないです……」

「？？？」

なんだったんだ？

「ああ、もう！鈴！すぐ行く！」

そういって一夏は敵ＩＳに向かった。

「ふう、さて一夏に貰った勇気でがんばるか…！」

そう言い、あたしも戦闘に加わった。

「鈴！すまん遅くなった！」

「まったくよ！馬鹿コンビ！！」

「わ、悪かったって…」

鈴に怒られちった。

「まあ、いいわ、大丈夫なの？千夏」

「え？なにが？」

「震えてたんでしょ……」

「大丈夫だ……一夏に勇気もらったから…　もう何も怖くない」

あたしはそう、鈴にいった。

「へえーそう……一夏、あたしにも勇気ちょうだい」

「え？な、なんでだ？」

「いいでしょ別に」

「はあ、わかったよ」

そういって一夏は鈴の手を握った。

「ちょ！？ほんとにしないでよ！朴念仁！！！」バキッ！

おー良い右ストレート

「グホッ！？な、何だよ、しろっていったのそっちだろ！？」

「うっさい！！朴念仁！！」

「たくっなんなんだよ……」

「アハハハ…まあ、ドンマイ」

そういって、一夏の頭を撫でた。

「んぅ…よし、勇気と元気がでた！」

およ？でたとな？

「これぐらいで出るわけないだろ？」

「ち、千夏がするから出るんだよ…」

一夏がそういいながら赤くなった。どういう事？

「元気ついでに思いついた作戦がある、聞いてくれ」

一夏が作戦を提案した

「なに？良い策が見つかっの？」

鈴が不機嫌になりながらも聞いた。

「ああ、それはな――――――――――……」

「という訳だ」

「な、なに言ってるんだ！一夏が危険すぎる！」

「そうね、たしかに危険だわ……」

一夏の立てた作戦は危険すぎた。

「大丈夫だ、俺達ならやれる！」

「だが……」

「はあ、千夏、こいつがやるって言ってんだからやらせてあげましょ」

う、鈴に後押しされてしまった……

「わるいな、鈴」

「ただし！失敗したらレゾナンスの以下略」

「ああ、わかった…千夏もなにか賭けるか？」

「え？えーと…」

むう、一夏にねぇ…

「いや、あたしはいい…その代わり――――」

「ん？」

「成功したら…何でも言う事聞いてやるよ……」

「へ？」

一夏は何故か、ポカーンとした後、ボンッと音が鳴りそうな勢いで赤くなった。

「そ、そそそそそれはつまり……？」

「ん？まあ、言いなりになってやるってことだけど？」

なんかおかしかったか？てか、鈴があたしを睨んでる。なして？

「……一夏、何エロい事考えているのよ……？」

「ち、ちちちがう！そ、そんなことはない！」

……エロい事？

「嘘つけ！親友に何かいやらしい事させる気でしょ！」

「ほ、ほんとにちがうって！」

ん～なんだろ？ハッまさか！？一夏は遠回しに大人の本が欲しいと言ってるのか！
なーんだそんなことならストックはあるぞ

「そんなことなら、別に構わないぞ～」

「マジッすか！？」

「千夏っ！？」

一夏は驚いているような嬉しいような顔して驚いてた。
そんで鈴は、何故か裏切られたような顔をしていた。あれ？何か間違ったの？

「とまあ、とにかくさっさと肩づけようぜ！」

「おう！！！」

「……うん」

あれ？鈴が元気ない。どうしたんだ？

「鈴、どうした？」

「……」

あ、あれ？なんであたしを睨むの？

「……親友だと、思ってたのに…」

「へ？あたし達、親友だろ？」

何か行けなかったのか？

「一夏にあんな事、いった……」

「あんな事？大人の本のことか？」

「……はい？」

「いや、一夏が大人の本を遠回しに欲しいといったんじゃないのか？」

そりゃ男の子だからな恥ずかしくていえねえわな……

「……はあ、忘れてた、千夏も朴念仁だった事を……」

「？、あ、そうそう一夏にはこの話は内緒な？あいつ恥ずかしがっちまうから」

「もとから言うつもりなんてないわよ、くだらない」

く、くだらないですか……

「はあ、いくわよ！一夏を援護しに！」

「お、おう」

急に元気半分を取り戻した鈴とあたしは、颯爽と飛び、無人ＩＳに

向かった。

「いくぞ！千夏！鈴！」

「おう！」

「まかせて！」

作戦のとおり、まずあたしが……だが、

「一夏ぁっ！」

おおう！？今耳がキーンってしたぞ！？

「ほ、箒！？なんであいつが中継室に！？

うわー、中継の人がのびてるよ……お悔やみ申し上げます。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

さすが箒！俺たちじゃあ、やれない事を平気でするぜ！

「じゃなくて！まずい！？」

無人のＩＳが、箒に興味を持っちまった！！！

「一夏！鈴！作戦を早めるぞ！」

「わかった！」

「うん！」

あたし達は作戦を開始した。

「あのフライング目玉おやじを落とす！」

あの目玉共、ビームを打つ時必ず制止する。その隙を突く！

「マッハでハチの巣にしてやんよ！！！」

そういってこちらに狙いを定めた目玉共を次々と「カルカノ」で撃ち落とす

「一つ！二つ！」

あたしはクイック・ブーストで回避しまた狙いを定め、次は「ファブラム」で撃ち落とす。

「三つ！四つ！」

次の攻撃に移ろうとした。

バシュウン！！

「ぐあぁぁッ！！」

「千夏！？」

くそ！本体のビーム砲を食らっちまった！
ただでさえ、エネルギーが少ないのに！！！

「大丈夫だ！まだやれる！」

あたしはそう言って、また突撃した

「うおりゃあああああ！！！！」

――――ＢＴＳ、発動

あたしの体から耳と尻尾が出て、その瞬間、あたしのＩＳの名のとうり、
一全てが止まって見えた。《・・・・・・・》

「やれる！」

あたしは残りの目玉共を落とし、本体に向けてミサイルを放った。

「目くらましになるかは分からんが、怯みはするだろ」

あたしは役目を終えた。

「出番だぜ？一夏っ！」

「おう！！」

一夏は、鈴の衝撃砲のエネルギーを利用して加速した。

「――――――オオオッ！！！！」

一夏は瞬時に敵の懐に入り――――――

「ハアァッ！！！」

ザンッ！

無人ＩＳの右腕を切り落とした。

そして反撃とばかり無人ＩＳは、一夏を左腕で殴ろうとしたが……

「やらせるとおもうか？」

あたしは一夏を抱えて間一髪で回避した、だが無人ＩＳは再びあたし達に狙いを定めた。

「一夏」

「ああ」

一夏はにやりと笑い

「……狙いは？」

『完璧ですわ！』

チャネルからセシリアの声が聞こえた、刹那、客席からブルーティ

アーズの四機同時狙撃により無人ＩＳが
落ちてゆく、まあ、セシリアが何故これたのかというと、

「あんだけバカスカ撃ってればシールドだって壊れるわな…」

「だな……」

あれだけ多ければシールドの一つや二つ壊れるわ……

『ギリギリのタイミングでしたわね』

『セシリアならやれると思っていたさ』

そう一夏がいうとセシリアは意外だったのか、ひどく狼狽した。

『そ、そうですの……。…。とっ当然ですわね！何せわたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生なのですから！』

おおーどもってるどもってる。
まあ、いいかと思いあたしは一夏から離れた。

「ありがとうな、千夏……」

「いいって、幼馴染だろ？」

そういったら一夏は嬉しそうで残念そうに苦笑いをした。なんで？

「さてさっさと――――――――」

――――敵ＩＳの再起動を確認！警告！ロックされています！

セシリアにトドメを受けた無人ＩＳが、片方だけ残ったビーム砲でこちらを狙って来た。そして

「！？まだあの球体が！？」

そう、まだ一機残っていた。予備として持っていたのか！

『だめだ！今の一夏じゃ、最悪……！』

嫌なイメージが頭に流れ、あたしは反射的に動いていた。

「一夏ぁっ！！！！」

「千夏！？」

あたしは一夏を突き飛ばし、そして……

「え……？」

ビームが、白い光があたしを包んだ。

「！？、千夏あああああああっ！！！！！！！！！」

ああ、一夏の声が聞こえる……

「……一…夏……よか……た…」

一夏を守れた……

「こいつっ！！！！！」

一夏は無人ＩＳに向かって一閃し、完全に破壊した。
その直後、あたしは誰かに抱きかかえられた。

「千夏っ！！千夏ぁっ！！目を開けなさいよ！！！！」

鈴か……ごめんな…迷惑掛けて……

「鈴…ゴメン…」

「謝らないで！喋っちゃダメよ！！」

鈴…泣かせて、ゴメンな？

「ごめ…ん…な」

「千夏？……千夏！？目を開けてよ！！！！！お願いだから目をあけてよぉ！！！！」

あたしは、鈴のを泣き顔を見ながら意識を失った……

第二十六話「幼馴染の悲劇」（後書き）

グルグル包帯な千夏「……あたし、どうなるんだ？」
セシリア「そ、それは……」
箒「その……だな……」
千冬「まあ、死にはしないだろ……多分」
千夏「多分！？」

第二十七話「生還と夢」（前書き）

あげましたー見てください！

第二十七話「生還と夢」

ここはどこだ……
あたしは、知らない場所にいた。
そこは砂漠で、近くにはビルの残骸がところかしこにあった。そして……

「黒い…雨か？これ……」

空から黒い雨が降っていた。不吉とは思えない。なんかというか神秘的に思えた……

「これは旗か？」

あたしの近くに、ボロボロの黒い旗があった。

「O…R……うーんボロボロで読めないぞ」

だけど何故か、懐かしい気がした。ずっと共にあったような気がしてならない。

「ふん、こんな早い段階でここに来るとはな……」

「？誰かいるのか？」

振り向くとそこには、男性がいた。
その男は、深海のような青いロングコートを来ていて髪は少し、青みかかっている。

「だれなんだ？」

「ふん、ずっと側にいたのに気づかぬか。鈍感だな」

ムカッいきなり初対面の相手に、それは無いんじゃないか？

「まあいい、貴様の鈍感も今日始まった訳では、ないからな」

「いや、だから初対面の相手に――――」

「貴様は、力が欲しいか？」

聞けよ、人の話……

「……えーと、力とかそういうのじゃなくて、あたしは――――」

あたしは…なんの為に……

「あたしは…――――――」

「……」

男性は、静かにあたしの問いを待っていた。どこか期待するような瞳で……

「あたしは……守るために力が欲しい……」

「誰を守ると？」

「親友、幼馴染、そしてこれから関わるすべての人たちを……守り

たい」

あたしはそう言った。そして男性は……

「……そうか」

男性は、どこか嬉しそうにしていた。

「で、その力はくれるのか？」

「いや、だめだ」

……はい？

「貴様のような小娘には、まだ早いということだ。小娘」

「ちょ！？言わせといてそれか！？」

「ふん、空気が、何を言っている」

空気って、いわれた！？

「まあいい、とにかく行け、向こうで男が待ってるぞ？」

「男？一夏か」

一夏の知り合いか？

「……フッあの男も、鈍い女に惚れたものだ」

「？何をいって――――」

「行け、おのが守りたい者達のところに」

そういって、あたしは意識が遠退いていった。

「おま…え…はだれ…だ？」

「私か？私は――――」

そこであたしは、意識が無くなった……

「――――ツッ！……ここは？」

あたしは目を覚まし、あたりを見回した。

どうやら保健室らしい。そしてあたしはベットに寝かされているようだ。

あの戦いで一夏を庇って怪我をしたらしい。

「……っいてて、起き上がるのも一苦労だな…」

あたしは何とか起き上がり、状況を確認しようとしたら

「あの夢はいったい……ん？一夏？」

一夏が、あたしのベットの横の椅子で、あたしの近くに寝ていた。

「……どうして、ここに…」

「お前をずっと看病してたんだよ」

そういってカーテンを開けたのは千冬さんだった。

「一夏が？」

「そうだ、お前を担ぎこんだのもこいつだ。後で礼を言っておけ」

「はい、わかりました」

そうか……一夏があたしを……

あたしは寝ている一夏の頭を撫でた、一夏は少しくすぐったそうにしていた。

「お前が担ぎ込まれた時は驚いたぞ。何せ血だらけで一夏に運び込まれたんだからな」

「お、お世話をおかけします」

ち、血だらけって……

「安心しろ、見た目は重傷だが、内臓や器官には異常はなかった。重傷なのは両手と右足ぐらいのものだ」

「そうですか……」

「ああ、不便かもしれないが、そこはこいつに任せる」

そういって、千冬さんは一夏の頭をポンポン叩いた。

「あははは、本人の意思無しですか……？」

「なに、こいつなら喜んで引き受けるだろう」

そうなのか？

「フッ私は仕事に戻る、お前も一夏に補助してもらって部屋に戻っていいぞ」

さすが千冬さん、仕事人だ。

そして、千冬さんが部屋を出たあと。

「……う、うんっ」

「お？起きたか？一夏」

一夏が目を覚ましたようだ。

「……千夏？」

「おう、おはよう」

一夏は目を覚まし、すこし眠そうだが次第に目を見開き。そして

「っ千夏！」

あたしに抱きついた。

「ふぇ！？い、一夏！？ど、どうしたんだ！？」

「よかった……目を覚まして……本当によかった……」

「あ…うん、わりぃ…心配かけて…」

どうやらかなり心配かけてしまったらしい。

一夏もなんだか泣いてるしな。

「よしよし、もう大丈夫だから、泣くなって」

「な、泣いてない……」

あははは、素直じゃねえなぁ……あたしは、一夏の頭を撫で、背中をポンポン叩いた。

自分の為に泣いてくれことを嬉しかった。何分かたって、一夏は落ち着き

「さて、そろそろ部屋に戻るか？」

「ああ、そうだな」

一夏は椅子から立った。

「ーーーーっやっぱり立つのは難しいか……」

「千夏？」

「ああ、右足が怪我してるからたてなくてな……」

むう、どうすれば……

「……千夏、お、俺が運んでやろうか？」

「え？一夏が？」

あーまあ、千冬さんがしてもらえっていってたからいいか。

「ああ、頼む、一夏」

「わ、わかった」

そう言って一夏はあたしを運んだ。お姫様抱っこで

「い、一夏？これはあの、えと……」

「動くなって、落ちるから」

「あ、うん……」

こ、これは、はずい……てか一夏も恥ずかしいなら別の運び方でいいんじゃ……

「まあ、いいか……」

「ん？なにか言ったか？」

「いや、なんでもない」

その後、あたしと一夏はクラスメイトに心配されたり羨ましがれたりと嬉しく、そして恥ずかしい思いをして部屋に着いた。着いたのだが……

「一夏……なぜ、千夏を抱いている……」

「え、えーとこれはだな……確たる事情が……」

「……はあ」

あ～修羅な箒が部屋の前で待っていた。

「何故かと、聞いている……！」

「ほ、箒、落ち着け、な？」

「箒、あたしは怪我をして歩けないから千冬さんが一夏に世話をしろっていったんだ」

とりあえず、説明した。

「……まあいい、一夏、千夏を部屋に戻したらすぐにこい……」

「あ、ああ、分かった」

「わるいな、箒」

「ふん、」

そう言い、一夏はあたしを抱っこしたまんま。あたしの部屋に向かった。

「ふう、助かったぜ、千夏」

「なに、気にするな」

「そうか、サンキューな」

一夏はそう言って、あたしをベットに移そうとした。だが

「下ろすぞ……て、おわ!?」

「うわ!?」

一夏はこけて、あたしと一緒にベットに倒れこんでしまった。

「千夏、大丈夫か?」

「あ、ああ、大丈夫だ……」

あたしは一夏に押し倒される体制になっていた

「……千夏…」

「ん？なんだ？」

あたしの名を読んだ一夏はどんどん顔を近づけて来て

「……」

「一…夏？」

あたしの顔に一夏の顔が近づいて、そして……

「なにやってんの……？」

「え？」

「あれ？鈴？」

部屋のドアの前に鈴がいて、何故か赤いオーラ見たいなものが出てきてる

「り、鈴？」

一夏は浮気がばれた夫のような顔をしている

「……千夏、こいつ……借りるわよ……」

「は、はい！？」

そう返事するしかなかった。だってこえぇんだもん……

「ち、ちょっと待て！ま、まだ千夏と話が――」

「いくわよ……！」

「じゃあなぁー、一夏、あしたもよろしくー」

「千夏！？」

そう言ってあたしは一夏が引きずられるのを見て、静かに合掌した。

「ふう、鈴はどうして怒ってたんだ？」

そう疑問に思ったが眠気に負け、あたしはポフッとベットに横たわり、眠った。

その後、廊下に悲鳴が響いたとかいないとか……

学園地下……

「山田くん、解析結果は出たか？」

「はい、これは――――無人機です」

一夏達を襲い、千夏に重傷を負わせた無人ＩＳはすぐに教師達の手で運ばれ、今ここ、
学園地下に送られ解析された。

「織斑くんの最後の攻撃で回路は焼き切れてしまいましたから修復は、おそらく無理かと」

「コアは？」

「……それが、登場されてないコアでした」

「そうか（やはりな……）」

何かを知ってそうな千冬に、摩耶は怪訝そうな顔をする。

「何か心あたりでも？」

「いや、ない。今はまだ――――な」

千冬は千夏の行動の早さに疑問を抱いていた。

『ガッティーノが優秀とはいえ、あの襲撃時の行動は的確すぎる……』

最悪の考えがよぎり、

『あの無人ＩＳにガッティーノが絡んでいるのか……？』

だがそれだと何故、無人ＩＳが千夏に攻撃を？

『演技の為…か、だがあの攻撃は下手をすれば死ぬな……』

だがそれも計算に入れたとすれば……

『ガッティーノ……お前は何者なんだ？』

一夏の前に現れ、そして弟の心を動かした女……

『監視を付けるべきか……』

千冬は千夏に監視を付けるべきが悩んだ。

第二十七話「生還と夢」（後書き）

感想、お待ちしています。

第二十八話「ヘルパーな一夏」（前書き）

あれ？いちゃいちゃさせすぎた？

第二十八話「ヘルパーな一夏」

六月頭、日曜日。
あの日から、俺は鈴と一緒に千夏の世話をし、いろいろと補助をした。
千夏の怪我はあの、ビームが原因で治りが遅いらしい。
ま、まあ千夏にあ～んや抱っこしてやれたから役得だったな。それに恥ずかしがる千夏もなかなか……
そうそう、鈴と次の日にあったら急に千夏に抱きついて来て無言で胸に顔を埋めて泣いていた。
本当に鈴には心配かけたと反省していたな、千夏は……
俺と箒、セシリアにも心配をかけてしまったと千夏も言ってた。
それとなんか箒との部屋割が変更したらしい。
なぜか箒を怒らせてしまったが……
それに箒が俺と約束した事があったな……
確か、学年別個人トーナメントで箒が優勝したら付き合ってもらうというものらしい。
まあ、買い物ぐらい付き合ってやるけど……
とまあ、こんな感じだ。俺は千夏にまだ足や両腕はまだ完治してないので安静にしないとだめと言ったが、俺に無理言って五反田の家に遊びに来ている。
あいつにもちゃんと顔をみせないといけないと言う千夏の願いだ。
俺は千夏の肩を支えて友達の家まで一緒にいった、さすがに抱っこでいくのは恥ずかしいからな……

「で？」

「でって……なんだよ？」

「だから、女の園の話だよ、いい思いしてんだろ？」

してないっつーの、たく弾の奴、俺があそこで苦労してるという話を何回聞かせれば気が済む……

「嘘をつくな嘘を、好きな女もいてそのうえ美女揃い何だぞ？何なんだよそのヘヴン」

「な！？何言ってるんだ！！」

千夏の前でなんて事を！

「ん？一夏は好きな女がいるのか？」

「へ！？あ、えーとそのだな……」

ううん、どうしよう聞かれてしまった……

「たしか前にも言ってたな……どうした、一夏？言えないか？」

「あはは、千夏、そんなこと一夏に聞くのは野暮だぜ？」

野暮ってなんだよ！野暮って！

「む、そうだな、一夏に似合う女が現れればいいな」

「「……はあ、」」

「え？なに？なんでため息なんてつくんだよ……」

いや、そりゃあねえ……

千夏は弾の部屋のベットで寝転がりながら、俺達のゲーム対戦を見ていた。

「俺のベットで千夏が寝転がる……匂い移るかな……」

「おい、こら、千夏に手ぇ出すなよ？」

「わかってるって、お前の彼女は取らねえよ」

「ブッ！？ば、ばか！何言ってやがる！！」

「ところで話は変わるが――――」

「おい！変えるなよ！」

「鈴も転校してきたんだろ？どうしているんだ？」

「だから！…はあ、鈴も誘ったんだが、いかないって言われてな」

「はあ？どうしてだよ？」

いや、あいつがな？

「たまには千夏に男を見せろって一人で行かせたんだよ……」

「それで一人で行ったと？」

「いや、二人で行くなら千夏も連れて行こうと言ったら急に不機嫌に……」

いや、ホント、なんでだろうな？

「「……はあ、」」

え？なに？今度は俺？

「一夏は、……」

「ほんとに鈍感だな」

失礼な……それなら千夏には負けるぜ？

「……一夏、今、失礼な事考えてただろ……？」

うぐっ、どうしてこう女性は鋭いんだ？

「まあまあ、そう言ってるうちに……よっしゃ！また俺の勝ち！」

「うわ、きたねぇ！最後ハイパーモードで削りきるのは無しだろ～……」

「あははは、一夏は弱いなぁ～」

そう言いながら、千夏はプルプル震えながら、俺の頭を右手で撫でた。

「千夏、無理はするなよ？行きの時だって辛そうだったろ？」

「だ、大丈夫だ。一夏がまた支えてくれれば問題ない」

「……じゃあ無理そうなら、……ま、まあ抱っこでいくことになるぞ？」

自分で行ってて恥ずかしいな……

「そ、それは……」

千夏が俯きながら顔を赤らめた。すげぇ可愛い……

「おーい、一夏ー？二人だけで甘い空間作らんでくれんか？」

「だ、弾！？なにいってやが――――――――」

その時！

ドンッ！！！！

何者かがドアを蹴り開けた！

「お兄！さっきからお昼出来たって言ってんじゃん！さっさと食べに――――――」

弾の妹こと、五反田蘭乱入（蘭入）。なんちって……

「あ、久し振り。邪魔してる」

「蘭か？大きくなったな」（特にその控え目な良い小山が……

オヤジ千夏、復活。

「い、一夏さん！？それに千夏さんも！？」

う～ん女子は自分の家だとラフな姿だな、
まあ、学園生活でなれてしまったせいか感覚が鈍ってしまった。
そういえば、千夏のラフな格好を見た事ないな……

「い、いや、えとあの、来てたんですか？……全寮制と聞きましたが？」

「まあな、今日はちょっと外出。家の様子見に来たついでに千夏と来たんだよ」

「そ、そうですか」

うーん、なんで蘭は俺にたいして、妙にたどたどしいというか。敬語なんだ？
俺が不思議そうにしてると千夏が。

「一夏、蘭は年下だから使ってるんだよ。どんな相手にも年上には敬語が大切だぜ？」

ふむ、なるほど、さすが千夏だな。さすがは……ま、まあ俺が惚れ

ただけはある。うん、まったく。
って、あれ？

「よく俺の考えてる事がわかったな？」

「幼馴染なめるなよ？」

そういってニヤリと笑った千夏だった。
うーむなんか千冬姉に似て来ているな……まあ、それはそれでいい（ｇｏｏｄ！

「って、千夏さん！？その両腕と足のけが、どうしたんですか！？」

む、蘭がようやく千夏の怪我に気づいた。

「ああ、これか…大したことはないよ。蘭」

「で、でも……」

「大丈夫だ、心配してありがとな。蘭」

「い、いえ、心配するのは当然ですから……」

うんうん、蘭が千夏の心配をしてくれるのはうれしいなあ

「ああ、俺も来た時はビックリしたぜ？何せ包帯だらけなんだからな」

弾も心配してくれてるしな。

「てか蘭、ノックぐらいしろって、恥知らずな女と思わ――――」

ギンッ！

おおーマ○オみてーに小さくなったぞ、弾が。

「うわー、ル○ージみたいだ……」

永遠の二番手かい……てか千夏、何気にひどいな……

「なんでいわなかったの？」

「い、いや、いってなかったか？そりゃ悪かったな。アハハハハ…」

「……」

ナイフの如く、弾を睨みつける蘭。おーいそれ以上小さくなったら見えなくなるぞ。

睨みつけた後、蘭は弾から視線を外し廊下にでて

「あ、あの、よかったらお昼どうですか？一夏さんも千夏さんもまだですよね？」

「ああ、いただくよ」

「ありがとな、蘭。ごちになる」

「い、いえ、それほどでも……」

ぱたんとドアが閉じた。

「んじゃ一階に下りるか」

「そうだな」

「ああ、そうしよう……」

弾が小さいままだ。ル○ージ

「それじゃあ、いくぞ？」

「え？一夏なにを――てっおわ！？」

俺は千夏を抱き上げ、二階から降りようとした。

「い、一夏、いきなりは止めてくれ……ビックリするぞ……」

千夏がすこし顔を赤くしながらいった。

「し、しょうがないだろ？ここの階段急なんだ」

「い、いやだって……」

千夏が赤くなりながら上目づかいで俺を見た。

『ウッ！？こ、これは…想像以上の破壊力……！』

や、やばい、他の事を考えなければ……！

「し、しかたないだろ、千夏が怪我したんだから」

「……ゴメン…あたしが怪我なんてしたから…」

だあああああ、!?何してんだ!!俺は!!

「い、いや千夏のせいじゃない!」

「で、でもあたしがもっとしっかり、してれば……」

「悪いのはあいつで、千夏じゃねえよ」

悪いのはあのＩＳで……弱かった俺なんだから……

出かけた言葉を飲み込んでそう告げた。

「一夏……ありがとう……」

千夏がすこしうるんだ瞳で礼を告げた。

「べ、べべべ別に気にするな……」

ヤベ、かんじった……

「フッありがとな、一夏」

次は満面の笑顔で言われた。

「だ、だから気にするな……ああ、もう、いくぞ!」

「おう!」

そういって俺は、千夏をお姫様抱っこしながら二階から降りた。

「……なに、この空気扱い（オッツダルヴァ）……」

弾はトボトボと後ろからついてきた。

一度外に、出て、俺達は店の暖簾をくぐった。

「あ、一夏さん……なんで千夏さんを抱っこしているんですか……？」

なんか蘭が、表情を硬くして、こっちを見た。

「ん？ああ、千夏はまだすこし歩けないから、こう運ぶしかないんだよ」

「まあ、怪我ならしかねえんじゃねえか？」

「うう…世話掛る……」

千夏も申し訳なさそうだな、さっさと座ろう。

「そ、そうですか…あ、椅子用意しますね？」

「お、サンキューな」

「世話をかけるな…蘭」

「い、いえ当然ですから……」

そう言い俺と千夏、弾と蘭は椅子に座り、千夏は蘭が用意してくれた椅子に座り食事を始めた。

「そう言えば、蘭」

「は、はひ？」

「着替えたの？どこか出かける予定？」

「あ、いえ、これはですね、その……」

蘭はさっきのラフな服装からおしゃれな半そでのワンピースを着ていた。

「ああ！」

俺はひらめき、答えが分かった。

「デー「ふんっ！ドゴッ！」グフッ！？」

いきなり千夏からひじ打ちを脇腹に貰った。

「つうぅ…ち、千夏？なにを……」

千夏は小声で拭いた。

『ばか、なんで蘭がおしゃれをしたのに褒めない？」

『え？褒めればいいの？』

『そうだよ、褒めろよ』

なんだかわからんが、千夏がそう言うのであれば、

「蘭、えと、に、似合ってるぞ？」

「ほ、ほんとですか！？」

うお、蘭が椅子を倒す勢いで、こっちに迫った。

「あ、ああ似合ってるよ、可愛いんじゃないかな？」

「か、可愛いい……一夏さんにかわいいいって言われた……」

蘭は、嬉しそうに、はにかんで笑っていた。

『……これでいいのか？』

『……まあ、上出来だ』

うむ、千夏も満足したようだ。

「それじゃあ、千夏」

「ん？なんだ？」

俺は千夏の手元にある、食事を箸でとり

「ほれ、千夏、あーん」

「…え！？あ、えとだな…」

千夏は恥ずかしそうして顔を赤くしていた。

「い、一夏、じ、自分で食べられるぞ？」

「何言ってんだよ、昨日は箸持つだけで痛がってたじゃないか」

「あ、あれはその……」

「ほら、無理すんな、あーん」

「…あ、あーん……」パクッ

千夏は恐る恐ると俺が箸でつまんだ料理を食べた。

「どうだ？」

「……う、うまい」

「そ、そうか」

千夏は少し恥ずかしそうにしてたが、こっちをみて微笑んでくれた。

『よ、よし、恥ずかしさを我慢してやったかいがあった！』

俺達があーんをしていると、蘭と口をぱかーんと開け、弾はニヤニヤしていた。

弾……こっちだって恥ずかしいんだ……役得だけど、

「むう……怪我が治ったらやり返してやる……！」

「え？あ、えと、わ、わかった……」

さらに役得な事が起きた……俺は、

頭の中ではファンファーレが鳴り響き、

リオのカーニバル並みの大祭りが繰り広げられていた。

このあといろいろと話し、蘭がＩＳ学園の試験を受けると言って話は進んだ。

そして弾は厳さんのおたま投げをくらいのびていた。

第二十八話「ヘルパーな一夏」（後書き）

千夏「は、はずかしいな…これは」

一夏「あ、す、すまん……」

箒「また出番がない……」

セシリア「ま、まあ、一夏さんとの連携できましたし、今は許しましょう……」

作者「オルコットさん、顔が引きつってますよ？」

第二十九話「見えない先」（前書き）

あ、頭が痛いとです……

第二十九話「見えない先」

あたし達は弾の家を出て、あたしと一夏はあたしの家に着き母、千雨と再会した。
母は、一夏を見るや否やあらあらと顔を笑顔にしてあたしと一夏を家へ招き入れた。
その後、母は一夏と何か話していて一夏は顔を赤くしてどもっていた。
何を話していたんだろう？一夏は話してくれないし、母は笑顔ではぐらかすし……
その母は父に電話して、お赤飯とか式はイタリアでとか言ってたけど、何の話なのだろう？
そんなこんなであたしと一夏は学園に戻った。

「ふう、病人にはきつかったぜ……」

一夏が補助して一緒に行ってくれたけど、
やっぱり我がまま言わずに安静にしとけばよかったか……
そんな感じで自分の部屋で考えていると……

「千夏、いるか？」

「ああ、いるぞ」

ドアが開き、外から一夏と鈴が入ってきた。

「千夏、平気？怪我は大丈夫？」

鈴が心配してくれた。

「ああ、大丈夫だ。もうギプスは取れたし、足も明日には歩けるようになるって医者がいってた」

「そ、よかった……」

鈴はホッと息をつき、安心したように微笑んだ。

「千夏、っそろそろ夕飯にするけどいくか？」

どうやら一夏と鈴は、あたしを夕飯に誘ってくれたらしい。

「ああ、そうだな行こう」

あたしは立とうとした時、鈴があたしを支えながら立たせてくれた。

「ありがとう、鈴」

「いいって、親友でしょ？」

そういって鈴はあたしに微笑んだ。

「俺も手伝うぞ、鈴」

「わかったわ」

「一夏、世話をかける……」

「いいって気にすんな」

あたしは、二人の幼馴染と親友に優しい言葉をかけられ嬉しかった。
あたし達は部屋を出て、廊下にでて食堂に向かった。

「お。織斑くんだ。やっほー」

「ええっ!?お、織斑くん!?」

野生の珍獣のほほんが現れた!
こいつ入学二日目に急に部屋にやって来て、いろいろとされたっけ……

「やー、おりむー」

「その愛称は決定なのか?」

「決定なのだよ~。あ、それとガッティ~。怪我はもう平気かい?」

「あたしはついでかい……」

「そ~怒らないで~私とパジャマ仲ではないか」

「なんだよパジャマ仲って……」

そりゃ、あたしのパジャマ（注!母の趣味です）とのほほんのを交換した事はあるけど……

「千夏、パジャマ仲ってなんなの?」

「え?え~と……」

「パジャマ仲とは～パジャマを交換する仲の事だよ～今着ているオコジョパジャマも千夏のだよ～」

「ちょ！？のほほん！！ばらすなよ！」

なんでこいつは……！

「千夏ってああいうのがいいの？」

「な、なかなか可愛い趣味だな…千夏は」

鈴の顔はすこし引きつらせていた。一夏は顔をほんのり赤くしてのほほんのパジャマを見ていた。

「ち、ちがうんだ！あれは母の趣味で着てっていうから……」

ううう、……なんでこんな目に……

「ははは、まあ千夏の母ならありえるな」

「そうね…あたしもああいうパジャマ着てみてって言われたから…」

鈴は物思いに耽けていた。あーたしか鈴に送られたパジャマってパンダだったな……

「それで？のほほん、なんかようか？」

あたしはちと疲れたように返事をした。

「それはね。おりむ～を夕飯に誘おうと思って～きたんだよ、」

「俺を？」

「そうだよ～私とかなりんと一緒に夕飯いこうよ～」

のほほんは一夏を夕飯に誘いに来たらしいなぁ

「……で、のほほん、そのかなりんって人がいないんだが？」

「おわ～。ほんとだ～いない～」

そりゃー、一夏にラフな格好見られたら恥ずかしくて逃げ出すわな……

「あ～まって～」

と、のほほんはかなりんという女性を追っかけて行ってしまった。

しかしかなり走るのが遅い……

「一夏はモテモテだな」

「いや、ただ珍しいってだけだろ？」

「だめね、これは……重傷だわ……」

だな……

「？何の事だ？鈴」

「なんでもないわよ……いくよ」

「おう」

「？、ああ」

とりあえず、あたし達は夕飯の為、食堂に向かった。

視点・「篠ノ之箒」

私は昨日、一夏ととある約束をした。

『ら、来月のクラス対抗戦（リーグマッチ）に優勝、出来れば……一夏と…』

そう考えると、急に顔が熱くなり、今にも薬缶のように沸騰しそうだった。

私は食堂でその事を考えてると……

「あ」

「あ」

「あって何よ、あって。――――あ」

「何みんなであっていってるんだ？」

一夏達が食堂に来ていた。

私は昨日の事を思い出して、顔を赤くしてしまった。

『な、なぜこの時間で来るんだ！？』

一夏も何か気まずそうにしている。

「よ、よお、箒」

「な、なんだ一夏か」

ぬう……言葉がこれだけしか出てこない……！

「……」

「……」

「なあ、なんかお前らあったのか？」

千夏に聞かれ、私と一夏は慌てて否定した。したくはないが……

「……それ、何かありましたって、言ってるようなものなんだけど？」

「……そんな訳ないだろ」

む、そんなとはなんだ！そんなとは！

私は不機嫌になり、一夏から目をそらして食堂から立ち去った。

「まったく一夏はいつもいつも……！」

私は不機嫌になりながらも、クラス対抗戦の事を考えて、気分を良くした。

ある真夜中の部屋の会話……

「父さん、そちらの調査で何か分かりましたか？」

その部屋には、腕と片足に包帯を巻いた女子が電話をしていた。

『ああ、そっちから送られたデータで真相が掴めたよ』

「ではやはり？」

『うむ、我が祖国の企業のデータが盗まれ、不正に使用された揚句、犯罪に使用されるとはな……』

電話に相手は、すこし気落ちしながら喋った。

「いえ！父さんのせいではありません！悪いのは盗んで犯罪に使用した奴なのですから」

『だが千夏に怪我を負わせて――――』

「父さんのせいではありませんよ」

『……すまないな千夏』

「いえ、それで調査の方は？」

『オーメルの技術者に内通者がいたようだ』

「いたようだ、とは？」

『すでに行方を眩ませている。その人物は二名で、名前しか掴めなかったが……』

「誰なんですか？それは……」

『ふむ、ステイシスの開発に加わった者だ。』

「私のステイシスに？」

『ああ、ステイシスの内部開発を任された者たちだ』

「なるほど、それでその者たちの名は？」

『二名とも、日本人で名前は「織神二夏（おりかみにか）」と「篠束天（しのずかてん）」だ』

何故か、包帯を巻いた女子は少し、いやかなり嫌な予感がした。

「そう…ですか」

『ん？知り合いかい？』

「いえ、ぜんっぜん知りません」

完璧に否定した。

『そ、そうか。それで、オーメルの事なのだが……』

「やはり責任は？」

『うむ、オーメル・サイエンスは一時期、活動中止にせざるをえない』

「やはりそうですか……」

やはりあの事件が痛かったか……

『ああ、オーメルに派遣していたトーラスとアスピナ機関の技術者達はもとのところで研究を再開する』

「本国で制作中の試作ＩＳ機の開発に回すと？」

『そうなるな』

あの技術が使われるのか……

『まあ、心配はいらないだろう。こちらではトーラスとアスピナの方に戦力を回す』

「わかりました。ではまた」

『ああ、気をつけるんだぞ？千夏』

「そちらも気を付けてください。父さん」

そういって千夏は電話を切った。

「……あたし達を襲った奴の武装はまだ未完成だった……」

あれは普通のエネルギーで動かすものではない……

「完成してあたしに向けられてたらと思うとゾッとするわな……」

そう言い、千夏はこれから先のイレギュラーに頭を悩ませながら眠りに着いた。

第二十九話「見えない先」（後書き）

むう、箒のツンデレは難しい……

第三十話「転校生」（前書き）

一夏は今回ラッキーですね。はい

第三十話「転校生」

昨日が過ぎ、あたしは今教室にいる。だが……

「…くか～…すぅ……」

「……」

「…千夏…起きないとまずいぞ……」アセアセ

昨日の夜の連絡で、寝不足なのだ。

「うにゅぅ……一夏ぁ……」

「え？…俺の夢を見てるのか？」

一夏は心なしか嬉しそうにした。

「……水底がお似合いだ…」

「怖！？何の夢見てんだよ！？」

一夏が突っ込んだ。そして織斑先生が右手に出席簿を構えて、

「……起きろ」

スパァンッ！

「うにゃあ！？」

変な声を上げて、織斑先生に文字通り叩き起こされた……

「は!?あれ?ここは何処?あたしは誰?」

「そうか、もう一度叩けば思いだすか……」

「い、いえ!?結構です!思い出しました!!」

「フンッちゃんと起きんか、馬鹿者」

「……はい、すいません……」

織斑先生に叩き起こされ、クラスからはクスクスと笑い声が聞こえた。

「うう、はずいぃ……」

「大丈夫か?千夏」

「あ、ああ大丈夫だ」

「……一体何の夢を見てたんだ?」

「え?えーと、忘れた……」

「そ、そうか」

うー、一夏に恥ずかしいところを見られてしまったぞ。なんか一夏も呆れてるし……

「ふう、まったく……山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

山田先生はあたふたしながらもホームルームを始めた。

「えっとですね、今日は何と転校生を紹介します！なんと二名もです！」

「え……」

「お？（とうとう来たか……）」

「「「えええええっ！？」」」

そりゃ驚くか、情報網を掻い潜っての突然の知らせなのだ。驚きもするわな……

「千夏、転校生だってよ。誰なんだ？」

「さあな、くれば分かる事だ」

「そうだな、留学生だろうか」

「可能性は、高いな……」

「織斑、ガッティーノ、お喋りはするな」

織斑先生に注意された。

「あ、はい。すいません」

「す、すいません」

「分かればいい」

ふう、あぶねえあぶねえ、二度目の出席棒がくるかと思ったぞ……
そう言ってるうちに転校生二名が教室に入って来た。

「失礼します」

「……」

おおう、何時もの賑やかなクラスがシーンと静まってしまった。
まあ、転校生の一人が男子なら、それは唖然とするよな。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いと思いますが、
皆さんよろしくお願いします」

『ほー礼儀正しく良い笑顔だ。（ううむ……コルセット付けてるせいか、正確に測れない……！）』

ああ……ついにシャルまでもおっさんの餌食に……

『まあ、いずれ見れるだろ…』

さすがパリジェンヌ――じゃなかった。今は男だからえーと……？

「お、男……？」

誰かが呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の人がいると聞いて本国より転入を――――」

うーんさすがフランス人だ。貴公子だねぇ…シャル党が出来るのも分かるわ……

「きゃ……」

「はい？」

「一夏、耳塞いどけ」

「え？」

「きゃあああああああ――――――っ！」

ぐほぁ！？なんだこれは！？連邦の新兵器か！！鼓膜が破れるかと思ったぞ！？

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてきてよかった～～～！」

すんげぇ、そこまで喜ぶか？今時の女子の心はわからん……

「あー。騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生がそうぼやいた。うん、まあその気持ちは分かるわ、あたしも疎いせいか女子の話題に追いつかない時があるしな……

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

あーはい、忘れてたわけではありますんよ？
ラウラの事を忘れた訳ではないですよ？

「……」

『……ま、最初はこうなんだよな……』

はあ、この後の事を考えると頭が痛いわ……

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

さすが軍人、千冬さんに敬礼をしたよ……ラウラ、ここは軍隊じゃあないぞ？
クラスの皆はポカーンと口開けていた。

「ここではそう呼ぶな。私はもう教官ではない。ここではお前は一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

うーんまだ軍人が抜けてないな。軍にいたせいでもあるんだが。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

うん、それだけなのね……趣味ぐらいいって欲しいのだが……

「えーと、あの、以上ですか？」

「以上だ」

終わりですか、そうですか……山田先生がフォローしたが駄目だった。

その時、ラウラと一夏の目があった。

「！貴様が――」

『！、やっぱりやるのか……』

あたしはすぐに動けるように座りながら構えた。そして……

パシィッ！

「！……」

「つぅっ……」

「え？なに？」

一夏は、訳が分からない様にあたしとラウラを見ていた。

「何の真似だ？」

「それはこっちのセリフだ。いきなり初対面の人に平手打ちか？」

いてぇ……まだ治りきってない左手でラウラの平手打ちを止めたからマジでいてぇ……

「貴様には関係ない」

「関係とかそうじゃねえだろ……」

「……ふんっ」

ラウラはあたしが握っていた手を乱暴に振りほどき、あたしの手は机の角に当たってしまった。

「ッ！？――――いっつぅ……」

「っ！？千夏！大丈夫か！？」

「大丈夫、平気だ……」

一夏が心配して声をかけてくれたが、少し当たり所が悪かったのか血が少し滲み出ている。

「千夏……お前、いきなり何をするんだよ！？」

一夏はラウラの事を厳しい目で言い放った。

「……私は認めない。貴様があの人の弟である事など、認めるものか」

そういってラウラは、スタスタと歩いて開いている席に座ってしまった。

「なんなんだよ……千夏大丈夫か？」

「平気だ、少し痛かっただけだから気にするな」

「だが……」

一夏は心配そうにあたしの手を優しく掴んで傷の具合を確かめていた。

「大丈夫だって、それよりも次の授業の説明が始まるから早く席に着いたほうがいい」

「……わかった、でも無理はするなよ？」

「分かってるよ。ありがとな…一夏」

「！……べ、別にお礼はいいって…当たり前なんだから」

「フッそうか……」

一夏は照れくさそうに自分の席に戻った。
その後、授業は二組との合同の模擬戦で、あたしは見学だが念のためすぐに着替えて第二アリーナに向かった。そして一夏とシャルルは廊下にいた女子達に道を阻まれ、遅れたとかないとか……

ここは第二アリーナ。
今二組と合同で授業をしている……しているのだが……

「千夏！手の怪我は大丈夫なの？後遺症残ってない！？」

授業そっちのけで、今鈴に絶賛心配されている最中だ。

「あー大丈夫だ。心配ないって大丈夫！」

「ほんと？ほんとだよね！？」

「ほんとに平気だって……」

鈴は心配症だなぁ

「だって……また千夏にもしもの事があったら…あたし……」

鈴は俯きながら震えてた。

「り、鈴大丈夫だから、な？全然平気だからな？」

あたしは鈴を包み込むようにして抱きしめた。

「…ほんと？」

グハァ！？鈴、それは反側だぜ？涙目で上目づかいもバッチリじゃねえか！！

「だ、大丈夫だ……ボーデヴィッヒもそんな強く振りほどいた訳じゃないから平気だ……」

「……そう、あの女が……お姉ちゃんを……」

んー？最後の方は聞こえなかったけど何だろう？なんか鈴も怖い気配、漂わせてるし……

「鈴？どうした？」

「ううん、なんでもない！」

鈴はそういって笑顔になった。

『はう！こ、これはお持ち帰りを――――』

「お前ら何時までやっている？」

そこには無敵とうたわれる鋼の女、織斑チフーユ……カボチャの頭を出席簿で叩いて砕く、

チフーユがやらねば…誰がやる！

ゴッ！！

「ハーゲンダッツ！？」

「千夏ぁ！？」

あたしの頭に出席簿が炸裂した……しかも角だったとです……

「くだらん事を考えてないでさっさと授業に参加しろ」

「は、はい……」

「千夏、大丈夫……？」

「へ、平気だ……」

あーいたーい……なんでこうなるんだ？

そんな事を考えてると、

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

おー皆気合入ってるなーあたしは見学だからあまり動かないけど……

そんなこんなで授業は開始された。

視点・「織斑一夏」

俺は今、第二アリーナで二組との合同授業を受けている。
二組には鈴がいて、千夏の怪我の具合を見ているようだ。
何故か急に鈴の目からハイライトが消えてブツブツと千夏に抱きしめられながら拭いてたが、
な、何を怒っているんだ?そう考えていると、

「今日は実演をしてもらう……凰!オルコット!」

「はい!」

どうやら鈴とセシリアが実演するみたいだ。

「それでわたくしの相手は誰ですの?」

「だれでもいいわよ!」

「そう慌てるな、大戦相手は――」

キィィィィン……

「……？なんだ？この音は？」

なんか空気を裂く音に似ているんだが……はて？

「あああああーっ！ど、退いてくださ～いっ！？」

え？なに？なんなの！？

「！？――――、一夏！！」

「へ！？おわ！？」

千夏は庇うように俺を抱きしめた。その直後……

ドカーン！

轟音が鳴り響き、俺達は吹っ飛ばされた。

あの謎の飛行物体から俺は千夏に守られたらしい。

何事かと思うが、俺は今の体勢に混乱していた。

『ち、千夏――――！？』

「――――う、んっ……」

千夏の色っぽい声が聞こえて俺はドキドキしていた。

今の体勢は俺が千夏を押し倒している状態である。なんで？

それに千夏との顔の距離はゼロ……つまり……

『ち、千夏と……キ、キキキッ!?』

ということである。
しかも右腕はしっかり千夏の母性あふれるエベレストをガッチリ掴んでいた。

『う、動けない…てか動きたくない!?」

下心丸出しである。

フニュ

「んっ!」

「う、うわ!?」

俺は反射的に千夏から離れた。

「つぅ…い、一夏…大丈夫か?」

「え!?あー、えっと…ダイジョウブダゾ?」

「……なんでカタコト?」

「キニスルナ、オレハキニシナイ」

「???まあ、いいか…ところで」

「ナンダ?」

「…唇になんか柔らかい感触がしたんだが……」

はっ!?やばい!?どうする!?前の土下座を繰り返すのは無理だ!

「しかも胸も妙な感じがするし……」

オワタ……俺の人生が終わった……

そう絶望していると……

「一夏、なんか知らないか?」

「へ?なにが?」

「いや、どこかにぶつけたのかなーと思ったんだが、目に砂埃が入って見えなかったから……しらないか?」

こ、これは気づいていらっしゃらないと?

「え、えーと――おわ!?」

俺は反射的に避けた。俺の頭があった場所をレーザー光が貫いた。

「ほほほほほほ……残念です。外してしまいましたわ」

うわーかなり怒ってるよ……顔は笑ってんのに……

ガキンッ!

「うん?なんだ――ってまた!?」

俺はマト〇ックスの如く避けた。
あれ、カッコいいよなー〇ロ最高、
鈴が双天牙月を連結して投げてきたみたいだ。

「一夏、千夏に何してんの？」

こっちも顔が笑っているが目のハイライトが消えてる！？

「てっ双天牙月が戻って来た！？」

今の体勢じゃ無理だ！避けられねぇ！？

「そこっ！」

ドンッ！ドンッ！

突然銃声が下から聞こえ、鈴の双天牙月を撃ち、軌道を変えて回避したみたいだ。
見てみると千夏が倒れたまま上体だけを起こし、
片手に銃剣着き突撃ライフル「カルカノ」で
狙い、撃ったようだ。カルカノは重量と反動が強く重く、片手で撃つのは難しくて、
千夏ぐらいしか扱えないらしい。
すげえな千夏……

「ふう、一夏大事ないか？」

「あ、ああ平気だ」

「そうか…よかった」

千夏は安堵したように胸を撫で下ろした。
さっきの事もあってかなり罪悪感はあるが……

「鈴！セシリア！あぶねえだろうが！」

「う、だって一夏が……」

「一夏さんが悪いのですわ……それに千夏さんが羨ましいですし……」

セシリアの最後の言葉は聞こえなかったが、俺が悪いらしい。なんでだよ……

「はあ、まったく二人は一夏の事になると見境が無いな……」

「…ごめん」

「すみませんでした……」

鈴もセシリアも謝った…千夏に…俺じゃないの？
俺たちがそんな事をやってるとさっき落ちてきた物体は山田先生と後から判明、
山田先生は見事な海老反りで墜落していたと、千夏から聞いた。
その後、鈴とセシリア対山田先生の模擬戦が始まって、二人とも山田先生が撃墜、
クラスからはクスクスと笑われていた。授業中、箒に昼食を一緒に取ろうと誘われ、俺はＯＫをだし、
箒はなんだか嬉しそうにして授業に取り組んだ。

第三十話「転校生」（後書き）

とうとう三十話になった……！

第三十一話「食事の時間」（前書き）

シャルルの出番はこんな感じですかな？

第三十一話「食事の時間」

授業が終わり、今は昼休み中だ。
あたし達は屋上で昼食を食べている。

「一夏、僕もここに同席していいのかな？」

「当たり前だろ？男同士仲好くやろうぜ」

「一夏もこういってるんだ。付き合いも大事だぜ？デュノア」

「うん、分かったよ。それと僕の事はシャルルでいいよ」

「おう分かった。シャルル、あたしの事も千夏でいいぞ」

「わかった。千夏」

うしうし、名前で呼び合う仲になれたぞ。一夏もすぐに友達になれたし……
一夏って何かこう、人を引き付けるフェロモンとか出してるのか？
あたしもなんだかんだで幼馴染になれたし、
鈴も一目惚れしてるからなぁ……あ、箒やセシリアもそうか。
まあいいや、今は食事を楽しもう。

「一夏、味はどう？」

「おう、この酢豚美味いな」

「と、当然よ、あたしが作ったんだもん」

「そうだな…さすが鈴だ」

「ふ、ふん……当たり前よ…」

「鈴、素直に喜べば？」

「な、なななに言ってんのよ！？千夏！！」

なんか怒られた。鈴よ……素直にならなきゃ振り向いてもらえんぞ？

『う、分かってるけど……む、無理よ……』

はあ、まあ気長に待ちますかね……一夏もさっさと誰かに惚れて安心させてくれよな。

幼馴染のあたしは心配だよ。

「一夏さん、わたくしと千夏さんでこういうものを用意しましたの。よろしければおひとつどうぞ」

「お、サンキューな」

セシリアはあたしと作った卵サンドを一夏の前に差し出した。

これは、あたしがセシリアに指導して作った合作だ。味は保証できる。

『あー、あの時は苦労したわ……』

セシリアがあそこまで料理下手とは……原作知っといてよかったわ……

これからセシリアの料理に関してはいろいろと手伝わなければ……！
一夏の胃袋が持たない！

「これも美味いな！」

「本当ですか！？それはよかったですわ！千夏さんと作ったかいがあるというものですわ！」

「あたしはセシリアにただ後ろから教えてただけだ。作ったのはセシリアさ」

「あら、そうでもありませんわよ？。千夏さんが親切丁寧に教えてくれましたから上手に作れたんですよ？」

「そうか？」

「そうですわ♪」

ふむ、セシリアも自分の料理が美味しいと一夏が言ってくれてかなり機嫌がよさそうだ。
何でもスキル、指導スキルを使ってよかった……それでもかなり教えるのに苦労したが……

「……」

「ん？箒、どうかしたか？」

「いや……その…」

ふう……箒も素直になれば良い物を……

「ところで箒、俺の分の弁当は？」

そう言うと箒は、無言で弁当を差し出した。おいおい一夏が反応に困ってるぞ。

箒も恥ずかしいのは分かるが時に素直にならなければ他の女子に出遅れるぞ？

「とりあえず食べたら？」

「あ、ああそうだな。……おお！」

あたしも箒の手作り弁当を見ると、その弁当はバランスの取れた弁当だった。

「これはすごいな！どれも手が込んでそうだ」

「おおー！確かにこれはうまそうだぞ！」

「そ、そうか？な、なら作ったかいがあったというものだ」

箒は嬉しそうにしている。そりゃあ意中の相手に褒められれば嬉しいわな。

うんうん、箒と結ばれる奴は幸せだな。

「箒はいい嫁さんになるぞ？一夏」

「ん？ああ、そうだな」

「な！？ななななっ！？」

ククククッ箒が顔を赤くしてかなり動揺してるぞ。あ、あと鈴とセシリアもアピールさせないと！
二人も一生懸命作ったんだ。さあ、二人とも！一夏に褒められて照れるがいい！！（マテ

「鈴もなかなか良い嫁さんになるだろうし、セシリアは……まあ、逆玉っつうのもいいだろ」

「？ああ、たしかに料理も美味いし、セシリアもお金持ちで綺麗だから寄ってくる男もいるだろうな」

「な、なななななに言ってんのよ！？」

「そ、そそそそそうですわ！！」

「照れるな照れるな、二人とも」

やっぱりからかうと面白いな、二人は、
一夏もこの四人から選ぶんだろうなぁ…あ、ラウラもいるから五人か。

「箒達を嫁にもらえる奴は幸せだな。うん」

……また、地雷を落としたよ。この男は……
あーあ、三人が不機嫌顔になっちゃったよ……

「あれ？どうしたんだ？三人とも」

「……何でもない」

箒は自分の弁当を食べ、

「……何でもないわよ。朴念仁」

鈴はそう吹き酢豚を食べ、

「どうしてこう、一夏さんは鈍感なのかしら……」

と、セシリアは卵サンドを食べ始めた。

「あれ？俺、なんかしたか？」

「……まあ、したと言えばしたのか、な？」

「？どういう事だ？」

「あたしの口からは言えんよ……」

「？そうか」

そう一夏と会話していると、

「あははは、賑やかだね。ほんと僕が同席してよかったのかな？」

と、シャルルが言った。何を当たり前の事を……

「いいんだよ。一夏が寂しがるから」

「いや、寂しがるって…」

「一夏だって男友達がいたら嬉しいだろ？」

「…そうだな、シャルルがいると落ち着くよ」

一夏はそう言ってシャルルの方を向いた。

シャルルは、なんだか照れくさそうにして笑っていた。

「そ、そうかな？」

「そうだな」

「だな、これから一夏の友達でいてくれな」

あたしは話が合わないから何時も千冬さんと話してるよ。つまみもってって……

「うん、僕でよければ」

「だ、そうだ。よかったな」

「あ、ああ、サンキューな、シャルル」

「いいよ、お礼なんて」

シャルルはまた照れくさそうにして微笑んだ。

お、一夏も照れている。

「……ふん、」

「ん？箒？」

「なんでもない？」

「？」

一夏は首をかしげながら箒の作った弁当の唐揚げを食べた。

「む！これはうまい！！」

お？なんか一夏が絶賛してるぞ。

「箒の弁当も美味しかったか？」

「ああ！この唐揚げ凄いうまいぞ」

「そ、そうか…何よりだ」

「もぐもぐ……おお、ほんとーに美味いな、この唐揚げ。仕込みかなりしたんじゃないか？」

「ああ、ショウガと醤油、おろしニンニクにあらかじめコショウを少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな」

箒は照れくさそうにして頬をほんのり赤くしていた。

ううむ、一夏から聞いたがこれが先日味のないチャーハンを作った人物なのか？

「うーん、さすが箒だな。やはりの事に一夏になると才能発揮するねぇ……」

「な!?ち、千夏!何を言っている!?わ、私は別に一夏とは……」

ありゃー箒が顔を赤くしてモゴモゴ言ってるよ。

箒は綺麗なのにどうして一夏は気づいてあげれないんだ?

うーん、謎だ……

「皆本当に仲がいいんだね」

「まあな、シャルルも食べろよ。この卵サンド美味しいぞ」

あたしは卵サンドを手に取り、シャルルの口に近付けた。

「え?あ、ありがとう、じゃあいただきます」

シャルルはそう言いあたしの手に持っていた卵サンドを食べた。

え?これってあーんじゃね?

「あ、えっと美味いか?」

あたしはシャルルが手に持ったまんま食べるとは思わずすこし動揺してしまった。

「うん、この卵サンド美味しいよ!オルコットさんと千夏のサンドイッチは美味しいね」

「あ、ああ、まあその……喜んでもらえて何より…です…」

「ええ、そうですとも。千夏さんが教えてくれたから美味しいのですわ」

あーうー恥ずかしい……今のあたしは顔を赤くしているだろう。
シャルルは原作と同じで大胆だな。

「……」

あれ？一夏が何故か顔をブスッとしているぞ。どうしたんだ？

「どうしたんだ。一夏？」

「……なんでもねぇ……」

あ、あれ？わたし何かしたか？

「あ、もしかして、一夏は僕が千夏にあーんして貰って拗ねたのかな？」

と、シャルルがそんな事を言った。なんで一夏がそれ位で拗ねるんだ？鈍感のはずだろ？

「シャ、シャルル！？な、なななにいってんだよ！？」

「あ、一夏ほんとの事言われて怒っちゃったかな？」

「お、怒ってねえよ……」

？、一夏は怒る？なんでだ？あたしが何か怒らせるような事をしたかな……
聞いてみるか……

「一夏、あの、あたし、何か一夏を怒らせるような事したか？」
あたしはすこし、オドオドしながら一夏に話かけた。
「い、いや！？ち、違うぞ！？千夏に怒ってるんじゃないんだ！」
「ほ、ほんとか？」
千夏は一夏を下から見上げる様に見つめていた。
「う、ほ、本当だ。だからそんな怯えんなよ……」
「お、怯えてねえよ……」
あたしは目をそらしながら反論した。
「二人とも仲がいいんだね？恋人か何かなのかな？」
何を言ってるんだ？シャルルは……そんな訳ないだろう。
「何をいっ「そんな訳ないでしょ！」る？」
「そうですわ！何を言ってるんですの！？シャルルさん！」
二人から何故かすんごい否定したよ……まあ、違うから反論する必要もないか。
「あ、あれ？違うのかな？」
「まあ、そう言う事だ」

「そ、そんな……」ガクッ……

何故か一夏は落ち込んでいた。なして？

「あ、そうだ一夏は放課後に皆とＩＳの訓練してるんだよね？」

「あ、ああそうだけど？」

「だったら僕も手伝おうか？」

シャルルが一夏との訓練を申し出てくれたみたいだ。

ふむ、シャルルが手伝えば一夏も強くなれるな。

「良いんじゃないか？一夏がシャルルと訓練すればもっと強くなれるぞ？」

「え？そ、そうだな……」

あれ？一夏が乗り気じゃない……どうしたんだろう……

「あ、やっぱりいやかな？」

「あ、いやそうじゃないんだ。うん、じゃあシャルル、頼めるか？」

「うん！僕でよければいいよ」

よし！僕っ娘ゲット！

「んじゃあまあ、そろそろ時間もないしさっさと食べちまおうぜ？」

「ああ、そうだな」

「そうだね」

「そうですわね。時間もないですし」

「そうね」

「それじゃあ、早く食べてしまおう」

と、皆は食事を再開した。さーてさっさと食べてしまおう！

「一夏、ほれ、セシリアのサンドももっと食べろよ」

「え？千夏？モガッ！？」

あたしは一夏の口にセシリアのサンドをねじ込んだ。

「あははは、一夏の顔おもしれぇ！」

「もが！もがががが！！」

一夏は顔を赤くして、食いながら反論している。でも何故か少し嬉しそうな顔をしてるが…気のせいか？

そんなこんなで昼休みが終わり、あたし達は教室に戻った。

第三十一話「食事の時間」（後書き）

千夏「一夏の訓練、シャルル頼むぞ？」
シャルル「うん、僕に任せてよ。千夏の信頼に応えてみせるよ」
千夏「シャルル……」
シャルル「千夏……」
一夏「……何故なんだ……千夏……」

第三十二話「一夏強化プラン？」（前書き）

すこし遅くなりました。すいません

第三十二話「一夏強化プラン？」

シャルルが転校してきて五日、今は土曜日で一夏達はアリーナに来ている。
土曜はアリーナ全開放なので生徒達が日々自分の腕を磨くためアリーナで訓練している。
その一夏達も今シャルルの下、実戦に近い訓練をしていたりする。
箒は一夏に基礎体力の訓練を、
セシリアと鈴は衝撃砲、及びビットを使っての回避訓練、
千夏は相手との距離の迫り方と、とある剣技を教え、
そして本命のシャルルはそれを踏まえての模擬戦を今やっている。
皆が自分の出来る指導を一夏に教え込み、一夏は原作とは違い、皆が協力して鍛えている。
千夏による何でもスキル、チームワークスキルのおかげで何とか一夏は訓練に励めるのだ。
まあ、皆は自分のおかげと言っては喧嘩になっているのだが……
それでも一夏は格段に強くに成りつつある。
未だシャルルから一本取れていないが、いずれは勝ちを取れるだろう。
今の一夏は、かのブリュンヒルデを彷彿とさせる強者の顔を見せ始めていて、
将来が楽しみである。やはり姉弟は似るものだ。
一夏は今、シャルルとの模擬戦を通し、確実に強く、雄々しく、勇ましく成り始めている。（マテ

「オーケイ、一夏、その感覚を忘れないでもう一度僕に接近戦を仕掛けてみて！」

「おう！」

一夏は瞬時加速を使い、シャルルに接近戦を挑んだ。
シャルルは五十五口径アサルトライフル、『ヴェント』と六十一口径アサルトカノン『ガルム』を一夏に向け、ぶっ放した。

『かわす時は最小限の動きでかわす……！』

一夏はヴェントの銃弾をギリギリ迫るところで回避し、
ガルムは剣を盾にして、弾数の少ない所を狙って体をずらし、かわした。

なかなかの攻防だ。

「おー、なかなか良い動きしてるなぁ、一夏は」

「そうでしょうそうでしょう、何せわたくしセシリア・オルコットの教えを学んだのですから♪」

「……お前は一夏を的にしただけではないか」

「なんですって!?箒さん!!」

「ふん……」

箒はセシリアとまた喧嘩をしていた。喧嘩するほど仲がいいとはこの事か、

「……あっちはほっとこう……」

「そうね…」

千夏と鈴は一夏達に視線を戻した。
模擬戦は一夏の距離が少しづつシャルルに近付き、有利に進めて来ている。

「お？これはもしかしたら……」

「まだまだよ。誘いこまれているわ」

「ですよねぇ～…」

そして一夏はシャルルに誘いこまれ、カウンターにより一夏は負けてしまった。
いい線まで行ったが、やはり初心者と熟練者じゃあ勝つのは難しかったようだ。

「どうだった？シャルル、一夏の戦闘は」

「まあまあかな？、やっぱり直線的だし読まれやすいかな」

「確かにな、無理に機動を変えると一夏が危ないし」

「うん、最悪骨折もあるからね」

千夏とシャルルは一夏の戦術の議題について話し合う。
一夏も隣で説明が分かりやすいのか、ちゃんと聞いていた。

「二人の説明は分かりやすいなぁ……」

「あははは、そうかな？」

「一夏が分かるなら小学生も分かるわね」

「どういう意味だよ！？鈴！！」

「べっつにぃ～…」

「まあまあ、二人ともモチツケ」

二人は仲がいいのか悪いのか分からない仲だ。

「それじゃあ、一夏、次は射撃武器を試してみようか」

「ああ、わかった」

「頑張れよ、一夏」

「おう！任せろ」

「射撃にビビって、尻もちつかないでよね」

「つかねえよ！」

一夏はシャルルと射撃訓練を開始、一夏はシャルルに射撃体勢と心得を聞いていた。

そして射撃が始まり、アリーナに発砲音が響いた。

「どう？一夏」

「ああ、なんか、早いって感じがする」

「まあ、今はこんなもんだろ」

「そうね、なかなか様になってたわよ」

千夏と鈴はそう評価した。その時、

「ねえ、あれってドイツの第三世代じゃない？」

「うそ…まだトライアル段階じゃあなかったっけ？」

そんな話が聞こえて、あたし達はその姿を目視した。
そこには黒いＩＳをまとう銀髪の少女がいた。
そう、転校生のラウラ・ボーデヴィッヒがＩＳを展開をした状態でそこにいた。

『きたか……さてどうするか……』

千夏はどうするか考えていた。考えていると、ラウラが一夏に開放（オープン・チャンネル）回線で話かけてきた。

「おい」

その声は低く、少し憎しみを乗せて放たれた声だった。
そこまで嫌うか。と、千夏はこの後の展開を考え、頭を痛めた。

「……何だよ」

ラウラに対して一夏は千夏を傷付けたのがラウラという事もあって

気が進まないらしく、すこしぶっきらぼうな返事だ。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

『…はあ、やっぱりこうなるか……』

千夏はまた波乱が始まると思うと気が気でならなくなっていた。
ラウラの考えも分かる。だが千冬の力の源は一夏にあり、助けるのは当然である。
たった一人の家族と言うのが大きい理由なのだが、

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくとも私にはある」

ラウラは一夏のせいで千冬がモンド・グロッソ二連覇を逃した事を許せない。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。
だから、私は貴様を――――貴様の存在を認めない」

『……一夏のせいじゃない…悪いのは知ってたのに救おうとしなかったあたしなんだ……』

悪いの自分だと大声で言えればどれだけ楽か、千夏はそんな暗い考えが頭をよぎった。
いつの間にか千夏は、きつく拳を握っていて
苦虫を食べたような顔をして自分を責めていた。
その時、千夏の頭に無機質な感触が伝わって千夏はハッとして自分

の頭を触っている
人物に目を向けた。

「千夏……気にするな、関係ないとは言わないが、あれは俺が弱かったのが悪いんだから…」

「一夏……」

一夏がＩＳの手で千夏の頭を撫でていた。
機械の手は固かったが、何故か暖かくそして守られているような安心感があり、
千夏は気持ち良さそうに目を細め、顔をほんのり赤くして撫でられていた。
撫でるのが気持ち良すぎたのか、千夏は気が抜けて耳と尻尾が生えてしまい、
耳はピコピコ動き、尻尾をブンブン振っていた。
その姿はまるで、愛犬を撫でる飼い主のような風景だった。
そんな風景を見ているハーレム部隊は……

『千夏さん…羨まし過ぎですわ……』

ハンカチがあったならズタボロにされていただろうぐらい歯を食いしばっている。セシリア

『一夏め、なぜ千夏ばっかり構っている！……なんと羨ましい……』

日本刀があるなら今すぐに一夏に斬りかかりそうな程二人を睨んでいる。箒

『いいなぁ…お姉ちゃん……』

千夏が一夏に撫でられている事が羨ましくて仕方ないように見ている。鈴

『二人とも仲いいなーほんとに付き合ってないのかなぁ……？』

本当に二人が恋人関係じゃないのかを考えている。シャルル

そう皆が考えていると、

「……貴様ら、私を無視とはいい度胸だな」

すこし顔を引くつかせてラウラがこちらを睨んでいた。

うわーと千夏は怒らせたかな？とそんな事を考えていた。

「悪いな。もう話は終わってたと思ってたからさ」

「……まあいい、話は終わっている…後は――――――」

――――――――私と戦う事だ！

ラウラはＩＳを戦闘状態へシフトさせる。刹那、左肩に装備された実弾砲が火を噴いた。

「！？千夏！」

「ふえ!?」

一夏はＩＳを展開していない千夏を守るように抱きしめ自分を盾にした。

ゴガギンッ！

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな?」

「貴様……」

横合いから一夏と千夏を守ったのはシャルルだった。

シールドで実弾を弾き、同時に右腕に六十口径アサルトカノン（ガルム）を展開してラウラに向ける。

「フランスの第二世代型（アンティーク）如きで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型（ルーキー）よりは動けるだろうからね」

二人とも涼しい顔だが、睨みあっている。

『シャルルの武器展開は早いな…さすが高速切替（ラピッドスイッチ）、その名は伊達ではないな』

千夏はシャルルの特技をまじかで見て、感想に浸っていると、

「そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！」
アリーナスピーカーから声がした。騒ぎを聞きつけた担当教師が来たらしい。
「……ふん、今日は引こう」
ラウラはＩＳを解除し、アリーナゲートへ去って行った。
「一夏、千夏、大丈夫？」
「あ、ああ、助かったよ。千夏も大丈夫か？」
「平気だ。ありがとな、一夏」
千夏は一夏に礼を言ってほほ笑んだ。
一夏は照れくさかったのか、顔を明後日の方向に向けていた。
「べ、別にいいって……」
「二人とも仲いいね。ほんと付き合って無いの？」
「シャ、シャルル！？お、俺たちはそういう仲じゃなくてな――」
「そうだぞシャルル、一夏とはただの幼馴染だぞ？」
千夏がそう言うと、一夏はガクッと肩を落として落ち込んでいる。
千夏は何故一夏が肩を落としたのかが分からず、首をかしげていた。
「ふふ、そうなんだ。それとそろそろ離したら？一夏」

「へ？何を？」

「千夏を何時まで抱いてるつもり？」

シャルルは少しニヤニヤしながら一夏に言った。

今の状態は一夏が千夏を両手で抱いていて、右手は千夏の頭を守り、左手は腰を支えて自分の体に密着させている。はたから見ればイチャイチャしているようにしか見えない。

「わあああ！？す、すまん！！」

一夏は慌てて千夏から離れた。

千夏はなんで謝っているのか分からず、また首をかしげていた。

「なんで謝っているんだ？一夏はあたしを守ろうとしてくれたんだろ？」

「あ、い、いやそれはだな――」

「それに、一夏があたしを守ってくれた時、嬉しかったよ……」

そういって千夏は微笑み、一夏は顔を赤くして焦っていた。

一夏はドキマギしながらも返事をした。

「い、いや、と、当然の事をしたまでだ！」

「そうか、まあ、幼馴染だからな。守り守るのは当然だろ」

そう千夏が言うと一夏はまた肩を落として落ち込み、シャルルはす

こし苦笑いしながら呆れていた。
あたし何かしたか？と、千夏は何故一夏が落ち込んでいるのか分からず、またまた首をかしげていた。
そんなこんなで訓練は終わり、一夏達はアリーナを後にした。

ある廊下での話……

「千夏さん」

「ん？なんだ、セシリア」

「実は一夏さんの事でお話が……」

「一夏の事？」

「はい」

廊下で千夏はセシリアと箒と鈴が一夏の部屋に行こうと言いだした。
千夏は別に行かなくてもよかったんだが、鈴に一緒に行こうと言わ

れ行く事になった。

「千夏さんは……その、一夏さんの事をどう思っているのですか？」

「どう思っている？」

「セシリアがいいたいのは、千夏が一夏の事を好きなのかって聞いてるのよ」

鈴がそういって、皆が千夏に注目した。

「好きって……一夏とはただの幼馴染だぞ？」

そう言うと、皆は千夏に詰め寄り、

「ほ、本当ですわよね！？」

「本当なんだな！？千夏！」

「千夏はただの幼馴染よね！？」

「おいおい、詰め寄り過ぎだ……安心しろ、おめえらの思い人を取る気はねえよ」

そう千夏が言うと皆ボンッと顔を赤くして俯いてしまった。

千夏は面白いなぁとニヤニヤしながら見ていた。

「と、とにかく！千夏さんが相手でも負けませんでしてよ！」

「ああ、私も負けるつもりはないからな。千夏」

「幼馴染だからって手加減はしないわよ？」

皆から何故か宣戦布告され、千夏は意味が分からなさそうに首をひねっている。

とりあえず千夏は承諾しといた。

「え、えーと……うん、わかった」

「それじゃあ、行きましてよ」

「そうだな、早く部屋にいこう」

「千夏、なにボーとしてんの？早く行くよ」

千夏に鈴に手を引かれ、一夏とシャルルの部屋に向かった。

その後、一夏達の部屋に着き、またひと騒動あったのは、言うまでもない。

第三十二話「一夏強化プラン？」（後書き）

千夏「一夏はどういった子が好みだ？」
一夏「え！？えーと…男勝りな女子…かな？」
千夏「あれ？千冬さんみたいな人じゃなくて？」
一夏「い、いや千夏と千冬姉ってどこか似て――――！？」
千夏「え？あたしと千冬さんがなんだって？」
一夏「な、何でもない！」
千夏「？？？」

第三十三話「黒との対立」（前書き）

やっと書き終えた……
感想待ってます！

第三十三話「黒との対立」

月曜の放課後、千夏は一夏とシャルルと一緒に第三アリーナに向かっていた。
朝は何やらクラスメイト達が噂をしていたらしく、一夏達は聞けなかったが、
どうやら学年別トーナメントで優勝したら一夏と交際出来ると言うものらしい。
一夏とシャルルはその事を知らない。
一夏もあのフラグブレイカー並みに不幸である。マジで爆ぜろ

「今日の放課後も頼むな、千夏、シャルル」

「任せな、一夏」

「うん、僕も頑張るよ」

一夏達は今、第三アリーナに続く廊下を歩いていた。

「お、箒だ」

千夏がそう言うと箒が前の廊下を歩いていた。
箒も気がついたのか、こちらを振り向いた。

「ああ、一夏達か、これから訓練か？」

「そうだ、箒も行くか？」

「わかった。そうしよう」

箒が仲間に加わった！

「じゃあ、箒はまた一夏の基礎訓練をやってもらえるか？」

「いいぞ、千夏の訓練は的確だからな。それで行こう」

「じゃあ、僕はまた一夏と模擬戦だね」

訓練内容が決まり、一夏達が歩いてアリーナに向かうと――

「ん？なんだ？なんか騒がしいな……」

「そうだな、何かあったのか？」

一夏達は第三アリーナに向かう生徒達が何やら急いでアリーナに向かっているのが分かった。

「どうしたんだ？いったい――」

一夏が一人の生徒に話しかけると、

「あ、織斑くん、実はね。誰かが模擬戦をしてるんだけど、なんだか様子が――」

ドゴォンッ！

「「「「！？」」」」

轟音が鳴り響いた。

「なんだ！今のは！？」

千夏がそう言うと

「第三アリーナからだよ！行ってみよう！」

「おう！」

「わかった！」

突然、爆発音が聞こえたアリーナの観客席に急ぐとそこのアリーナでは……

「鈴！？セシリア！！」

千夏が悲鳴に似た叫びをあげた。

鈴とセシリアのＩＳがボロボロにされていたからだ。

その二人の対戦相手は転校生で黒いＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲンを操るラウラだった。

『ちきしょう！！なんで忘れてたんだ！あたしは！』

千夏は原作で鈴達がラウラによって傷つけられる事を忘れてしまっていた。

二人もう限界であり、

機体ダメージが操縦者生命危険城（デッドゾーン）に到達するのは時間の問題だった。

『止めに行かねえと……！』

千夏が観客席からピットに向かおうとすると、

「まて！千夏、何をする気だ？」

「鈴達を助けに行く！」

千夏は急いでピットに行こうとするが、一夏が千夏の手を掴んだ。

「離してくれ！一夏！」

「何言ってるんだ！まだ病み上がりなんだぞ！」

「でも……！」

千夏は自分が怪我をしている事に腹を立てた。
大事な時に動けない自分を情けなく思っていた。

「俺がいく」

「え…？」

「俺が…行ってくる…」

「でも、一夏はまだ訓練中で……」

一夏が行ったとしても、状況を打破できるのは難しい。だが……

「……もう、嫌なんだ……」

「え…一夏？」

「もう……千夏が誰かを助けて怪我をするのは見たくないんだ……！」

「！……一夏……」

一夏はあの事件で千夏が自分の弱さのせいで傷つけてしまった事を悔んでいた。
その事もあり、一夏はより一層訓練に励み、時間を見ては千冬に直々に修行して貰っていたのだが、
千夏はその事をしらない。

「僕も同じだよ。千夏に無茶させるなんて、僕のプライドが許せないからね」

「シャルル……！」

千夏は自分を大切にしてくれる幼馴染と友達に心が温かくなっていくのが感じられた。

「…わかった……でもその代わり――」

「なんだ？」

千夏は一呼吸した後、一夏の右手を両手で優しく包んで、
二人に言葉を告げた。

「…怪我は……しないで……」

「！……ああ！分かった！」

「そのつもりはないよ」

そう言い、二人は走ってピットの方に向かった。

「…一夏、シャルル…無事に帰って来てくれ……」

千夏はこの時初めてあいつに願った。

『お願いだから……二人を守ってくれ……神様…！』

千夏にとって不本意だが、そう願うしかなかった……

「ふん、これで終いか……」

「う、グッ……」

「ま、まだまだですわ……」

ここはアリーナフィールド、今まさにラウラが鈴とセシリアに対し、殴る蹴るの攻撃をしていた。

ラウラの顔は、愉悦に口元を浮かべていた。

「アンタをぶっ飛ばすまでは…倒れるわけにはいかないのよ……！」

「その…通り…ですわ……あの言葉を取り消させるまでは…！」

ラウラは少し首をひねり、また顔を愉悦に口元を浮かべて言った。

「ハッあの種馬とイタリアの女の事か……下らん、男を助けて怪我をするとはな、無駄な行為だ」

「人を助けるのが下らないっていうの…！？」

「たかが男一人、ＩＳを動かせるだけの種馬を助けて何の得がある？」

「一夏さんただＩＳを操縦できるだけの殿方ではありませんわ……！」

「ふん、あの雑魚がか？笑わせる…あの時もフランスの第二世代（アンティーク）に守られていたではないか」

「…確かにあいつはまだ弱いかもしれない……」

「鈴さん！？」

「やっと認めた「でも！」む？」

鈴が大きく声を上げ、ラウラにぶつけた。

「あいつはアンタよりも強くなる！絶対アンタを倒す！そんでもって千夏もアンタには負けない！」

鈴はニヤリと笑い、ラウラは心底つまらなさそうにして、攻撃を続けようとした。

「気をつけた方がいいわよ？」

「なに？」

ラウラは鈴の言った言葉に疑問を持った。

「……そうですわね…気を付けなさった方がよろしくてよ？」

「貴様ら一体何を――――！？」

その刹那、ラウラの背中にゾクリとして、後ろを振り向くと、

「「後ろから突っ込みがくるわよ？（きましてよ？」」

「うおおおおお！！！！！」

「――――――！！クッ！？」

ドゴッッッン！！！

「ぐあぁッ！？」

ラウラは突っ込んでくる白い物体に吹き飛ばされた。その白き者は……

「鈴！セシリア！無事か！？」

「一夏！遅い！」

「待ちくたびれましたわ…一夏さん」

白いＩＳ、白式の操縦者、織斑一夏だった。

「ぐうっ…！、貴様！？どうやって気づかれず接近した！？」

吹っ飛ばされ、シールドエネルギーを削られたラウラはハイパーセンサーがあったにも関わらず、接近戦を許した事態を分からないといった風に驚いていた。

「ん？ああ、イグニッションブーストを使っただけだぞ？」

「馬鹿な！それでもハイパーセンサーに引っかかるはずだ！？」

「普通のイグニッションブーストなら、な」

一夏は訳ありそうにつぶやいた。

するとその態度に不服を持ったラウラは、

「普通のだと？貴様一体なにを！？」

「悪いが企業秘密ってやつだ。教えられねえよ…シャルル、二人を頼む」

「うん、わかった！」

いつの間にか、シャルルが一夏の隣にいて、鈴とセシリアを抱えて、離れた。

「ふう、これでひとまず安心だな…」

「貴、様……！」

ラウラは吹っ飛ばされた事に対して怒りを示していた。

「……まあいい、次は貴様を潰す！」

「…やれるものならな…」

一夏は、雪片を地面に水平な状態で構え、ラウラを厳しい目で見た。

「！？――――こ、これは……！？」

「俺の仲間にもう手は出させないぞ…ボーデヴィッヒ……」

ラウラと一夏は構え、対立した。

『なんなんだ。コイツの覇気は！？これじゃあまるで……――――――』

――――――――――まるで教官を相手にしているようではないか！？

「……」

「お前は…一体……！？」（何故だ！？なぜコイツなんかが教官の

覇気を持っている！？）

「来いよ。フロイライン（美しいお嬢さん）……千冬姉に鍛え上げられたんだろ？」

「貴様！…舐めるな！！」

ラウラが今まさに飛びだそうとした瞬間、俺たちの間に影が割り入ってきた。

ガギンッ！

金属同士がぶつかり合う音が響いて、ラウラはその影に加速を中断させられる。

「……やれやれ、これだから餓鬼の相手は疲れる」

「千冬姉！？」

ラウラの攻撃を止めたのは千冬だった。

千冬は何時ものスーツ姿で、ＩＳを展開していないにも関わらず、一七〇センチはある長大なＩＳ用ブレードを軽々使い、戦いを止めた。千冬さん、貴方はサイヤ人ですか？

「模擬戦をやるのは、構わん。――が、模擬戦相手の生命にかかわる事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「……教官が…そう仰るのなら」

素直にうなづいて、ラウラはＩＳを解除した。

そしてラウラは一夏を人睨みした後、その場を去った。

「織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな？」

「え？あ、はい…」

「僕もそれで構いません」

千冬は、その言葉を聞いて、アリーナ内全ての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンッ！と千冬が強く手を叩いてこの場は幕を閉じた。

「一夏！シャルル！怪我はないか！？」

「あ、ああ大丈夫だ。」

「僕も大丈夫だよ」

「ほんとか？ほんとなんだな！？」

一夏達はピットに戻り、鈴とセシリアは待ち構えていた救護班に運ばれていった。
千夏は一夏の体をペタペタ触り、傷が無いか確かめていた。
そして千夏は一夏の顔に自分の顔を近ずけて熱心に傷を探していた。

「ち、ちちち千夏!?だ、だだだ大丈夫だって!!ほんとに何もないって!!」

「そ、そうか?それならいいんだが……無理はしないでな?」

「わかってるさ、千夏よりは無茶はしねえよ」

「な!?あああもう!一夏!!」

「ははっ悪い悪いっ」

「たくっ……シャルルも平気か?」

「うん、僕も平気だよ。千夏よりは無茶しないからね」

「シャルルまで!?酷いぞ二人共!!」

「「あははーごめんごめん」」

「むー!」

千夏は二人にからかわれ、むくれた。そんなこんなで千夏は拗ねたまま早歩きでピットを後にし、一夏とシャルルは千夏を追って二人は小走りで歩いた。

オマケ・「神(みみかき)の右手を持つ女子」

ここは、寮の千夏の部屋、
そこには、その部屋の主である千夏と
女子達から命からがら逃げのび、千夏の部屋に避難した一夏がいた。

「はあ、死ぬかと思った……たく、なんで俺がこんな目に……」

「幸運な奴だな。そんな思いが出来るのは世界広しと言えど一夏だけだ。」

「千夏…なんで苦労が出来る事を幸運に思わなきゃならないんだ?」

「別に……」

千夏は今ベット寝転がりながらイタリアのニューマ〇バ社オートマティックリボルバーの整備をしている。護身用として千夏の父から渡されたその銃は、リボルバーなのにオートマティックの機能が付いてるのが特徴だ。そしてその外見はリボルバーそのままだが銃口が下に着いている珍しい銃である。
ぶっちゃけト〇サの相棒である。

「それ…本物か？」

「ん？ああ、そうだぞ」

「へえーなんかごついな……」

確かにごつい。銃口の上には跳ね上がりを防ぐ重りが付いているのだ。
華奢に見える千夏が持つとその銃は、より一層ごつく見える。

「一夏、触ってみるか？」

「いいのか？」

「ああ、構わないぞ。弾は抜いとくけど」

「いや、撃つ訳じゃあないからいいよ……」

「当たり前だ。こんなところで撃ったら弾丸の代わりに出席簿があたし達のどたまを吹き飛ばすわ」

たしかにその通りだ。千冬姉の出席簿アタックはどんな武器よりも怖い、

「……見た目どうり重いな…これ」

「そうか？」

「ああ、なんかこれで撃たれたら体半分が吹き飛びそうだ」

「ＩＳの武器じゃあねえんだからそれはねえよ」

この武器はＩＳが出来る以前に生産された銃だ。
大統領である千夏の父は、マ○バ愛用者であり、カラビニエリ時代の相棒として共戦った。体の一部と言ってもいいと千夏パパは言う。

「千夏、触らせてくれてありがとな」

「いいって、こいつは一夏を守る為にも使えるからな」

「…そっか、俺も早く強くならないとな……」

「ゆっくりでいいさ…一夏は強いんだからな」

「ははは…ありがとな…千夏」

「あ…うん…」

千夏は一夏に礼を言われ、少し照れくさそうにして頬を指でかいていた。

「まあ、俺が強くなるまでよろしくな。千夏」

「はは、マ○バでよろしければ」

マ○バの整備を終え片づけて終えると、一夏はしきりに自分の耳を気にし始めた。

「どうした？一夏」

「ん？ああ、なんか耳の中が急に痒くなってな」

「あーあるよなー急に痒くなるの」

「だな、あークソ、痒い」

「…ふむ」（ちょっと辛そうだな…よし…」

千夏はベットから下り、机の引き出しからある物を取りだした。

「一夏～こっちにきてくれ」

「ん？ああ、わかった」

一夏はそう言って千夏のところに向かい。千夏は、ある物を取ってベットに戻り、一夏を呼んだ。

「で、なんだ？」

「はい」

「え？」

「だからはい」

「え？何が？」

千夏はベットに正座で座り、正座してる太ももをポンポンと叩いた。

「もう、早く太ももに頭寝かせろよ。一夏は前に耳かきで下手をうって痛がってたろ？」

一夏は言葉を理解するのに数秒かかり、そして理解できると……

「……え！？千夏がやってくれるのか！？」

「な、なんだよ大声出して…やっぱりやめるか？」

「い、いや！止めない！宜しくお願いします！！」

一夏は千夏の膝枕が堪能できると分かるとテンパっていた。

そりゃそうだ。意中の女性に膝枕をして貰えるのだから、一夏でもテンパる。

「お、おう（何故に敬語？）」

一夏はベットに恐る恐る、またがり、千夏の膝に頭を乗せた。

「よしよし、良い子だ。おとなしくしてろよ？動くと怪我するからな」

「わ、わかった」

千夏は一夏の頭を左手で抑えた。一夏は一瞬ビクッとした。千夏はまだ耳かきを耳に入れてないので不思議がってたが、気にせず、右手で耳かきを持って耳かきを始めた。

「ん～……かなり詰まってるな～」

「そ、そうか」

「ちゃんと耳の掃除しろよ?耳の炎症とかがあるんだからな」

「あ、ああ、悪い…」

「分かればいい。お?なんか手ごたえあるぞ。動くなよ。一夏」

「お、おうわかった」

一夏は動かない様に右手で千夏の露出している足を持つ、今の千夏の服装は結構ラフである。上はワイシャツだけで、下着はつけておらず、下はスパッツだけである。

ちなみに何時も付けているＩＳ待機状態の伊達メガネはワイシャツの服の谷間にかけている。

髪は下ろしており、昔の髪型に戻っていた。

一夏が急に部屋に入れてくれと言われ、千夏はのほほんが渡したパジャマを来ていたが、

恥ずかしいらしく、一夏が部屋に入るまでに着替え、今の姿である。

どっちかって言うと今の格好のほうが一夏にとって宜しくない状態である。

『おおう、ちっ千夏の太ももって柔らかい…それに良い匂いだ……』

「ん～あともうチョイか～」

『そ、それにあの格好は…マズイ！』

一夏は向かい側にある鏡で千夏の姿を見ていた。

やはり一夏も男、千夏の姿と自分の置かれた状況に嬉しいが困っていた。

「う～ん…ん～……」

『髪を下ろした姿の千夏って、やっぱり綺麗だな…』

「う～ん――――とぉ！」

「おお？」

「おおーとれたとれた」

千夏がそう言うと一夏の耳の穴のかゆみが取れた。

「おお！かゆみが取れたぞ」

「そうだろうそうだろう、じゃあ次は反対側な」

「おう」

一夏は立ちあがろうとすると、

「あ、一夏は立たなくていいぞ。あたしが動けば――」

「いや、千夏にして貰ってるんだ。俺が移動するよ」

「そうか、わかった」

千夏はそのままでいて、一夏は反対の耳を千夏に見せるようにまた膝の上に頭を置いた。

「始めるぞ」

「おう」

そういって耳かきが始まった。

「う～ん、こっちも結構あるなー」

「そ、そうか」

一夏は気持ち良さそうにして目を細めていた。今は夜である。つまり……

『ヤベ……眠くなってきた……』

「ここか？う～ん……」

千夏の耳かきは予想以上に上手く、一夏は眠くなってきた。

「む～ん…お、取れたぞ…一夏？」

「……スゥ……スゥ……」

「ありゃ、寝ちゃってるよ……」

千夏はしょうがないなぁ、と言い、一夏をベットに寝かせた。

「さてと、あたしも寝るかな……」

千夏は一夏の隣に寝た。

「ふぁ～ん、……はぁ、お休み一夏」

千夏は寮のルール忘れていた。

千夏自身も鈍感であり、自分が女である事を眠気のせいで失念していた。

そして二人は寝てしまった。朝の恐怖を知らずに……

そして翌日……

「……んぅ？…朝か…」

一夏は昨日の耳かきで眠気に負け、千夏の部屋で寝ていた。

「……あー、千冬姉に殺される……」

一夏がそう吹いて、体を起して立つと……

ガチャッ

「ガチャッ？」

突然洗面所の扉が開き、目の前に……

「……え？」

「一夏？起きたのか？」

そこには千夏がいた。素っ裸で……

その体は完璧としか言いようのないボディラインで、

水着を着れば、百人中百人が振り向く事間違いなしの美人である。

一夏並みの鈍感なのがたまに傷なのだが……

その千夏の裸体をまじかで見た一夏は声出せず、目を離せなくなっていた。

そして……

「一夏、どうした？」

「ぎ…」

「ぎ?」

「ぎゃあああああ!!!??」

一夏は叫びをあげた。

十分後……

「あっははは、わりぃわりぃ、一夏がいるのを忘れてたわ」

「勘弁してくれ……」

千夏は自分が女である事を失念し、忘れていた。
鈍感を通り越した結果がこれである。

「わるいって一夏、あとそろそろ戻らないとまずいぞ?」

一夏は千夏の部屋で寝てしまった為、校則に反し、千冬に殺されかねない。

「そう…だな……早く戻るよ。悪かったな、千夏」

「いいって早く戻りなって」

「ああ、わかった」

一夏はそう言い、千夏の部屋を出ていった。

「……ふう、自分が女だったの忘れてたぜ……」

千夏は朝、シャワーに入った後何時も服を着ないで洗面所から出てるのが習慣なり、
一夏がいる事を忘れてそのまま出て来てしまったのだ。
一夏には嬉しいが困るハプニングである。

「そういやあたしの体……一夏に見られたんだよな……」

千夏は今、女である。少しばかりの恥じらい心だってある。
千夏は一夏に見られた事を今更恥ずかしがっていた。

「――――――っヤバい…どんな顔して会えばいいんだ……」

千夏はとたんに顔を赤くしてベットにダイブした。

「……一夏のスケベ……」

自分のせいなのに人のせいにしている千夏だった。
その後、千夏が一夏に会うたびに、顔を赤くし、顔を背けて距離を置いた。
一夏は自分が嫌われたと思い、必死に千夏に謝っていた。
そして一夏が千夏の部屋に泊まった事がクラスにバレた。あれだけ一夏が叫べば嫌でも外に聞こえてしまう。
千夏と一夏を待っていたのは、千冬の出席簿が一夏と千夏の頭に炸裂し、
ハーレムズの執拗な尋問が千夏を待っていた。
さんざんな一日であった事は言うまでもない。

第三十三話「黒との対立」（後書き）

一夏「なあ、千夏、あの技ってなんだ？」
千夏「明治時代の頃、細目の警官が使ってた神速剣だ」
一夏「誰なんだ？」
千夏「ある流浪にと戦った男だよ……」

第三十四話「疑いの解消」（前書き）

一夏「千夏！あの技すげえな！」
千夏「だろう？一夏に教えといてよかったわ！」
鈴「でもこれって他作品の技って入れていいの？」
シャルル「確かに……このＳＳってＡＣじゃなかったっけ？」
作者「ネタの為です。はい」

第三十四話「疑いの解消」

六月、最終週。
あのラウラとの対立から少し経ち、学園別トーナメントが開催された。
鈴とセシリアはラウラとの戦闘で怪我をしてしまった為、山田先生がドクターストップならぬ、
ティーチャーストップをかけたからだ。
二人とも悔しそうだったが無茶をしてＩＳに無理はさせられないからな。
一夏とシャルルは原作道理にペアを組み、千夏は病み上がりな為、出場は無しになってしまった。
いわく、千冬が千夏の出場は却下したのである。千夏は病み上がりで出場は無しと思っているが、
千冬には別の意味があるのは千夏はしらない。一夏は最初、千夏と組もうとしたがシャルルがいるため、千夏は一夏にシャルルと組んでやれと言われ、一夏もそのお願いを聞きいれた。
そして一夏とシャルル、千夏はトーナメント表が発表された。
その一回戦目の相手は……

「「え？」」

『……原作通り…だな』

一回戦の対戦相手は、ラウラと箒だった。

あのトーナメント表発表から何分か過ぎ、一夏、シャルル、千夏はピットにいた。

「ＡＩＣ？」

「そうだ。ＡＩＣ（慣性停止結界）アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略で、ボーデヴィッヒは［停止結界］と呼んでいる。もともとＩＳに搭載されているＰＩＣを発展させたもので、対象を任意に停止させることができ、１対１では反則的な効果を発揮するが、使用には多量の集中力が必要であって、複数相手やエネルギー兵器には効果が薄いんだ」

「へえーすごそうだな……」

「一夏、もう少し緊張感持って聞こうよ」

シャルルは少し呆れながら一夏に言った。

「あーわるい」

「…まあいい……後はヴォーダン・オージェ（越界の瞳）についてだな」

「ヴォーダン・オージェ？」

「ヴォーダン・オージェ（越界の瞳）ラウラの瞳に移植された、疑似ハイパーセンサーだ。ＩＳ適合性の向上のための処置の一環で、脳への視覚信号の伝達速度の飛躍的な高速化と、超高速戦闘下での動体反射を向上させたナノマシンだ。」

「な、なんかすごそうだな……」

「だろうな……だがあっちは油断している。使う前に叩ければこっちの勝ちだ」

「だね。でも千夏」

「なんだ？シャルル」

「どうしてそんなに詳しいの？」

「あーそれはな」

「またカラビニエリの情報か？」

「まあ、そんなところだ」

「へえー千夏の祖国の人はすごいね」

「そうか？」

そんなこんなで千夏のアドバイスと対抗策、注意事項を聞いた二人は、対戦時間が来て、
一夏とシャルルは出撃した……

「一回戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

試合開始まであと五秒。四、三、二、一、――――開始。

「「叩きのめす！」」

ラウラと一夏は同時に動き、戦闘開始した。

一夏はプライベート・チャネルで、

『シャルル、千夏の作戦通りな』

『分かってる。そっちも気をつけて、まだあの技は未完成なんだからね』

『わかってる。ここぞって時に使わせて貰うさ……』

そういって通信を終え、一夏はラウラを相手にし、シャルルは箒と対決した。

「ハッ一人で私と戦うつもりか？」

「お前だってそれがお望みだろ？」

「良い根性だ……消してやろう！」

ラウラがそう言うと、肩のカノンを機動させ、一夏を狙った。

『敵ＩＳの大型レール砲（カノン）の安全装置解除を確認、初弾装填――――警告！ロックオンを確認――――警告！』

白式のハイパーセンサーが警告を発した。

『慌てるな……当たらなければ、どうということはない！』

一夏はラウラのカノンをギリギリまで動かず、最小限の動きでかわした。

「ふん、これぐらいは避けるか……」

「三人がかりの集中砲火を避けきったからな（あれは死ぬかと思った……）」

一夏は心の中でそう吹き、ラウラに接近した。

「イグニッションブースト無しで近付く気か！」

「楽しみは後で取っておくほうなんでな！」

一夏はラウラのカノンを正確に、そして紙一重にかわし続けた。

「近づいたところで、私の［停止結界］の餌食だ！」

ラウラは停止結界を発動させ、一夏を待ち構えた。

「だろうな……だが！」

ズザザザザーッ！

一夏はラウラに接近せず、ラウラの少し離れたところで土煙を上げながら止まった。

「！？目くらましか！」

「それもある…が！」

一夏の上げた土煙はラウラを覆った。
その時、
「――――!?これは!?」
ラウラの目の前には砂が線をかくように無数に浮いていた。
『停止結界の網が見える――――!』
一夏は砂で出来た線を掻い潜り、ラウラに一閃を放った。
ザンッ!
「グウぅッ!?――――」
ラウラは一夏の斬撃を食らい、後方に下がった。
「にがさねぇ!」
「このおおお!!」
ラウラは六つのワイヤーブレードを射出、一夏を襲った。だが……
『こんな物……千冬姉の神速乱れ出席簿に比べれば!!』
一夏は襲ってくるワイヤーブレードを避けては切り、また掴んでは他のワイヤーの絡ませた。
「なんだと!!??」

「固結び一丁上がり！」

ラウラに残ったのは二つに切られたワイヤーと固結びされた二つだった。

あと残る二つは、一つは切られ、もう一つは一夏が握っていた。

何という正確な回避か千夏の事になると凄く強くなる一夏だった。

『千夏の考えた策がこうも上手くいくとはな……やっぱお前は最高だぜ！千夏！』

一夏は心の中で千夏に参照を送った。

千夏の作戦はこうだ。

回想中

「俺がラウラと一対一で戦うのか？」

「そうだ」

「それは無茶なんじゃあ、ないかな？」

ラウラの試合前、三人は打開策について話し合っていた。

「まあ、今回ばかりは厳しいから弱点や策を教えようと思う」

「ふ～ん、てっちょっと待て、千夏はセシリアや鈴の弱点を知ってたのか？」

「イエス」

千夏はあっさり認めた。

「な、なんで教えてくれなかったんだ？」

一夏は少し悲しそうにして千夏を見ていた。

「そんな目で見んなよ……一夏の成長の為にやったんだから」

「え？そうなのか？」

「そうだ。最初から知ってたらフェアーじゃないだろ？」

確かその通りだ。

「そうだな…たしかにそうだ」

「ま、一夏も苦労して強くなった方がいいって事だ」

「うん、そうだね。それで弱点や策っていうのは？」

「ああ、あの停止結界の対処法だ」

「停止結界の！？どうやるんだ！？」

一夏が食いついた。

「落ち着け、話すから……まずあれは見えない赤外線だと思えばいい」

「赤外線？」

「スパイ映画で出てるだろう？見えない赤外線を潜り抜けて侵入するシーンとか」

「あーたしかに……」

「さてここで問題だ。そのスパイはどうやって見えない赤外線を潜り抜けた？」

「うーん……シャルル分かるか？」

「え？そうだね……サーマルかな？」

「それもある。だがそれだと停止結界は見えない」

「うーんなんだったかな――――――」

「……あ！」

「わかったみたいだな」

「もしかして…煙？」

「当たりだ」

千夏はシャルルが応えを出すとニヤリと笑った。

「煙が正解なのか？」

「ああ、だがただの煙じゃあだめだ」

「というと？」

「いいか？アリーナ地面を使ってな――――――――――」

回想終了

『土煙は砂を大量に巻き上げてる……だから停止結界にも引っかかるはずだ！』

千夏の作戦は停止結界を目視できるようにする作戦だった。
おかげで一夏は、停止結界に捕まらずラウラに攻撃できたのだ。

「このぉ！……舐めるな！」

ラウラは両手のプラズマ手刀を展開して一夏を攻撃した。
一夏は神経を集中し……

『頭を下げ…思いっきり左手を振り上げる――――！』

ブゥンッ！ガンッ！

ラウラは右手のプラズマ手刀で切りかかったが、
一夏が頭を下げて避け、ラウラの右手を一夏が思いっきり左手で弾いた。

『左手が当たったら右肩を前に出して、そのまま倒れこむ――――――！』

ドンッ！

「ぐっ！？」

『――――！、隙が出来た！』

一夏は好機とばかりに零落白夜を発動、雪片を頭上に構え、そして……

「うおおおおお！！！！！」

ザンッ！！

振り下ろした。

「ぐぁぁぁぁ！！！」

ズサーーーッ！！

ラウラは一夏の一撃を受け、吹き飛ばされる。

「ぐうっ……キ…サ……マ……！！！」

「！、今だ！」

一夏は、前の対立で見せた構えをした。

それは、雪片を地面に水平な状態で構えた型だ。

「！貴様、その構えは――――――！？」

「いくぞ？」

一夏はイグニッションブーストを発動、空気抵抗を極限まで減らす

体勢をし、ラウラに突撃した。

「牙突！！！！」

一夏の必殺技、牙突が炸裂した。
刃を地面に水平な状態で相手を突き、
避けられても横薙ぎに派生出来る平刺突（ひらづき）を兼ね備える。
千夏が一夏に叩きこんだ必殺技だ。

「うおおおおお！！！！！」

「このぉ――――舐めるなぁぁぁぁぁ！！！！！！」

一夏は叫び、ラウラも声を上げて迎え撃つ、

ここは一夏とシャルルが出撃したピット内、千夏そこで戦いを見ていた。
今、一夏が千夏から教わった新技を出しているところである。

「斎藤さん……貴方の技は引き継がれました……」

千夏は目をつぶり心の中である人物に感謝し、視線を画面に戻した。

「一夏は強くなった……これで福音戦も大丈夫だ……」

千夏はこの先の激戦を予想し、一夏が怪我をしない様に鍛え上げた。
全ては幼馴染を守る為に、

「――――む、シャルルと箒の戦いは終わったか……」

空中ディスプレイを見ると、シャルルと箒の一騎打ちは、
箒を戦闘不能にして、シャルの勝利に終わった。

「専用機を持ってないのに、箒もなかなか粘ったな……一夏との訓練の賜物か」

箒は悔しそうにして、一夏とラウラの戦闘を見ているのがわかった。

「後は一夏とラウラの一騎打ちかな？」

千夏はそう言い、モニターを見た。

「……そろそろか…」

千夏はそう吹き、ＩＳを何時でも展開出来るようにしていると……

「――――何がそろそろなんだ？」

「！！？？」

千夏は驚いて後ろを振り向くと……

「さて……ガッティーノ…何がそろそろ何だ？」

「あ…う…その……」（どうしてここに千冬さんが！？）

千冬が千夏の目の前にいたのだ。千夏は千冬の存在に気付けなかった。

これがブリュンヒルデの実力という事か……

千夏は千冬の覇気に当てられ、動けなくなっていた。

「答えろ。ガッティーノ……」

「っ――――――そ…それは……（ま、まさか気づかれた！？）」

千夏はどうすればいいか考えていた。

だが千冬相手にどう動けばいいか……

（ど、どうすれば…このままじゃあ一夏を助けられない……！？）

千夏は少しガクガクと震えながら考えとめぐらせたが、

思いつかなかった。

「……千夏」

「え？あ、はい」

千冬は千夏を名前で呼ばれ、千夏は反射的に返事をした。

「お前が何を知って、何をしようとしているのかは分からない」

「……」

「だが……」

千冬は言葉を区切り、言葉を発した。

「お前が一夏を助け、守ろうとしているのはわかる」

「え？」

「お前が私の弟の為に命をかけてくれた事も知っている」

千冬はさっきの覇気が無くなり、今は千夏に向けて微笑んでいた。

「千冬…さん？」

「だから私は、お前が弟を守ると言うのなら――――」

千冬は言葉を区切り、千夏に向けて言った。

「私は何も検索はしない。お前が弟を守る邪魔をするわけにはいかないからな……」

「！？――――千冬さん……」

千夏は……嬉しかった。千冬に認められた様な気がして、
千冬は千夏に近ずき、千夏の頭に手を置いてクシャクシャと撫でた。

「ちょ！？ち、千冬さん！髪型が乱れます！」

「フッそれは悪かったな」

千夏は少し不機嫌になったが千冬に撫でられた事が嬉しかったらしく、
あまり気にならなかった。

「千冬さん……」

「なんだ？」

「何時頃から気づいたんですか？」

「あの無人ＩＳの時からだな」

「そうですか……」

千夏は自分の行動で疑われた事に少し後悔した。
もっと気を付けて行動すればよかったと、

その時……

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルＤと認定、鎮圧のため教師部隊を送りこむ！来賓、生徒はすぐに非難す

る事！繰り返す！』

「……これも知ってたのか？」

「……え～と……」

千夏はどう答えればいいか分からず困っていた。

「て、言うか。千冬さんと話してたから一夏達の試合を見れなかった……」

「ほう…私のせいか？」

千冬は千夏を目を向けた。

「い、いえ！？決してそう言う訳ではないですよ！？」

「……フッ冗談だ」

「そ、そっすか……」

千夏はホッとしたように胸をなでおろした。

「それで……行くのか？」

「え？」

「一夏達を助けにさ」

千夏は千冬が何を言ったのが一瞬分からなかったが、

少し立つと意味を理解した。

「行っていいんですか！？」

千夏は不安そうにして千冬を見た。

千冬はフッと笑い、千夏に言った。

「もちろんだ。ただし、怪我はせぬようにな？」

「あ、は、はい！分かりました！行ってきます！」

千夏はそう言い、ＩＳ「ステイシス」を展開してフィールドに向かった。

「行ってこい……一夏を支えにな……」

千冬はそう言い、自分のするべき事する為、真耶のいる観察室に向かった。

第三十四話「疑いの解消」（後書き）

千冬「一夏の事を頼むぞ？」
千夏「はい！任せてください！一夏はあたしの幼馴染ですから！」
千冬「いや、そういう事じゃなくて……はあ、それでいいか…」
千夏「え？なんでため息はいてるんですか？」
千冬「……自分で考えろ」
千夏「？？？」

第三十五話「第二の敵《イレギュラー》」（前書き）

一夏「おい、作者……また千夏に怪我をさせたな？」シャリンッ
作者「ま、まままままってくれ！！！！こ、これは話に必要で――――！？」
一夏「悪・即・斬！！！！」ズバッ！！！
作者「ぎゃあああああああああああ！！！！！！！！？？？？？」

第三十五話「第二の敵《イレギュラー》」

一夏とシャルルは学年別トーナメントの試合でラウラと箒と戦っていた
シャルルは箒との戦いで「盾殺し《シールドピアース》」を炸裂させ、勝負を終わらせた。
箒の乗る打鉄は防御型だが、シャルルの一撃必殺には耐えられなかった。
一夏はラウラに牙突を繰り出し、一気に勝負を仕掛けた。
だが、一夏がラウラに突撃を仕掛けようとした瞬間……

「あああああっ！！！！！！」

「！？、なんだ！どうしたんだ！？」

ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。同時にラウラのＩＳから激しい電撃が放たれた。

「な、なんだいったい！？」

一夏は腕を交差するように防御した。
そして一夏がラウラの方に目をやると……

「い、一夏……何…あれ……？」

「……普通じゃない事はたしかだ……」

シュヴァルツェア・レーゲンの装甲がグニャリと溶け出し、
泥人形のようになってラウラを飲み込んだ。

そして、その操縦者を包み込むようにして新たな形状を構成していく。

「なんだよ、あれは……」

無意識に一夏はそう呟く。この光景を見てある全ての人間が同じ事を思っているだろう。

ＩＳは原則として変形しない。

ＩＳがその形状を変えるのは『初期操縦者適応（スタートアップ・フィッティング）』と『形態移行（フォーム・シフト）』の二つだけ。

そして、『形態移行（フォーム・シフト）』もあのような変形の仕方ではないと思う。

やがて変形が終わり、そこに立っていたのは全身装甲（フルスキン）の黒いＩＳ。

ボディラインは少女のそれであり、

同じ全身装甲（フルスキン）と言っても先月の千夏を傷つけた無骨な襲撃者とは似ても似つかない。

腕と脚に最小限のアーマーをつけ、

頭部のフルフェイスアーマーがラインアイ・センサーの赤い燐光を漏らしている。

そして、その手が握る武器を一夏が見たとき、一夏は顔を怒りに変えた。

「（雪片）……！」

千冬がかつて振るっていた刀。それに酷似ていた。

似ているというレベルではない。まるで模写（トレース）だ。

「あの野郎――――――！」

「！――――一夏！何をする気！？」

一夏は黒いＩＳに向かって牙突の構えをした。

「一夏！待って！危険だよ！？」

「止めるな。シャルル、コイツは千冬姉の技を――――！？」

刹那、黒いＩＳが一夏の懐に飛び込んでくる。居合いに見立てた刀を中腰に引いて構え、

必中の居合いから放たれる必殺の一閃。それは紛れもなく千冬の太刀筋だった。

「くっ！？」

一夏は敵の一閃を受け流し、後方に回避した。

「――――っクソ！あいつ……！」

一夏は敵に再度、牙突の構えをして突撃しようとした。

その時、後ろから声がした。

「一夏！何をしている！？危険だ！」

「！――――っ箒？」

「一夏、あいつはお前が倒さなくても教師部隊が何とかする。だから――――」

「…駄目なんだ……」

「なに？」

「一夏？」

箒とシャルルが一夏の言った言葉を不思議そうにして、問いを待った。

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ……」

「一夏……」

敵のＩＳが使った剣技は本来千冬のものだ。それを使われ、一夏は怒っていたのだ。

『あの剣技は千冬姉に教わった技なんだ！……俺は……あいつ（千夏）を守る為に覚えたんだ！……それなのに……！』

一夏は雪片を強く握りしめ、構え直した。

「……お前はいつも千冬さん千冬さんだな」

「それだけじゃねえよ。あんな、訳わかんねえ力に振り回されてるラウラも気に入らねえ。ＩＳとラウラ、どっちも一発ぶっ叩いてやらねえと気が済まねえ」

あれは、守る力じゃない。あれは強さなんかじゃない。ただの暴力だ。そう一夏は心で言った。

「あいつは俺が倒す、そのためにはまず正気に戻してからだ」

「……理由はわかった。だがお前のシールドエネルギーは残り少ないんだぞ。どう戦う気だ」

「それは……」

今の状況でどう戦うか、一夏考えたが、エネルギーが少ない上、相手も相手だ。
戦闘は厳しかった。

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送りこむ！来賓、生徒はすぐに非難する事！繰り返す！』

「聞いての通り、お前がやらなくても状況は収拾されるだろう。だから――――」

「だから、無理に危ない場所へ飛び込む必要はない、か？」

「そうだ」

箒の言ったことはもっともだ。だが一夏は……

「箒……それは違う、それだけは出来ない。俺がここで退いてしまえば、俺が俺でなくなっちまうんだ。誰の為じゃない、俺は俺の為だけに――――行く」

「ええい、馬鹿者が！ならばどうするというのだ！今のエネルギーで戦闘など――――」

「無いなら他から持ってくればいい。でしょ？一夏」

「シャルル……」

シャルルはさっきまで一夏達の話を黙って聞いていたが、なにか策があるらしく。
一夏達に話しかけた。

「普通のＩＳなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスで移せると思う」

「本当か！？だったら頼む！さっそくやってく――――――！？」

突然、黒いＩＳが一夏達を襲ってきた。
今、一夏達はコア・バイパスのエネルギー受け渡し最中であった。
その為、一夏達は動けなかった。

「くそ！？」

「不味い！？」

箒は一夏とシャルルの前に出て、シールドエネルギーの無い。打鉄で……

「箒！？止めろ！！」

「篠ノ之さん！？」

「今の私でも時間稼ぎくらいはできる！今のうちに！」

箒は剣を構えた。

『千夏も一夏を命がけで守ったのだ！ならば私も一夏を守る！』

そう箒は思い、敵ＩＳに向いた。

「箒！！」

「クッ！」

箒は斬撃の衝撃に備えたが、その斬撃は来なかった。なぜなら……

ビシュウゥゥゥン！！ドゴンッ！

「「「！？」」」

箒と敵の間に黄色いレーザーが貫いた。

「なんだ！今のは！？」

「このレーザー色は！？」

「もしかして……！？」

一夏達はレーザーが降って来た。方向に目をやると……

「！――――まったくタイミングの良い奴だ……！」

「あいつ…まだ病み上がりなのに……！」

「あの深海のような青いＩＳが……」

一夏達は頭上にいる援軍の名を呼んだ。

そこには、ＩＳ全体がスリムな青いＩＳを操る……

「「「千夏！！」」」

「待たせたな！！！！」

ＩＳ「ステイシス」を操る、イタリア代表候補生、千夏・Ｎ・ガッティーノがいた！

千夏は一夏達の近くに下りると、一夏が、

「千夏！何で来たんだ！？」

「え！？一夏？」

千夏は一夏がいきなり怒鳴った事に驚いた。

一夏は千夏の側まで行き、千夏の両肩を掴んだ。

「お前は怪我が治ったからってまだ病み上がりなんだぞ？分かって

るのか！？」

「あ、あの…えっと…」

千夏は一夏の剣幕に怯えて、上手く喋れなかった。
そこへシャルルがきて一夏をなだめた。

「一夏、千夏が怯えてるよ？落ち着いて」

「けど！……」

一夏は千夏を守る為に戦ってきた。それなのに自分達の力量不足で
病み上がりの千夏を戦場に出す事が、
一夏自身には許せなかった。

「……一夏、ゴメン……でもあたしは、一夏達を守りたいんだ……」

「！……千夏……」

千夏は少し持ち直し、一夏に言った。

「確かにあたしはまだ病み上がりだ……けど！あたしは一夏達を助
けたいんだ」

「…千夏……」

「千夏……」

「千夏……おまえ……」

箒とシャルル、一夏は千夏の尋常じゃない覚悟を見た気がした。
助けたい。守りたい。支えたい。という思いが伝わって来た。

「……一夏、あたしがあいつを受け持つ、その間に！」

「な！？無茶だ！相手は偽物でも千冬姉を真似ているんだぞ！？」

確かにその通りだ。病み上がりの千夏が一夏達のコア・バイパス完了まで持つか危なかった。

「大丈夫だ。必ず持たせる！」

「だけど！」

「信じろ……」

「え？」

千夏は一夏の目を真剣な目で見て、言葉を放った。
そして千夏に見詰められ、一夏は若干顔を赤くするのはお約束、

「一夏が信じるあたしを信じろ！」

「！……千夏……」

「必ず期待に応えるから……信じてくれ」

一夏は千夏の目を見続け返す、その間一秒、

「わかった……だけど」

「ん？」

「約束だ。無茶はするなよ……」

「分かってるって、約束だ」

千夏がそう言うと、一夏は少し顔を赤くしながら、

「じゃ、じゃあもし破ったら……臨海学校で持っていく千夏の水着は俺が決めるな？」

「ぐっ……それは……」

千夏は言葉を詰まらせた。一夏なら変な水着は着せないだろうが少し不安だった。

だが一夏の勝利の為、やむなしと思い承諾した。

「ああ、いいぜ。受けて立ってやる！」

「い、いったな？約束だぞ！？」

「お、おう……（あれ？なんか嬉しそうだぞ？）」

千夏は一夏が少し嬉しそうにしてい事を不思議に思ったが、今は後回しにした。

「それじゃ――――」

「ああ…」

「行ってくる！」

「無事に帰ってこい……千夏！」

千夏は一夏達のエネルギー受け渡しまで、時間稼ぎをするため、黒いＩＳに向かった。

『一夏達の時間を稼ぐ！それまで持ってくれよ！ステイシス！』

千夏は心の中でそう言った。

気のせいかもしれないが、「ま、付き合ってやってもいいぞ？」という声を聞いた気がした。

とりあえず上から目線の言葉に聞こえたので、千夏はスルーした。

そして千夏は黒いＩＳと戦闘に入った。

「さて、どう戦うか……」

相手はかなり早く、千夏の射撃でも当てるのは難しかった。

「とりあえず、相手をけん制して……ん？なんだ？」

黒いＩＳは刀を頭上斜めに構えた状態で制止した。

『なんだ？なにか繰り出す気か？』

千夏はそう思って警戒した。すると……

――――警告！敵ＩＳから、高純度の有害性粒子を検知、肉体保護をＢレベルからＡに引きあげます。繰り返します！――――

「!?なんだって!?」

千夏は驚いた。ステイシスの肉体保護システムのレベルがAに引きあげられた。すなわち……

「あいつ!核エネルギーでも使うつもりか!?」

核放射能を防御するレベルまでに自分のISが引きあげた事に絶句した。

『一夏達を待っているわけにはいかない!あたしが仕留める!』

千夏は早速、BTS(ビースト・トランス・システム)を発動、耳と尻尾が生えた。
感覚は鋭くなり、危機感知能力も引き上げられた。
そして千夏は敵ISに突撃した。だが、それがいけなかった。
敵ISの武器である刀に緑色の粒子が集まり……

ゾクッ!!!!

「！！？？不味い！！！！！！」

ブバアアアアアアアンッ！！！！！！！！

敵が千夏の突撃と同時に刀を振り下ろし、緑色の粒子が千夏を襲う。

「クッ！？避けろ！！！！！」

千夏は体をひねり、間一髪で回避した。だが……

「――――――ぐうぅっ！？……」

千夏のお腹あたりから右わき腹からななめ左下に線を書くように出血していた。

千夏はそれを見たとき、また絶句した。

「！？、シールドを貫通した！？」

あり得ない。あれだけでなんて威力だと千夏は驚き、
切られたところを手を使って止血を試みるが、
血は止まらず、痛みが増した。
どうやらあの緑色の粒子が止血を邪魔しているらしく。
千夏はかなり危険な粒子だと悟った。

『そ、そんな……こいつも原作とは違う――――!?』

千夏は言い知れぬ恐怖に陥った。
前は一夏達の援護もあって自分だけ怪我をしてすんだが、今回はそうはいかなかった。

『こいつを一夏達に戦わせたらいけない!!!』

千夏はそう考え、覚悟を決め敵に特攻をかける。
敵はまた、千夏に向けてあの粒子攻撃を繰り出そうとまた同じ構えで待ち構えた。

『…一夏…ゴメン……臨海学校…いけねえかも……』

そう心の中で幼馴染に謝り、千夏は死を覚悟して敵に飛び込んだ。

『あたしの……俺の大切な人達を…守る!』

こうして千夏の死合が始まった……

第三十五話「第二の敵《イレギュラー》」（後書き）

鈴「作者……まだ痛みつけが足らなかったみたいね……」ガキンッ！

作者「ま、まってくれ！？俺のライフはもうゼロで――――――！？」

鈴「しねえええええええええ！！！！！！！！」

作者「あばばばばばばばばっばばばばっばばばばばば！！！！！？？？？？？？」

第三十六話「激戦の終わり」（前書き）

で、でけた……か、感想をお願い…します…ガクッ

第三十六話「激戦の終わり」

試合中、突然ラウラのＩＳが暴走、その姿を変え、一夏達に襲いかかって来た。
その窮地を救ったのは千夏だった。一夏達は千夏が援軍に来た事に安堵したが、
今の一夏達は焦っていた。

「千夏ぁ！？クソ！何なんだよ！あれは！？」

千夏が敵ＩＳの一撃に当たり、負傷したのだ。だがＩＳには絶対防御がある。
しかし、今の敵には、それが無意味だった。

「なにあれ……あの一撃でシールドが貫通して、しかも絶対防御すら貫くなんて……」

「クッ！千夏が危ない！一夏！シャルル！まだなのか！？」

箒が焦って声をだし、二人はハッとしてコア・バイパスに集中した。

（俺のせいだ……俺が弱いからこんな事に……ちきしょう！！！！）

一夏は自分の弱さのせいで、千夏にまた、怪我を負わせてしまったと思った。

「……一夏、後悔するのは後だよ……今は早くエネルギーを白式に移さないと……！」

シャルルは口では冷静だが、千夏が敵の一撃に当たり、あまつさえ怪我をしたのだ。
遠目から見ても、千夏の怪我が酷いのが分かり、シャルル自身も焦り始めていた。

「私……私は見ているだけしかできないのか……！？」

箒は、専用機が無い自分に腹を立て、拳を強く握りしめていた。
シャルルは焦りのせいか、上手く集中出来ないでいて、一夏はまだかまだかと唸っていた。

（千夏…死なないでくれ……！！！）

一夏はこれしか出来ないのかと心の中で悔む様に祈った。

「ちきしょお！！何なんだよあれは！？ラウラの停止結界か！？」

今千夏は、敵ＩＳはラウラのような停止結界に似た、
緑色のバリアーで攻撃は防がれてしまっている。

敵はまたあの構えを取り、一夏に向けて、高純度の粒子斬撃波を放った。

「くうぅぅっ！！！！」

千夏は早すぎる斬撃波を避けたが、また攻撃が体をかすった……ケモノ耳だったが……

「ぎゃあああああ！？あたしの右ケモミミがあああああああっ！！？？」

千夏のケモミミは痛覚や血管がめぐっている為、千夏の体の一部なのだ。
当然、血も出るし人間の耳同様、かなり痛い。

「つぅぅぅっ……や、やろう！……人が一番気にしてるところを！！！！」

気に入ってるのか気に入らないのか分からん事を言ってるが、千夏は割と気にしつつ、気に入っている右ケモノ耳を半分以上切られ、かなり怒っていた。

「この野郎！ファブラムでも食らえ！！！」

千夏はレーザーバズーカ「ファブラム」を撃つが何故かエネルギー系の武器は避けて対処していた。
千夏はこの事に気づき、考えた。

『あの緑のバリアー…エネルギー系の武器は苦手なのか？』

千夏は作戦を考えたが、いい案が浮かばない。
自分は今一人、教師部隊はまだ来ていない。
今一夏達を守れるのは千夏しかいなかった。

『どうする!?このままじゃジリ貧になる……かといって一夏達を待ってあいつと戦わせるなんて出来ない!!』

千夏はあの敵が尋常じゃない攻撃力と危険性を兼ね備えた。ＩＳだと分かり、
一夏達に太刀打ち出来るか不安だった。

『あたしが相討ち覚悟で倒せば一夏達は……』

助かる。そう考えたが倒せず千夏が倒れたら一夏達に危害が及ぶリスクが大きすぎる。
ならば、

『一夏達のコア・バイパス完了まで時間を稼ぎ、特攻する……!』

一夏達なら、この判断を怒るだろう。そう千夏は思った。

『怒るかな…一夏は……あたしを嫌うかもしれねえな……』

千夏は一夏達の方に目を向けた。コア・パイバスはもうすぐ完了するだろう。
そうなればあとは千夏が敵に少しでもダメージを与え、
一夏達を優位にしなければならない。
だが一夏達ならば……

『あたしを助けるのを優先するだろうな……』

そうなってはダメージを与え、隙を作る意味がない。つまり

『一撃離脱……ヒット&アウェイか……！』

これしかないと千夏は考えた。だがしかし、

『何処を狙えば……ん？あれって……？』

千夏が敵の胸元に注意した。

「あれは……」

千夏が気づいた物とは、

「……いい胸だ…」

まじめにやれ、まじめに、

「じゃなかった…あいつの胸に輝く緑色の宝石って？」

千夏は敵ＩＳの胸元に着いているペンダントのような宝石が付けられているのが分かった。

その緑色のペンダントは中で緑色の粒子みたいなものが渦巻いているのが高純度センサーで見えた。

『もしかしてあれがあのバリアーの源か？』

千夏は確信めいたものを掴んだ気がした。

『やる価値はある……！』

千夏はまた一夏達に視線を戻し一夏はそれに気づき、千夏を見つめた。
千夏は一夏が気づいた事に少し嬉しいそうにほほ笑んだ。
だが一夏にはそれが最後に見る千夏の微笑みだと思い顔を青くした。
そして……

『悪いな…一夏、約束破って……』

また千夏は笑いかけ、敵に視線を戻した。

「さあ、あたしの生き様を見せてやる！」

千夏は特攻を開始した。
そのあと、一夏が大声で千夏の名前を呼んだ気がしたと千夏は後から知った。

「くそ！早すぎるだろ！？あの斬撃波は！！！」

千夏は愚痴りながらもミサイルを撃ちながら敵に接近し、距離を詰めた。
敵の攻撃は激しく、千夏の体に無数の傷を作っていく、
最初に当たった攻撃の怪我で、千夏は出血による血液不足で意識が朦朧とし、
回避が少しおろそかになっていた。

「この特攻が決まれば……勝機はある！」

千夏は被弾などお構いなしに特攻し、ようやく敵の目の前に到達し

かけた。

「これで――――――――!?」

ズバッ!!

銃剣着き突撃ライフル「カルカノ」で攻撃しようとした瞬間、敵の一閃でカルカノが真っ二つにされた。そして二閃目が千夏に襲った。

「くそぉ!!!!」

千夏は渾身の力を振り絞り、体をひねり、避けたが背中のＰＭミサイルポッドを切り落とされ、体勢を崩し、千夏は地面に滑るように墜落した。

「ぐぁぁあああああああ!!!!!!」

ズザーーーッ!と千夏は敵の目の前で止まり、動かなくなってしまった。

「ぐっ……クソ……ここで…終わり…な…のか……?」

敵は千夏に向けて、刀を振るおうとする。

「ち…き…しょう!……あたし…は…こんな…ところで……!」

千夏は諦めないと体の力を入れたが入らなかった。

『あークソ……血を流しすぎたか…?』

出血のせいで、意識が朦朧とし、体が動かなかった。
敵ＩＳはそんな千夏を気にせず刀を振り下ろす構えを取り、
その刀には緑色の粒子が集まっていく。

『…確実に仕留めようってかい……嫌な敵だ…』

死ぬのが怖くないのか、千夏はそう考え目をつぶると……

「千夏あああああああ！！！！」

「！？――――っ一…夏？」

遠くから一夏達の声が気がした。
千夏は倒れた体勢から一夏達の方に顔を向けると……

「千夏！！諦めるな！」

「箒…？」

「千夏！がんばって！あともう少しだから！まだ諦めるには早いよ！」

「シャルル……」

一夏達の応援を聞いて、千夏が身が打ち震える感覚に合っていると、

『千夏！！…がんばって！…死なないで！！！」

『そうですわ！！千夏さんがいなくなってしまってはだれがわたく

しに料理を教えてくださるんですの！？』

突然、プライベート・チャネルから声がした。
その声は鈴とセシリアだった。鈴は若干涙声だった。
どうやら千冬の計らいで鈴達と連絡が取れたらしい。
千冬さん、あんたいい人だ！！！

「鈴！…セシリア……！」

何故かは分からない。前世では味わったことのない感覚が体に流れた。
千夏は少し考えて答えを見つけた。ああ、そうか…そうなんだ…これが……――――――――

――――――絆なんだ……

千夏は体中を駆け巡る心地よい何かに力を感じ、
気を引き締め、立て直した。
そして敵に渾身のオーバードブーストで体当たりをした。

「うおおおおおお！！！！！！」

敵ＩＳは体当たりするとは思わなかったらしく
空中に千夏と共に打ち出された。そして……

ガチャッ！

千夏はファブラムで敵ＩＳの胸元に光る粒子が渦巻いたペンダントにファブラムの銃口を押し当てた。

「この距離なら、バリアは張れないな！」

だがそれは自分もダメージを食らう諸刃の剣だった。
しかし千夏は為らはず、引き金を引いた。

ズガアアアアンッ！！！！！！

千夏と敵ＩＳは爆発に巻き込まれ、黒煙を出した。千夏は空中に投げだされたが、
何とか体制を立て直し、制止した。

「こ、これで…どうだ！！」ニヤリ

千夏はニヤリと笑い勝利を確信した。……だが…

「――――!?…なんでだよ…どうして……!?」

千夏は信じられないような物を見るような目で黒煙の先を見た。
そこにはダメージは与えられたが、まだピンピンしている黒いＩＳ、
千冬のデータで出来た偽物が、
健在していた。

「そんな……あたしじゃ駄目なのか…？」

千夏は脱力して、出血が増して意識が急に遠退いて行くのがわかった。

『ああ、ここで終わるんだ……俺は……』

千夏のＩＳが千夏が危険だと判断し、光となって消え、
最低限の生命維持装置しか動かなくなった。
そして千夏は空中で体を支えるものが無くなり、その体は地面に落ちようとしていた。
千夏がいる高度で頭から落ちれば千夏といえど助からない。
鈴達は何処からか見てるのだろうか、
チャネルからは悲痛な声が聞こえた。

『鈴、セシリア……ゴメン…料理教えてあげられそうにないわ……』

千夏はここの中で友達に謝った。

『箒、シャルル……あたしの料理…披露してやりたかったんだけどな……』

心残りを思い出し、少し顔を苦笑いさせる千夏、

「――――、一夏……」

最後に幼馴染を思い出し、千夏は守りあう約束を思い出した。

「――――守れなくて…守られなくて――――」

千夏は最後に言葉を発した……

「――――、一夏……ゴメンな……！」

千夏はそう吹き、目をつぶって自分が終わるのを待った……だが、

ブウゥンッ！！！

トサッ

千夏は誰かに抱き上げられ、地面と激突する事はなかった。

「――――――……え？あ、あれ？あたしは……」

「大丈夫！？千夏！」

千夏の上から声がして顔を上げると、

「シャ、シャルル？」

「うん、僕だよ……一夏に頼んで、リヴァイヴのエネルギーを少し残して貰ったんだ。千夏の為にね」

そういってシャルルはウィンクした。千夏は訳が分からなかったが、シャルルの異変に気付いた。

「……シャルル」

「なに？千夏」

「なんで…泣いてるんだ？」

シャルルが泣いていたのだ。千夏には何故泣いているのかが分からなかった。

「…千夏が無茶して心配させたんでしょ……」

シャルルは怒ったような悲しむような顔をして、千夏を見た。

「……ゴメン…でも…結局あたしは何の役にも立たなかった……」

千夏は己の力無さに腹を立てた。

だがシャルルはそれを否定するように首を横に振った。

「……千夏と千夏のステイシスが、こんなにボロボロになってまで戦ってくれたんだ……」

シャルルの声はハッキリとそう、千夏に言った。

その時……

ピキッ！

敵ＩＳの胸元にある粒子が渦巻くペンダントに亀裂が入った。

「千夏に守れない者なんて……」

ピキッ！ピキキキッ！ペキッ！！

「千夏に救えない者なんて――――――――」

そして敵の胸元にあるペンダントがヒビだらけになり、
シャルルは千夏の顔を真剣な目で見て言い放った。

――――――――――在りはしないんだよ……！」

パリイィンッ！！！

敵の胸元にあるペンダントが完全に破壊され、敵ＩＳは全体を電流のような物が駆け巡っていた。
シャルルは大きな声で一夏に言った。

「一夏！！！今だよ！！！」

「おうよっ！！！！！！」

一夏は零落白夜を発動させて接近、敵ＩＳに切り込んだ。
敵も黙って切られる気はなく一夏に向けて刀で切りつけたが、
一夏の一閃二段の構えにあっけなく刀は弾かれ、一夏の雪片が敵を切り裂く、
その中からラウラが現れ、その目は悲しく、寂しそうな眼をしている。
一夏は気絶したラウラを抱き上げ一安心していた。
その時、千夏は敵に切り裂く時の雪片の刀身に目が離せなかった。

『一夏の雪片の刀身が、緑色の粒子で輝いている……？』

敵の使っていた少し黒み掛った緑色の粒子とは違い、
雪片の緑色の粒子はシャルルのような瞳の色をしていた。
エメラルドの様に光る、本当に綺麗で、澄み切った緑の色をしていた。
千夏は何でか分からなかったが、不思議とその粒子を見ていると安心感包まれる感覚になった。

『ああ……これで大丈夫だ……』

千夏は心の中でそうつぶやいた。
自分の名前を呼ぶ声がしたが、
疲れや痛みに負けて応える事が出来ず、千夏は意識を手放した……

第三十六話「激戦の終わり」（後書き）

千夏「なーんでこうまいどまいど怪我せにゃならん……」
作者「まあまあ、この後、いろいろあるんすから頑張ってください」
千夏「へいへい……」

第三十七話「緑色の悪魔」（前書き）

か、書けた……感想お願いします。

第三十七話「緑色の悪魔」

ここは保健室、千夏はそこいた。
あの事件の後、千夏は一夏に急いで運ばれ治療を施されたが、
敵ＩＳの使っていた武器が原因で、血は止まらず傷も多い為、危険な状態だった。
一夏は千冬に泣きつき千夏を助けてほしいと悲願した。
千冬は一夏を落ち着かせ必ず助けると皆に約束した。
何故かは分からないが千冬があの粒子兵器の治療ワクチンを持っていた為、千夏の命は取り留めたが、
それでも千夏は、怪我とあの粒子兵器の粒子が千夏の肉体に入り苦しめた。だが二日ほどでそれも無くなり、本当なら何年もの入院が必要だが、そこはチートボディー、
今は怪我だけを癒すだけに終わった。だが……

「い、一夏、もう大丈夫だから、自分一人で食べらるし、あるけるから平気だぞ？」

「いーや駄目だ。今回も千夏は無茶したんだ。だから俺がお前の世話と監視を千冬姉に任されたんだ」

「そう言う事、だから千夏の面倒はあたしと一夏でやってあげるね！」

「あう……何でこんな目に……」

そう、今一夏は千夏の世話をまたしていた。
事件時の一夏の必死な様を千冬に聞いた時、
本人は顔を赤くして号泣した事を否定していたが……

「それにしても、一夏が泣くねぇ……見てみたいかも……」

「な!?ち、千夏!その話はよしてくれ!」

「いいじゃない。千夏、こいつはね千夏を運んでる時も泣きながら運んでたわよ?」

鈴もその時の状況を見ていたらしく詳しかった。
まあ、鈴は千夏が助かった時、号泣してたけど……

「マジか?」

「マジよ」

「ああくそ!!もういいだろ!?」

「いやよ。あたしを転校初日でからかった罰よ」

あの事件の後とは思えない光景だ。
千夏も今の状況を楽しんでおり、皆無事でよかったと心から思える。

「ところでさ千夏」

「ん?なんだ?」

鈴は千夏に何か聞きたいらしく話を変えた。
一夏ももうからかわれず済むと思い、鈴の聞きたい事に耳を向けた。

「…なんでケモノミミ出てるまんまなの?」

「え？ああ、これか……」

実は今千夏は、常時ＢＴＳモードになっているのだ。

「これはな、体の治りを早くするのと、あの事件の粒子兵器による予防の為に出してんだと」

千夏はまだ完全に体からあの粒子の脅威が去った訳ではない。
まだ体内に微量だが、残っているのだあの緑色の粒子が……
後遺症はないのだが、女にとって死活問題な事が千夏の体には起きている。

「……それを使っても、千夏の傷跡は消えないんだよね……」

「まあな、ま、大丈夫だろ？」

千夏は服を捲り、お腹にある傷を鈴に見せた。鈴と一夏は辛そうな表情をしていた。
千夏の体には、あの敵ＩＳから受けた初撃でお腹あたりから右わき腹のななめ左下に線を書くように傷跡が生々しく残っていた。
ほとんどの傷は後を残さなかったが、初撃の傷だけが一番大きな傷でもあり残ってしまったのだ。
それもあの粒子に関係しているのかは、ＩＳ医療部が調査中とのこと、

「…すまん、千夏……俺が強ければ……」

「ちげえよ。あれはあたしが油断して招いた結果だ……後悔はして

ねえよ」

「千夏……」

一夏も鈴もなんだかお通夜に出席するような顔をしている。

「暗い話は終わりだ。それで一夏ラウラのほうは？」

「あ、ああ、大丈夫だ。筋肉疲労と打撲だけだったからもう動けるって。あの粒子の後遺症もないから安心しろ」

「そうか……よかった」

千夏は心底安心して、ホッと胸をなでおろす、
ラウラのＩＳ、シュヴァルツァ・レーゲンの肉体保護がラウラを守ったらしい。

『あの時のラウラのＩＳ……ＶＴシステムだっけ？原作ではあんなの無かったのに……』

千夏は原作の話から離れている事を今一度実感し、今後の対策を考える羽目になると思うと
頭が痛くなってきた。

『この調子じゃあ、福音戦も危ないかもしれない……』

千夏はそう考えていると一夏と鈴は千夏が急に黙った事を心配そうに見つめていた。

「まあ、あとの事はあとで考えるか……」

「後の事って？」

「え？ああ、えっと……り、臨海学校どうなるのかな～と思って」

千夏は咄嗟に話題を変えた。一夏達もそれに納得したのか、答えを言った。

「それなら大丈夫だって、ドクターも行けるっていってるし、千冬さんもＯＫ出してくれてるしね」

「だから安心しろって、皆で行けるぞ？」

「そっか……それはよかった……」

『千冬さんの事だから、体の事を心配して休ませると思ったが、行けて何よりだ』

千夏は嬉しそうにして顔を綻ばせた。だが千冬は心配もしていたが別の目的もあり、

千夏の臨海学校へ行く許可をだしたのは、千夏達は知らない。

「それにしてもラウラのＩＳに起きたあれは何だったんだろうなぁ……」

「…そうね…千夏ですらあそこまで苦戦させたあれっていったいなんだったんだろう……」

「さあな、だが過ぎた事だ。今は他の事を考えようぜ？」

千夏は暗い話を嫌い、話を変える。

「そう言えば一夏、お前ホームルームの時、ラウラに唇奪われたんだって？」

「な！？な、なななんでその事を！！？？」

「鈴から聞いた。」

「そう言う事、まったく……あんたはなんでこうポンポン女を落とすのよ。」ブツブツ……

「あはは、一夏の初めてをラウラに奪われたな？」（ほんと…なーんでこう一夏は人気なんだろ？）

「い、いや、ただラウラは間違った知識を覚えてあーなっちゃったというか」（ち、千夏は俺とのキ、キスを覚えてないのか？……なんか助かった様な悲しい様な……

一夏は事故とは言え、千夏の知らぬ間に初めてを奪ってしまった事に、嬉しさと罪悪感に悩まされた。

その時、

コンコンッ

誰か保健室のドアをノックした。

「ん？誰か来たのか？」

「便所じゃねえんだ開いてるぜ」

「千夏…下品よ」

そうか？と千夏は首をかしげた。

そう言ってると、保健室のドアから誰かが入って来た。

「お邪魔します。千夏、もう怪我は平気かな？」

入って来たのはシャルルだった。

「おおう、これはシャルルさん失礼しやした」

「ふふふっ千夏、口調が変だよ？それと僕はもうシャルルじゃないよ」

そう言われ、シャルルを見てみると、シャルルはＩＳ学園の女子の服を着ていた。

「……シャルル」

「何？それと僕はもうシャルルじゃなくて――――」

「お前そういう趣味だったの！？」

「なんでそうなるの！？趣味じゃないよ！そういのじゃなくて僕は――――――」

「一夏！シャルルが！シャルルが女装をして……！？」

千夏はオヨヨと泣く真似をして一夏に泣き真似ついた。

「だから違うって！僕は元は女で――――」

「ＩＳ学園に来る前から心は女だったのか！？なんてこったい！一夏が！一夏がゲイヴンの餌食に！？」

「だから、ちーがーうーのー！！！」

千夏は一頻りシャルル改めシャルロットで遊んだ後、箒とセシリアも来て皆で食堂に向かった。

会談だが、一夏は泣き真似ついてきた千夏に顔を真っ赤にして心臓バクバクだった事を千夏は知らない。

「ううう……酷いよ千夏ぁ……僕で遊ぶなんて……」

「あははーワロス、いやー今がからがい時！って思ってな。ついついなぁ……サーセン！」

千夏は反省ゼロの回答でシャルに謝った。

「もう……一夏からも何か言ってよ」

シャルから一夏に千夏を注意してと言われ、一夏は苦笑いした。

「あーえーと、まあ、千夏も悪気があるわけじゃあないんだからさ、な？」

「一夏…お前は何時も千夏には甘いな？」

箒が目を厳しくして一夏を睨んだ。

「そうですわね…どうして千夏さんばっかり優しんですの？」

セシリアはこめかみをピクピクさせながら一夏を鋭い目で睨んだ。

「たしかにそうよね…説明を要求したいんだけど？」

鈴も一夏の態度の違いに不満があり、一夏をまた睨んだ。

「そうだよね。僕もちょーと聞いてみたいな……」

シャル参戦。争いは避けられないようだ。

「え、えーとその、だな。ほ、ほら！千夏はけが人なんだから甘いのは当然だろ？」

一夏は千夏の怪我を理由に千夏への態度をごまかした。

「んー？まあ、一夏とはただの幼馴染だし、優しくするのは当然じ

ゃね？あたしだけじゃなく皆にだって一夏は優しいじゃあねえか」

皆そう言う事を言ってるんじゃないと言いたいが一夏がいる手前、言えずにいた。

当の本人である一夏は……

「……はは、幼馴染……俺と千夏の関係はただの幼馴染……」ズーン……

一夏は海底二万マイルの如く落ち込んでいた。

原作でヒロイン達の一夏への好意を一夏は千夏の言葉で痛感しただろう。

気づいてもらえない思いを……

「んで、対抗戦は無しになったんだっけ？」ずずずーーーーっ

千夏はラーメン大もり（正確には、チャーシュー大得盛りのどんぶりラーメン）を食べながら話した。

「怪我人なのによく食うわね……そうよ、あの事件で中止になったけど、一回戦はやるみたい」

「へえ、そうなんだ……」ずずずーーーーっ

「……千夏、食べながらは駄目だぞ？」

一夏は千夏を注意した。

「だって腹減ってんだもん。治療のせいでろくなもんが食えなかったし」

「だからって静かにくえよ。女の子なんだし」

「いいよーどうせあたしは貰いてのいない傷物だしな」

そういうと一夏はどよーんとして肩と頭を落とした。

千夏はしまった！と思い口をつぐんだが、すでに遅し、

「……ああ、そうだな……俺が弱かったせいで……」

ズズズーンと一夏はやらに落ち込み、座っている椅子が落ち込みオーラで削れてきている。

お馬鹿だが凄い、

「い、一夏のせいじゃねえよ！あ、あれはあたしがやりたいからやった事で……」

「それでも俺は……」ズズーン……ガリガリッ！

「いや、だから一夏のせいじゃ無くてな……？」（ああ…一夏の落ち込みオーラで椅子が！？）

「たく、あんたは……一夏、千夏が一夏のせいじゃないって言ってるんだから元気出しなさいよ！」

「そうですわ一夏さん、千夏さんも気にしていらしゃらないんですから、元気をお出しになってください」

「そうそう、一夏元気だしなよ。ね？」

「そうだぞ一夏、男たるもの何時までもくよくよしていてはいけないぞ」

皆から励まされ、一夏は少し気が楽になったらしく、顔を上げた。

「皆…ありがとな」

一夏が皆に笑いかけると一斉に全員が顔を赤くしモジモジした。千夏を除いて、

『ほーお、これがフラグスマイルか……一夏も大変だな。この中から誰か選ぶのは……』

すでに一夏が好意を寄せている相手が自分である事を千夏は知らない。
千夏は一夏から好意を寄せられている事を今だ気づいてやれないでいる。

「そんで、一夏」

「ん？なんだ？」

「ラウラは？」

「ああ、ラウラは――――」

「ここにいるぞ。嫁よ」

「おわ！？」

千夏の後ろから急に声がして、千夏は驚きの声を上げた。
そこにいたのは……

「ラウラ、来たのかお前も夕飯か？」

「ああそうだ。嫁も夕飯か？」

「まあな、一緒にどうだ？」

「そうさせてもらおう」

ラウラも食卓に加わり、一夏達は食事を再開した。鈴やセシリアはラウラを警戒していたが、千夏が仲裁に入り、その場は収まった。
その後、皆は解散し一夏は千夏を千夏の部屋に連れていくため、皆も一緒について行ったが、
箒は用があると言って一人、残った。

「……いったか」

箒はそう言い、あの事件の後の事を思い出していた。

「……一夏は……何故あそこまで必死に千夏を……」

回想中

「千夏！返事をしろ！千夏！」

「はあ、はあ、……うぅ、ゴプッ」

敵ＩＳを一夏が倒し、ラウラを救出した後、一夏達は千夏を治療室まで急いで連れていった。

だが、千夏の怪我は酷く、原因不明の吐血と高熱により危険な状態だった。

いまの一夏は千夏の血でＩＳスーツ共々真っ赤に染まっていた。

「千夏！？クソ！また血を吐いたぞ！？」

「一夏、落ち着け！あともう少しだ！千夏、耐えろ！」

「千夏！頑張って！」

「はあ、はあ、はあ、……」

『――――――っくそ……俺がもっと強ければ……』

一夏は己の実力不足の無さにどうしようもない苛立ちをした。

そして医務室に着き、ＩＳ学園の医療スタッフがタンカを持ってきて千夏を乗せ、集中治療室に入って行った。一夏と箒、そしてシャルは、治療室外で待たされた。

「……千夏…頼む……死なないでくれ……」

一夏はその場で膝をつき、祈った。そこへ……

「ガッティーノはもう中か？」

「あ、織斑先生……」

千冬が来た事に箒が気づいた。千冬は顔を厳しくさせて、治療室の方を向いた。そして一夏が千冬に目を向けるとすがりつくように血だらけの手で千冬の手を取った。

「千冬姉…千夏を……千夏を助けてくれ……！」

「……一夏」

箒は今まで見たこともない弱弱しくなった。一夏の姿を見て、胸が少しズキリと痛む、

『一夏のあんな姿……初めて見た……』

箒は一夏の必死様を見た箒はそのあと視線を千冬に向けた。

「……安心しろ一夏、千夏は必ず助ける……だから落ち着け」

「落ち着いていられねえよ！……千夏は…千夏は……――――――――――」

――――――俺の掛け替えの無い大切な人なんだ！！！

あの時一夏が言った言葉に箒は胸が凄く苦しくなっていく。
一夏のあの勢いは自分の命を賭ける覚悟ある覇気だった。
そこまで大事にされる千夏を箒は羨ましく思い、
そして、妬ましく思ってしまう自分自身がいる事を恥じいていた。
箒は事件で大けがをした千夏を見て動揺し、一夏は酷く焦り今にも泣きだしそうな顔をしていた。
千夏は大切な友人だ。その友人が怪我をして取り乱すのは当たり前ではあるが
一夏のその取り乱しようは尋常ではなかった。
箒はそれを見て、また胸が苦しくなったのだ。

「もし私が、怪我をしたら……一夏は……」

あそこまで心配してくれるだろうか……そう思い、
箒は千夏が一夏に一番大事にされている事にうすうす気づいていた。

そう思うと箒はまた胸が痛くなった。

「……止めよう、今は千夏が元気なった事を喜ばなければ……！」

箒は自分に言い聞かせ、食堂を後にした。

寮に戻るとまた一夏が千夏とラッキースケベに遭遇し、箒を怒らせていた。

本当に一夏がいるといい方の苦労が絶えないである。

ここは誰も知らない秘密の場所、そこに通ずる廊下を一人の少年が歩いていた。

その髪は白く、目は赤く、

その服装は不思議の国のアリスに出てくる白ウサギだ。

服はタキシードの様で腰には銀時計が輝いてる。

兎耳は……残念ながらついていない。ある人付けてくれと言われたが、丁重に断ったらしい。

コツッコツッコツッ

革靴を鳴らしながら少年は目的の部屋に歩く。

コツッコツッコツッ

少年は目的の部屋につくと、扉のドアがプシュッと開いた。
その部屋は機械の備品がちりばめられ、ケーブルが所狭しとのびている。
その鉄の根の上を機械仕掛けのリスが、少年の横を通り過ぎた。
少年は中に入り、奥に進むと人影がいる。
その人影は女性で服装は言ってみれば一人『不思議の国のアリス』のアリスだった。
その女性は電話で誰かと話しており、少年は電話が終わるまで待っていた。

「いやいや、邪魔だなんてとんでもない。私の時間はちーちゃんのためならいつでもどこでも二十四時間フルオープン、コンビニなんか目じゃないね。五十六十喜んで！」

そういって電話からブツッと電話が切れる音がして、
その女性は名残惜しそうにした後、ケロッとして電話を放り出した。

「やぁ、久しぶりに声が聞けて束さんは嬉しかったねぇ。ちーちゃん相変わらず素敵ングだよ。夕陽の向こうに行かないでね」

女性は腕を組んで、うふふと笑った。

「……楽しい話は終わったかい？」

「うゅ？」

その女性は後ろを振り向き、さっき以上にニコニコして喜んだ。

「おおー！！にっくん！帰ってたんだね。お帰り！」

女性は少年に抱きつき頬ずりをした。

「わぷっ！？た、束、何時もいうが行き成り抱きつくのは寄せって……」

少年は苦笑いをし、まんざらでもなさそうに受け入れた。

「気しない気にしな～い。束さんはにっくんが心配で夜も寝れなかったんだよ～？」

「何時もまともに寝てないだろ……」

「えへへ～そうだったね。ところで私が作ってあげた酩酊（アレサ）はどうだった？ＶＴシステムを作ってた研究所の破壊ついでに機動実験してたって聞いたけど？」

「ああ、完璧だよ。武装も防御も協力だし、さすがにタバネ粒子を使う兵器は強すぎて使わなかったけどな」

少年は女性改め、篠ノ之束に戦果報告をした。

「うんうん、さすが束さんの作ったＩＳだね。にっくんのご要望道理にできて束さんは嬉しいよ！」

そういってピョンピョン嬉しそうに跳ねる束は少年より年が上とは

思えないくらい子供っぽかった。

「ふう、で、さっきだれと話してたんだ？東」

「ぶ～にっくん、束さんの事は束姉と呼んで欲しいって言ったじゃないかな？」

束はプクーと頬を膨らませ、怒った顔の様にしている。

「あーそれは後でな、で？誰なんだ？」

「ん～ちーちゃんだよ？あーあとワクチンを届けてくれて助かっただって、私じゃあないんだけどね」

「千冬さんが…そうか……」

少年はワクチンが届いた事に安心した。だが束はまたプクーと頬を膨らませた。

何のワクチンをこの少年が千冬に届けたのかは束は知らない。

「ぶーなんで私は呼び捨てなのかな？」

「いや、跳び捨ての方が親しいと思うぞ？」

「う～んそうなのかなぁ？」

「ああ、その通りだ」

「そっかぁ。それならいいね！」

（一夏の姉から電話が来たか……そろそろ福音戦だな。あー千夏の水着姿みてぇ～！）

少年はそう考えていた。半分邪な発言だったが……
何故その事を知っているのかは束から聞いたらしい。

「ところで、さあ……」

「ん？なんだ？」

「…体の方は大丈夫？」

束は少し心配するような目をして少年に問いかけた。

「……ああ、あの酩酊（アレサ）の精神汚染か？それなら大丈夫だ。俺を誰だと思ってやがる？」

「……ふふっそうだったね。いっくんに続く、二人目の男性ＩＳ操縦者、最恐にして無敵の戦士！
全知全能の――――――」

束が最後のセリフを言おうとした時、着メロが鳴った。てか極道の女たちって……少し理解に苦しむ、
束は電光石火の如く電話を取り、誰かと話した。

「……あの喜びようは…妹か……はあ、束は妹の事になると嬉しそうだな」

少年は束の嬉しそうな声と笑顔を見て聞き、束が言おうとした。最後の言葉を少年は口にする。

「俺様は全知全能の――――――――」

――――――――――――――織神二夏様であり神だぜ？

第三十七話「緑色の悪魔」（後書き）

千夏「なあ、コジマ粒子ってかなり危ないんだろ？」

神「安心しろ手は打ってある」

千夏「ほんとかよ？（なんか心配だぜ……）

第三十八話「守りたい人」（前書き）

書けたー！感想お願いします！

第三十八話「守りたい人」

「悪いな、手伝わせちまって」

「気にするなよ。千夏はまだ病み上がりなんだからな」

放課後の廊下、赤い夕日が差し込む中を千夏と一夏が並んで歩いていた。

二人とも、その手には今日の学校行事、臨海学校について書かれたプリントを持っている。

「千夏には訓練とかいろいろと助けて貰っているからな。これぐらいお安い御用だ」

「……好きな男を助けたかったから…な…」

「え？」

「昔は幼馴染として見てたけど、今は…一夏の事を……好きだと思っているんだ」

そう言った千夏は頬をわずかに赤く染め、熱い視線で一夏を見つめた。

一夏も千夏を見つめ、二人は向き合い。その二人を夕日が照らす、

「一夏……」

「千夏…お前…」

廊下には二人だけ、二人は相手をお互いに愛おしそうに見つめ合う。
そこに言葉は不要だった。
夕日が照らす光景の中、二人は徐々に近ずいて千夏は目をつぶりながら何かを期待する様に待つ、
一夏も千夏の期待に応え、千夏の顔に自分の顔を近ずける、そして
……

「――――――んあ？」

ハッキリしない思考で今の状況を確認する。
場所は一年生寮の自室。時刻は早朝の六時半。

「……」

一夏は徐々に意識が覚醒しだし、状況を把握すると、

「夢かよ……」

あぁぁぁぁぁ……と情けない声を出して、悔しがっていた。

（あと……あともう少しだったのに！）

一夏は夢の内容を諦められず、忘れてなるものかと目を瞑り必死に思いだそうとすると、

「……」

カーと一夏は顔を赤くさせた。
夢の内容が自分にとって願ったものであり、一夏はとたんに恥ずかしくなる。

（うう……いいシチュエーションだったんだがなぁ……）

一夏はまた悔しそうにして夢の続きを見る為、二度寝した。

（次は最後まで行けたら……）

一夏は夢の続きを考え、また顔を赤くなった。

そんなこんなで寝ようとした一夏だったが……

ふに。

「あ？」

ふにふに。

『なんだこの感触？千夏の太ももの感触に近いが、小さい様な……？』

今も覚えてるんかい、この変態は……

原作よりもエロさが増した一夏だった。

一夏は確かめる為、また触ってみると、

ふにふにゅっ。

「ん……」

『あれ？声が聞こえたぞ……』

そう考えた瞬間、ピキーン！と一夏の脳裏を何かがよぎる。

お前はニュータイプか、あながち間違ってはいないが（声繋がり的な意味で）、
一夏はバサァッと布団をめくる。そこには――――

「……ら、ら、ラウラ!?」

ドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒが寝ていた。
一緒に寝ている事は問題だが、今はそこでは無い。
ラウラが全裸で寝ている事が一番問題だった。
服は付けておらず、眼帯とレッグバンドのみであった。
一夏とラウラはいろいろあったが、今は仲良くなり、
夫婦である。（ラウラが勝手に決めた事だが……）

「ん……なんだ……？朝か……？）

「ちょ、おま！隠せ！」

「おかしなことを言う。夫婦とは包み隠さずものだと聞いたぞ」

「いや、確かにそうかもしれんが……って違うわ！服着ろ！服！」

一夏は慌てて、何かラウラに着せるもんが無いか探したが、
ここは男部屋、着せるとしたらワイシャツかTシャツしかない。
そんなもん着せたら逆効果だ。男として、

「たく、お前に間違えた知識を教えたのは誰なんだ？」

「しかし、効果はてきめんのようだな」

「？」

「目は覚めただろう」

「当たりまえだ……」

一夏はハアッとため息をついた。

ラウラはトーナメント後からこうである。

時には風呂場、時にはＩＳスーツを着用している時、数えたらきりがない。

「しかし、朝食までにはまだ時間があるな」

ラウラはシーツを身にまとい、一度束ねた後ろ髪をふさぁっと散らす。

一夏はラウラの仕草に少し顔を赤くさせながらもこの状況を打破しようとしていた。

（それにしても、先日のトーナメントからこうだから困る。もしこんなところに千夏に見られたりでもしたら……）

千夏にこの状況を見られたりでもしたらと思うと一夏は顔を青くさせた。

（ヤバい！早くラウラに服を着せなければ……！）

一夏はラウラに服を着るようせかす。そこに……

ガチャッ

「え？」

部屋のドアが突然開いた。

「おーすっ一夏、普段はやらないが起こしに来てやった……ぞ……」

そこに千夏がいた。一夏はこの状況を見られ顔を真っ青にさせている。

千夏は目をパチクリさせて、一夏とラウラの状態を見ていた。

「えーと、こ、これって……？」

「ち、違うんだ！千夏！これは千夏が思っているような状況じゃなくてだな！？」

一夏は必至に誤解を解こうとしたが、

その時ラウラが少し不機嫌そうにしてトドメを刺した。

「何が違うのだ嫁よ、夫婦が一緒に寝るのは当然ではないか」

ピシッとラウラの発言で一夏だけが固まった。

千夏はあーなるほど、と噴いて一夏に向き直った。

その顔は笑顔で一夏は誤解が解けたのかと安堵したが……

「まあ、まだ二人とも学生だし、そう言うのはもう少し大人になってからした方がいいと思うぞ？」

ピシピシッとまた一夏は固まった。

「ふむ、そうか？」

「ああ、あまりがっつきすぎると飽きられちまうぞ？」

「なるほど、ほどほどがいいと言う事か……」

「そんな感じだ。じゃああたしは行くな？ラウラが一夏を起こしてくれてたみたいだし」

千夏はラウラにそう言って固まったままの一夏とラウラに二度寝するなよ？と言い、出て行った。

「……は、はは……終わった……千夏に誤解されちまった……」

ガクッと一夏は膝をつき、ラウラは不思議そうに一夏を見ていた。
その後、一夏はラウラに服を着せようとしたが、腕を掴まれ寝技をされ、その後訪れた箒との激闘に突入した。

「と、言う事があったわけだ」

「むむ、ラウラさん……油断ならない方ですわ！」

「ふーんそうなんだ……よし、殺そう」

落ち着け、セシリアと千夏はそう言い鈴をなだめた。
ここは朝の食堂、千夏は鈴とセシリアにあの時の状況を話していた。
一夏の命が危なそうだったので、ラウラが裸でいた事は言わなかった。、

「一夏さんはどうしてこう他女性との交流が多いんですの？」

「確かにそうね、何でかしら？」

「ただ単に女性を助けたり面倒事に首を突っ込んで好意を寄せられたりしたからじゃあねえか？」

お前らがその良い例だろ？、と千夏は言葉を付け加えながらカツサンドをほおばっていた。
三段重ねのカツサンドである事は言うまでもない。

「そ、そうね。確かに……」

「そ、そうですわね。はい……」

鈴とセシリアはその時の状況を思い出したのか、顔をほんのり赤くさせた。
良い顔するね～と千夏はニヤニヤ笑みを浮かべていた。

「千夏！ニヤニヤしない！」

「へいへい、わるかったよ」

千夏はそう言いながらまたカツサンドをほおばった。

「ところで千夏さん、一夏さんはまだ来られてない様に見られるのですが……」

「ん？ああ、たぶんまだ部屋だな。今頃箒に……」

千夏はその先の言葉を思い出したのか、千夏は誰かに向けて合唱した。

鈴もセシリアも察したのかまたかと思い、ため息をついた。

「さて、食い終わったし、あたしは行くな？」

「ええ、また教室で」

「あ、千夏、あたしも行くわ。」

「おう」

千夏はそう言い。席を立ち、また鈴も席を立った。

「じゃあ先言ってるな。セシリア」

「ええ、また」

千夏と鈴は食堂からでて教室に向かった。

その後、鈴は自分のクラスについたのでそこで別れた。

教室では一夏とシャルが遅刻しそうになった為、ＩＳを展開して遅刻を免れようとしたが、
千冬に見つかり怒られた。千夏は一夏とシャルにご愁傷様と目で言って先に席についていた。
二人には千冬から有り難い出席簿アタックと教室掃除を与えられ、涙ながらにそれを受けた。
今日も騒がしい一日である。

「で？また逃げて来たと？」

「す、すまん……千夏のところが一番安全なんだ（本当は、千夏の部屋に来たかっただけなんだけどな…）」

「だからって毎回逃げ込むなよ……」

「め、迷惑だったか？」

「迷惑……じゃあねえから落ち込むなよ」

「わりぃ」

「いいって、別に」

ここは千夏の寮の部屋、一夏はまたそこに避難していた。
千夏は一夏が座っているベットの隣に座り、話しを聞く、
服装は下にスポーツパンツを履いて上はワイシャツだけで、
風呂上がりなのか髪はしっとりと濡れていて、
顔は火照り妙に色っぽく、
一夏は千夏が隣に座っている事にドキドキしていた。

（うう……千夏の奴、凄い色っぽいな……）

一夏は内心ドギマギしていた。千夏はまた眼鏡と髪留めを外しており、
今は髪を下ろして、ＩＳ待機状態の眼鏡もまたワイシャツのエベレスト級の胸当たりでかけてある。

「一夏、朝の事なんだけど」

「朝？」

「そ、ラウラと寝てただろ？」

「な！？ち、違うんだ千夏！あれは誤解で――――――！？」

「あはは、知ってるよ。ラウラが勝手に潜り込んできたんだろ？」

「し、知ってるならからかわないでくれ……」

「ゴメンって、な？」

「……まあ、いいけど……」

千夏は一夏をからかった事を謝り、一夏は誤解が解けた事を少し安堵してため息をついた。

「一夏、ちょっと聞きたい事があるんだが……」

「ん？なんだ？」

千夏は急に一夏を真剣な目で見た。
一夏も察したのか、千夏の話を真剣に聞く、

「あの時の……トーナメントの事件で使ったあの雪片……緑色に輝いていたろ？」

「え？えーと…確かに光ってたな……何だったんだろ？」

「一夏にも分からないのか？」

「ああ、何だったんだ？あれ」

「う～ん、敵が使ってたやつと同じように見えたんだよなぁ……」

「おいおい止めてくれよ。あれってヤバいもんなんだろ？」

「確かにな……あの粒子兵器のせいで、アリーナが使用禁止になったしな」

あの粒子は有害性粒子だった為、その粒子が蔓延したアリーナは、現在、使用禁止になり、アリーナは厳重な警備とセキュリティーで守られていた。

警備員の人なんて防護服を付けてたくらいだ。

「だな、何でラウラのＩＳにあんなものが……」

「なあ、一夏白式の開発に関わった人ってしってるか？」

「え？どうしたんだ急に」

「ちょっとな……」

千夏は訳ありそうにそう言って顔を真剣にして黙ってしまった。

一夏は何かあると思ったが、千夏があれに関わってる訳が無いと信じ、

千夏に話した。

「えーと確か、装甲は倉持技研で内部の一部は外人技術者だって言ってた気がする」

「ふ～ん、外人がねえ……で、その外人技術者って誰なんだ？」

「名前は知らないけど、確かその技術者って天才アーキテクトだって言ってたようなないような……」

「天才、ね……」（なんだろう……何か気になるような……）

「知ってるのか？」

「……いや、知らないな」

「そうか」

「一夏……」

「ん？」

「あの雪片の緑色の粒子が出た時、どんな感じだった？」

千夏はあの時の一夏の状況を聞いた。

「あの時か？えーと確か……何というか、力がみなぎってくるような……少し気持ち悪くなった感じがしたな」

「気持ち悪くって……――――――！？」

千夏は顔を青くして、一夏に近ずき、両手で顔を押さえた。

「ち、千夏！？な、ななにを……！？」

「まさか！あたしと同じように体の中に粒子が……！？」

千夏は自分の体が普通で無い事を知っている。だからこうやって無事でいられるのだ。

だが一夏の体は普通なのであの粒子が体に入ったとなれば危険と思い、急いで一夏の体を調べていた。

「い、今は気持ち悪くないか？体がだるいとか……辛いとか無いか！？」

千夏は今にも泣きだしそうな顔をして、一夏の体を調べていた。

調べられている一夏はアタフタしていた。

「ち、千夏あの、大丈夫だって――――――」

「と、とりあえず服を脱がして見てみないと……！」

千夏は一夏の上着をはぎ取るように脱がせて、
粒子による人体汚染が無いか調べた。

「ま、ままま待ってくれ！千夏！ほんと！ほんとに大丈夫だ！」

「で、でも、一夏にもしもの事があったら……――――――――――」

千夏は顔を伏せて小刻みに震えていた。千夏はあの粒子の恐ろしさを身をもって味わった為、
あの粒子に関しては過敏に反応するのだ。
それがなおさら大事な幼馴染の体に入っていると思うと千夏は気が機で無かった。

「千夏……」

一夏は脱がされた上着を着直し、顔を伏せて震えている千夏の頭を撫でた。
その撫でている手に感じる優しさと心配しくれる幼馴染への感謝が千夏を落ち着かせた。

「一夏……？」

「ありがとな、千夏……心配してくれて」

「い、いいって幼馴染だし……」

千夏は照れくさそうに、そして撫でられている事が気持ちいいのか、耳はピコピコと動き、尻尾はブンブンと振られていた。

（ヤベ……すげえ可愛いんですけど！）

一夏は千夏の常時ケモミミモードを見て、そう思っていた。

顔良し、器量良し、性格良し、ついでに箒を超えるグラマーという事で一夏の千夏への評価は、

ウナギ登りだった。

「……んぅ…」フニャア

「おおう……（ぐほぁ！？い、色っぽ＆可愛過ぎる！！）」

千夏の目を細めての上目ずかいと気の抜けた。フニャッと顔に一夏は心を撃たれた。

いちゃ着き過ぎだバカップルもどき共、

「と、とにかく、俺は大丈夫だから、な？」

「うん、わかった……」

千夏は落ち着いて一夏に撫でられていたが、一夏の手が右のケモミミ触れた瞬間、

「――――――っ！？つぅ！！」

「え？」

千夏はビクンッと体を震わせ、一夏から少し離れた。
一夏は訳が分からず、何事かと千夏を見た。

「あぁぅ……」

「ち、千夏？どうしたんだ？」

千夏は右ケモミミを押さえ、震えていて一夏は少し考え、
あの事件を思い出し千夏が右ケモミミの怪我を失念していた事に気づいた。
一夏は顔を青くし、千夏に謝った。

「す、すまん！大丈夫か！？」

「だ、だい…ひょう…ぶ、へ、平気……」

千夏は触られただけでも相当痛かったらしく、上手く喋れないでいた。
少し慌てて一夏が心配して声をかけた。

「か、かなり痛そうに見えるんだが？」

「だ、大丈夫だって……ほんと……平気だから……」

千夏は涙ぐみ、まだケモミミを押さえていた。
一夏は千夏のそんな状態に罪悪感が湧いて、一夏は少しでも痛みが無くなるように
千夏の背中を優しく撫でて、落ち着かせた。

「……ゴメン」

「いいって、もう大丈夫だから……」

「でも……俺がもっと強ければ……千夏は…」

「一夏は強いよ……だから――――」

無茶はしないでと千夏は言おうとしたが、一夏の声で止められた。
一夏の千夏を見つめる瞳は力強く、そして優しさに満ち溢れていた。

「……ゴメン…俺、強くなるから」

「え？」

「もう負けねえから」

「一夏……」

「お前を傷つける様な連中、一人残らずぶっ飛ばせるくらい……強くなるから」

一夏は自分に言い聞かせるように千夏に語り、千夏も一夏の言葉を心に刻むように聞いた。

「一夏」

「ん？」

「その……ありがとう……」

千夏は自分を守ってくれる幼馴染に今自分が出来る微笑みを向けてお礼をいった。

「!?き、気にするな……お、俺がやりたいだけなんだから」（その顔は反側だろ……）

「それでも、だよ」

千夏は照れている一夏を見て笑っていた。
笑われている一夏も居心地は悪いようにそっぽを向いた。
その時、千夏は何かを思い出したように一夏に話した。

「あ、あとまだ聞きたい事があるんだ」

「ん？なんだ？」

「あの時ってどうやってあの粒子を発動させたんだ？色だけじゃなくて雪片自体も変ったように見えたけど？」

「あーたしか千夏の事を想ったら――――――――――!?」

一夏は顔を赤くしながら急に口を自分の手で塞いだ。
千夏はそれを不思議そうに首をかしげて、

「一夏、今なんて言った？」

「な、何でも無いんだ！忘れてくれ！」

「そ、そうか」

一夏は何故か安堵してふうっと息をついた。
千夏はまた不思議そうに一夏を見つめていたが、
千夏が放課後の事を思い出し、一夏に問いかけた。

「ところで一夏、放課後にシャルと週末の日曜に町に行くって？」

「え？そうだけど」

「そっか、確か水着を買いに行くんだっけ？（一夏って時々言葉が少ないから皆が誤解するんだよなぁ……）」

そう心で思いながら千夏は一夏の話を聞いていた。

「そうだ。千夏はまだなのか？」

「一夏がまだ選んでくれてねえだろ？」

「え？」

「忘れたのか？あの事件であたしが怪我をしたから一夏に町で水着を選んでもらうって」

「……ああ！確かに約束したな」

一夏は今思いだしたようにポンッと手を叩き、
千夏は呆れたのか、苦笑いをしながら一夏を見ていた。

「でも日曜はシャルと行くんだろ？ならあたしとは――――――」

「え？千夏も一緒に行けばいいじゃないか？」

「はあ？」

何言ってるんだ一夏は、と千夏はため息をついた。
シャルが一夏とのデート……とは一夏は思ってねえよな。
千夏が行けば二人っきりになれないのである。シャルが、

「おいおい、あたしが行ったら意味無いぞ……」

「え？なんでだ？」

「それは……あーなんて言うか……」

千夏は言葉に詰まった。
どう説明すればいいか千夏は迷う、

「そのーえっと……」

「？」

一夏は千夏を不思議そうに返事をするのを待つ。

「……まあ、いいか…いいぜ三人で行こう」

「ほんとか？」

「ああ、本当だ」

「よし！」

一夏は妙にテンション高めでガッツポーズをしていた。
休めるからってあそこまで嬉しいのか？、と千夏は的外れな事を考えてたが、

「じゃあ、日曜はレゾナンスの水着売り場でいいよな？」

「ああ、いいぜ。あそこなら全部揃ってるだろうしな」

「そうだな。じゃあ俺は行くな。そろそろ戻らねえと」

「わかった」

一夏はウキウキしながら立ちあがり、千夏の部屋から出ようとすると、

「一夏」

「ん？なんだ。千夏」

千夏と久しぶりに町に行く事で気分がよかった為か、
その声は若干嬉しそうだった。

「お休み……一夏」

「あ、ああ、お休み…千夏」

一夏は少し面食らったが、何とか返事をして部屋から出た。
部屋の外から鼻歌が聞こえた気がしたが、今千夏は別の事を考えていた。

「……ふう、シャルも強敵に恋したもんだ」

そういって千夏はベットに寝そべった。まだケモミミは痛むが、一夏が撫でてくれたので痛みはさっきより引いていた。千夏は一夏は優しいなぁと苦笑いしながら言った後、真剣な顔をして

「……臨海学校…大丈夫だろうか……」

千夏はその事だけが心配でしかたなかった。
今まで起きたイレギュラーに千夏は命を賭けて皆を守ってきた。
これからも守れるのか千夏には不安になってくる。

「福音……警戒した方がいいな……」

福音も何らかの原因で変わっているかもしれない。
千夏はそう思い一夏を守るべく早く体を直し、一夏との訓練に入らなければと意気込んでいた。

「……そろそろ寝よう……」

千夏は布団にくるまり寝る事にした。
まだこの先の敵に不安が残るが、体にあまり無理はさせられない。

（体を直さねえと福音との戦闘が出来ないからな……）

千夏は体を直す事に専念する事にして、眠りについた。

オマケ・「ミサイルパニック」

ここはアリーナの中、今一夏は、
千夏の体を慣れさせるため、訓練に付き合っていた。

「一夏、これ使って見るか？」

「ん？それって――――――」

「ああ、あたしが使っているＰＭミサイルだ」

千夏は後ろにアンロックユニットしているＰＭミサイルポッドを手で持ち、一夏に手渡した。

「これはインターフェースでも使えるが、緊急時の時に手動……つまり手で持って使えるんだ」

「へえ、便利だな」

「やってみるか？」

「ああ、頼む」

そういって千夏は一夏に武器を渡し、構え方とミサイルを撃つ心得を教えて貰った。そして、

「んじゃ、試しに撃ってみるか」

「お、おう、分かった」

一夏は千夏に支えられながら、ミサイルを撃つ体制に入った。
その時一夏は千夏に後ろから支えられている状態なので、
ある意味、千夏に抱きしめれている状況なのだ。

（あ～やっぱり千夏っていい匂いするなぁ……じゃなくて、訓練に集中しねえと――――――！」

「一夏、いいか？」

「ああ、何時でも！」

「おし！撃て！」

カチッと一夏が引き金を押し、小型のスコープで的に狙いを定めて発射した。

ドドドドッ！

勢いよくミサイルが四発連続で発射され、斜め横に勢いよく飛んでいき、的にぶち当たって爆発した。

「どうだ。感じは？」

「お～なんかこう……スカッ！とするな」

スカッドミサイルなだけに、

「そうか、一夏、ミサイルにいろいろあるんだぜ？たとえば拡散型とかな」

「拡散型？」

「目標近くに行くと、自動でミサイルから小型のミサイルが切り離されて拡散し、敵に大打撃を与える代物だ」

「なかなか強そうだな」

「まあな、クラスターに似た原理で結構有効なんだよ。これ」

千夏は一夏にミサイルの特性や対処法などを教えてた。

一夏も真剣に聞き、耳を傾けていた。

「それで「千夏ー！」ん？」

言葉を遮るようにそこに現れたのは……

「「双〇姉妹！」」

「あたしは双子アイドルか！」

「じゃあ、幼馴染繋がりでアメ「もういい！」――――ケチ」

鈴は反射的に突っ込みをした。

一夏も千夏は満足そうに頷き、鈴を褒めたたえている。

「いやー良い突っ込みだ。久しぶりに鈴と遊んだわ」

「遊ばれたの間違いよ！」

「まあまあ、落ち着け鈴」

「アンタらが突っ込ませたんでしょ！？」

「「そうとも言う」」

「それしか言わないわよ！」

鈴はギャアギャア言い、一夏達は鈴で遊んでいた。

そして数分、鈴が落ち着きを取り戻し、

「まったく……で？一夏達は訓練？」

「いや、千夏の体を慣れさせる為にちょっとな」

「……それならあたしも呼びなさいよ」

鈴は自分が呼ばれなかった事に少しご機嫌斜めの様子だった。

「ゴメンな鈴、次からはちゃんと呼ぶからさ、許してくれ」

「……まあ、千夏がそう言うなら……」

鈴は機嫌を取りなおし、千夏の体を慣れさせる為、訓練に加わった。

「ところで今、なんかすごい音がしたけど？」

「ミサイルカーニバルです」

「はあ？なにそれ」

「まあ、それは置いといて、一夏にミサイルを撃たせてみたんだ」

「一夏に？雪片しか使えないいんじゃ？」

「いいんじゃねえか？武器をいろいろ使えた方が便利だろ？」

「まあ、確かに……」

千夏と鈴は一夏の戦術の強化を話し合っていた。

その頃一夏は……

「もう一発撃ってみようかな……」

一夏はミサイルを撃つことが楽しかったらしく、また撃とうとしていた。

「えーと、千夏が言うにはあれを言ってからミサイルを撃つんだよな……」

一夏はそう拭きながらミサイルを撃つ体制に入った。そして……

「ハラショー！」

ドドドドッ！！！！！

ミサイルが連続で発射された。ミサイルはさっきの通りにミサイルが飛んで――――――――いかなった。

「へ？」

ミサイルはすべて、あらぬ方向へ飛び、その全ては何故か千夏達の方へ飛んで行った。

「！？不味い！！」

一夏はすぐさま千夏のところへ飛んだ。

「千夏！」

「ん？なんだ？」

「どうしたのよ一夏」

千夏達は猛スピードでこっちに来る一夏を不思議そうに見て、そして……

「千夏！すまん！」

「へ？わあ！？」

一夏は素早く千夏を抱き上げ、その場から逃げ、
鈴は一夏の行動に驚き、声を荒げた。

「ちょっと一夏！何してんのよ！？」

「鈴も逃げろ！」

「逃げろって何か「ヒュウゥゥゥゥん……」ら？」

鈴は後ろから聞こえる音に嫌な予感がし、後ろを振り向いたが時すでに遅し……

ドカァァァァァン！！！！

「にゃあああああああ！！？？」

鈴は爆発の衝撃で吹っ飛び、

「にゃ！」ドゴッ！

「ぷぎゃ！」ドゴンッ！

「へブッ！！」ズサーーーーーーッ！

何回かバウンドして滑ってから止まった。
一夏は千夏を下ろして、顔を真っ青にし鈴に駆け寄った。

「鈴！大丈夫か！？」

「平気か！？返事をしてくれ、鈴！」

一夏達は鈴の側に駆け寄ったが、鈴は動かず、ところどころプスプスと音がしていた。
二人は顔をまた青くして、

「「へんじがない。ただのしかばねのようだ」」

「生きてるわよ！」

がばっと起き上がって鈴は突っ込んだ。
驚くべき生命力である。

「ＩＳのシールドがあるんだから死ぬわけないでしょ！！」

こらこら地の分に突っ込まんでくれ、

「鈴！よかった。無事なんだな！？」

「……ええ、無事よ。頭がツインアフロに成りかけたけど……」

「わ、悪い鈴！また試し打ちをしようとしたらこうなって……」

一夏は鈴に謝ったが鈴はかなり怒っていた。

「一夏のアホ！あたし達が話してる途中でぶっ放す馬鹿が何処にいんのよ！！」

「う……すまん」

「ま、まあまあ落ち着けって鈴、一夏も謝ってるし、な？」

「な？じゃないわよ！危うく千夏姉が――――！？」

鈴は言いかけた言葉を飲み込み千夏は急に黙った鈴を不思議そうにして見ていた。

「鈴？今なんて行ったんだ？」

「な、何でも無い！何でもないから！」

「そ、そう……で、鈴は本当に大丈夫か？」

「ええ、平気よ。まったくアンタは千夏に怪我をさせる気？」

鈴は一夏を鋭く睨み、一夏は慌てて否定した。

「ち、ちげえよ！ほんとに悪かったって！……」

「ふん！どうだか」

「二人ともそこまでだ。鈴やあたしに怪我は無かったんだからもういいだろ？」

「あ、ああ」

「むう、……千夏がそういうのなら……」

鈴はまだ納得いかないのか、口をとがらせていた。

そんなこんなで千夏の体を慣れさせる訓練は終わり三人はアリーナと出て言った。

第三十八話「守りたい人」（後書き）

シャル「なんか僕って出番すくないような……」
作者「ご安心を、次は一夏とデートですので」
シャル「そっか♪じゃあ我慢するよ！」
作者「アザースッ！」（本当は三人だけどね……）

第三十九話「トリプルデート！」（前書き）

書けた……女の子の服は難しいとです……

第三十九話「トリプルデート！」

週末の日曜。天気は快晴、絶好のデート日和である。だが、

「良い天気だな。一夏」

「ああ、そうだな千夏、シャルもそう思うだろ？」

「……そうだね」

何故かシャルことシャルロット・デュノアが何故か千夏を見ながら仏頂面をして返事をした。

千夏は申し訳なさそうにして、シャルに小声で、

『……なんつうかその……ゴメン』

『いいってどうせ一夏に一緒に行こうって言われたんでしょ？』

『まあ、な……』

二人はお互いため息を吐いた。

「ん？どうかしたか？」

「いや、なんでもねえよ」

「なんでもないんだよ。一夏」

二人はそっけなく返事をしってそっぽを向いた。

「そ、そうか」

一夏は若干怯んだが千夏とのデート、基買い物が嬉しいのかすぐに切り替えた。
ちなみに三人の服装は、一夏はブラックのモノトーン系のポロシャツにジーンズという少しオシャレな服装だ。前に千夏が一夏に、一夏はカッコいいんだから良い服着ないと駄目だぞ？と言われ、千夏は一夏の服をチョイスし、買ってあげたのだ。千夏の元男の知識が役に立ったのである。
一夏は買ってもらった服を大事にし、千夏と出かける時しか着ない様心がけている。
ほんとに一途な一夏である。
そんでもってシャルは夏によく似合う半そでのホワイト・ブラウス。その下にはスカートと同じライトグレーのタンクトップを着ている。顔が笑顔であればもっとよかったんだが……
そしてわれらが女オリ主、千夏の服装は白のタック入りのシンプルなVネックカットソーとデニムのショートパンツだ。常時ケモミミモードの耳が時々ピコピコと動き、男女問わず視線が行く、分かる人に分かる良さだ。知らない人はググってくれ。
ちなみに服は千夏の母、千雨が選んだ服で千夏は男装を好んで何時も身に着けていた為、
これは駄目よと言われ、千夏の母が千夏に着せているのである。

「あ、千夏」

「ん？なんだ？」

「その服、似合ってるぞ」

「そ、そうか？」

千夏は頬を手で掻いて照れくそうに尻尾をブンブン振っている。
その顔は若干嬉しそうにはにかんでいる。

「ああ、凄く似合ってる」

「そ、そっか…でもあたし全然女らしくないから似合わないかと思ったんだが……」

「そんな事ねえよ。千夏は凄く……その…か、可愛いと思うぞ？」

「か、可愛いって…あたしが？」

「あ、ああ…凄くな」

「そ、そうか……」

「そ、そうだ……」

二人は少し顔を赤らめ、言われ行った事に恥ずかしかっていた。
何というか二人だけの空間が出来上がっている。
そしてその空間の外では……

「……」

シャルが凄く一夏を睨んでいた。

「い、一夏…その……あ、ありがとう……」

「い、いいって…本当の事を言っただけだから…」

「そ、そうか……」

「そ、そうだ……」

なんかこの空間が延々と続く気がする。

「……二人とも」

シャルは若干声に不機嫌を混ぜて声をかけた。

「え!?な、なんだシャル?」

「ど、どうしたんだ?シャル」

「二人だけの空間を作らないで欲しいんだけど?」

シャルは呆れているのか怒っているのかそれとも両方か……

「ご、ゴメン……」

「すまん……」

「もう……一夏、僕には何もないの?」

「え?何がだ?」

一夏は何かシャルに忘れた事があっただろうかと千夏に聞いた。

「千夏、俺シャルの事で何かあったっけ？」

『……たぶん、まだシャルの服装を褒めて無いんじゃねえのか？後小声で喋れ』

『何で小声？えーと褒めればいいのか？』

『……はあ…どうしてシャルを先に褒めない』

『え？何でシャルを先に？』

『いいから早くシャルをほ・め・ろ』

『お、おう』

一夏は少しどもりながらもシャルを褒める。

「シャル、その服に似合っているぞ？」

「なんで疑問形？」

「あ、いや、えーと……」

（このおバカは……）

千夏は一夏の鈍感さに呆れつつ、フォローする事にした。

「まあまあシャル、一夏のアレは今始まった事じゃあないんだからさ」

「うー……」

「すねんなって……」

はあ、と千夏はため息をつき、一夏に話す、

「一夏、シャルのご機嫌取らねえと買い物が出来んぞ？」

「あ、ああそうだな」

一夏はシャルに近ずき、

「シャル、駅前の専門店のパフェ奢るから機嫌を直してくれ」

「パフェだけ？」

「け、ケーキも付けよう。ドリンクも」

「ん、あと、はい」

と、シャルは行き成り右手を一夏に差し出した。

一夏は和歌が分からず困惑している。

「手、繋いでくれたらいいよ」

「ああ、なんだそんな事か。ほい」

一夏はシャルがまだ知らない町で迷わないように手を繋いでくれと思ったらしく、

なんの抵抗もなくシャルと手を繋いだ。
そして手を繋がれた本人は……

「……」

顔を赤くして黙り、視線も落ち着かなかった。

「どうしたんだ？シャル」

「ひゃあっ！？な、な、何でも無いよ！？」

「そ、そうか？」

「う、うん！平気！大丈夫！ノープログラムだよ！？」

「それをいうならノープロブレムだ」

千夏はシャルに突っ込んだ。

「とりあえず、さっさと行こうぜ？」

「そうだな」

「そ、そうだね」

一夏達は駅前のレゾナンスに歩きだそうとしたが、

「――――――ん？一夏？どうしたんだ？」

「え、えっと……」

一夏は手ぶらの左手に目をやっていた。
千夏は何だろうと考えていた。

「一夏？どうしたの？」

「ああ、いや、その……」

「ああもう！さっさと行くぞ？」

千夏は早く行きたかったのか強引に一夏の開いている左手に腕を通し、引っ張る。

「え！？あ、ち、千夏！？」

「早く行くぞ」

「わわわ！千夏、早いって！」

一夏の腕を組むようにして駅前に向かって歩く、その時一夏は千夏と腕を組む事を嬉しそうにしている。千夏は何故そんな嬉しそうにしている一夏を疑問に思っていたが、喜んでいるので良しとしていた。そんなこんなで三人は一夏を真ん中に仲良くくっつきながら歩いて行った。リア充はマジ爆ぜろ。

「……」

「……」

そんな三人を蔭ながら見つめる二つの影があった。

三人が青になった横断歩道を渡って人ごみに消えると、頃合いとばかりに茂みから姿を表すふたつの影、
一人は躍動的なツインテール、もう一人は優雅なブロンドヘアー。
つまり、鈴とセシリアであった。

「……あのさあ」

「……なんですの？」

「……あれ、手え握って無い？しかも片方は腕を組んでる」

「……握ってますし組んでますわね」

だれもが見たらそうであろう光景を目にして、セシリアは引きつった笑顔のまま持っていたペットボトルを握りしめた。グワシャッ！とペットボトルが音を立てて圧散した。

「そっか、やっぱりそっか。あたしの見間違いでもなく、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。――――――――いいなぁ……千夏姉……」

ズルッドゴッ！

セシリアはズッコケ、頭を電信柱にぶつけた。かなり痛そうだ。

「――――――――っ……り、鈴さん！？な、何を羨ましがってますの！？」

「え？だって一夏とあんなにくっついて――――――」

「普通ここは怒るとこでしょ！？」

「いや、だってねえ……」

鈴は千夏が一夏に全然気が無いと思っているので別段羨ましいだけで済んでいた。

「だ、だからってシャルロットさんはどうですの！？」

「……うん、そうね。――――――――――、よし、混ざろう」

ズルッドゴンッ！メキメキッ！

またセシリアはズッコケ、電信柱に頭をぶつけた。今度は電信柱にヒビが入る。どんだけ固いんだよセシリアの頭は……

「――――――――――っ……もういいですわ。今は二人を影から追いかけましてよ」

「そうね」

二人は一夏達を追いかけようとすると、

「ほう、面白そうだな。では私も混ぜるがいい」

「！？」

「あ、ラウラじゃん」

二人が振り返るとそこにはドイツ代表候補生にして専用機持ちのラ

ウラがいた。
鈴とラウラが普通に仲よさそうなのは千夏が二人と合わせ、仲たがいを解消させたからだ。
千夏が言うには同じ貧にゅ――――げふんっげふんっ、同じ妹属せ――――でもなくて、同じ専用機持ちとして仲良くやって貰いたいと思ったうえでの計らいだった。セシリアはまだ警戒しているが、

「な、なぜ貴方がここに！？」

「ラウラも買い物？」

「私は嫁がシャルロットと町に行くと聞いてな、私も混ざろうと思ってこう来たのだ」

「へぇ、じゃあいっしょに行く？」

「ああ、そうさせてもらおう」

「鈴さん！何故親しげに接してますの！？」

「え？だって千夏が仲良くしてって言うから……」

「うむ、苦楽を共にする仲間と友好を築かなければ戦場では共に生き延びられぬからな。と、千夏が言ってたからな」

正確には、普通に友達として接してと千夏は言ったのだが、ラウラは軍人、
考え方や言葉が軍事関係になってしまう。てか二人とも、千夏の言う事を素直に聞くって
なんだかお姉ちゃん子になってきている。ラウラも千夏にいろいろ

と助けて貰っているのか、
一夏と同じくらい仲が良い。

「だ、だからってわたくしはまだ貴方の事を――――！」

「あの事か？まあなんだ。許せ」

「ゆ、許せって……」

「まあ、いいじゃんセシリア」

「鈴さん！？貴方は悔しく無いのですか！？」

「何時までも根に持っても仕方ないでしょ？今は一夏達を追いかけるわよ！」

「うむ、そうだな。早く行動せねばターゲットを見失ってしまう。即時行動だ」

「だ、だからって鈴さん！ってもうあそこまで！？」

鈴とラウラは素早い身のこなしで人ごみを避けて一夏達を追いかける。ちっちゃいってことは便利だね！

「ま、待ってください！わたくしを置いていかないで！」

セシリアも再起動して鈴達を追っていった。
こうしておかしく愉快な追跡トリオが結成された。

「えーっと、水着売り場はここだな」

一夏達は駅前のショッピングモール、その二階にいる。
ここは昔よく一夏、弾、鈴、千夏がよく放課後に行っている場所なのだ。

「んじゃ、さっそく水着を選んでもらおうか？一夏」

「おう、任せろ」

「え？どういう事？」

シャルは一夏と千夏の会話に疑問を持った。

「ほら、前に怪我したら千夏の水着を選ぶって約束したろ？」

「……あ、確かにしたね」

「そう言う事だ。さっさと行こうぜ？一夏、ついでにシャルのも選んでやれよ」

「つ、ついでって……」

シャルは少し肩を落とした。

「そうだな。じゃあ先に二人の水着を選ぼう」

そう言って一夏は女性水着売り場に足を進めた。

「さて、着いたは良いが、どの水着が千夏に似合うんだ……」

一夏はきたはいいが、千夏に似合う水着が決められないでいた。

「どれでもいいだろ？」

「いや、ちゃんと決めねえと……」

「いや、なしてそこまで真剣に？」

「千夏は……ほら、お腹の傷が……さ」

「あ……」

一夏は千夏の傷跡を配慮してお腹を隠す水着を選んでいたのだ。

（一夏……考えてくれてたんだ……）

千夏は一夏の何気ない配慮に感謝しつつ、水着を選ぶ、

「これはどうだ？これならお腹の傷も隠せるぞ？」

千夏がとったのは青い水着、なんというかＩＳ学園のＩＳスーツに似た水着だ。

「確かに……もうちょいお腹を隠しつつ露出を上げられないかな……」

「え？なんだって？」

「あ、いや、なんでもない」

「？そうか」

「お、これなんか良いんじゃないか？」

一夏が選んだのは黒を基準に赤いラインが描かれたデザインで、細いボーダーのモノキニだった。
その水着は前はワンピース、後ろはビキニに見えている為お腹の傷は隠せるようになっている。

「え……こ、これ？」

千夏はちょっと恥ずかしそうにして一夏の選んだ水着を見る。

「ああ、千夏に似合うと思ったんだが？」

「えーと……」

千夏はまだ精神状まだ男が残っているため、抵抗があるらしい。

「駄目だったか？」

「うーん、でも一夏が選んだものだしなぁ……」

約束で一夏が選んだ水着を着ると言った為、
千夏は困っていた。

「別に無理しなくてもいいぞ？」

「……いや、着るよ。一夏が選んでくれたからな」

「そ、そうか……じゃあ帰着室に行こうぜ」

「ああ、シャルは決まったか？」

「うん、僕はこれにしようと思う」

シャルの選んだ水着はセパレートとワンピースの様な水着で、色は夏を意識した鮮やかなイエローだった。

「じゃあシャルも決まった決まった事だし、早く来てみようぜ」

三人は帰着室に移動した。

「僕達着替えるから」

「ああ、待ってればいいな？」

「一夏」

「ん？」

「覗くなよ？」

「な！？の、覗かねえよ！」

一夏をからかってから二人は帰着室に入って行った。

「……二人の水着姿ってどんなんだろ……」

一夏は二人の水着姿を思い浮かべて顔を赤くしていた。
そのころ千夏は……

（おー！シャ、シャルの生パイが目の前に――――！！）

……一夏も大変な女の恋したものである。
千夏は一緒にシャルと帰着室入っていて、一緒に水着に着替えている。

「どうかした？千夏」

「なんでもないぞー」（セシリアよりは小さいがこれはなかなか……！）

「？でもなんか上機嫌だね」

「そうかなー？」（おふぅ……かたちも中々……！）

「そうだよー」

「かもねー、一夏が選んでくれてるからかもなー」（いや待て……お尻もなかなか……！）

シャルの小山と谷間を見ながら着替えてシャルと喋る千夏、器用である。
千夏はシャルを基シャルの体を見ているとシャルが苦笑いしていた。

「あはは、千夏って少し変わってるね」

「そうか？」

「うん、千夏って時々男の子みたいな行動を取るからね」

「そ、それは……」

元男だからだなんて言えない！、と千夏は心で吠えた。

「や、やっぱり変か？」

千夏は水着に着替えながら千夏は言う。

「そんなことないよ。千夏は十分女の子らしいよ」

「そ、そうか」

喜んで良いのか、悲しんで良いのか、分からない千夏だった。

（この体になってから精神が女に引っ張られてる気がする……）

千夏は自分がこのまま女として生きるか、男の精神を保ったまま生きるか悩む、

「ん……じゃあ僕は着替え終わったから一夏に見せてくるね」

「え？お、おう分かった。あとついでに一夏も落としてこい」

「な！？な、ななにいってるの！！」

シャルは顔を赤くして怒った。

「冗談だよシャルも一夏の事好きなんだろ？」

「う、えーと……」

シャルは少し顔を赤くして頷く、

「ムフフフッ一夏もすみおけないねぇ」

千夏はニヤニヤしながらシャルを見る。

（……いや、セシリアよりも将来大きくなるか……）

いい加減にせい、

「むううぅ、もう！千夏はどうなのさ！？」

「全然」

「即答！？」

シャルは千夏の即答に驚いた。

「いや、だって一夏とはただの幼馴染だし」

（なんだろう……一夏がかわいそうに思ってくる……」

ここにいない一夏に何故かかわいそうに思えてくるシャルだった。

その頃帰着室の外では……

「ズ――――――――ン……」ガクッ

一夏は膝をついていた。その姿は無性に同情を誘うものだった。

「何故だろう……無性にもの凄く悲しくなる……」

二人の会話を聞いて無いのに一夏は千夏の言葉を感じ取り、悲しくなっていた。

「まあ、あたしの事はいいだろ。早く一夏に見せに行こうぜ？」

「う、うん、そうだね」

千夏とシャルは帰着室から出て、一夏に水着を見せに行った。

「一夏ーお待たせーって何やってるの？」

シャルは膝をつき、うなだれている一夏を不思議そうに見る。

「どうした？シャルって、一夏は何やってんだ？」

「えーと、僕に聞かれても……」

「……」ズーン

二人は一夏を立ち直らせ、水着の感想を聞く、

「で、一夏」

「僕たちの水着……どうかな？」

二人はほんのり顔を赤くして、一夏に聞いた。

シャルは一夏に見られているのが少し落ち着かないのか、視線が泳がせている。

千夏は恥ずかしそうに手をお腹らへんでモジモジさせていて、そのしぐさと水着姿が合わさって一夏は千夏がたまらなく可愛く見えていた。

「……」

「……一夏？」

「ハッ！な、なんだ？」

一夏は見惚れていた状態から我に帰り、再び一夏は二人の水着姿を

見る。

「……」

「……あの、い、一夏……」

「そ、そんなに見ないでくれ……恥ずかしいんだが……」

「え!?あ、わ、わるい!二人ともその……凄く似合ってて……」

一夏はかなりテンパリながらも二人の姿を褒めた。

「えへへ、似合ってるって、千夏」

「そうだな、一夏もシャルを見て見惚れてたしな」

千夏の言葉にシャルは顔を赤くして嬉しそうにはにかんでいた。

言っとくが一夏が見惚れてたのはお前だ。その時、一夏達の後ろから聞きなれた声が聞こえた。

「何だ、お前達も水着を買いに来たのか?」

「ん?その声は……」

一夏が後ろを振り向くと……

「山田先生に織斑先生!」

「はい!こんにちわガッティーノさん」

真耶が元気よく返事をした。

「先生達も水着を？」

「ああ、臨海学校で着る水着をな、それとわたし達は今は教師ではない。楽にしていいぞ？」

「ああ、分かったよ。千冬姉」

「分かりました。千冬さん」

一夏と千夏は千冬を名前で呼んだ。

「――――――あ、そうだ。一夏」

「ん？なんだ」

「そろそろさ……」チラッ

千夏は視線を物陰にチラッと移した

「――――ああ、そうだな……そろそろ出てきたらどうだ？」

ギクッという音が聞こえるように物陰が動いた。

「そ、そろそろ出てこようかと思ったのよ」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

という訳で、物陰から出てきたのは鈴とセシリアだった。

「どうして隠れてたんだ?鈴、いるなら一緒に水着を選んで欲しかったんだがな」

「うっ……ご、ごめんなさい……」

「あーいや、怒っている訳じゃあ無いんだ」

千夏は鈴に近付き、頭を撫でながら微笑んだ。

「いいって、その変わり鈴の水着を後で選ぼうか」

「え?あ…うん!」

鈴は嬉しそうにして頷いた。
千夏も鈴が笑顔になると嬉しくて同じように笑った。

「あ、あー私ちょっと買い忘れがあったので行きます。えーと、場所が分からないのでオルコットさん、デュノアさん、それとガッティーノさん達もついて来てください。」

(……なるほど、姉弟水入らずと言う訳か!)

千夏は真耶の考えが分かった様で鈴を連れていく、

「鈴、あたし小腹がすいたから一緒にパフェでも食いに行こうか」

「うん、わかった」

鈴は素直に頷き、千夏は着替え水着を買った後、鈴とセシリア、着

替えて水着を買ったシャルと真耶と共に水着売り場に織斑姉弟を置いて出た。

視点・「織斑一夏」

「……まったく、山田先生は余計な気を使う」

「え？」

「ふぅ……。言っても仕方がない、か。一夏」

「なんだ？千冬姉」

千冬姉が俺に話しかけながらハンガーから水着を持ってきた。

「一夏、お前もどっちの水着が良いと思う？」

千冬姉がそう言って持ってきたのは、スポーティーでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出している黒水着、もう片方はこれまた対極で、一切の無駄を省いたような機能重視の白

水着。
どちらも水着で、露出度はかなり高そうだ。

（これは……黒の方、かな）

千夏と同じ黒がいいと思ったが、ふと気がつく。
もしかするとこっちの黒水着だとおかしな男達が寄りついてくるんではないだろうか。
というか、百パーセント寄ってくるだろう。千夏も露出度はこれほどではないが、あの美貌とそれに……
む、胸もあるしな。うん、いまさらだが千夏の水着を見惚れてて考えずあの水着にした事を後悔する。
千夏は強いが優しいところが多すぎるから変な男に騙されたら大変だ。
臨海学校で海に行く時は千夏の側にいよう。
少なくとも、俺が千夏の側を離れなければ寄っては来ないだろう。

「どうした？一夏、似合わないか？」

「え？あ、いや、黒が良いと――――」

「ふむ、では黒の方にするか」

しまった。つい反射的に良い方をえらんでしまった。
千夏の事も心配だが姉である千冬姉も心配だ。

「いや、あの、千冬姉やっぱり白のほうが……」

「嘘を付け、思えば先に注視してたのは黒の方だぞ。昔から、お前は気に言った方を注意深く見るからな。すぐ分かる」

ウチの姉、ぱねぇ……

「まったく、弟が余計な心配をするな。大体、私がそのあたりにいる程度の男になびくような女に見えるか？」

「いや、見えないけど……。でも千冬姉、彼氏とか作らないのか？そういう話、一回も聞いた事ないしさ」

「手のかかる弟が自立したらな、考える」

「うっ…面目ない」

「だが」

千冬姉が俺の方を見て、ニヤリを笑って吹いた。

「それももうすぐ考えるかもしれんな」

「え？どういう事？」

千冬姉が千夏達が出て言った場所を見ながら吹いた。

「一夏にも想い人が出来たしな」

「ぶふぅっ！？」

俺は壮大に吹いた。てか、千冬姉！？

俺は焦りながらも反論した。

「な、なななな何言ってんだよ！？千冬姉！」

「フッ何を焦っている？一夏は千夏の事を好きなのだろう？」

「な、なななな……――――――！？」

俺は今、顔を真っ赤にするぐらい取り乱している。

うう……何故、千冬姉に……

「まだ自分の気持ちを伝えて無いのか？」

「そ、そんな簡単にいえねえよ！」

「なに？まったく、弟ながら情けない」

「うっ！」

「で？いつ言うかは決まっているのか？」

「……臨海学校で言おうかと思ってる」

「ほう、そうか」

千冬姉はやっとか、と安心したように言う。

「それで、臨海学校の何時頃に言うんだ？」

「えっと……最終日に言おうかと……」

「なるほど……そうだ。旅館の夜の海岸に千夏を連れて言ってはど

うだ？」

「海岸？」

「ああ、あそこなら雰囲気も良いだろう。それと夜の外出も許可しよう」

「え？あの、千冬姉？なんでそこまで？」

「なに……千夏もそろそろ重荷を背負いあう事を覚えて貰わんとな」

千冬姉が意味ありげな言葉を言った。

「千冬姉、千夏が何かを背負っているのか？」

幼馴染の俺にも言って無い。何か言えない事を背負ってるって言うのか、千夏は……

「そうだな……あいつの……お前を守る強固な決意は並大抵ではない……下手したら一夏を守る為に自分の命を差し出す覚悟だろうな」

千冬姉の言葉に俺は驚愕した。

千夏が俺を守るのに命を差し出す？なんで俺なんかの為に千夏は命をかける？

いや、そんなことよりも俺の為なんかで千夏の命を危険にさらす訳にはいかない！男が女に守られるなんてかっこ悪い事は絶対にしない。何より俺は、千夏を守るって約束したんだ！

「……千冬姉」

「なんだ？」

「俺、強くなりたい」

「そうか……」

「強くなって……千夏を守りたい！」

「なれるさ。何せ、私の弟だからな」

千冬姉は嬉しそうに俺に微笑みを向けた。

俺はまた強い決意を新たにして、前を向く、

俺の初恋で、愛した人を守る為に……

オマケ・「勝負水着」

あたしはお手洗いといって皆から離れている。それは何故か……

「ムフフフ……一夏と千冬さんの話は恋愛物が多いからね～」

といことである。

「さーて、何を話しているのやら……お？」

あたしの前に小柄な少女がいた。ラウラだ！

「おーい、ラウラー」

「む？千夏か…どうした？」

「うんにゃ、なんでも、ラウラがいたから話しかけた」

「そうか」

「そうだ、ところでラウラも水着を買いに？」

「いや、私はＩＳ学園の水着を着ていこうと思う」

「え？なんで？」

「私は水着はどれがいいとかわからん。だからこのままで――――」

ラウラは淡々としゃべり、あたしは少し考えてラウラに言った

「だめだ」

「ん？」

「だめだぜ？ラウラ、水着は可愛いのを着なければいけないんだぞ

？」

「いや、しかし――――――」

「それに！」

「そ、それに？」

ラウラはあたしの大声に驚いたが、立て直して聞いた。

「一夏も水着を買う！つまりは！必然的にラウラの水着を見ることになる！」

「な！？」

ラウラは驚愕した。

自分の水着姿を見られるんだ。見られるなら良いのを着たいしな。

「ラウラは一夏の事を好きなんだろ？」

「う、うむ」

おおう赤くなってモジモジしてる……食べちゃダメか？

「ならば可愛い水着を着て一夏の高感度上げねばならぬ！」

「な、なるほど！」

ラウラはあたしの力説を関心するようにして聞いていた。

「だ、だが、私は千夏見たいにその……」

ラウラは顔を伏せて黙りこんでしまった。

ムフフフッ……ラウラよ。大きいもの（オッパイ）がすべてではないのだぞ？

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！！」

「は、はい！？」

あたしは声に覇気を乗せてラウラの名を呼ぶ、

何故かラウラは直立不動になっていたが、今は気にしない。

「ラウラ……この世の中には大きいだけが良いとはかぎらないぜ？」

「と、いいますと？」

「すなわち！」

「すなわち？」

「貧乳はステータスだ！」

ドドーンッと背後に音がした気がするように言ったあたしの言葉にラウラはまた驚いた。

「す、ステータス……」

「そうだ！ラウラには貧乳によるステータスがある！」

「な、なるほど！」

「可愛い水着を着て、一夏の前に現れれば効果はばつぐんだ！」

「ふむ……実に興味深い……！」

ラウラはあたしの話に
興味津津だった。あともう一押し！

「だからラウラの部隊の人と話してラウラに合う水着を選んでくれ！」

「はっ！了解しました！」

ラウラは何故か敬礼をし、あたしも場の雰囲気に流されて敬礼し返した。

「じゃあ、ラウラあたしは戻るからまたね」

「はっ！お気をつけて！」

あたしはラウラに言う事を言って別れた。
そしてあたしは……

「計画通り」ニヤリッ

あたしはニヤッと笑い次の標的のところへ向かう。

（まってろ鈴！あたしがとびっきりエロ可愛い水着を選んでやるぜ！）

あたしは心の中で高笑いをした後、皆のところに戻った。

第三十九話「トリプルデート！」（後書き）

感想まってまーす

第四十話「旅行の途中で」（前書き）

千夏「なんかいろいろ出したけど大丈夫か？」
作者「た、多分大丈夫です。はい……」
千夏「なら……いいんだけどな」

第四十話「旅行の途中で」

「ふぃーやっとパーキングに着いた」

千夏はストレッチをして、からだをほぐす。

「ん～良い天気だ」

千夏は快晴の空を見て無性に飛びたくなる。

「ステイシスにもこの空で飛ばしてやりたいなぁ……」

千夏がそう吹いて、右ケモミミについてる赤いリボンを触った。
そのリボンを壊れ物の様に触り、嬉しそうに笑う。

「一夏も良いのを買ってくれたし、気分が良いや……」

千夏はまたリボンを触り、千夏が右のケモミミに付いているリボンは一夏がレゾナンスで買った物だった。一夏は右耳の保護と傷跡を隠すために千夏に送った物で、千夏は一夏が送ってくれたプレゼントと配慮に感謝した。一夏は礼を言われた時、顔を赤くして照れていたが……

「さーて、一夏達と合流して――――――」

「ねえ君」

「はい？」

千夏は後ろから声をかけれて振りむくと、二人の男がいた。
その二人はアクセサリーや派手な色をした服を来ている。
良くに言うチンピラだ。

「そのケモミミは趣味かな?可愛いね。俺達と遊ばない?ここのパーキングにいい店があるんだ」

「そうそう、損はさせないよ?」

(……あー夏にはこういう奴が大量発生するんだよなー)

千夏はチンピラ達を蚊の様にウザッたらしく見た。
前にもこういう事があり、前は弾や一夏、鈴がその誘ってきた輩をボッコボコにしていた。
何故か一夏は怒涛の百裂拳を繰り出していた事を千夏は知らない。

「いいっす。あたし連れがいるんで」

「そんなこと言わずにさ~」

「あーもー、止めてください」

千夏は嫌そうにしたが、男は脈ありと勘違いして肩を掴んできた。
行き成り掴まれ、千夏はビックリする。

「な、ほんとに嫌ですから!」

「まあまあ、そう言わず~」

「俺達と遊ぼうぜ」

もう一人の男が千夏の左手を掴み、無理やり連れて行こうとする。
千夏はＩＳ学園の生徒であり、代表候補生である。
下手に大事を起こす訳には行けないので、あまり大きく出れないでいた。。

「ちょ！？は、離して！（あー！もう！こうなりゃ――――！）」

千夏は右手で腰に隠しているマテバに手を伸ばして男達を撃退しようとすると……

「――――――おい……」

「あ？」

「ん？誰だお前？」

「あ、一夏……！」

後ろから声をかけて来たのは一夏だった。
千夏は助けが来たとばかりに笑顔になった。

「千夏を離せ……！」

「な、なんだよお前……」

「この子の連れかよ？」

「そうだ」

一夏は千冬さん似の鋭い目をさせて男達を睨む、

「っ――――――な、何なんだよ。コイツ……」

「何ビビってんだよ。たかが子供だろ」

チンピラ達は相手が子供だと分かると調子を取り戻しドスの聞いた声で一夏に言う。

「おい、ガキんちょ、俺たちはこの子に様があるんだ帰って寝てな」

「そうそう、俺達でお前の連れを楽しませてやるよ」

そう言ってチンピラの一人が千夏の耳を触って来た。

「!?さ、触るな!」

「千夏!」

「へへ、可愛い耳だな」

男は右のケモミミを触り、男の手が千夏の傷跡に触れた。

「!?いっぅ――――――!!」

「!お前ら……!!」

一夏が男達から千夏を助け出そうとすると……

「まったく、お前は何時も熱くなると手が出るな?」

「まあ、一夏はそう言う熱いところが良いんですけど」

「あ？なん――――い、いでででで！！？？？」

「お、おいどうし「はっ！」あべしっ！？」

男達の後ろから一人は男の腕を掴んで捻じ曲げて千夏を救い出した。
もう片方は中国拳法に似た格闘戦を繰り出し、男を吹き飛ばした。

「鈴に……――――――」

「お、織斑先生……？」

「おう、大丈夫か？ガッティーノ、織斑」

「千夏を助けるのはアンタだけの役目じゃないのよ」

そこにいたのは鈴と千冬だった。

「な、なんだお前ら！？」

「そ、そうだ！なんな「黙れ……」ヒ、ヒィィィ！？」

千冬の圧倒的な覇気にチンピラ達は縮みこむ、

「ちょうどいい。教師になってからあまり体を動かしていなくてな、相手をしてやろう。どうだ？嬉しいか？」

「千夏姉の代わりでよければ少し付き合ってあげてもいいわよ？お

じさん達……」

声とは裏腹に二人の顔はニタァと笑っていた。

「「い、いえ！結構です！！」」

男達はそう言って逃げようとしたが……

ガシッ！×2

「逃がすと――――――」

「思っているのか？」

「「ヒ、ヒィィィィィッ！！？？」」

男二人は鈴と千冬の怒りのオーラに怯えたままパーキング裏に連れて行かれた。

「……え、えーと……」

「た、助かったでいいのか？」

一夏はあのチンピラに生死が気になった。

（千冬さん……カッコいい！！）

千夏は千冬を尊敬し、

（千冬姉が逝らなくとも俺が……！）

一夏は自分で逝れなかったことに不服があるようだった。

「……まあ、いいか、千夏、大丈夫か？」

「平気だ。まだ少し耳は痛むけど……」

千夏はケモミミをさすりながら応えた。

「……やっぱり俺が奴らを……！」

一夏は握り拳をして千冬達の後を追おうとすると、

ギュッ

「え？」

「一夏、落ち着け」

千夏が一夏の右手を握っていた。

「千夏？」

「あたしは大丈夫だからもういいぞ？」

「だが――――――！」

一夏は声を発しようとすると千夏が右手で一夏の頭を撫でた。

「――――って、千夏？」

「ありがとうな、あたしの為に怒ってくれて……」

千夏は一夏に微笑み、また頭を撫でた。

撫でられている一夏はだんだん怒りが収まって行く、

「……わりぃ、少し熱くなってた」

「いいって、一夏はあたしの為にやってくれた事だし」

「千夏……」

一夏は千夏の優しさに癒され、徐々に気持ちよくなっていった。

「ん、じゃあ時間が勿体無いし、少しパーキングの屋台を身に行こうぜ？」

「そうだな。じゃあ行くか」

「おう」

一夏と千夏は歩き出した……手を繋いだままで、

「一夏、バスに乗り続けたから少し疲れたか？」

「だな、座りっぱなしだったから尻が痛くなった」

「アハハハ、だろうな」

説明が遅くなったが、千夏達は臨海学校へ行くため、高速道路のパーキングにいる。
そこでバスを止めて一五分の休憩を入れているところだ。
一夏と千夏は今パーキングでやっている屋台にいる。

「お、このステーキ串うまそうだな」

「鈴達に買っていってやろうぜ？」

「そうだな。じゃあ俺が――――――」

「ワリカン、だろ？」

「え？いや、いいって、俺が出すよ」

「あたしも食うんだから一緒に払うぞ」

「だが……」

一夏は男を見せたいらしく、自分が払うと粘る。
千夏はそれを嬉しく思うがやはり一夏だけに払わせるのは酷だった。

「一夏、あたしも払いたいんだ。いいだろ？」

「……ふう、わかったよ。じゃあいっしょに払うか」

「おう、素直でよろしい」

千夏は一夏の頭を撫でた。
一夏は気持ち良さそうに目を閉じて撫でられていた。

「……千夏」

「ん？なんだ。一夏」

二人の仲はいい雰囲気になっていくと……

「……あんちゃん達」

「「え？」」

「仲が良いのは良い事だが露店の前でするのは勘弁してくれねえか？」

と、ステーキ串を売っている店員に注意された。

「あ、えと、すみません……」

「サーセンっす」

「はあ、買ったら早く行ってくれ……」

そう言われ、二人は代金を半分子にだして買った。
まったく近頃のバカップルは、と言いながら店員は次のステーキ串を作る為、材料を取りに行って店の奥に消えた。その声が一夏に聞こえたのか、顔を赤くする。

「……まあ、買った事だし早くバスに戻ろうぜ？」

「そ、そうだな、戻るとするか」

そう言って二人は旅行バスに戻った。

「あ、鈴！」

「ん？あ、千夏」

鈴がバスに帰る途中にいた。

「ちょうどよかった。はい鈴」

「え？これって……」

「ステーキ串だ。美味いぞ？」

「あ、ありがとう」

鈴はおずおずと取ろうとすると、

「ん？鈴、手が赤いよ？」

「え？ああ、これ？汚物を消毒しただけよ」

「そ、そうか……と、忘れてた」

千夏はポケットからハンカチを取り出して鈴の手を拭いた。

「え？ち、千夏？」

「その手じゃ食えないだろ?だから拭いてんの」

「そ、そう」

鈴は少し顔を赤くさせていた。千夏は鈴の手を拭き終わると串を差し出す、

「ほら、持ってけ、服にたらさない様にな?」

「わ、わかってるわよ。子供じゃないんだから」

「はいはい」

「むうぅ……」

鈴は少しプクーと頬を膨らませ、千夏を見る、

「そろそろ戻るか、もうすぐ目的地に着くだろうし」

「だな、鈴、また旅館で」

「うん、千夏も一夏も旅館で」

そう言って一夏達は自分の班のバスに戻って行った。

「……ありがとう……千夏姉……」

鈴はそう言い、ステーキ串を食べながら自分のバスに戻っていった。

「諸君、忘れ物は無いか？戻ってきてない生徒はいないか？」

「「「「「いませーん！」」」」」

「よし、では出発する」

千冬がそう言うと一夏達を乗せたバスは走り始めた。

「パーキングじゃあ大変だったな」

「ああ、そうだな」

千夏の隣の席に座っている一夏はそう言い、ステーキ串を食べている。

「まあ、千夏が無事でよかった」

「心配かけてゴメンな？一夏」

「いいって、千夏が無事ならそれでいいさ」

千夏は嬉しそうに笑い、一夏も釣られて笑顔になる。

「ねえ、千夏」

「ん？なんだシャル」

シャルが席を乗り出してあたし達の席に来た。

「パーキングで何かあったの？」

「ん？ああ、ちょっとな」

「千夏がチンピラにからまれたんだよ」

「え！？大丈夫だったの？」

「ああ、平気だ。鈴と織斑先生が助けてくれたからな」

「そうなんだ。よかった」

「心配かけたな」

「気にしないで、千夏が無事ならそれに越したことはないよ」

「ああ、ありがと」

「ふふっどういたしまして」

シャルは安心して、席に戻って行った。

千夏はシャルが心配してくれた事を嬉しそうにしてニコニコしている。

と、千夏が何かを思い出したようにポケットからある物を取りだす、

「……注文してみようかな？」

千夏が見ているのは名刺だった。
その名刺を何処で手に入れたかというと……

回想中・駅前のショッピングモール「レゾナンス」

「ふ～ラウラにいい事教えたから気分がいいぞー」

千夏はウキウキしながら摩耶達のいるところに戻ろうと歩いている。

「鈴の水着を選んで、パフェ食って……」

千夏はいろいろ考えながら歩いていると、

ドンッ

「おわ!?」

「あら?」

千夏は誰かとぶつかってしまった。
すぐに謝ろうと千夏は声を発した。

「す、すいません」

「いいえ、大丈夫よ」

千夏とぶつかったのは女性だった。
その女性は美しい金髪をなびかせる年上で、大人の色気を溢れんばかりに放っている。

(な、なんという美人だ……!)

歳は二十代後半だろうか。その身に千冬に似た黒のサマースーツを来ていて、シャープな造形のサングラスをかけている。そしてその体つきはボンキュボンだった。

(こりゃあ、男女問わず目がいく美人だな……)

千夏の乳レーダーもマヒするほどの美人だった。

「そっちは大丈夫かしら？」

「へ！？あ、はい！大丈夫です！」

「そう、よかったわ」

女性は微笑みを向けた。千夏はその笑顔を向けられて照れていた。

「あ、えと……あうぅぅ……」

千夏は顔を赤くして俯いてしまった。

「――――――あなたってもしかしてＩＳ操縦者？」

「え？あ、はいそうですけど？」

「やっぱり！貴方の体、よく鍛えられててもしかしたらと思ってたのよ」

「はあ……」

千夏は少し呆けていたが再起動した。

「あの、お名前がまだ……」

「あら、忘れてたわ、ごめんなさい」

女性はそう言って、名刺を差し出した。

「私はこういう者なの」

千夏は差し出された名刺を貰い、見てみると……

「レイレナード社、社長……スコール・ミューゼル……」

千夏は名刺のに書かれた名前を読んだ。

千夏が会ったそのスコールという女性から興味があるのなら私の会社のＩＳスーツを注文してみてと言われた。

（それにしても……）

千夏は綺麗な人だったと――――――

（いい乳だ……）

訂正、胸しかあまりみてなかったようだ。

「――――――？千夏、その紙はなんだ？」

一夏は千夏が持っていた名刺を見つけて質問した。

「ん？ああ、何でも無いぞ」

そういって、千夏は名刺をポケットにしまう。

「……そろそろ着くころじゃあないか？」

「ああ、そろそろだな」

千夏達のバスがトンネルを抜けると、

「海っ！見えたぁっ！」

クラスメイトの誰だかそう言った。

トンネルから抜けると海が見え、太陽が海を照らし、さんさんと輝いていた。

「……今度も……一夏を守れるかな……」

千夏は楽しいはずの臨海学校をあまり楽しめず、この先の激戦に身を震わせていた。

そんな厳しい顔をしていると、

「千夏、具合がわるいのか？」

「え？」

「顔がこわばってるぞ？」

どうやら一夏は千夏の顔がこわばっているのを気分が悪いと思ったらしい。

千夏は一夏に心配無いと言い、礼をいった。

「そうか、でも無理はするなよ？怪我が治ったからって無茶していい訳じゃあないからな」

「分かってるよ。大丈夫だ」

「なら……いいんだが」

一夏は心配そうにしていたが、千夏が笑顔を向け、一夏は顔を赤くしてそっぽをむいた。

（この件を考えるのはよそう。今だけは一夏達と楽しまなくては」

千夏は考えるのをやめ、これから一夏達と海でなにで遊ぶか考える事にした。

この先、千夏達を待ち受ける報復者がいる事を知らずに……

第四十話「旅行の途中で」（後書き）

一夏「千冬姉、手に赤い物が付いてる。はい、ハンカチ」
千冬「ん？ああ、すまんな。一夏」
一夏「千冬姉、もっと綺麗に逝らないと」
千冬「ふむ、そうだな」
千夏（……何故だろう。二人の会話が怖い……！）

第四十一話「カオス襲来」（前書き）

束「いや～やっと出てこれたね！」
二夏「ああ、そうだな。やっと千夏に会えるよ」
束「箒ちゃんも元気にすくすく大山が育ってくれてたし」
二夏「束、セクハラ発言だぞ？」
束「女の子同士だからダイジョーブイ！」
二夏「……あっそ」

第四十一話「カオス襲来」

今あたし達は旅館に着き、割り当てられた部屋にいる。いるのだが……

「あの、織斑先生？」

「なんだ？ガッティーノ」

「何故あたしと一夏が教員室である織斑先生の部屋なんですか？」

そう、何故か一緒の部屋なのである。
あたしは千冬さんに聞いた。

「確かにそうだな（千冬姉、ナイス！！）」

「そうだな。織斑の場合は他の女子達が就寝時間を無視して押しかけてくるだろうからな」

「なるほど」

「そ、それが理由ですか……」

「ああ、それでガッティーノだが……」

「あたしはどんな理由ですか？」

千冬さんは少し言いにくそうにしながらも口を開いた。

「……腹の傷を見せたくはないだろ」

「あ……そうだったんですか」

千冬さんは、あたしの事を考えて一緒の部屋にしてくれたんだとわかった。

「えっと、あの、ありがとうございます」

「気にするな」

千冬さんはフッと笑った。

「織斑、私はほかの先生との連絡や確認がいろいろとあるから、部屋の決まりや入浴時間はガッティーノから聞け」

「分かりました」

「謹んで、役目を果たします」

「ああ、頼むぞ？」

「はい！」

あたしは千冬さんに元気よく返事をする。

「あ、そう言えば、織斑先生は何時ごろ泳ぎますか？」

「職務が終わってからだ。なに、すぐ終わるから安心しろ。どこかの弟が選んでくれた水着を着ない訳にはいかんだろ」

千冬さんは少し照れくさそうに喋る。
あたし達が離しているとと、部屋の外から声が聞こえた。
「織斑先生、ちょっとよろしいですか？」
部屋の廊下から聞こえたのは山田先生の声だった。
「ええ、どうぞ」
千冬さんの返事を聞いて山田先生がドアを開ける。ちょうど入口から直線上に立っていた一夏を目があった
「わあ、織斑くん！」
「いや、そんなに驚かなくても……」
どうやら書類に目を通していたらしく、一夏に気づかなかった見たいだ。
「ご、ごめんなさい。ついつい忘れてしまいました。織斑くんとガッティーノさんは織斑先生のお部屋でしたね」
「山田先生。確かこれはあなたが提案した事だったはずだが？」
「は、はいぃぃっ。そうです、はい。ごめんなさい！」
千冬さんのジロリとした視線に受けた山田先生は縮こまる。
「さて織斑、ガッティーノ、私達はこれから仕事だ。何処へでも遊びに行ってこい」

「はい。それじゃあさっそく海にでも」

「羽目を外しすぎないようにな」

「「はーい」」

あたしと一夏は千冬さんの注意に返事をして、部屋を出る。

「一夏、忘れ物は無いな？」

「ああ、ちゃんとリュックサックに入っているぜ」

あたしは一夏に忘れ物が無いか確認し、海へ向かう。

「「さあ、いざ行かん。海へ！」」

「……」

「……」

「……何…あれ？」

あたし達は更衣室に向かう為、別館に向かう途中箒に出くわし、一緒に行く事になったのだが、
何故か箒はあたしを見て少し睨んでいたが、何かしたか？あたし……
その睨みが数秒続き、一夏がしびれを切らして
一夏が一緒に行くか？と言ってその場はとりあえず一緒に行く事になったが、

「……引っこ抜いてくださいって書いてあるけど……」

「……なあ、箒……これって」

「知らん。私に聞くな。関係無い」

そこには地面に刺さったうさ耳があった。このうさ耳は絶っ対、篠ノ之博士だな……
ご丁寧に看板まで刺さってるよ。
てか、ずいぶん嫌うな、箒……仲良くしないと接着剤でリンスだぞ？

「……千夏」

「なんだ？」

「固結びは止めろよ？」

何故、読まれた……

「惜しい、接着剤でリンスだ」

「もっと酷くなってるぞ！？」

「じゃあ、カオスヘアにする方向で……」

「大却下だ！」

「銀髪パーマで」

「わたしを甘党侍にする気か！」

「逆刃刀を持たせて」

「不殺はいいが、ござるはやらないぞ！」

「濡れる！」

「髪ともう関係なく無いか！？」

そんな事をしていると一夏が地面に生えているうさ耳を握りながら箒に抜いていいか聞いた。

「おーい、箒、抜くぞ？」

「っ――――――私には関係ない。好きにしろ」

そう言って箒はすたすたと歩いて行ってしまった。

「やっぱり仲は悪いか……」

「一夏、このうさ耳って……」

「あーまあ、引っこ抜けば分かる事だ」

そう言って一夏はうさ耳を握り、思いっきり引っ張ると、

「のわっ！？」

「ちょ！？ま！ぶっ！！」

一夏が思いっきり引っ張っぱって体勢を崩し、あたしを押し倒すかたちで倒れた。

「いっつぅ……一夏、いてえよ……」

あたしは一夏に圧し掛かれた状況で文句をいう。

「わ、わるい！大丈夫か？」

「…何とか」

そう言って、一夏は立ちあがろうとすると、

「――――――何してますの？」

なんか怒りを滲ませた声が上から聞こえて、あたしと一夏はその声の方へ顔を向けると……

「せ、セシリア……」

「セシリアか、今このうさ耳を引っこ抜こうとしていたんだけど―

――お」

あたしと一夏は倒れたままなので、必然的にセシリアをみやげるかたちなる。つまり……

「レースがついた白か……」

と、あたしは感想を言う。いい趣味をしている。

「!?、い、一夏さん!」

セシリアは驚いたようにして、ばばっとスカートを押さえて後ずさる。

その顔は赤く染まり、怒っているようで恥ずかしがっているように見える。

いや、両方か……

「す、すまん。その、だな。うさ耳が生えていて、それで……」

「は、はい?」

セシリアは怒るのを忘れて素っ頓狂な声を上げた。

てか、一夏、そろそろ退いてくれ

「いや、束さんが――――」

キィィィン……

「んあ?一夏、なんか空から何かが……」

「え？空からって……」

一夏とあたしは上を見ると何かが光、こっちに高速で落ちてくる物体が近ずいて来て……

「――――！？、千夏！」

「へ？うわぁ！？」

あたしは一夏に抱きかかえられ、一夏はあたしを抱きかかえたままその場から逃げるようにして避けた。

どかーーーーん！！！

謎の飛行物体が壮大に地面に突き刺ささった。その謎の飛行物体は……

「「「に、にんじん……？」」」

あたし達はそう言って声を漏らす。しかも、いわゆるイラストチックなデフォルトニンジンだった。

なんなの…これ？

「あっはっはっはっ！引っかかったね、いっくん！」

ばかっとにんじんが真っ二つに割れ、中から笑いと共に登場したのは、カオスの中心、ヒューマノイドタイフーンも可愛く見える。ヒューマノイドビックバン、篠ノ之束博士だった。

てか、この人、普通の登場は出来ないのか……

「いやー前はミサイルで飛んでたけど危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになってにっくんがいたからたすかったからね。わたしは学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

学習出来んなら普通にしてくれ普通に、
そうあたしは心で突っ込む、

「お、お久しぶりです。束さん」

一夏はあたしを抱きかかえたまま、篠ノ之博士に挨拶した。

「うんうん、おひさだね。本当に久しいねぇ……」

篠ノ之博士は一夏をじぃーと見ていた。

「……えーと？」

「……うんうん！黒いっくんもいいけど白にっくんもいいよねぇ！」

と言っていやんいやん見たいな腰の振り方で赤くなっていた。
あれ？こんな会話原作にあったっけ？

「く、黒？白？いったい何を――――」

「ところで、いっくんにお姫様抱っこされている君は？」

「へ！？あ、あたしですか？」

「そうそう、お名前は？」

……おかしい…篠ノ之博士は一夏達や箒以外は冷たいはずなのに、なんであたしにも一夏に向ける目で見てるんだ？

「えっと、千夏・棗・ガッティーノです」

「なるなるなるほど～、ちー…あ、これじゃあ被るから、ちうちゃんだね！」

「ち、ちうちゃ！？」

ちょっと待て！あたしはネットアイドルになった覚えはないですよ！？

「あ、あの、それは――――」

「ねえねえ、いっくん、箒ちゃんは？さっきまで一緒だったよね？どこかな？」

篠ノ之博士は一夏に箒の居場所を聞きながら一夏に渡されたうさ耳をあたしから受け取って、
すぐ装着した。
て、あたしの話を聞いてください！

「えーと……」

一夏は篠ノ之博士を避けてどこか行きましたと言えず、どう答えたらいいか迷っていた。

「まあ、この私が開発した箒ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあねいっくん！ちうちゃん！またあとでね！」

シュタッと篠ノ之博士は走り去ってしまった。無茶苦茶はえぇ……、て！

「ちょっと待ってください！篠ノ之博士！あたしはちうちゃんはー――――――！」

「私の事は束さんでいいよー！私もちうちゃんって呼ぶからー！」

走り去ったはずの束さんはいったんあたし達の見えるところまで戻り返事をした。その後また彼方へ走り去る。

「だあああああ！だからあたしは！」

「千夏、諦めろ……あの人の暴走は止められない」

一夏はそう言い、あたしを下ろした。

「でもぉ……」

あたしは一夏にすがる思いで助けを請う。

「！？む、無理は言わないでくれ……（そんな捨てられた子犬の様な目で見ないでくれ……罪悪感が……）」

「そんなぁ～……」

あたしはガクッと肩を落とし、へこんだ。

一夏でも束さんのアレは止められんか……

その後、セシリアがさっきの人は誰と質問し、その答えを聞いた時は驚いていた。

でも、あたしと一夏はそれよりも驚いた事がある。

「「あの束さんが他人に興味を持つなんて…」」

おかしいと思ったが、まあ、嫌われるよりマシと思い、良しとする事にした。

でも、まさか束さんとアイツが関わっていたなんて、今にして思えば予想も出来なかった……

「ふん、ふっふーん♪」

と、鼻で歌を歌いながらスキップで走る我らが束さんがスキップでは考えられないスピードで走っている。

「ふーんふっふーん♪、お、忘れてた！」

束はポケットから携帯を取り出し、

「ピポパポとなっと♪」

携帯のボタンを押してどこかにかけた。

「――――――お、にっくん？」

『ああ、俺だ…オールド「そのネタはいいよ～」そうか…』

束は突っ込みをし、携帯から聞こえる声の主は若干へコんだ。

「ねえねえにっくん、私ね。いっくんとちうちゃんにあったよ！」

『そりゃそうだろ。俺がそこにピンポイントで落下させたんだからな』

束の返事に相手は応えた。てかピンポイントって……

「うんうん、なかなかの命中度だったよ」

『それは何よりだ。それで、千夏は元気にしてたか？』

「んー元気だったよ？いっくんにお姫様抱っこされてたけど」

『……そうか』

電話の主は低い声で返事をした。

束はニヤニヤしながら相手をからかう、

「アハハハハハ、想い人取られて怒っちゃったかな？」

束は楽しそうにしながら喋る。

『……フン、まあいい。それで束のお目当ての人は見つかったか？』

「ん～箒ちゃんはまだ見つから無いんだよね～何処だろ？ところでまだそこにいるの？」

『ん？ああ、まだ大気圏内にいるぞ。束の姿も見える』

「やーん、そうなんだ」

束はおもむろに空に向かって手を振った。

『……ああ、ちゃんと手を振ってるのは見えるぞ』

「それは良かった良かった」

束は嬉しそうにしてはにかむ、

「にっくんも早く降りて一緒に泳ごうよ！特別に今日はマイクロビキだよ？」

『はいはい、そんじゃあさっさと下りますかね……』

「ぶぅ～あんまり嬉しそうじゃない……にっくんは束さんの水着姿を見たくないのかな？」

相手の主は疲れた様子で呆れていて、

束は少し怒った様に不機嫌になる。

『あーはいはい悪かったよ。束の水着姿を見たいな～』

「なんか投げやりだよ!?束さん傷ついちゃうよ!?」

『何を言うか変態』

「ひど!?酷いよにっくんぅ〜……」

束は少し涙目になった。

『フッ冗談だ。束もたまには体を動かさなきゃな』

「むうぅーイジワル……」

『拗ねるな拗ねるな』

と、落ち込む束を電話の――――――もうめんどいから……二夏が束をあやす、

『じゃあ、そっちに行くな?』

「……うん、待ってる」

そう言って束は電話を切った。

その手は少し寂しそうにしていて顔も少し悲しそうにしていた。

「……ほんと、にっくんはちうちゃんにラブラブだねぇ……」

と、今ここにいない二夏に愚痴るように喋る束、

「私もアピールしてるんだけどなー……」

そういって束はまた走り出す、

「もう！にっくんはいっくんと同じで鈍感さんなんだから、ぷんぷん」

怒った様でふざけながらもその声は弾んでいた。

「ムフフフッ！ちうちゃんには負けないよ～！」

そう言って楽しそうに、そしてどことなく闘争心を燃やす、

束は走るスピードを上げ、鼻歌を歌いながら高速で走って行った。

第四十一話「カオス襲来」（後書き）

千夏「一夏……あたしは寒気が止まんねえよ……」
一夏「だ、大丈夫か？風邪でも引いたか？」
千夏「そうじゃないんだが、何故か束さんが来てから、な……」
一夏「……そうか、な、なら俺がそ、側にいてやるよ」
千夏「それは助かる……サンキューな、一夏……」
一夏「い、いいって、別に……」
箒（一夏め……何を千夏相手に赤くなっているのだ。まったく！）

第四十二話「神と再会」（前書き）

何とか完結まで書きますね。

第四十二話「神と再会」

カオスが去り、一夏達は更衣室に行って着替えを終えて、浜辺に来た。
一夏は何故か鼻を押さえていたが……
実は一夏は千夏はお腹の傷を見せない為に先に一夏が使う更衣室を先に千夏に使わせて着替えをさせたが、一緒に着替えないのか？と千夏に言われ、大いに慌てふためいた一夏を不思議そうに見ていた。
そんな、ハプニングもあったが、千夏が最初に着替えていると、更衣室の部屋から大きな音がして、一夏は何事かと更衣室に入ったら、
千夏が一夏にお尻を突き出すかたちで転んでいた。千夏が服に足を引っかかって転んだらしく、
それを見て一夏が鼻血を噴きだしたのはお約束、

「一夏、平気か？」

「ああ、問題ない……」

「でも、どこかに鼻をぶつけたなら治療を……」

「ほ、ほんとに平気だって（き、気づかれてない？よ、よかったぁ～……）」

「なら……いいんだが」

千夏は一夏の鼻から垂れる鼻血を心配そうに見ていた。
一夏は千夏が心配してくれている事に嬉しさと千夏の尻を見てしまった事への罪悪感で少し鬱になっていた。

「あ、そうだ」

「ん？なんだ？」

千夏は手をポンとたたき、いい事思いついたと言った。

「一夏、手を鼻から離してくれ」

「え？なんでだ？」

「いいから、すぐ終わる」

そう言って千夏は一夏の鼻に両手を添えて、目を閉じた。

「千夏、一体なにを――――――」

その時、千夏の体が青白く光った。すると……

パアアアァァァ……

「！これは？」

一夏の鼻を中心として光り鼻血を止めた。一夏は驚愕し、千夏に聞いた。

「千夏、これは一体……」

「ん？ああ、これは治癒の一種だよ」

「治癒？」

「そうだ。鼻血止まったろ？」

「あ、そう言えば……」

さっきまでドバドバ出ていた。鼻血が止まっていた。

「凄いな。あんなに出てたのに……」

「そうだろ？」

「ああ、それもＩＳのおかげなのか？」

「あー、まあそんなところだ」

「へえー凄いんだな。千夏のステイシスって」

一夏は感心したように頷き、鼻をしきりに撫でて、血が止まっているのを再確認していた。

（まあ、本当は魔法なんだけどな……）

一夏なら黙っていてくれるかも知れんが、人の口に戸は立てられない。

何かの拍子にばれたら、即研究所行きは確定だからである。

「んじゃ、鼻血も止まった事だしさっそく泳ぎに――――――」

「い、ち、か～～～！」

「ん？なん――――のわっ！？」

「んお？」

行き成り一夏に乗っかって来たのは……

「鈴か」

「千夏もいたんだ！早く泳ぎに行こう！」

鈴だった。なんかもの凄くテンションが高い、ちなみにきているのはスポーティーなタンキニタイプ、オレンジと白のストライプでへそが出てるやつ。

何故原作と同じであると言うと、千夏は鈴に何を着せようと悩み、最終的に決まったのが……マイクロビキニだったからだ。鈴もこればかりは流石に無理と言って他のを選び直し、原作と同じ水着になった。

千夏はマイクロに出来なかった事を少しばかし残念がっていた。

「どうした？鈴、やけに機嫌がいいなぁ（ついでにマイクロビキニなら一夏も振り向くかもしれんのになぁ……）」

「そりゃそうでしょ、久しぶりに千夏と一夏と一緒に海来たんだから！」

「なるほど」

「て、聞いてないで下りろ！何してんだよ。鈴」

「肩車、あるいは監視塔ごっこだけど？」

「いや、普通に応えんなよ」

「何よ。もっとひねりが欲しかった？」

「そうじゃねえ！早く降りてくれ。女子達の視線がきつい」

一夏は周りの視線がきついのか鈴に降りるよう言い聞かす、そう言ってると……

「あっ、あっ、ああ！？な、何していますの！？」

と、そう言ってやって来たのはセシリアだった。手には簡単なビーチパラソルとシート、それにサンオイルを持っている。こちらは鮮やかなブルーのビキニ。腰に巻かれたパレオがちょっと優雅でカッコいい。

「なにって、肩車。あるいは監視塔ごっこ」

「か、肩車……監視塔ごっこ……」

セシリアはあぁ～と何故か体勢を崩しそうになった。

「ど、どうしたセシリア？気分でも悪いのか？」

「もしかして日射病か？きついなら先生を呼ぶぞ？」

鈴を肩車しながらも一夏と千夏は崩れそうになるセシリアを心配した。

「え、ええ、大丈夫ですわ……それよりも！」

ガバッとセシリアは顔を上げ、一夏に肩車している鈴に詰め寄った。言っとくが、一夏は鈴を肩車しているため、鈴に詰め寄っているセシリアの胸が一夏の顔の真ん前に来ているのだ。セシリアの胸が顔の近くに来ている為、一夏は顔を赤くさせながら固まっている。

（おおーセシリアの胸があんなに一夏の顔の近くに……ウラヤマシス）

「鈴さん！そこから下りてください！」

「ヤダ」

「な、何を子供みたいな事を言って……」

セシリアがザクッ！とパラソルを砂浜に刺す。ちなみに一夏の足とパラソルの位置は約五センチの幅で一夏は自分の足を刺されそうになった事に恐怖した。

「なになに？なんか揉め事？」

「って、あー！お、織斑くんが肩車してる！」

「ええっ！いいなぁっ、いいなぁ～！」

「きっと交代制よ！」

「そして早い者勝ちよ！」

騒ぎを聞きつけた女子達が何を勘違いしたのか、一斉に一夏に詰め寄る。
なんというか、男にとっては天国（ヘヴン）なのでは？

「鈴、誤解が広がるから早く下りな」

「ん、千夏がそう言うなら」

鈴は素直に一夏から下りた。
それを見たセシリアが不満の声をあげる。

「り、鈴さん…どうして千夏さんの言う事は聞きますの？」

「ん？ん～、千夏の言う事に間違いはないから」

「は、はい？」

セシリアは意味が分からないと言うように首をひねるが、気を取り直し一夏に話かけた。

「い、一夏さんさっそくですが、サンオイルを塗って頂きませんか？」

「「「え！？」」」

クラスメイトがセシリアの言葉に驚き、すぐさま目を光らせて、

「私サンオイル取ってくる！」

「私はシートを！」

「私はパラソルを！」

「じゃあ私はサンオイルを海で落としてくる！」

そう言って女子達は自分も塗ってほしいらしく、準備をしていた。

てか最後の奴、一夏に手間をかけさせるな。

「……人気だな。一夏」

「ただ、珍しいってだけだって」

「そうか？」

「そうだろ」

そんなこんなで一夏はセシリアのサンオイルを塗るべく、向かおうとすると、

「あ、そうだ」

「ん？どうした？」

「あー、えーと、……ち、千夏もサンオイル、塗るか？」

「え？あたし？」

「あ、ああ、セシリアが終わったらだけど」

一夏は顔を赤くしながら千夏にサンオイルを縫ってほしいか応える。

「ん～、そうだな……後で頼もうかね？」

「そ、そうか！後でか！わかった！」

一夏は顔をパァーと嬉しそうにして、セシリアのところへ行く、

「なんか一夏の奴嬉しそうだったけど、何だったんだ？」

千夏は不思議そうにしていたが、まあ、いいか、といって歩き出す、

「さーてと、少し散策して見ようかね」

千夏は人気の無い海岸に進む、体は女、心は男、冒険心に火がついたらしい。少し歩くと、

「おーすげー！」

そこは岸壁に挟まれ、ぽっかり開いた海岸だった。まるでプライベートビーチだ。

「すげぇ、一夏達に教えてやろーと！」

そう言って千夏が戻ろうとすると……

「それは困るなぁ。まだ千夏と二人っきりでいたいんだが」

「え？」

千夏は声のした方え振りむくと、

「よ、久しぶりだな。千夏」

「……一、夏……？」

そこには、サーフスーツを着ている。一夏に瓜二つの容姿を持った少年がいた。
千夏はフリーズしていて、状況が飲み込めていないようだが、

「どうした？そんな不思議そうに俺をみて」

「あ、いや、その……」

千夏は何を言えばいいか分からず混乱している。
少年はやれやれと言って千夏に近ずいてきた。
そして近ずくと千夏の顎に触れて、クイッと自分の顔に向けさせる。

「え？あれ？えーと、え？」

「ほう、近くで見ると、やっぱり綺麗なもんだ……」

千夏はそう言われ、少し顔を赤くした後、ババッと距離を取る。

「な、なななな！？だ、誰なんだよ！？」

「忘れたのか？この俺を」

「忘れたって――――――――」

千夏は昔の記憶を呼び出し、検索すると……

「――――神か？」

「ああ、それとここでは二夏と言う名前だ。覚えとけ」

神改め、二夏は面白そうにして笑っていた。

「な、なんでここに？」

「なんでってそれは――――」

「それは？」

「千夏の水着を見に来た」

「……」

「……？、どうした？」

「……それだけ？」

「ああ、それだけ」

「……ハア……」

千夏はため息をつき、心底あきれた様にして神を見る。

「たく、あたしの水着姿なんて価値はないぞ？」

「それは誤解だ。千夏は誰よりも綺麗だよ」

「な!?何言ってんだよ!?」

千夏は行き成り神が綺麗だと言って顔を赤くしてうろたえる。

「そ、そんなわけねぇだろ!」

「本当さ、なんなら証拠を見せようか?」

「しょ、証拠って――――――」

「こうやるのさ」

「え?うわぁ!?」

千夏は行き成り二夏に両腕を掴まれ、砂浜に押し倒された。

「な、何を……」

「だから証拠を見せるって言っただろ?」

二夏は千夏の両手を押さえながら徐々に顔を近付けて迫まっていく。

千夏は急に怖くなり、抵抗した。

「ちょ!?ま、待てって!」

「いいや、またない」

なんなんだ、こいつは!?と心の中で言って、千夏はまた暴れる。

だが二夏の方が力が強いのか、ビクともしなかった。

「あ……い…いや…や、やめ――――――」

「可愛い声も出すんだな。千夏は……」

そう言って二夏はどんどん自分の顔を千夏に近ずけて迫る。

千夏は目をつむった。

『だ、誰か助けて！』

心に中でそう願い、その思いが届いたのか、千夏達の後ろから……

「おい！お前！千夏に何をしてるんだ！」

「ん？」

「あ……一夏！」

千夏は一夏が来た事を嬉しくなってその目は若干涙目だった。

一夏はすぐさま千夏と二夏のところに走って来た。

「ふう、お預けか……まあいい」

二夏は千夏を解放すると、一夏に向けて言い放った。

「また会おう……首輪付き……」

そう言って二夏は、海の方へ行き、飛び込んだ。

ザパァァンッ！

二夏は飛び込み、海から水しぶきを上げていなくなった。

「千夏！平気か！？」

「あ、ああ一夏が来てくれたから助かった……でも、どうしてここに？」

「千夏がいなくなったから探しに来たんだ」

「そ、そうか……わりぃ迷惑かけて」

「まったくだ。勝手にいなくなるなよ？」

「う……ご、ごめん…」

「……それより、さっきの奴は……」

「あ、えっと……」

千夏は二夏の事を話すべきか迷う。

「顔は見えなかったけど、なんか俺に似てたような……」

「き、気のせいじゃねえか？」

「そうか？まあいいか…それより皆のとこに戻るぞ？」

「あ、ああ、わかった……」

千夏は立とうとすると一夏が急に千夏を抱き上げた。

「え!?あ、ちょっと!?」

「動くなって、行くぞ」

「え?えぇぇぇぇぇ!?」

千夏は一夏に抱っこされたまま、皆のいる海岸に戻っていった。

第四十二話「神と再会」（後書き）

一夏「千夏、平気か？」
千夏「ああ、問題無い」
一夏「ならいいんだが……」
千夏「平気だって、ありがとな」
一夏「あ、ああ、気にするな」

第四十三話「一夏の想い人」（前書き）

千夏の過去が少し明らかに……なる？

第四十三話「一夏の想い人」

二夏との遭遇で、あたしは一夏にお姫様抱っこされながら皆のところへ戻り、
何故か女子達は次は私を抱っこしてー！と言って、場を乱していた。
そんなこともありながら、海を満喫し今、七時半になって食事を取っているところである。

「うん、うまい！昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなぁ」

「そうだね。ほんと、ＩＳ学園も羽振りがいいよ」

そう言って頷いたのはあたしの左隣に座っているシャルと奥にいる一夏だ。
今は全員がそうであるように、シャルも一夏も浴衣姿だ。何故か一夏はあたしの浴衣姿を見て顔を赤くしていたが、浴衣どこかおかしかったか？
そう思って浴衣を着直そうとしたら一夏がさらに真っ赤になって慌てながらあたしの着直しを止めた。
何を焦ってたんだ？一夏は……

「確かにこのカワハギは美味いな」

「そうだな。臨海学校で食べれるなんて思いもしなかった」

一夏はそう言ってまた刺身を食べる。

「あー、美味い。しかもこのワサビ、本ワサじゃあないか。すげえな、おい。高校生のメシじゃあねえぞ」

「本ワサ？」

「ああ、シャルは知らないのか。本物のワサビを下ろしたやつを本ワサっていうんだ」

「えっ？じゃあ、学園の刺身定食でついてるのって……」

「あれは練りワサ、えーと、原料はワサビダイコンとかセイヨウダイコンとか言うやつだったかな。着色したり、合成したりして見た目と色を似せているやつ」

「ふぅん、じゃあこれが本当のワサビなんだ？」

「そう。でも練りワサは最近の美味しいものが多いぞ。店によって本ワサと練りワサを混ぜて出したりもするから」

「そうなんだ。ふむ」

「ちょ！？シャル！？それは！」

今ワサビの山を食わなかったか！？

「～～～～～～っ！！」

案の定、鼻を押さえて涙目になるシャル。何やってんだよ……可愛いけど、

「だ、大丈夫か？シャル」

「ら、らいひょうぶ……」

「おいおい、声が鼻声だぞ？」

てか、本ワサの山を食いながらも笑顔で返事をするって凄くねえか？

「ふ、風味があって、いいね……おいひいよ……？」

何処まで優等生だ。この子は……

「大丈夫かー？」

「な、なんとか……」

「大丈夫そうだな」

あたしはそう言って、また刺身を食べた。シャルも持ち直し、食事を再開した

ここの旅館の食事は美味い。飯だけではなく、部屋も風呂も豪華で本当に女性優遇が感じられる旅館だ。

「んー、うめー」

刺身の美味さに口を唸らせる。そんなこんなで食事を楽しんでいると、

「ほんとにおいしそうに食べるね。千夏って」

「いやだって、本当にうめえんだよ。母さんが和食を作ってたけど、日本を離れてイタリア料理が主だったから、美味しく感じられてな

あ……」

「え？でも食堂で和食は食べなかったの？」

「うんにゃ、イタリア料理になれたからそっちメインに食べてから、あまり和食食って無かったんだよ」

「ふーん、そっか」

あたしとシャルは話に花を咲かせながら、食事をした。

「うーん……」

「？どうしたの。千夏？」

「えーとな。あたしキモはちょっと……」

あたしは刺身を食べていたが、キモだけは苦手なのである。

「キモが苦手なの？美味しいのに……」

「美味しいだろうけど、あの感触が――――」

あたしは母に初めて食べさせて貰ったイカのキモの感触を思い出し身震いした。

「おおう……思い出しただけでもあの嫌な感触が～……」

「あははは……、まあ、苦手ならしょうが無いね」

「うむぅ……残すのも悪いし……そうだ！」

あたしは肝にワサビと醤油を付けて箸で持った。

「あれ？やっぱり食べるの？決心がついたのかな？」

「いや、全然」

あたしは即答して一夏を呼んだ。

「一夏ー」

「ん？なんだ千夏、今セシリアに食べさせようとして――――――」

「ほい」

「へ？むぐっ！――――――」

シャルの少し真横から身を乗り出し、一夏の口に肝を入れた。一夏は驚いて、キモを食べさせられた事に気付いたのか、顔を赤くしながら食べる。

「美味しい？」

「……凄く」

「それはよかった」

あたしは満足げに頷き、席に戻った。そして何故かセシリアは口を開けたまま固まり、シャルは目を見開いて驚いていた。

「な、なななな――――――――!?」

「千夏、人に食べさせるって……」

「いやぁ、あたしは食べれないから一夏に食べて貰おうと思って」

シャルは呆れたようにため息を吐き、セシリアはぐぐぐっと腕を握ってあたしを恨んでいた。

え？あたしまた何かしたか？

「あああー！千夏ずるい！何してるのよ！」

「織斑くんがガッティーノさんに食べさせて貰ってた！ひきょう者！」

「ズルイ！インチキ！きょにゅうぅっ！」

おいこら、何騒いでんだ女子共は……それと最後に言った奴、後で来い。

「何がずるいってんだよ。なあ？一夏」

「あ、えーと、その……」

一夏は何故かモゴモゴしながら少しにやけていた。

あたしは少し変なのと思ったが、今の状況を一夏に頼まないと騒がしくなる一方だ。

「い、一夏？早く否定してくれないとクラスメイト達が――――――」

「ずるいよ！私も！」

「織斑くん！私も食べさせてあげるー！」

うわぁー、女子達が一夏に群がっていく……あたしのせいか？

「早く早く！」

「あーんして！」

一斉に一夏に箸でいろいろな料理を挟んで差し出している。

おいこら、お前らは苦手なもんはねえだろ！それに一人は食べかけじゃねーか！何考えてんだよ！？

「お前たちは静かに食事することもできんのか」

その声に場の全員が凍りついた。

「お、織斑先生……」

「どうにも、体力が有り余っているようだな。よかろう。それでは今から砂浜をランニングしてこい。そうだな。五十キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！とんでもないです！おとなしく食事をします！」

そういって各自の席に戻っていく。それを確認してから、千冬さんはあたしの方を向いた。

「ガッティーノ」

「は、はい……」

「あまり織斑関係で騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「あ、はい、すいません……」

ううん、なんであたしが騒動を起こしたってわかったんだ？千冬さんは……

「お、織斑先生、俺が騒がしたから千夏のせいじゃ……」

千冬さんに注意をされていた時、一夏はあたしを庇ってくれた。

「……ハア、とにかく、静かに食事をしろ。いいな？（まったく、この二人は何時も……）」

「はい……」

「それと――――――」

千冬さんは言葉を区切り、一度一夏を見てあたしに言った。

「あまりアイツを甘やかすな。ベタボレされてしまうぞ？」

「え？ベタボレって……」

「ち、千冬姉！？何を言って――――――――！？」

バシィンッ！

「織斑先生だ。諸君も静かにしろよ」

はーい、とクラスの皆が返事をして、織斑先生は部屋を出て戻って行った。

「だ、大丈夫か？一夏」

「あ、ああ、何とか……」

一夏は叩かれた頭をさすりながら応えた。
あたしは立ちあがり、一夏の頭を撫でた。

「ゴメンな…あたしのせいで……」

「……千夏のせいじゃないさ。俺がちゃんとしてなかったのが悪いんだし」

「でも……」

「気にすんなよ。千夏が無事ならそれでいいさ……」

「一夏……」

「千夏……」

あたしと一夏は、お互いの目をまっすぐ見ていた。

「……」

「……」

そのまま一夏を見ていると……

「「一夏？（さん？）」」

「「え？」」

あたしと一夏は誰かに呼ばれ、振り向くと、

「早く食べちゃいなよ。一夏」

「千夏さんも早くお食べになってください」

シャルとセシリアの二人が何故か不機嫌になっている。

なして？

「あ、ああ、そうだな」

「ん、わかった」

シャルとセシリアが不機嫌になった理由は分からんが、

とりあえずあたしと一夏は食事を食べる。

その後、一夏がセシリアに何か小声で話していたが、なんだったんだろ？

ここは旅館の一角に作られた露店風呂、そこには……

「お、織斑先生…自分で洗えますから……」

「そう言うな。久しぶりに一緒に風呂に入ったんだ」

「あうう…」

「フッ、千夏、髪を洗うから目をつむってくれ。それと今は名前でいいぞ」

「あ、はい……千冬さん」

千夏は千冬にシャンプーの付いた髪を洗い流して貰った。

「あ、ありがとうございます」

「ああ、どういたしましてだ」

何故、千夏と千冬が一緒に風呂、しかも職員用の露店風呂で二人だけなのかは、

千冬が千夏のお腹の傷跡の事を考えて、配慮した物だった。

「千冬さん、その…ありがとうございました」

「ん？もうお礼は言ってもらったが？」

「いえ、あたしの為にここまでして貰ったことへの感謝です」

「気にするな。お前は大事な生徒だからな」

「……はい、ありがとうございます」

「ああ、さて、そろそろ入るか」

「そうですね」

千夏と千冬は、立ちあがり、風呂に入る。
今更だが千夏はかなり緊張してる。それは何故か？

（ううぅ……千冬さんを直視出来ない……！）

ということである。中学の頃一夏と千冬さん、それに鈴と一緒に行った銭湯でも、
千冬の体を直視できずにいた。

「どうした？千夏、何故私から目を背ける？」

「えーと、ですね……（千冬さんの体が……そのぉ……）」

考えるだけでも恥ずかしく、千夏は俯きプシューと音を立てるぐらいに顔を真っ赤にしていた。

「……まあいい、それよりも千夏」

「は、はい？」

千夏は赤くなりながらも千冬の話を聞くために少し近づいた。

「一夏の事で少し話がある」

「お話……ですか？」

「ああ、そうだ」

千冬は真剣な眼差しで千夏を見つめる。

千夏も千冬の真剣差に気づき、自身も風呂に入りながらも姿勢を正す、

「お前は……一夏の事をどう思っている？」

「一夏をどう思っている…ですか？」

「そうだ。一夏は役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージだってうまい」

お前もして貰ったろ？と付けくわえ、千夏に言った。

千夏はうんうんと頷き、千冬に言う、

「そうですね。専用機持ちの誰かが一夏を落とせればいい旦那さんになれると思いますよ？」

「……お前は入って無いのか？」

「え？あたしですか？」

千夏は心底不思議そうにして千冬をみる。

「あたしはただの幼馴染ですし、一夏があたしを好きになるなんてある訳ないじゃないですか」

「……ハア、一夏も唐変木な女に惚れたものだ……」

「？一夏が唐変木なのは前からでは？」

「一夏の事を言った訳ではない」

「ではだれの事ですか？」

「それは…だな……もういい」

「？？？」

千夏はまた不思議そうにして千冬を見た。

千夏は千冬に質問した。

「千冬さんは一夏が誰かと付き合ってもいいんですか？」

「ん？そうだな……目星がついてる女子はいるんだが……」

「え？誰ですか？それは」

千夏は千冬が一夏の付き合う相手を決めていた事に少し驚く、

「だが、一つ問題があってな……」

「問題？」

「ああ、ソイツは鈍感でな」

「鈍感……ですか？」

「ああ、そうだ。一夏が惚れているのに気付きもしない」

「え！？あの一夏が女性に惚れる！？」

千夏は心底驚いた。あの一夏が女性に惚れる。それは天地が引っくり返る事よりもあり得ない事だと思っていた。それはいいとして、千夏は一夏が惚れたを聞くべく、千冬に問いかける。

「そ、それは誰ですか？」

「あー、その…だな…（本人の前で言うわけにはいかんな……）」

「？言えない事ですか？」

「まあ、その、なんだ…弟のプライベートをこれ以上喋る…とな…（一夏が自分で言うと言ってるから言う必要はないか……）」

「それもそうですね……一夏も早く告ればいいのに」

誰が一夏を惚れさせたんだと、心の中で突っ込みをする千冬だった。

そんなこんなで千冬と千夏は露店風呂を堪能していく、
その風呂で千冬が千夏の胸を遊び半分で揉んでた事は、二人だけの
秘密である。

超オマケ・「ネッコネコな鈴」

ここは旅館の部屋、千夏は今、鈴の部屋にいる。
部屋には千夏と鈴しかいない。部屋いるクラスメイトは風呂に行っ
ているからである。
今千夏達は、何をしているかというと……

「うゆぅ……」

「何猫みたいな声出してるんだ?鈴」

「だって千夏の耳かき気持ちいいんだもん……」

「そんなにか？」

「うん、かなり」

「そうか…よし終わり。鈴、次は反対の耳をやるから移動してくれ」

「ん～、わかった」

そう言って鈴は立ちあがり、千夏の方を向いて千夏に耳を向けた。

「やるぞ～」

「おっけぇ～」

そう言って耳かきを始める千夏とそれを気持ちよさそうに目を細める鈴、
なんというか、姉と妹に見える。

「うにゅぅ～気持ち～……」

「はいはい」

千夏は微笑みながら鈴の耳の穴を掃除する。訂正、もう母親と娘だ。

「ねえ、千夏」

「ん～？なんだ？」

「この耳かきって一夏にもやったの？」

「ああ、そうだけど？」

「ふーん……」

鈴は一瞬不機嫌そうに顔を歪んだが、また顔をにへらと顔を緩めた。

「それがどうかしたか？」

「ん～なんでもな～い……」

「？そうか」

そう言って千夏は鈴の耳かきをする。

「ん～鈴の耳は綺麗だな」

「そう？」

「ああ、くりっとした感じがなかなか」

「て、そっちなのね……」

「まあね。一夏に舐められたらさぞ敏感に感じるだろうな」

「ぶっ！？ちょ！千夏！」

鈴は千夏が言った言葉に慌てふためき起き上がろうとしたら、

ブスッ

「あ」

「いたーーーーーーーーっ!?」

鈴は耳を押さえながら床をゴロンゴロンと転がる。
千夏も慌てて鈴を押さえて耳に傷が出来ていないか見る。

「り、鈴!?大丈夫か!?」

「ううぅ…痛い……」

「ご、ゴメンな?からかってゴメンな!?」

「ううぅっ……」

「ああ、鈴、機嫌直してくれ……」

鈴は少しふくれっ面でそっぽを向いた。

「鈴、許してくれ…あと早く耳に傷が出来てないか見ないと……」

「……わかった」

「ゴメンな?鈴」

「うん……」

千夏は寝転がっている鈴の頭撫でた後、膝に乗せ直して耳の穴の中を見る。

「……良かった。傷はないみたいだ」

「さっきブスッて音がしたような気がするんだけど……」

「あーそうなのか？もう少し奥の方かな……」

千夏は耳の奥の方を目を凝らして見る。

「……ここも大丈夫そうだな…さっきの音は気のせいじゃあないか？」

「そうかしら？」

「それは……分からん」

「……まあいいわ」

そう言って鈴は瞳を閉じて、千夏の膝枕を堪能していた。

千夏は鈴が甘えたいと悟り、しょうがないなぁと吹いて鈴の頭を撫でた。

「うゆぅぅ……」

「よしよしっと」

千夏は鈴の頭を撫で続けていると、鈴が、

「……ねえ、千夏」

「ん？なんだ？」

「千夏の家族の事なんだけど」

「あたしの家族がどうかしたか？」

「……どうして、家族の前では何時も敬語なの？」

「え？」

「だってそうじゃない。それに……なんか無理してる感じがしたから」

「……そっか」

千夏は観念したかの様に息を吹き、鈴に事情を話す、

「あたしの家族ってさ。父がイタリア大統領で、母が日本外交官じゃん？」

「うん」

「それでな、父のとうさ――――祖父が他国の女性は駄目だっていったんだよ」

「え？なんで？」

「祖父は厳格な人で、同じイタリア人じゃなければいけないってい

ったんだ」

「……」

「そんで、父は母の事を忘れられず、大統領だった祖父を説得しようとしたけど……」

「無理だった？」

「そうだ。それで父は愛した人と別れるぐらいなら祖国を捨てるっていっちゃってな」

「へぇーやるじゃん。千夏お父さんって」

「まあな」

千夏は鈴に父を褒められた事が嬉しかったらしく、自分の事のように喜んだ。

「父は祖父にそう言って家を出ようとしたけど、祖父が慌ててそれを止めたんだ。それで祖父は、ある条件で二人の婚約を認める事になったんだ。」

「ある条件って？」

「……あたしが次期大統領になる事さ」

「え？それって……」

「そう……あたしの未来はもう決まっちゃってるんだ」

千夏は少し悲しそうにしながら鈴に微笑む、
鈴は、そんな顔をする千夏を見るのが辛いのか、目を背けてしまう。

「祖父はどうしても自分の血筋を残したいらしくて、ひっきりなしにお見合いの話が舞い込んでくるんだ。それもほとんどが年齢の離れた人ばかりだからまいっちまうよ。父もこの条件に悩んだけど、母と結ばれるならいいと思ったんだろうな……」

「それって……千夏の事を考えずに……」

「仕方ねえよ。父も母と結ばれたい一心だったからな」

「……」

鈴は悲しくなった。自由の無い人生を歩む千夏を見て、

「まあ、そんなこんなであたしが生まれて今ここにいる訳だが……」

「……まだなんで敬語なのか聞いてない」

「そうだったな。それはあたしが立派に振舞わないといけなかったからだ」

「どうして？」

「あたしは次期大統領になるべく、いろいろな政治の勉強をしていたからな。そんでもって祖父に認められるような人間に成らないといけなかったし、だから父や母、祖父の前では敬語だったんだ」

「そうなんだ……」

「まあ、それもちょっと辛くてな。在りたい自分と父と母の会話でのギャップとかで、心身ともに負担をかけ続けてたんだ」

「……千夏」

「ん？」

「今は…平気なの？」

「ああ、平気だ。アイツがいたおかげでな」

「アイツ？」

「ああ、そうだな。あの話も聞かせてた方がいいか」

「あの話って？」

「あたしが心身ともにまいっていた時、一夏が現れたんだ」

「一夏が？」

「そ、一夏にあたしと母の会話を聞かれてな。どうして家族の前じゃ礼儀正しいんだって聞かれて、あたしは一夏に全部喋ったんだ」

「どうして…一夏に話したの？」

「んーそうだなー……一夏なら助けてくれると思ったからか、な？」

「そうなんだ。それで？」

「一夏はこう言ったんだ。それなら俺の前では千夏は千夏自身でいればいいってね」

「ふーん、一夏がねぇ……」

千夏は嬉しそうに喋り、鈴は少し複雑そうに聞いていた。

「それで、あたしの肩の荷が取れて、こうやって元気にしてられる訳だ」

「そっか」

「一夏には、感謝してる……一夏に出会わなかったら、あたしどうなっていたか……」

千夏は昔を思い出し、少しはにかみながら鈴に視線を戻した。

「鈴にも感謝してるぞ」

「え？あたしに？」

「ああ、鈴には何時も癒して貰っているからな」

そういって千夏は、鈴の頭を撫でまわす、

「い、癒すって…あたしの何で癒してるのよ？」

「んー？秘密だ」

「何よ。秘密って……」

鈴は呆れたようで瞳を再度閉じる。千夏も太ももに乗っている鈴の頭を撫でていた。

「まあ、この話はこれでおしまいかな？」

「そう……」

「次は子守唄歌ってやろうか？」

「千夏、子供扱い禁止」

「へいへいっと……ん？」

「どうしたの？」

「部屋の外から気配を感じる……」

千夏のケモミミがピコピコと動き、気配を察知する。

「千夏、ここにいて」

「あいよ」

そう言うと鈴は、千夏から離れ、部屋のドアへ向かい開けると、

「……何してんの？一夏」

「あ、えーと……き…」

「き？」

「きちゃった☆」

ドゲシッ！！

鈴は思いっきり一夏の腹を蹴る。

「グホアァッ！？」

「何乙女の部屋を盗み聞きしてんのよ！あんたはぁー！！」

「い、いてぇ……」

「はあ、懲りない奴……」

千夏はやれやれと立ち、鈴をなだめて一夏を部屋に招き入れる。
本当は駄目だが、鈴も一夏にいて欲しそうだった為、招き知れる事にしたのだ。
そんなこともあったが、三人は中学の頃の思い出に花を咲かせていた。

第四十三話「一夏の想い人」（後書き）

千夏「ちょ！？千冬さん！そこは……ひゃあ！？」
千冬「ほう、無駄に大きくなってきているなあ千夏」
千夏「す、好き好んで大きくなった訳じゃ……あぅん！」
千冬「そうか？（この大きさは……私と同等か？）」
千夏「ち、千冬さん……許し――――ふぁん！？」
千冬「まあいいではないか、揉めば大きくなるかも知れないぞ？」
千夏「こ、これ以上はもういいですううううぅぅぅぅぅぅぅっ！！！！！」

作者「ずずーーーーーッ↑お茶……いいねぇ…女性同士のくんずほぐれつは…」

第四十四話「悩める乙女たち」（前書き）

うぬぅ……この回の話は難しいですね……福音戦もあるからきついなぁ……

第四十四話「悩める乙女たち」

夕食を食べ終え、俺は風呂に入り、部屋に戻るとこだ。

「ふうー、さっぱりした」

俺は風呂でさっぱりして部屋に入る。

「ただいま～」

「おーお帰り」

「帰ったか、織斑」

部屋には千冬姉と千夏が先に戻っていた。

「ん？一人か？女の一人も連れ込まんとは――――いや、もういるから十分か……」

それは、千夏の事を言ってるのか？千冬姉……

「連れ込む訳ないだろ？千冬姉……」

ゴスッ。鋭いチョップが飛んできた。

「織斑先生と呼べ」

「いいじゃないですか。千冬さん、三人だけなんですし」

「しかしだな……」

「まあ、それはいいじゃん。千夏と俺しかいないんだし、風呂上がりだし、久しぶりに――――」

視点・「篠ノ之箒」

私は今、鈴ともに織斑先生の部屋に来ている。来ているのだが……

「リンさん？それに箒さんまで。一体そこで何を――――――」

「シッ！」

鈴が即座に後から来たセシリアの口を塞ぐ、鈴は状況が分からずもがくセシリアを押さえて、

扉に耳を密着させて中の声を聞く、私は中から聞こえる声に心が猛烈に沈んでいた。

『千冬姉、久し振りだからちょっと緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。――――んっ！す、少しは加減しろ……』

『はいはい。んじゃあ、ここは……と』

『くあっ！そ、そこは……やめっ、つうっ！』

『すぐに良くなるって。だいぶ溜まっているみたいだし、ね』

『あぁぁっ！』

「こ、こ、これは、一体、何ですの……？」

ひくひくと口元を震わせ、引きつった笑みを浮かべながら私にそう尋ねるセシリア、
だが私は、何も言わない。言えなかった。

「……」

「……」

私は、何も言えず、ずーんと沈んだ表情で聞き耳を立てる。
鈴は何故か、ああ、あれか……といいながら少し羨ましそうにしている。何故だ？
そして私たちに、追い打ちをかけるようにある声が聞こえた。

『一夏、あたしも早くしてくれよ』

『まってろって、千冬姉が終わったらやってやるよ』

『一夏～早く気持ちよくしてくれ～』

『はいはい』

き、気持ちよくだと!?一夏め、織斑先生に飽き足らず千夏までも!
鈴の拘束から解放されたセシリアも顔を赤くから青くして状況を聞いていた。
一夏は千夏の事を人一倍大事にしている事を知っていた為、私は気が気ではなかった。

（一夏は……千夏の事を…好き…なのか…）

私は一夏と千夏がもし、付き合う事になったらと思うと、私は……

『じゃあ次は――――』

『一夏、少し待て』

二人の声が途絶え、鈴とセシリアはドアに耳をさらに密着させる。
私は一夏と千夏の事を考えていて気付かずにいると……

バンッ!

「「「へぶっ!!!」」」

思いっきり、ドアに殴られた。私はドアから少し離れて聞いていた為、鈴やセシリアよりも衝撃が強く、気絶してしまった……

視点・「織斑千冬」

（やり過ぎたか？）

私はそんな事を思いながら、目を回している篠ノ之を弟に運ばせ、凰とオルコットにデュノアとボーデヴィッヒを呼んで来るよう言った。

「千冬さん……あの…」

「分かっている…やり過ぎた」

悪かったとは思っているが、部屋で出した声を聞かれたとなると、いても立ってもいられなかった。

「千夏、気持ちいいか？」

「あ、うん、いい感じぃ……」

千夏は気持ち良さそうに目を閉じて、弟のマッサージを堪能していた。

途中で専用機持ちの奴らに邪魔はされたが、まあいいだろ。

「――――あう！？い、一夏…もっと優しく……」

「す、すまん…こうか？」

ぎゅっぎゅっと弟は指圧から手のひらの下部で静かに圧力をかける。

「――――はうぅぅん……やっぱり一夏は上手いなあぁ……」

「そ、そうか？」

……気のせいかもしれないが、私よりも真剣にやってないか？

そんな考えが頭によぎる。

「あ～…一夏～」

「ん？なんだ？」

「もう腰はいいから――――」

「腰はいいから？」

「お尻の方をやってくれ」

「――――へ！？」

「ハア……」

こいつは何時も普通に大胆なことを……

「や、あの、だな……そのぉ…」

「え？駄目なのか？」

「い、いや！ち、千夏が良いって言うのであれば……」

弟は緊張した面持ちで手を千夏の尻に伸ばす……心なしか、手がワキワキしていたが

「自重しろ。変態が」

ゴスッ

私は愚弟にチョップを炸裂させる。

「いてっ！？」

だが私は力加減を間違えたのか、弟は勢い余って――――――

ムニュッ

「はう！？」

「あ」

「……またか…」

私はまたかと言い、ため息をついた。

「い、一夏…そんな急に――――」

「い、いや！ワザとじゃないんだ！信じてくれ！」

「な、何を言っているんだ？一夏」

「え、えーと……」

弟は私に助けを頼もうと目を向けるが……私は目を背ける。弟は絶望した！という顔をしていた。

千夏に特別真剣にマッサージをした罰だ。私には痛いやつしかしなかったからな。

「一夏……」

「ち、千夏！？違うんだ！誤解なんだ！」

「……嫌…なのか？」

「へ？」

「あたしのお尻に触るは……嫌か？」

千夏は少し不機嫌そうに、そしてどこか不安そうにして弟を見ていた。

「あ、いや、そんなんじゃ…ない……ただ、おれは……」

やれやれ、ここで二人の仲を裂く訳にはいかないな……
私は弟の誤解を解く為に、弁明を言う。

「千夏、こいつはただ、女である千夏の尻を触っていいのか迷っていただけだ」

「え？そうなの？」

千夏はきょとんとした後、少し顔を赤くさせ、弟に謝った。

「あの…一夏、ごめん…」

「い、いや、いいんだ。俺も千夏のお尻に引かれて――――」

「え？」

「い、いや！何でもない！」

「？変な一夏」

「へ、変って……変って言われた…」ズーン……

弟は千夏に言われた言葉に落ち込んでいた。
言う事を間違えたか？

「ところで千冬さん」

「ん？なんだ？」

千夏は起き上がって、体の調子を確かめながら私に話しかけた。

「外にいる皆を呼びます？」

「む、そうだな……おい、聞き耳立ててる四人。そろそろ入ってこい」

ぎくっぎくっぎくっぐきっ！

「「「……」」」

「……つぅっ……」

なんだ？最後の音は…足をひねった様な音がしたが……

そう思っていると、ドアがゆっくりと開いた。

立っていたのはオルコットにボーデヴィッヒ、デュノアに……何故か右足を持ちながら痛そうに歩く凰

「一夏、沈んでないでシャキッとしろ。お前たちは好きなところへに座れ」

「ほら、一夏、なんだかわかんないけど元気出せって」

千夏は弟の両肩を持ち、弟の布団が置いてあるところまで運ぶ、私は四人を手招きで呼び、四人はおずおずと部屋に入った。

「一夏～しっかりしてくれ」

「はは……変な奴…変な奴って……」

「何言ってんだ？一夏は……」

「……ハア、……千夏、一夏を風呂まで運んで行け、一夏も私とお前のマッサージで汗臭くなっているからな」

「うぃ～すっ」

「「「「え！？」」」」

「なんだと！？」

四人は驚き、今まで寝ていたふりをしていたらしい篠ノ之も起き上がった。

起きているなら起きろ。馬鹿者が、

「一夏～風呂までいくぞ～？」

「俺は……変な奴……」

駄目だ……弟が重症になっている……、そう弟の状態を見ていると

――――――

「わ、わたくしもお手伝いしますわ！」

「ぼ、僕も！」

「私も手伝うぞ！」

「あ、あたしも行く！」

「ちょ、ちょっとまて！私も行くぞ！」

そう言って五人が、千夏と弟の同行に立候補する。

「馬鹿者、千夏だけで十分だ。お前たちには話がある」

「で、ですけど……！」

「ち、千夏が大変そうだから僕は！」

「教官！嫁が他の女と混浴など！」

「一夏が千夏姉を襲わない様に見張らないと！」

「は、破廉恥な行為をする幼馴染に成敗を――――――！」

「文句があるのか？」

私は少しドスの聞いた声をだす。

「「「「「ありませんすいません…」」」」」

「分かればいい」

私は納得した五人を見て、座る。

「千夏、早く一夏を連れて行け」

「ほ～い」

そう言って千夏は一夏を抱っこして部屋を出る。
五人の専用機持ちはその千夏と弟が出ていった扉を悔しそうで悲しく見ていた。

「安心しろ。あの千夏だぞ？お前らが思うような展開にはならないから安心しろ」

「むうぅ……」

五人は少しふてくされるように頷く、まったく、弟はなぜこうもモテるんだ？

「……まあいい、お前たち、喉は乾いていないか？私が奢ってやろう。篠ノ之何か飲むか？」

篠ノ之は私が行き成り声をかけてビクッと肩をすくませた。すぐに声は出ず、困っているようだ。
私は、旅館の備え付けの冷蔵庫からラムネとオレンジ、スポーツドリンクとコーヒー、紅茶を取りだす。

「ほれ。受け取れ。他のが言い奴は各人で交換しろ」

私がそう言って、全員に渡す、全員は、渡された飲料水で満足したのか交換会は開かれなかった。

「い、頂きます」

全員が同じ言葉を口にして、そして次に飲み物を口にする。
女子の喉がごくりと動いて私はニヤリと笑う。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何かはいってましたの！？」

「失礼な事を言うな馬鹿め。なに、ちょっとした口封じだ」

私はそう言って冷蔵庫から出したビールを飲もうとすると……

「ん？どうした。ボーデヴィッヒ？」

鼻を押さえて、何かに耐えるようにして、涙目になっていた。

「……つ」

「つ？」

「つーんてします……！」

「は？」

「このコーヒー……つーんてします！」

「なんだと？」

そう言って私はボーデヴィッヒからコーヒーを受け取り、匂いを嗅

ぐと……

「……ワサビか……」

「や、やっぱり何か入ってたんですか！？」

「ま、まさかこれにも！？」

「えぇぇー！？」

「落ち着け馬鹿者」

千夏め、イタズラの為に入れたな……まあ、一夏を狙ったものだろうが……

「ボーデヴィッヒ、他のコーヒーをやるから、それを飲め」

「は、はい……」

「まったく…千夏は子供じみた悪戯をする…」

やれやれと言って肩をすくませ、ボーデヴィッヒが代わりの物を受け取ると、私はビールの淵を開け、プシュッと良い音を立てたに口に唇を付ける。

「――――ふう、む、忘れていた。千夏がお摘み作ってあったな」

私はボーデヴィッヒに皿にのっているお摘みを取らせ、それを口に放り込んでまたビールを飲む。

それを見て、全員が唖然として私を見ていた。ボーデヴィッヒは何

度も目を瞬きしながら
その目の前の光景を信じられないような目で見ている。おいおい、何を見ているんだ?信じられないのは分かるがな。

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらい飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか?」

「い、いえ、そう言う訳では……」

「無いですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……?」

ボーデヴィッヒは、ぽかんと開いた口から何も言葉は出ないようだ。代わりに、代わりに渡されたブラックのコーヒーを嚥下する。

「固い事を言うな。それに、口止め料はちゃんと払ったぞ」

そう言ってニヤリと私は笑い、全員の手元をざっと流し見る。そこでやっと女子一同が飲み物の意味に気づいて「あっ」と声を漏らした。

「さて、前座はこれぐらいでいいだろう。肝心の話をするか」

私は空になったビールをゴミ箱に捨て、ボーデヴィッヒに二本目のビールを取らせる。

「お前ら、あいつの何処が良いんだ?」

女子全員がアイツと言う言葉が誰を示しているのか瞬時に分かり、喋る。

「わ、私は……その……ち、小さい頃より腕が上がったのが良いと言うか……」

と、恥ずかしそうに、モジモジしている。篠ノ之

「あたしは……えっと……まえより男前になっているがいいなぁ…て」

モゴモゴさせて、小さい声で言う凰

「わ、わたくしは……なんて言えばいいんでしょう…か、格好いいからでしょうか…」

さらに凰よりもモゴモゴさせて喋るオルコット、

なんだこいつら？前より素直になってるような気が……？

「……そうか」

私は弟が好かれている事を嬉しく思い、同時に寂しくもなった。て、何を思ってるんだ。私は……

「僕――――あの、私は……優しいところ、です」

ぽつりとそう言ったのはデュノアで、声の小ささとは裏腹に真摯な響きがあった。

「ほう。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ？」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなぁ」

デュノアは照れ笑いをしながら熱くなった頬をぱたぱたと仰ぐ、四人はその様子を羨ましいのか悔しいのか、じぃーっとデュノアを見つめた。

「で、お前は？」

さっきから一言も話していないボーデヴィッヒに、私が話しかけるとビクッと身をすくませながら言葉を紡ぎ始めた。

「つ、強いところが、でしょうか……」

「ふむ、なるほどな……」

たしかにあいつは強い。だがそれは……

「千夏在っての事だろうがな……」

「？、織斑先生？」

ボーデヴィッヒが、私に声をかけて思考から出る。

「いや、何でも無い」

「そうですか……」

ボーデヴィッヒはそう言って、言葉を紡ぎ終えた。

「まあ、確かにあいつは強い。この頃も実力を上げて来ている。あいつは役に立つしな」

ボーデヴィッヒは、私の弟の事を褒められたのか、嬉しそうにして私の言葉を聞いていた。

「と言う訳で、あいつと付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

え！？と女子達が顔を上げる。それからおずおずと、ボーデヴィッヒが私に尋ねた。

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

そう言うと、女子一同はええ～……と声なき突っ込みが聞こえた気がした。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。千夏の様に自分を磨けよ、ガキども」

私がそう言って、三本目のビールを飲もうとすると……

「え？なんで千夏がここで出てくるんですか？」

そう言って訪ねたのは、ボーデヴィッヒだった。

「なんだ知らないのか？一夏は千夏に惚れてるんだぞ？」

「え？」

女子一同は間抜けな声を上げ、固まっていた。無理もない。私も知った時は呆けたものだ……

その中には固まらず、ああ、やっぱりそうよね。と吹く凪と、顔を俯かせて手をきつく握りしめた篠ノ之の二人だ。

「あ、あの……それはつまり？」

先に再起動したのはデュノアだった。

「つまりも何も、一夏が千夏の事を好いていると言う事だ」

また固まり、数秒後に声を上げた。

「ええぇー！！？？」

女子一同は驚きの声を上げて身を乗り出し、私に詰め寄る。

「い、一夏さんが千夏さんを――――！？」

「そ、そんなこと聞いて無いですよ！？」

「何故嫁が他の女の事を！？」

「まあ、予想はしてたけどねぇ……」

「……」

三人は声を荒げて講義し、凰と篠ノ之は知っていたらしく、あまり驚かなかった。

「落ち着け馬鹿もん。誰が誰を好きになろうと勝手ではないか」

「で、ですが――――――！」

「そんなこと急に――――――！」

「言われても！」

三人は口をそろえて言う。まったく……どうしてこう弟は女を寄せ付けるんだ……

「だから落ち着け、私が知っているのは一夏が中学で千夏に一目ぼれした事だけだ」

「い、一夏さんが……」

「千夏に……」

「一目ぼれ……だと！？」

その顔は絶望と悲しみで満ちていた。私は少し見てられず、とりあえずチャンスがある事だけは伝えた。

「フッ、安心しろ。まだチャンスが無いわけではないぞ？」

「え？」

そこにいる全員が声を同じくして、私の方を向く、その目には希望を見ているかのような輝きがあった。

「千夏は一夏と同じで鈍感で唐変木だ。だから千夏が一夏の好意に気づかないかもしれんしな」

「そうなのですか！？」

「そうなの！？鈴！」

「お前は千夏の中学時代を知っているのだろう！？」

そう言ってデュノアとボーデヴィッヒが凰に詰め寄る。

「え？あ、うん…まあね」

「お、織斑先生が言った事は本当ですの！？」

「ち、千夏が鈍感なのは本当なんだよね！？」

「正直に言え！これは私と嫁の未来がかかっているんだ！」

そう言い三人はさらに凰に詰め寄る。

「ちょ、ちょっと落ち着きなさいよ！話すから」

そう言って三人を落ち着かせた凰は、三人に説明する。

「……そうね。たしかに千夏は天然なとこはあるわね」

「そ、それでは！？」

「ああ、うん、チャンスはあるんじゃないかな？」

鳳は少し自信なさ気に喋り、説明を終えた。

「そ、そっか……まだ、チャンスはあるんだ……」

「う、うむ、そうだな……」

「まだ……負けていませんわ！」

そう言って三人の背からメラメラと炎のオーラが見える。とりあえず一夏は今回で千夏に告白するのは黙っておこう。こいつらが何かしでかさないとは限らないからな……何か悪い気がするが、私はあまり驚かなかった鳳に聞く。

「鳳、お前はいいのか？一夏と千夏が付き合っても」

「……あたしは…なんというか……」

「…千夏に遠慮しているのか？」

「そう言う訳じゃ…ないです。ただ、千夏はあたしを一夏に何かとくっつけ様としてくれてたのは嬉しいです。だけど……」

「千夏の身の上話を聞いたのか？」

「……はい」

「そうか……」

私も千夏の次期大統領就任の話は聞いていた。
大統領になれば好きな事はあまり出来ないからな。そこら辺を凰は心配しているのだろう。

「フッそれで自分だけが幸せになるのが嫌なのか？」

「……はい」

「そうか」

あいつも親友に大事にされているものだ……

「それで、篠ノ之お前はどうなんだ？」

「え？」

「一夏が千夏の事を想っている事だ」

「私は……」

篠ノ之は少しいい淀み、言葉を絞り出す。

「私は…いや…です」

「……ふむ」

「一夏の事は…ずっと大事に想っていましたから…その…」

「取られたくない、か？」

「……はい」

篠ノ之は少し声を震わせていた。小さい頃から思い続けた男を取られるのはやはり辛いか……

私たちはそのまま黙り、凰はまだ千夏の事で悩み、他三人は燃え上がり続け、部屋は別の意味で暑苦しくなった。

そんな恋愛と暗い話がされている事はつゆ知らず、一夏を風呂に入れる為来た一夏と千夏は……

「――――――――、ハッ！ここは！？」

一夏は現実に戻り、あたりを見回すと露店風呂に入っていた。

「な、なんで風呂にはいっているんだ？」

一夏は訳が分からずそう言っていると……

「――――ん？なんだあれ……」

風呂の水面の下に見える人影が見えた。

「いったい誰だ？」

一夏が目を凝らして見ても、湯気のせいか見えなかった。

そうしているうちにその水面の下に見えた人影はゆっくりと一夏の方に向かってくる。

「あ、あれ？こっちに向かってくる？」

一夏は少し戸惑いながら待っていると、その人影は一夏の真ん前で止まり……

ザパァーンッ！

「うおわっ！？」

急に浮上しながら水しぶきを上げて出てきたのは……

「俺――――」

「――――――参上！！」

千夏だった。

「あ、ああ……あああ……」

一夏は声を出さない。否、出せないでいた。何故かと言うと、千夏の今の姿である。
ここは風呂、必然的に裸になって入る場所だ。つまり……マッパである。

「よう、一夏！やっと現実世界に戻って来たんだな」

千夏は首を振りながら一夏に言って、しっとりとした髪をバサァッと跳ね上げ水滴を飛ばす、
その時に揺れた二つのメロンが一夏の目の前で豪快に見せる。
その姿はサンドロ・ボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」だったと一夏はあとから語る。

「ん？どうした一夏、そんな顔して」

「あ、えっと…そのぉ（な、なんで千夏と一緒の風呂に！？）」

「一夏？」

「あの、その、だな……（お、おれは千夏に変な奴と言われた後から記憶が――――――ハッ！？）」

その時、一夏は気づく、

（そ、そうか！これは夢だ！）

一夏はそう思い込み、状況は把握した。

（だよなぁ。千夏が天然でもここまではないよなぁ……）

だが一夏は侮っていた。千夏の烏頭を……夢じゃないのに……

（それにしても……）

一夏は千夏を見る。

その裸体は完璧と言っていいほどのスタイルで、胸は大きく、お腹と腰には無駄な肉が付いていない。

さらにお尻は引き締まり足もスラっとしていた。

（な、なんで千夏って口調に似合わずこんなにも綺麗なんだ？）

焦りながらもマジマジと見る一夏、その視線に気づいたのか、千夏はいごごちが悪そうにして後ずさる。

「な、何をそんなに見ているんだ？何かついてるか？」

「え？あ、いやその……」

「……まあ、いいか」

千夏はそう言って一夏の隣に腰をおろして座る。
その時一夏は一瞬だけ自分の肩に千夏の肩が当たってビクッと震えた。

「ち、千夏？（こ、これは夢だ！落ち着け！俺の息子！）」

「大丈夫か？一夏、なんだか元気なかった様だけど？」

「え？なんでだ？」

「だってさっき、元気がなかったから……」

「あ、ああ、大丈夫だ（何の事だ？いったい……）」

「そうか？それならいいんだが……」

それを言ってから、二人は無言になる。

（ど、どうすれば目を覚ます！？てか覚ましたくないけど！）

そんなことを考えている一夏、本当にエロくなっている。

「な、なあ、千夏」

「ん？なに？」

「なんで俺、風呂場に？」

「ああ、千冬さんがな。一夏に汗を落としてこいっていったから」

「千冬姉が？」

「ああ、そうだけど？」

「そ、そうか（どう言う事だ？いったい……）」

一夏は考えていると、ある事に気付いた。

（――――ん？これって夢なんだよな？）

夢ではないが、そう思う一夏はある事に気づく、

（つまり……やりたい放題！？）

と、邪の考えが浮かびあがる。一夏は一度、シャルとはいったが、

（シャルの時と違ってこの状況じゃあ耐えられない……！？）

自分の理性を押しこみ、耐える一夏、

「あ、一夏」

「は、はい！？」

急に呼ばれて素っ頓狂な声を上げた一夏は千夏の方に向くと、

「あたし、そろそろ出るな？」

「え？」

「いや、なんだかのぼせて――――」

そう言って千夏は恥ずかしそうにして頬をかいていた。

顔は風呂の熱で頬が赤くなっていた。

「先に出るな。また部屋でな」

そう言って風呂から出て行こうとすると……

ズルッ

「へ？」

「え？」

千夏が風呂の底の石で足を滑らせて体勢を崩す、

「わわわっ！？」

「っ！千夏！」

一夏は咄嗟に動いて千夏の下に潜り込む、

「ふっ！」

バチャンッ！

千夏と一夏が動いた衝撃で風呂に波が出る。
一夏は千夏を転ぶ寸前で受け止めた。が……

「……」

「……」

一夏は千夏を抱きかかえるようにした状態で倒れていた。しかも、

（な、なななーーーーー！？）

一夏と千夏の顔の距離は零、つまり……

（に、二度目のキス！？）

一夏は前に、真耶が落ちてくるハプニングで千夏のファーストキスを奪っていたので、これが二度目だ。
そうこうしているうちに、千夏から唇を離して一夏から離れる。

「……えっと…あの…」

「え！？あ、なに！？」

千夏は顔を真っ赤にさせながらも言葉を絞り出した。

「……え」

「え？」

「エッチなのはいけないと思います！」

そう言ってダッシュで風呂から出て行った。

一夏はポツンと残され、呆けるしか出来なかった。

「……えーと…」

一夏は状況を整理すると、

「……夢…じゃ…ない？」

そう分かると徐々に顔を青くさせて鼻まで湯に沈める。

「ぶほれば、まずいがもじればい（これは、まずいかもしれない……）」

一夏はのぼせるまで千夏にどう謝ろうか考えてながら風呂から出て行った。

第四十四話「悩める乙女たち」（後書き）

一夏「ど、どうしよう！千冬姉！」
千冬「焦るな馬鹿者、男ならさっさとコクってこい」
一夏「無理言うなよ！？」
千冬「出来なければ一生振り向いてもらえないぞ？」
一夏「ううぅ……どうすれば……」

第四十五話「カオス再び」（前書き）

箒の心が闇に染まっていく……書けるかな…俺？

第四十五話「カオス再び」

合宿二日目。今日は午前中から夜まで丸一日ＩＳの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。
場所はＩＳ試験用のビーチで、四方を切り立った崖に囲まれている。ちょっとした秘密のビーチだ。
一夏達はＩＳスーツに着替えている。だが千夏は専用のＩＳスーツではなく、ＩＳ学園標準のＩＳスーツを着ている。それは、あのラウラの事件で着れなくなってしまった為、専用のＩＳスーツが一つしかなかったからだ。そして専用機持ちは大量の装備が運び込まれ、その対応に追われている。追われているのだが……

「……ううぅ…痛い…」

「……いってぇ…」

一夏と千夏は、頭に出来たタンコブを押さえていた。千夏は一つ、一夏は三つだった。
何故タンコブが、一夏と千夏の頭に出て来ているかと言うと……

「馬鹿者、男女が風呂に入るなど言語道断だ。入りたければ付き合ってからにしろ」

「ち、千冬姉！何言って――――――！？」

バシィンッ！

「織斑先生と呼べ、馬鹿もんが」

「はい、織斑先生……」

一夏のタンコブが四つになった。

「？付き合うって？友達との裸の付き合いですか？」

千夏がそう言うと一夏は崩れ落ち、千冬はため息をついた。

「は、はははは……」

「まったくコイツは……」

「？」

千夏は首をかしげて二人を見る。

「ガッティーノ、お前は男と入ったんだぞ？気にしないのか？」

「？、父と入った事はありますよ？小さい頃ですけど」

「状況が違うだろ状況が」

「そうですか？」

「そうだ。織斑がお前に何もしないとは限らないぞ？」

「何も……」

千夏は黙り込み、風呂での出来事を思い出したのかそのあと顔を赤くした。

「あ、えっと…そのぉ……」

「？……まさか…」

千冬はゆっくりと一夏の方に向いた。その顔は鬼神の様に恐ろしい顔をしている。

「織斑……」

「――――え？な、なんです――――ひぃ！？」

一夏は後ずさり、怯えた表情で千冬を見る。

「お前と言う奴は……」

「ま、まってくれ！な、何を！？」

「ガッティーノを傷物にしたな？」

「なぁ！？ち、違います！俺は千夏に手を出しておりません！」

「じゃあ何故、ガッティーノが顔を赤らめている？」

「え、えーと……」

一夏は昨日の事を思い出し、少し顔を赤らめる。

千冬はらちが明かないと思い。千夏に向き直り事情を聞く。

「ガッティーノ、織斑に何かされたか？」

「え？えっとぉ…そのぉ……」

千夏は説明しにくいのか、上手く言えないでいた。

「……ふう…ガッティーノ」

「は、はい」

「今は授業中だからここまでにするが――――――」

「はい……」

「織斑に何かされたらすぐに私に言え、姉として弟を叩きのめす」

「え？」

「ちょ！？」

「当たり前だ、弟の失態は姉の責任だ。すぐに言えよ？」

「あ、は、はい」

「そ、そんなぁ……」

千冬はそう言い授業に戻り、千夏と一夏は少し話した。

「一夏、昨日の事なんだが……」

「……ああ、わるい…」

「い、いいって、事故だし……助けようとしたんだろ？」

「まあ…そうなんだが……」

「ならあたしは気にしねえよ。一夏はワザとした訳じゃあ無いんだから」

「あ、ああ、ほんとにすまん……」

一夏は嬉しいのか嬉しくないのか複雑な気分だった。
千夏もあまり気にしてないらしく、普通に接する。

（う～ん…気にしてないと言われると悔しいなぁ……千夏は俺の事を本当に何も思って無いのか？）

（じ、事故とは言え、い、一夏と……キ、キスをしちまうなんて…
…鈴にわるい事をしたなぁ……）

一夏と千夏は思い思いに考えていた。二人が考えているとラウラが遅刻して織斑先生にＩＳのコア・ネットワークについて言うように言われ、言い終わった所だ。一夏達も何時までも考えている訳にはいかず、
千冬の授業を聞くその時、千夏とラウラの目が合いラウラは少し複雑そうな目で見た後、すぐに千冬の方に向いた。その仕草に千夏は戸惑ったが、授業が始まるので考えるのは中断した。

「さて、各藩ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。
専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はーい、と一同が返事をする。一夏や千夏も自分の役目をする為、行動する。
そして千冬はＩＳ「打鉄」を準備している箒を呼ぶと、

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

箒は呼ばれ、千冬の前まで来る。

「お前は今日から専用――――――――」

「ちーちゃ～～～～～～～～～～～～ん！！！」

ずどどど……！と砂煙を上げながら人影が走ってくる。否、滑って来ている。その人影の足元に何かスケートの様な物が付いているらしく、それで滑っているようだ。

「……束」

千冬は心底疲れた様にその滑ってくる人影の名前を吹いた。
立入り禁止もなんのその、変態の頂点、良いか悪いか分からない方の天才・篠ノ之束は堂々と臨海学校に乱入した。

「やあやあ！、会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグ（剥ぐ）しよう！愛を確かめ――――ぶへっ」

飛びかかる束を千冬が片手で掴む、しかも顔面。
手加減なしなのか、思いっきり指が食いこんでいる。束が千冬に片手で顔面を掴まれ、

足についていた大型のスケートだけが、束の足から外れて爆走している。
ちなみに、そのスケートの前からブレードの様なものが出ていて、石と雑草をスパスパ切っていたのは知らない……知らないったら知らない。

「うるさいぞ、束。それと爆走しているアレを何とかしろ」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

そしてその拘束から抜け出す束はただ者ではなかった。
よっと言って着地しようとすると、さっきまで束の足に装着していたスケートみたいな物が束の着地場所へ走り……

「合・体！」

ガシッーン！と束の足とその機械が合体した。

「うんうん、にっくんの作ってくれたスティグロくん二号は役に立つねぇ！」

そして束はスケート…スティグロくん二号が装着されたまま箒の方に走ってキキィー！とドリフトして箒の前に止まった。ちなみに何故二号なのかは後から束が改造したからだ。速度と威力も段違い。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。大き

くなったね、箒ちゃん。特にちうちゃん並みのオッパイが」

ガンッ！ドゴォッ！

「殴り叩きますよ」

な、殴ってから言ったぁ……。し、しかも日本刀の鞘とみね打ちの連続打ちで叩いた！ひどい！箒ちゃんひどい！」

頭とお腹を押さえながら涙目で訴える束。そんな二人のやり取りを、一同はポカンとして眺めていた。

「え、えっと、この合宿では関係者以外――――」

「んん？奇妙奇天烈な事を言うね。ＩＳの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……」

真耶、見事に轟沈。

「い、一夏……」

「わかってる……束さんに何言っても無駄な事は分かってるから好きにさせてた方が良いんだ」

「そうか……」

「そうだ……」

千夏は悟り、それで納得した。

「おい束。自己紹介しろ。うちの生徒たちがこまっている」

「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

そう言ってくるりんと回って見せる。その自己紹介を見ていた千夏は……

「……まあ、原作の一夏の挨拶よりかはマシか……」

「え？俺ちゃんとやったぞ？千夏のおかげだけど、それと原作って？」

「気にするな。とりあえずあたし達は準備をしよう一夏、本国から来たＶＯＢのテストを手伝ってくれ」

「ん、わかった。あーあと、俺の機動も見てくれないか？上手くなってるか感想が欲しいし」

「オッケー」

二人が束から視線を外し、作業に取り掛かる。その二人のやり取りを少し遠目で見ていた人物がいた。

「……」

箒が一夏と千夏の二人を見て苦しそうに、そして悲しみの目で二人を見ていた。

千夏が一夏に話しかける事に一夏は嬉しそうに笑顔で返事をする。
その一夏が千夏に向ける笑顔を見るたびに胸が苦しくなる箒、暗い感情ばかりが頭を過っていく。

（何故……何故一夏は千夏にそんな笑顔を向けるんだ……）

一夏を想う心は誰にも負けないと自認していた箒は急に不安になる。

（一夏は……千夏の何処が良いって言うんだ……！）

自分だって負けてないと思っていた。だが結果はどうだ……

（何故一夏はそんなにも千夏が好きなんだ……！？）

箒は心が暗い感情に染まっていき、邪の考えが浮かびあがる。

（…千夏さえ……千夏さえいなければ……！）

箒は千夏を自分の大切な者を奪う敵に見えてならなかった。
その思考は束が話しかけて来るまで続いていた。

「あー、いたーい。ちーちゃんは本当に手加減なしだね……？、箒ちゃん？」

「……」

「おーい、箒ちゃ～ん」

「……」

「むむむ、無視かなぁ？」

「……」

「そういう子には……とうっ！」

ムニュッ

「ひゃあ！？」

「おおー、箒ちゃん、やっぱり大きくなってるねぇ。おねえちゃんはうれｓ「バキッ！」グヘッ」

束は考え事をしていた箒の胸を鷲掴みにして揉む、そして手をプルプルさせて束を吹っ飛ばした。

「姉さん……私は今考え事を――――――」

「怖い顔してたよ」

「！？」

「そんな怖い顔しちゃダメだよ。箒ちゃん、お姉ちゃんは箒ちゃんの笑顔が好きなんだから」

束は少し真剣な顔をして箒に言う。だが箒はそれどころではなく、

話を変えた。

「っ――――――……それよりも、頼んでおいた物は……？」

箒は束の言葉を聞きいれず、束に頼んだ物を早く出してほしい様だった。

束は少し寂しそうにしていたが、すぐに切り替えて目をキラーンと光らせる。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

びしっと直情を指差す束、その言葉に従って箒も、そしてほかの生徒たちも空を見上げる。

「――――――――――――――――――――、あれ？来ない？」

空を見ていた千夏が、すぐに来るはずだろう箒の専用機が来ない事を疑問に思う。

「……何も来ないな」

「そう、だな……こない「ボコッ」な？」

千夏は音の発生源がした自分の足元を見る。

「なんだこれ？」

千夏の足元にあったのは地面に付き出る鉄の塊だった。異様に尖った物が付き出ていて、一夏も気づいたらしく千夏の足元に視線を送

る。

「なんだよこれ？あぶないなぁ……」

千夏が怪我したらどうすんだ。と付け加えて千夏に近ずく、すると……

ギュウウウウウウウウンッ！！

その地面から突き出た突起物が高速回転して、周りの土を吹き飛ばす、

「え！？」

「！？千夏！はなれろ！」

「え、あ、え、ひゃあ！？」

一夏は千夏の手を引っ張っぱり、抱き寄せるようにして後ずさる。
その突起物が地面を掘りながらせり上がり、全体を露わにした。

「な、なんだよ……これ？」

「こ、これって…掘削機？」

その形は、前に掘削機が付いた機械だった。その後ろにはコンテナ

の様な大きな箱もついている。
そして、その掘削機はプシューと音を立てて二つに分かれ、その中からは――――――

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！全スペックが現行ＩＳ上回る束さんお手製のＩＳだよ！」

真紅の装甲に身を包んだその機体は、束の声に応えるかのように動作アームによって外へ出てくる。

「…一夏、あたし束さんの言った言葉に気になるところが……」

「奇遇だな。俺もだ……」

二人は気になる単語を聞いて疑問視していたことを口にする。

「やり過ぎだ」

二人は声をそろえて束の暴走に恐怖した。
そんなこんなで話は進み、箒は紅椿を装着し一夏は束に白式を見せ、セシリアは束の毒舌で撃沈された。千夏は本国から送られた。増設ブースター「ヴァンガード・オーバード・ブースト（ＶＯＢ）」のインストールに入った。このＶＯＢは時速約２０００ｋｍでの高速移動を可能とした増設ブースターだ。
千夏がその装備の準備をしていると……

「やっほー、ちうちゃん！またあったね～」

「ど、どうも」

千夏はどもりながらも返事をする。束さんの後ろで口をあんぐりあけて呆けている一夏が気になっていたが、

「ねえねえ、ステイシスちょっと見せてくれない？」

「え？あたしのＩＳをですか？」

「そう。いいかな？」

「いいって言われても……」

千夏は千冬の方に目をやって確認を取ると、千冬がコクッと頷いた。ＯＫが出たらしい。

「わ、わかりました」

「うん！ありがとね」

千夏は自分への態度に疑問を持ちながらもステイシスを呼び出す。

（――――――、変身！）

『――Ｓｅｔ　ｕｐ！』

あたしの呼びかけにステイシスは応え、ＩＳが展開される。

「おおー、カッコいいね！ちうちゃん！」

「は、はあ、どうも……」

「んじゃあ、さっそく……ブスッとな」

ブスリッ！

「いったあああぁっ！？」

「あ、間違えた」

束は千夏のステイシスの装甲にコードを刺すはずが……

「束さん！そこは違うでしょ！？」

「あははは～ゴメンねー？間違ってちうちゃんのおしｒ「いわなくていいです！」むむ、とめられちゃった」

千夏は溜息を吐く、改めて束にステイシスのデータを見せる。

「早くお願いします……」

「ごめんごめん。じゃあ今度こそ――――――」

そう言って束は狙いを定めて……

「――――――――、二度目はＮＧですよ？」

「あ、バレた？」

「やる気だったんですか！？」

「いや～、ちうちゃんのお尻がなかなか良くて」

「感想なんて要りません！てか言わないでください！」

「何をぉ！ちうちゃんのお尻は国宝級なんだよ？」

「だから言わないでください！そんなこと言ったらあたしは明日からお尻を隠しながら生活することになります！」

「モジモジしながらお尻を隠すちうちゃん……イイ…」

「何言ってるんですか！？」

束は手をワキワキしながら千夏に近付く、千夏は本能的に危機を察知したのか後ずさる。

「うふふ、さあ…ちうちゃん……」

ワキワキ

「あ、……い…や……こ、来ないで……」

「さあ…さあ！」

ワキワキ

「あ…ああ……」

「いっただっきまー「ズドンッ！」す？」

束が涙目の千夏のお尻に迫ろうとした瞬間。束の目の前に大型の粒子カノンが降って来た。

そのカノンはところどころ焼け焦げており、まるで大気圏を突入したスペースシャトルの様だった。

「……あ、あははは……ち、ちょっとまっててね？」

束は千夏から離れて、ポケットから携帯を取り出す。

「――――――――あ、え、えっと……にっくん？」

束は電話の主につながったのか、少しどもりながら返事をする。

「あ、あのね？遊びだからイジメじゃないんだよ？だから――――――」

束は携帯の相手に何か弁明をしているらしく。何処となく焦っていた。

「ち、違うよ！？そ、そうじゃ無いんだよ！だから――――――」

束は何か言われたのか、少し顔を青くさせていた。

「……すみません…」

「な、なんなんだいったい？」

千夏は訳が分からず首をかしげていた。束は電話が終わり、千夏のもとに戻ってくる。

束が戻った事で千夏はまた怯えたような目で体を隠す。

「ひっ……」

「あーえっと……もうやらないから怯えなくていいよ？」

「ほ、本当ですか？」

「うん、ほんとだよ。じゃあさっさと始めようか！」

「あ、は、はい」

そう言って千夏は気を取り直して束にデータを見せた。

その後、真耶が小走りで千冬のもとに行き、事態は一変する……

「――――――――――、ハ！？千夏の尻に危機が！！」

「……なぜ、尻なのだ……」

一夏が何かを察知し、箒が静かなる怒りに身を燃やす様な事があった様な無い様な……

オマケ・「幸せの意味」

俺は今、合宿二日目の朝を迎えている。
今日も天気がよく太陽がさんさんと部屋を照らす。
その熱い日差しに照らされて起きた俺は、別の意味で猛烈に顔が熱くなった。

「な、ななななんで千夏が俺と同じベットに！？」

そう、千夏が俺と同じベットで寝ていたからだ。
俺は飛び出しそうになる声を押さえて、千夏を見る。

「……スウゥ……スウゥ……」

「……寝顔も可愛いじゃねえか……」

俺は千夏の寝顔を見て少し幸せな気持ちになる。

「……」

プにプにッ

「んぅ……スゥ……」

（……すげえ可愛いんですけど!?）

俺は心の中で叫んだ。千夏の頬は柔らかく、プリンに引けを取らない柔らかさだった。
その上触った時に出す声や顔は俺にとって天使に見える。

「も、もう一回触ろうかな?」

そう言って手を伸ばそうとすると……

「寝てる相手にイタズラか？織斑」

ドキィッ！と驚き、後ろを振りむくと、

「まったく、お前は朝っぱらから何をしてるんだ」

バシィンッ！

早朝に良い音が響く、

「――――つぅっ……」

「ガッティーノのもそうだが、お前はもう少し紳士になれ」

「はい、すみません……」

俺は千冬姉に謝りながらベットを出ようとすると、

ギュッ

「え？」

右手に柔らかい感触がする事に気づき、俺は見てみると、

「千夏？」

「んんぅ……スゥ……スゥ……」

千夏は眠りながら俺の手を握っていた。

俺が手を剥がそうとすると千夏が嫌そうな顔をしてどうにも手を離す気にはなれない。

「フッ本当に好かれているな。お前は」

「あははは、まあ、恋人の仲じゃないって言うのが悔しいんですけど……」

「だな。さっさとプロポーズしないと他の男に取られるぞ？」

「嫌だな。ＩＳ学園には女しかいないんですから大丈夫ですよ」

「そうとも限らんぞ？何せガッティーノは次期イタリア大統領だ。その権力目当てで近ずく男は絶えないはずだ」

「え？」

「お前は何も考えなかったのか？コイツはかなり人気なんだぞ？各国の大富豪は権力欲しさに近ずいてるからな」

「そんな……」

もし、そんな奴が千夏の婿になったら……

「それじゃあ千夏が幸せに――――――」

なれない。そう言おうとした時、千冬姉が言葉を遮る。

「お前が幸せにするのだろう？」

「え？」

「お前がガッティーノを幸せにしないで誰が幸せにするんだ？」

「千冬姉……」

「お前は今度こそ守ろうと誓ったのだろう？」

「……」

そうだ……俺は千夏に何時も守られてばっかで……千夏を守った事なんて一度も……

「前にガッティーノが言った言葉なんだがな……」

「？」

「漢なら、誰かの為に強くなれ。歯を食いしばって思いっきり守りぬけ……とな」

「千夏が……」

「そうだ」

千夏が言った言葉に、俺は妙に心が熱くなる。

「……そうだな。俺が千夏を守って幸せにしなきゃな……」

「そうだな……（ふん、漢らしい顔をするじゃないか、一夏……）」

俺は開いている左手で千夏の顔を撫でる。

「んううぅ……」

「千夏……俺、絶対に千夏を守って……幸せにしてやるからな」

千夏の顔を撫でながらそう決心して、千夏を起こす。

その後、起きた千夏が俺と風呂に入った事を千冬姉にばらしてしまい。

千夏と俺はシバかれた。

第四十五話「カオス再び」（後書き）

千夏「なんか手が疲れたような……」
一夏「き、気のせいじゃないか？」
千夏「そうか？なんかあったかかったなぁ……」
一夏「そ、そうか……（お、俺の手があったかい？）」
千夏「まあ、いいかさっさと朝食にしようぜ？」
一夏「そうだな。行こう」

千冬「……思いまだ届かず……か…（一夏も苦労するな。これは…）」

第四十六話「戦いの始まり」（前書き）

千夏「福音……とうとう来たな…」
作者「ですね……長かった……」
千夏「大丈夫か？あたし……」
作者「水没は免れません。あの人と同じ運命です」
千夏「出来れば回避したかった……！」

第四十六話「戦いの始まり」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の御座敷・風花の間では、あたし達専用機持ち全員と教師陣が集められた。さっきまで行われていたＩＳの装備試験とデータ取りは山田先生が来て、千冬さんに何か話すと行き成り千冬さんは授業を中止し、この場に呼ばれた。あたしはこの展開を知っている……とうとう来たんだ。戦いが……

「では、現状を説明する」

千冬さんがそう言うと、照明の落とした室内に、ぼうっと大型の空中投影ディスプレイが浮かび上がる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御化を離れて暴走。監視空城より離脱したとの連絡があった」

やはり相手は福音か……

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過する事がわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

淡々と続ける千冬さん。その次の言葉にあたしは息を飲む。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

福音との戦いは原作と同じ専用機持ちとなった。あたしは福音のス

ペックを頭の隅から引っ張り出す。

「それでは作戦会議（ブリーフィング）を始める。意見があるなら挙手するように」

「はい」

あたしが頭の中から福音のデータを思い出していると、セシリアが手を上げる。

「目標ＩＳの詳細なデータスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二ヵ国の重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付けられる」

「了解しました」

千冬さんがセシリアのスペックデータの表示を聞きいれ、福音のデータが表示された。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲竜を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊兵装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しいがするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

セシリア、鈴、シャル、ラウラは真剣に意見を交わしている。その時、一夏があたしに声を掛けてきた。

「なあ、千夏」

「福音のあの銀の鐘（シルバー・ベル）の攻撃は……ん？なんだ。一夏」

「お、俺達ってもしかして今表示されている軍用ＩＳを止めるのか？」

「ああ、そうだぞ」

「それって俺も？」

「まあな」

「そ、そうか……」

一夏は項垂れる様にして頭を掻く、

「まあ、大丈夫だろ？……多分だけど……」

「多分って……」

「しかたねえよ。あたしだって軍用ＩＳの相手なんて……しかも実戦だし」

「そうなのか？」

「ああ……もし失敗すれば…最悪…」

あたしは表情を曇らせ、一夏を見る。

もし福音が表示されたデータと違えば、一夏が危ない……

「最悪……て、なんだよ？」

「……死ぬ……かもしれない」

「！」

あたしは両手の拳を強く握りしめ、顔を俯かせた。

「……させねえよ」

「え？」

「ぜったい千夏は死なせねえよ…俺が……俺が千夏を守る」

「一夏……」

一夏は顔を上げ、あたしを見る。その目は決意を宿し、揺ぎ無い信念が見えた気がした。

「だから千夏、絶対死なせないからな……」

「……うん、わかった」

あたしは頷き、一夏は微笑んでいた。
そしてあたし達はお互い決意を固めるとブリーフィングに集中する。
その時、

「待った待ーった。その作戦ちょっと待ったなんだよ～！」

作戦室に明るい声が聞こえた。あたしは何処から来るか分かるから
上を見ていると……

ガタッ

「え？」

あたしが座っている床が一瞬揺れた。そして

ドゴっ！

「うわぁ！？」

「千夏！？」

急に床の畳が浮き上がり、あたしは投げ出された。

「！、危ない！」

一夏はあたしの下に滑り、あたしを受け止めた。

「――――――?、一夏?」

「ふう…大丈夫か?千夏」

「あ、ああ、平気だ……」

あたしは一夏を押し倒す体勢だった。あたしと一夏はそのまま見つめ合う形で固まったままだった。

「い、一夏、あの……ありがと」

「い、いいって……千夏が無事なら」

一夏はあたしを見つめている。その目は、心なしか熱い物を感じる。そうやって見つめ合っていると、

「……何をしている…一夏」

「え?」

誰かに声をかけられ、あたしと一夏は振り向くと、

「箒?」

「……さっさと離れろ。千夏」

「え?わあ!?」

箒はあたしの腕を持って一夏から剥がした。

ドンッ！

「痛！」

「！千夏！」

あたしは箒に、少し乱暴に一夏から剥がされ、あたしは畳に尻もちをついた。

「――――――つぅっ……」

「大丈夫か？ちｋ「一夏」え？」

あたしに心配して近づこうとした一夏は、箒の声で呼びとめられた。

「今は作戦会議だ。ブリーフィングに集中しろ」

「いや、でも――――――」

「いいから……！」

箒は一夏の腕を引っ張り、千冬さんと何か話している束さんのところに行く。

てか束さん、上だと思ったら下から来るってどういう事？、原作と違くね？

「ほ、箒？どうしたんだ？」

「なんでもない」

箒は少し無理やりに一夏を連れていく。その声は少し怒っているようで、感情があまり無い様に思えた。

「な、なんだったんだ？箒は……」

あたしは訳が分からず、尻もちをついたお尻を擦りながら立ちあがり、千冬さんの会話を聞いた。

時刻は十時半。あのブリーフィングで束さんが爆弾発言し、箒の専用機が最新の第四世代機ＩＳである事が判明して、皆は口をぽかんと開けていた。まあ、そんなこんなで作戦まじかになり、あたしは本国から送られた増設ブースター『ヴァンガードオーバードブースター』の準備に入っている。

「頼むぞ。ステイシス……」

あたしは自分のＩＳにお願いする様にして、展開した。

「……やっぱり重いか……」

その増設ブースターはかなり大きく、さすが超高速移動用だけはある。

「ふむ、ブースターに異常は無しっと……一夏、箒、そっちはどうだ？」

「ああ、問題無い」

「……こちらも問題ない」

一夏の白式は問題ない様だな。だが箒、なんでそんなしかめっ面なんだ？

「なあ、箒」

「……なんだ？」

「あたし……何かしたか？」

「……別に何もしていない」

「でも……」

「いいから早く準備したらどうだ？お前の装備が一番時間を取っているのだぞ」

「あ、ああ、わかった……」

「ふん……」

箒は赤椿を展開したまま一夏に近ずき、作戦の再確認をしている。何というか……あのブリーフィングから箒はあたしに対してなにか冷たい。

（あたし、箒に何かしたのか？分からん……）

少し遠目から箒を見てみると、一夏と話す時は表情は少し硬いが一夏に向けて微笑んでいるように見えた。

（あの顔……少し浮かれているな…どうすれば……）

あたしは、箒が力に溺れて一夏に怪我をさせてしまった事を原作で知っている。それをなんとか阻止できないか……

（てか、増設ブースターが届いて良かった。これなら作戦に参加出来るし）

最初は一夏とセシリアで作戦を遂行する事になっていたらしかったんだが、束さんが乱入して白式と赤椿になったんだよな。でも……

（どうして千冬さんは……あたしを作戦に加えたんだろ？）

そこが分からん。考えていると千冬さんの会話がよみがえる。

回想中

「ガッティーノ、お前も作戦に参加しろ」

「え？あたしがですか？」

「そうだ。お前はもうインストール出来たのだろう？」

「ええ、まあ……時間短縮の為に別々にインストールしてましたから後は組み立てるだけです」

「なるほどな。では直ぐに取り掛かれ」

「了解」

あたしがＶＯＢの組み立てに入ると、別の声が聞こえた。

「――――――織斑先生」

「ん？どうした。篠ノ之」

箒が千冬さんに話しかけた。

「……作戦の事についてですが」

「ああ、なんだ？」

「作戦は、私と一夏で十分です」

「なに？……」

「え？」

あたしは箒の言った言葉に一瞬、ポカンとした。

「……何故だ？」

「千夏のＩＳは高速戦特化型です。福音の攻撃には耐えられないかと」

「確かにな」

「あ、あの…箒？」

箒はあたしに一瞬目をやると、険しい目で見た後千冬さんに視線を戻す。

「ですから、千夏はこの作戦には組まないで――――――――」

「だが人数が多ければそれだけ作戦成功率を上げることは出来る」

「！、で、ですが！」

「今回の作戦は三人で行う。以上だ」

そう言って千冬さんは身を翻し、ブリーフィングに戻る。
残された箒は千冬さんの後ろ姿を見ながら険しい表情をしていた。

「箒？」

「……」

箒は目を細めてあたしを見た後、千冬さんに続いてブリーフィングを受けた。
その目はなんだが親の敵を見る様な目だった。

「あたしがなにしたってんだよ……まったく…」

あたしは溜息を付く、ブリーフィングに戻った。

回想終了

（千冬さんの行動にも不思議だけど、なんで箒があたしを目の敵見たいに見るんだ？）

あたしが訳が分からず、唸っていると、

『織斑、篠ノ之、ガッティーノ、聞こえるか？』

ＩＳのオープン・チャンネルから千冬さんの声が聞こえる。一夏と箒、そしてあたしは頷いて返事をした。

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がけろ』

「了解」

『織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？』

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてから実戦経験は皆無だ。突然何かしらの問題が出るとも限らない』

『分かりました。できる周囲で支援します』

『それと……ガッティーノ』

「はい、なんでしょう？」

『お前が一番専用機になれている。織斑の側でサポートしてやれ』

「了解、受けた割りました」
あたしはそう返事をした。
「千夏、よろしくな」
「ああ、任せろ」
一夏はあたしに近ずいて拳を突き出す。あたしも拳を突き出して互いの手の甲をぶつける。
一夏がニヤリと笑い、あたしもニヤリと笑った。
『……遊んでいないでさっさと準備をしろ。一夏』
『え？いや、遊んでる訳じゃあ……』
『……ふんっ』
箒は少し不機嫌そうにして赤椿のスペック確認をする。
「箒、なんか怒って無いか？」
「あたしに聞かれても分からんよ……」
あたしと一夏が首を捻っていると、プライベート・チャネルで声が届いた。
『織斑、ガッティーノ』
『は、はい』

『織斑先生？』

プライベート・チャネルでかけてきたのは千冬さんだった。

『どうも篠ノ之は何故か不機嫌でもあり浮かれている。あんな状況ではなにかをし損じるやもしれん。いざという時は二人がサポートしてやれ』

「わかりました。ちゃんと意識しています」

「こちらも意識をします」

『頼むぞ』

それからまた千冬さんの声がオープンに切り替わり、号令をかけた。

『では、はじめ！』

こうしてあたしと一夏、箒は初の実戦へと向かった……

ここは人気のないビーチ。そこに二人の人影があった。

「おー、にっくんの言った通り作戦は三人で行ってるね」

「だな」

「よくわかったね？」

「予測はできるさ。束」

「普通は無理だよ～」

「そうか？」

「そうだよ」

二夏と束、二人が呑気に話している最中で、束は空中投影ディスプレイで何かを操作していた。

「ところでにっくん、いいの？」

「ん？なにがだ？」

「この設定にしたら、ちうちゃん結構危ないよ？」

「フッ、大丈夫だ。俺が惚れた女だぞ？簡単には死なない様に出来ている……それに――――」

「ステイシスにはある能力がある？」

「その通りだ」

二夏がニヤリと笑い、束は普通に笑う。

「そっか……さすがだね！にっくん！」

「まあな」

束はディスプレイに視線を戻し、操作する。

その目は少し寂しそうにしていたが二夏は気づかなかった。

「……（さーて、千夏はどう出るかな？）」

二夏は口を歪めて笑う。

（千夏が一夏を好きになって、俺がそれを横からかっさらう……）

そんな考えをしながら二夏は千夏達が飛んでいく空を見る。

（早く完全な良い女になってくれよ？千夏ぁ……）

二夏の心は千夏に恋焦がれる。だがその愛は狂気に満ちていた……

第四十六話「戦いの始まり」（後書き）

二夏「面白い展開になりそうだな」
束「そう…だね」
二夏「あまり乗り気じゃ無いな？」
束「うん、まあね……」
二夏「ナンクルナイサー、安心しろ」
束「……うん、にっくんがそういうなら……」
二夏「ああ、そうだとも（フッ、良い展開を見せてくれよ？千夏……）」

第四十七話「海中に没す」（前書き）

千夏「ぎゃあああああ！！」
一夏「ち、千夏!?どうした!?」
千夏「まだケモミミの傷が治って無かったから海水で傷に染みる～……！」
一夏「だ、大丈夫か？」
千夏「……なんとか…」
鈴「でも、福音にコジマナックルされたから無事所じゃ……」
千夏・一夏「あ」

第四十七話「海中に没す」

福音の停止作戦が開始され、千夏と一夏、そして箒は飛び立った。
箒は白式を展開した状態の一夏を乗せ、紅椿を飛ばす、
千夏は本国から送られた増設ブースター『ヴァンガードオーバードブースト』で空を駆け抜ける。
そして、目標高度五百メートルに達したところで千夏が一夏にオープン・チャネルで話す。

「一夏、お浚いだ。今回の目的は軍用ＩＳの停止だ。まずは紅椿の常時ブーストで一気に福音まで接敵するぞ。試験中のＩＳとは言え、軍用だ。火力は侮れんぞ」

「わかった！」

一夏は力強く応え、身を引き締める。

「箒、お前も油断するなよ？」

「分かっている……」

箒は千夏に声をかけられ、どこかいらついていた。
千夏は少し寂しそうに箒を見て、作戦中だと思いだし、意識を福音に向ける。

（なんとしてでも二人を守らないと……！）

そう考えていると、箒は声を上げる。

「見えたぞ！一夏！」

「！！」

「ついに来たか！」

ハイパーセンサーの感覚情報で、目標を映し出す。だが千夏達は福音の姿を見て驚愕する。

「な、なんだよあれ！？スペックデータと姿が違うぞ！」

「どういう事だ！？」

「聞いていないぞ……」

福音の姿は『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』に相応しく全身が銀色をしている。だが、千夏達がスペックデータで見た福音とは違い、頭部から生えていたのは一体の巨大な翼ではなかった。

「あの軍用ＩＳの全身を包み込む武装はなんだ？」

「まるで無数の細い盾みたいだ……」

「アメリカめ……くそっ、いい加減な情報を！」

千夏は怒り、言葉を吐き捨てる。

「何のためのＢＲＦ（ブリーフィング）だ、ばかばかしい！」

三人は行き成りの事態に対処を焦る。

千夏は原作とは違う武装にまた恐れを抱くが、作戦中の手前、気持ちを切り替えるていると……

「……関係無い」

「え？」

「箒？」

「私と一夏がいれば奴は倒せる！行くぞ。一夏！」

「お、おい！箒！？」

箒は紅椿のスピードを上げ、敵に近ずく。

「お、おい！あたしを置いてくな！」

千夏も慌てて箒達の後を追った。

「目標に接触するのは十秒後だ。一夏、集中しろ！」

「あ、ああ」

一夏は戸惑いながらも零落白夜を発動させる準備に入る。

千夏もそろそろＶＯＢの限界が近い為、パージ準備に入る。そして……

「うおおおおおっ！」

零落白夜が発動し、それと同時に一夏はイグニッションブーストを

行って間合いを詰める。

（行ける――――――！！）

光の刃が銀の装甲に触れる、その瞬間。

「なっ！？」

福音は、なんと最高速度のままこちらに反転し、後退の姿となって身構えた。

（一度体勢を立て直し――――――いや、このまま押し切る！）

一夏は引くには遅すぎた為、相手の間合い今、反撃が来る前にケリを付ける。しかし――――――

「敵機確認。迎撃モードに移行。（アンサラー《報復者》）、稼働開始」

「！？」

オープン・チャネルで聞こえたのは抑揚のない機械音声だった。けれど、そこに明らかな『敵意』を感じて、一夏はギクリとした。

（なんだ？嫌な予感がする！？）

そして、一夏の悪い予想は数秒と経たずに現実となった。

ぐりん、と。行き成り福音が体を一回転させ、零落白夜の刃をわずか数ミリの精度で避ける。それは慣性制御機能（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）を標準搭載しているＩＳであっても、かなり難易度の高い操縦だった。

「くっ……！あの無数の板状の盾で急加速しているのか！？」

福音に付いている幾つもの板の様な盾にブースターが付いており、個別に噴射して福音の精密な急加速を実現している。一夏達は改めて『重要軍事機密』だと思い知らされる。

「千夏！箒！援護を頼む！」

「任せろ！」

「任された！」

一夏は箒に背中を預けて再度福音へと切りかかり、千夏は増設ブースターの出力を上げて突撃する。

「くっ！このっ……」

「一夏！慌てるな！奴の隙はあたしが作る！」

「千夏！？」

千夏は突撃し、福音に接近する。千夏が福音の目と鼻の先まで近づいた時、福音の武装が展開された。

銀色の板状の物が、クルリと周り裏側を見せる。その裏側には数十もの穴が開いており、その穴が光だし、千夏はヤバッ！と言ってＶＯＢを……

「まだ早いが、仕方ない！パージ！」

ガシャンッ！

ＶＯＢがステイシスから切り離されて、福音の方へ向かうそして……

ドガアアアアアァンッ！

切り離され、分解せずに突っ込んだＶＯＢは福音を巻き込んで大爆発を起こした。

「どうだ！ＶＯＢアタックの威力は！」

「す、すげえ……」

「……」

一夏は唖然とし、箒はあまり面白く無さそうにして千夏を見ている。

「一夏、相手は軍用ＩＳだ。まだやられちゃいねえよ」

「ああ、わかってるさ」

そう言ってると、案の定。黒煙が晴れて、福音が姿を現す、その姿は少し傷が付いている有るものの、

ダメージはあまり期待出来なかった。

「やっぱりあれで停止はしてくれないか……」

「ふん、糠喜びさせるな」

「っ――――――すまん……」

「おい、箒。何もそんな言い方――――――」

「さっさと仕掛けるぞ！」

そう言って箒は敵に向かった。

「あ！おい！たく……いったいどうしたんだよ。箒は……」

「分からない……だけど何か焦ってたな。こりゃあヤバいかも……一夏！あたし達も行こう！」

「あ、ああ！わかった」

そう言って一夏と千夏は箒を追う。箒は福音とすでに交戦していた。

「一夏！二面攻撃で箒を援護！そんで隙が出来たら一夏の零落白夜で！」

「了解！」

一夏と千夏は複雑な回避運動を行いがらながらも箒に連射を繰り出す福音へと、二面攻撃を仕掛ける。

――――けれど、一夏と千夏、箒の攻撃はかすりもしない。福音はとにかく回避に特化した動きで、
その上同時に反撃までしてくる。この特殊型のスラスターは、その単純な外見とは裏腹に実用レベルが異常に高い代物だった。

「一夏！私が動きを止める！！」

「わかった！千夏！援護してくれ！」

「あいよ！」

言うなり、箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り出す。しかも、腕部展開装甲が開き、そこから発生したエネルギー刃が攻撃に合わせて自動で射出、福音を狙う

（箒の機体も化物だな……！）

（まあ、あたしゃあ福音の方が怖いけどな……！）

二人が意思疎通で考えていると箒は紅椿の機動力と展開装甲による自在な方向転換、急加速を使って福音との間合いを詰めていく。この猛攻には、流石に防御を使い始めた。

「？a……♪」

甲高いマシンボイス。その刹那、板状の砲門全てが外側に回転して露わになる。
その数、八十。しかも全方向に向けての一斉射撃。

「やるなっ……！だが、押し切る！！」

箒が光弾の雨を紙一重に、拍撃をする。――――――――――隙が、できた。

「！」

「一夏！今だ！……って、一夏！？」

だが一夏は福音とは真逆の、直下海面へと全速力で向かった。

「一夏！？」

「うおおおっ！！」

イグニッションブーストと零落白夜。その両方を最大出力で行い。数発の光弾に追いついた一夏はそれをかき消す。

「何をしている！？せっかくのチャンスに――――」

「船がいるんだ！海上は先生達が封鎖したはずなのに――――ああくそっ密漁船か！」

「密漁船！？じゃあ早く避難勧告を出さないと！」

千夏は密漁船に避難勧告を言いに行こうとすると、

「そんな必要はない！」

「え！？」

「箒？」

千夏は箒の声に驚き、振り向く。

「犯罪者などを助ける必要なんてない……。そんな奴らは――――！」

「箒！！」

「ッ――――――――！？」

「箒、そんな――――――――そんな悲しい事はいうな。言うなよ。力を手にしたら、弱い奴の事が見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

（……ん？この会話って――――――――まさか！？」

千夏はすぐに福音を探す。

（――――――いた！）

千夏は福音を見つけた。その福音は今まさに箒を狙っている。

「クッ！間に合え！」

千夏がオーバードブーストで箒に近付く。

「千夏！？」

「え？……」

「間に会え！（頼む！ステイシス！箒を助けて！）」

千夏は願うようにして箒に急接近し、箒の手を握った直後、福音から凶弾が放たれた。

「千夏！箒ぃ！」

一夏は叫び、千夏は箒を守るように抱きしめて回避する。しかし……

チュンッ！ボンッ！

「！？、メインブースタがイカれただと！」

福音の光弾がブースタに当たり、千夏のＩＳのブースタから黒煙が上がる。

そしてメインブースタに直結しているＰＩＣも機能が著しく落ちていき、高度が下がってゆく。

ステイシスは高速型を特化させた機体でところどころにまだ改良が進んでいないところがあり、

メインブースタとＰＩＣを繋げて驚異的な加速と速度を実現させていた。つまり……

「狙ったか、福音！（クソ！ＰＩＣと直結したのが仇に！）」

千夏は福音を睨みつける。

「よりによって海上で……クッ、駄目だ、飛べん！」

一夏は福音から二人をそらす為、援護している。

一夏は福音に集中している為に千夏達を助ける余力が無く、見ていなかった。

このまま箒を掴んだままでは海に落ちる。そう判断した千夏は箒に助けを求む、

「箒！あたしを引きあげてくれ！このままじゃ――――――」

千夏が箒に助けを求めようとしたら箒が握っていた千夏の手を緩める。

「！、ほ、箒？」

「……」

「ほ、箒…は、早くしないと――――――」

「……すまない…」

「え？」

箒は千夏のスティシスの手を離し、千夏とスティシスは速度を上げながら落下していく。

「うわあああああっ！？」

「！？、千夏！！」

一夏が千夏を助けに行こうとしたが、福音が邪魔して助けにいけない。

「くっ、箒！千夏を助けてくれ！」

「……」

箒は震えていた。一夏は箒の今の状態じゃあ助けられないと考え、

「千夏！クソ！箒頼む！千夏をぉ！！！」

「あ、う……」

「箒！クソ！邪魔をするな！」

箒は千夏が落ちていく様子を見る事しかできず。そして自分が突発的にしてしまった過ちへの罪悪感が
渦巻き、何も出来ないでいた。そして……

ドボォーーーーンッ！

千夏のステイシスは海に落ちた。

「ゴポッ！……ぷはぁ…ハア……ハア…」

「！、千夏！よかった……」

千夏は海には落ちたが何とか海面から浮上し、一夏が安堵した様に息を吐く。一夏は千夏を助けに行こうとすると……

「え？」

一夏の隣を駆け抜ける影……福音が海面に向かって飛んでいく。その先は……

「！？、千夏逃げろおおおおおおお！！！！」

「え！？」

福音はもう目の前まで来ていた。そして福音の右腕からあり得ない物が出てくる。

「！？、あ、あの緑色って……」

千夏はあの時のラウラのＩＳとの戦いを思い出し、戦慄した。その間にも福音に右腕は緑色の粒子が渦巻始める。まるで力を溜めている様に……

「くそ！間に会えええええ！！！！」

一夏もイグニッションブーストで福音よりも早く千夏のところに行こうとしたが若干、福音の方が早かった。

「そんな……これがあたしの最期と言うか……！」

千夏は再度福音を睨む。

「認めん、認められるか、こんなこと……！」

千夏は震えながらも福音を睨みつけ、そして……

ドゴオオオオオオオォォォォォォンッ！！！！！！！！！

「千夏あああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！」

一夏の叫びも虚しく、福音の緑の粒子が渦巻く拳は千夏と海面を吹き飛ばし、一夏はその衝撃で遠くに飛ばされた。そして千夏は……海中に没した……

千夏の最期を見ていた箒は怯えた眼差しで見ていたが、

その顔にわずかに見える笑みを、夕日が照らしていた。

第四十七話「海中に没す」（後書き）

箒はやってはならない事してしまった……
千夏は海中に没した……
そして一夏は……また大切な人を……守れなかった……

さて……これからどうなるんでしょう。感想お願いします。

第四十八話「大罪」（前書き）

作者「設定画が、書きたいですっ……！」
安西先生「……私はバスケ専門だよ」
作者「ですよねぇ……（ペイントツール探さなくちゃ……何が良いんだ？）」

第四十八話「大罪」

それは一夏が中学二年の頃の事だ。
鈴が中国に行って少したってから、千夏がいなくなった頃だ。

（なんで何も言わず行っちまったんだよ……千夏…）

一夏は中学校の教室の机に腕を組み、顔を机に伏せながら落ち込んでいた。

（箒や、鈴もいなくなって……千夏まで……）

想い人が急に何処かにいなくなった事で、一夏は塞ぎこんでしまっていた。

「おい、一夏、元気出せよ。な？」

「……」ブツブツ……

「駄目だなこりゃ……完全に塞ぎこんでる」

こんな一夏初めてだ。と言ってやれやれと首を振る一夏の悪友、弾が一夏を心配して声をかけたが、
完全に落ち込んでる一夏は聞こえなかった。

「おい、一夏もう帰る時間だぜ？千冬さんが心配するぞ？」

「……」ブツブツ……

「……はあ、鈴がいれば叩き起こしてくれんだがなあ……」

「……」ブツブツ……

「おい、一夏……たく、しゃあねーなぁ……」

弾は一夏の真正面に周り、声をかける。

「あのなぁ一夏、お前の今の状況を千夏が見たら心配するぜ？」

「っ――――――……」

弾が千夏の名前を出した瞬間、ピクっと一夏が反応する。

「お前がそんなんじゃあ千夏が帰って来たときに困るか悲しむぞ？」

「……」

「お前の好きになった女を悲しませたいのか？」

「……嫌だ…」

「だろ？ならしっかりしなきゃな！」

そう言って弾は一夏を立たせて教室から出る。

少々一夏は引きずられている状態だが……

「たく、世話のかかる奴だぜ。お前は……」

「……悪い…」

「いいって、俺も千夏が困る事にしたくは無いからな」

「……」

「なあ一夏、いい加減元気だせよ。な？」

「そう…だな…」

「そうだ。千夏が帰って来た時、お前がそんなんじゃあ千夏が悲しむしな」

「ああ、そうだ…な。俺が…しっかりしないと……」

一夏は次第に元気をだし、弾を安心したようにして頷いた。

「じゃあ、ゲーセン行こうぜ！あと女の子をナンパしに！」

「いや、俺はいい」

「即答かよ……いいじゃねえか、一夏がいねえと寄ってこねえんだよ！」

「俺は千夏一筋だ」

「な……はあ、なんつー奴だ……ここまで依存してるなんて、千夏はすげえな……」

「当たり前だ。千夏ほど良い女はいない。」

「千夏馬鹿め」

「褒め言葉だ」

そう言いながら二人は歩きだす。その顔は笑っていて、とても楽しそうだった。

「――――――――――――っ……う…あ……」

「！、一夏？」

俺は少しぼーとしていて状況が分からなかったが、眠り、夢を見た後に目覚めた事は分かった。

「……り、鈴？ここは？」

少し目が赤い鈴に聞くと、少し話しにくいのか黙っていたが、何かを決意した様に頷いて俺に話す、

「ここは旅館の部屋よ。一夏は福音の攻撃の余波で飛ばされたの」

「福…音？……！？」

俺は福音という言葉で次第に頭が覚醒し、飛び起きた。

「そうだ！福音！どうなったんだ！？」

俺は鈴に両肩を掴み、鈴に聞く。

「鈴、教えてくれ！福音は！？」

「い、一夏…落ち着いて…痛い…」

「あ…悪い…」

俺は鈴の肩から手を離して、少し自分を落ち着かせる。

鈴は少し痛そうにして両肩を抱いていた。その姿を見た俺は、乱暴にしてしまったと思い、反省した。

「……それで、鈴…」

「……福音は…まだ健在よ」

「そうか……」

「うん……」

「……！、そうだ…千夏は？」

「え……」

俺が千夏に名前を出すと、鈴は唐突に震えだし、顔を俯かせた。

「ど、どうしたんだ？鈴…どこか痛いのか？」

「……ウグッ……ヒッグッ……」

「鈴……？」

「…千夏…は…千夏……は……！」

「千夏が…どうしたんだ？」

鈴の様子に、少し戸惑いながらも聞く。

俺は急に悪い予感がした。

「千夏は……福音の攻撃を受けて…死んじゃったの…」

ナニヲイッテルンダ？リンハ……

俺は鈴の言った事を理解出来ず、ただ茫然としていた。

ここは、旅館の奥にある個室、だがその個室と言っても鉄格子と鉄の扉が付いている。
言わば牢屋だ。何故この旅館にそんな物があると言うと、何年か盗さｔ、ん、んー……ＩＳを狙った窃盗が入った為、急遽作られたのである。その牢屋に一人、入れられている女性がいた……

「……」

箒だ。だが箒の顔中心に打撲の跡がある。これは鈴が福音戦の映像を見た後に激怒し、箒に殴った事で出来た跡である。その時箒はされるがままで、泣きながら殴る鈴からの暴力に耐えていた。
そして何故箒が独房に入れられていると言うと……

「篠ノ之、福音の戦闘時にガッティーノの手を離した事に何か弁明はあるか？」

「……ありません…」

箒は、戦闘の際千夏の手を離した事によって福音との戦いが失敗した後に千冬によって拘束、紅椿を取り上げられた。

「……なぜ…ガッティーノの手を離した…！」

「……分かりません」

「分からないで済むか！」

「わからないんです……」

「人一人が死んだんだぞ？」

「……分かりません」

「お前の友だぞ……」

「分か…らない…です…」

「っ――――――――……そんなに千夏が憎かったのか？」

「……」

「お前はそんな奴じゃなかったはずだ……」

「……」

「一夏に想われる千夏を……そんなにも憎かったのか？」

「……」

「応えろ…篠ノ之箒…！」

「……そう…かも知れません…」

箒はポツリポツリと言葉を絞り出す、

「千夏は最初は良い友達と思ってました……だけど」

「……」

「一夏がアイツに想いを寄せている事が分かって……私は…」

箒の体はガタガタと震え、腕は自分を抱くようにして項垂れる。

「私は！……千夏が羨ましかった！……一夏が好きになった千夏を…妬んでしまった……！」

「……」

「だから私は！……千夏がいなくなればいいと思って……気が付いたら…私は…千夏を……」

「……そうか」

箒は己が犯した損酷な事実に泣きだし、嗚咽に、涙に、心が悲鳴を上げる。

「織斑先生…」

「なんだ？」

「私は…どうなりますか……？」

箒は千冬に悲願する様な眼差しで見つめ、千冬はそんな箒を見て、悲しみと皆に喋ってしまった自身の後悔に苦しむ、そして、

「……最悪…イタリアの政府からお前の身柄引き渡しが要求されるだろう……」

「……」

「だが……」

「……？」

「千夏はそれを望まないだろう」

「！っ――――……千夏は…もう…」

「ああ…だがそれでも…アイツは死んでなかったとしても……お前を守ろうとするだろうな」

「あり得ません！」

「……何故だ？」

「私は千夏を見殺しにした！もし生きていたとしても私を許すなんて思えない！」

「……」

「アイツは……アイツは……私が千夏を死なせたんです……！」

「……」

「私のせいで！……私の……私は千夏が福音に落とされた時…喜んで…しまった……」

箒は自分の気持ちを吐きだし、千冬はただそれを黙って聞いた。
全ての自分の心の中を吐きだした箒は、涙ながらに息を切らせていた。

「……箒」

「…はい……」

「何故お前は一夏と仲良くやれた？」

「え？」

箒は唐突に話しだす千冬に、少し首をかしげる。

「お前が、一夏と訓練をするきっかけを作ったのは誰だ？」

「そ、それは……」

「今の……一夏がお前と同じで剣道をやっていたのは誰の影響だ？」

「……」

「一夏とお前が喧嘩した時、仲を取り計らってくれたのは……誰だ？」

「……」

「千夏だろう……？」

「っ――――――――……」

箒は、何か思い出した様に顔を伏せ、唇をかみしめる。

「お前は、このままでいいのか？」

「私は……」

「篠ノ之は、そのままでいいのか？」

「わた…し…は……」

「……答えを出しておけ。私は戻る」

「……」

千冬はそう言って牢屋から出ていく。

「……私は…」

箒は自分がしでかした過ちの大きさに実感し、ただ辛い表情をするしかなかった。

ここは何処だろう……
あたしは知らない場所で寝転がっていた。
何時着替えたのか分からないが、制服を着たまま寝ていた。
そこは海の様に水があり、ビルが所々にその水で水没しながらも立っていた。

「……」

あたしは動かなかった。いや、動けないでいた。
体が金縛りにあっているような感じで、体を動かせず、ただ水面に寝転がっていた。

「……」

あたしは頭がボーとしていて、今の状態が気持ちよくってそのままの体勢でいる。
そして少し経っただろうか、あたしが水面に寝転がっていると、水面が微動だに揺れた。

「？……」

あたしは揺れた方に目をやると、はるか遠くの方に人影が見えた気がした。
その影は水面の上を歩いている様に、こちらに歩いてくる。

「……」

遠くで誰だか分からないが、何故か前に感じた懐かしさに似る感覚がして、あたしはそのまま動かないからだでその人影をじっと見つめながら待つ、

「……」

そうしてあたしはその人影を待ち続けた……

視点・「織斑一夏」

俺は鈴が話す言葉を信じられなかった。

「嘘だろ？鈴……箒が…そんな……」

「本当よ…アイツが…千夏を…！」

「な、何かの間違いじゃないか？ほら、実戦だし、箒も俺の言葉で動揺し――――――」

「アイツは笑ってた！……千夏が福音に落とされるのを見て……笑ってたのよ……」

鈴は膝に置いている拳をプルプルと震えさせながら語る。
本当に、箒が？

「鈴……箒は？」

「…この旅館に作られた…牢屋にいるわ…」

「！、牢屋って…まだ箒がワザとやった訳じゃ――――――」

「さっきも言ったでしょ！？アイツは！箒は千夏を見捨てたのよ！？」

「っ――――――だ、だからそれは……」

「アンタは千夏姉が死んだのに悲しく無いの！？」

「っ――――――それは悲しいに決まってるだろ！！何でアイツが……千夏が……」

俺はやり場のない怒りと悲しみに、そして絶望で身を震わせる。
なんで俺は…何時も何時も千夏に守ってばかりで…千夏何時も傷つかなくちゃいけないんだよ！

「……」

「……ゴメン…一夏だって辛いのに…あたし……」

鈴も千夏の事を思い出したのか、また泣きだした。
俺はいい様の無い怒りを覚え、拳を強く握りしめる。
だが、それよりも……

「……鈴」

「……ぐすっ…何？」

俺は鈴の手を引いて近くまで寄せてあと……

「え？い、一夏？」

「……」

そのまま鈴は俺の近くまで来てそして、

ギュッ

「……」

「へ！？あ、え、い、一夏！？」

俺は鈴を抱きしめる。

「……悪い、鈴……」

「な、何を謝って…そ、それよりもなんで――――――」

「千夏を守れなくて……ゴメン……」

「！、あ……」

鈴はつーと涙を流す、

「悪い鈴……俺がいながら……！」

「ち、ちが……一夏のせいじゃ…」

「俺が弱かったから……千夏が……」

「ちが…う…一…夏の…せいじゃ…」

鈴は嗚咽しながらも俺の言葉を否定する。

それが俺には、たまらなく辛い。
鈴の…そして俺の大切な人を守れなかった事への後悔で、目じりが熱くなる。

「鈴……」

「ふえ…ふぐっ……ううぅ……」

鈴は耐えきれなくなり、俺の胸でわんわんと泣いた。
俺も耐えきれず、声を殺しながら鈴を抱きしめたまま咽び泣いた…
……

第四十八話「大罪」（後書き）

シャル「やっと出せたね」
ラウラ「ああ、だが今回の回で私達の出番は無いぞ？」
セシリア「ご心配なく、次で箒さんとの会話が入ってますわ」
作者「一夏をどうマジギレさせるか問題ですけどね……」

第四十九話「狂気」（前書き）

絶望した！俺の絵の才能に絶望した！！！！
感想待ってます。

第四十九話「狂気」

千夏が福音に落とされて二時間後、牢屋に三人の女子がいた。

「ねえ、ほんとに行くの？」

「当たり前だ。アイツが何を思ってあんな行動に出たのか確かめなくてはな」

「と言いましても、理由は容易に考えられますけど……」

「……そうだね……」

シャルは悲しそうに俯き、箒が何故あのような行動に出たのか今でも理解できなかった。

「一夏が千夏の事を好いている事に対して、アイツは許せなかったんだろうな……」

ラウラは顔は無表情だが、心の内では悲しみと怒りが混ざり合う。

「わたくしも、一夏さんの事は想っておりますが何も友を見捨ててまでする事では……」

セシリアもシャルと同じく顔を俯かせて喋る。

「……落ち込むのは後だ。着いたぞ」

ラウラはそう言って目の前にある鉄の扉を指差す。

「……ここに…」

「箒さんが……」

「ああ…で?誰が開ける?」

「え?ラウラじゃないの?」

「いや、いざ来てみると何を話せばいいのか…なと…」

「た、確かに……セシリアお願い」

「わ、わたくしですか!?」

「だ、だって箒にどう切り出せばいいか……」

「分からぬのだ……」

「貴方達、何の為に来ましたの?」

「う」

二人はセシリアの言葉に顔を下げる。
セシリアはまったくと言いながら鉄のドアをノックする。

「箒さん?いらっしゃいますか?」

「いや、セシリア…普通の部屋じゃないんだから……」

「まあ、もしいなかったら違う部屋に移されたか、脱走かのどちらかだがな」

そんな事を言っていると、部屋から箒の声が聞こえた。

「……なんだ？」

「箒さん、少しお話を宜しくて？」

「……ああ」

「やっぱり元気無いね…」

「ふん、自業自得だ」

「ラウラ……」

「アイツは作戦中に仲間を見捨てたんだ。当然の処罰だろ」

「でも……」

シャルは淡々と言うラウラの言い分が事実な為、弁解が出来ないでいた。

「シャルロットさん、ラウラさん、今は箒さんとの会話でしてよ？」

「あ、ごめん」

「ふん……」

「ふう、……箒さん…何故…千夏さん？」

「……」

「箒さん――――――」

「…聞こえた…」

「え？」

「聞こえたんだ……」

「何がだ？」

「何が聞こえたの？箒」

「福音との戦闘中……一夏の声が聞こえたんだ」

「一夏の？」

「それは、通信して来たからでは？」

何を当たり前な事をと思い、三人は首をかしげる。

「落とせと聞こえたんだ……」

「落とせって…何を？」

「……千夏をだ…」

「！？」

三人は驚愕する。それはそうだ。一夏は千夏を好いている。その一夏が千夏を落とせなんてありえない。

「でたらめを言うな！！」

ラウラが扉越しで声を荒げ、箒に食ってかかる。

「私の嫁がそんな事を言うはずがない！！」

「ラウラさん、私の嫁と言うのはいささか聞き捨てならないのですが？」

セシリアがこめかみに少し血管を浮き上がらせてながら低い声で言う。

「何を言う。愛は奪う物だと教官が言ったではないか」

「これとそれとは話しが違いますわ！」

「ふ、二人とも落ち着いて……」

喧嘩はあったが、気を取り直し、話を戻す。

「それで、箒…一夏が千夏を落とせって聞こえたのは本当？」

「……分からないが…多分、頭に直接聞こえた様な感覚だった…」

「直接……」

シャルは考える。もしかしたら箒は福音による。何らかの兵器によって狂わされた可能性があるからだ。
実際、データと実物のスペックデータが違い、一夏達は慌てていた。
作戦室にいた千冬達も同様をしていたくらいだ。

「あの福音が箒に何かしたのかな？」

「だとしても箒が千夏見捨てた事に変わりは無いがな……」

「ラウラ」

「ふん……」

もう、とシャルが言って箒に聞く。

「箒、それは本当？」

「多分……」

「そっか……」

シャルは考える。もし箒があの行動に出たのが福音のせいならば、弁解の余地はあると……
だが、心の底では箒は本心でやったのではないかと言う考えが浮かび上がる。

（箒は一夏を人一倍大事にしている……そこに千夏が入ったから……）

嫌な考えがよぎり、シャルは頭を振ってその考えを振り消す。

（とりあえず、福音を倒して調べれば何か分かるかも……！）

千夏が死んだと言う報告があっても冷静でいられるのは彼女の長所かはたまた短所か……

とにかくシャルは千冬のいる作戦室に行く事を決めた。

「セシリア、ラウラ、僕は織斑先生にこの事を話してくるよ」

「ああ、わかった」

「わたくし達はもう少し箒さんと会話していますわ」

「うん、じゃあ行ってくる」

そう言ってシャルは、駆け足で歩き、千冬のいる作戦室に向かった。

残された二人は、箒との話しを再開した。

視点・「シャルロット・デュノア」

「さてと、織斑先生に聞きに行かなくちゃ……」

私はラウラ達と別れて、織斑先生がいる作戦室に向かう。

「えっと、確かここだね――――――ん？」

私は作戦室の扉をノックしようとすると、声が聞こえてきた。

「この声……織斑先生？」

部屋の中から少し大きい声が聞こえてきて、私は聞き耳を立てる。

『どういう事ですか！そちらに指揮権を譲れと言うのは！』

（！、……なんだろう…誰と話してるのかな？」

織斑先生がこうまで声を荒げているのは初めて聞いた。

『それに、純粋水爆で福音を吹き飛ばすなど……！」

（！？、水爆！？福音にそれを使うつもり！？）

私は驚いた。福音を水爆で吹き飛ばすなんて……それじゃあ操縦者が！

その時、中から通信越しの声が聞こえてくる。

『これはもう決められた事だ。国防省総省長官の決定でな』

『くっ！』

（国防省……もしかしてアメリカの……）

こ、これは大変な事に……みんなに知らせないと！

私は音を立てない様に歩いてその場を後にした。

視点・「織斑一夏」

「鈴、平気か？」

「うん……もう大丈夫…アンタは？」

「俺は精神が強いからな。平気だ」

まあ、本当に言うと、まだ千夏が死んだ事を受け入れられないからこうも冷静なんだけどな……

「そう……ねえ、一夏」

「ん？なんだ」

「箒のとこに行くの？」

「いや、とりあえずは千冬姉のとこに行こうと思う」

「そう……」

箒とは……まだ面と向かって話せそうにない。鈴見たいにキレてしまうかも知れないしな。

そう思っていると、千冬姉がいる。作戦室に着く。

「よし、ついーーーーん？あれは……」

俺は向こう側の廊下に走って行く人影が見えた。

「あの金髪って……シャル？」

「シャルがどうかしたの？」

「いや、向こうの廊下にシャルが走って行くのが見えて……」

「ふ～ん、まあ今は千冬さんに会いに行きましょう」

「そうだな……」

シャルにも俺が起きた事を知らせないといけないけど、今は千冬姉に顔を見せに行かねえと、
俺は作戦室のドアを開け、中に入る。

「織斑先生、一夏をつれて――――――――」

「くそっ！」

ドンッ！

「ひゃ！？」

「え！？あ、え？」

俺達は声と音に驚き、声をあげた。

「アメリカめ……操縦者はていの言い駒だと思っているのか……！」

そこには顔を怒りに染め上げている千冬姉がいた。

「ち、千冬姉？」

俺は少しオドオドしながらも声をかける。

「ん？……織斑か……」

千冬姉は俺を確認したあと顔を手で覆って溜息を吐く、

「あの、織斑先生？どうしたんですか？」

鈴が千冬姉に話しかけると千冬姉は手を顔から離し、応える。

「いや、アメリカの国防省がな――――――」

「国防省？」

「いや……何でも無い……」

千冬姉は言いかけた言葉を飲み込んだ。

「千冬姉？」

「何でも無い。織斑、お前は動いて平気なのか？それと織斑先生と呼べ」

「はい、問題ありません。織斑先生」

「そうか……」

千冬姉は少し安堵した様な表情をしてまたキリッと顔をしめる。

「織斑先生」

俺は千冬姉に聞きたい事を聞く。

「なんだ？」

「……千夏は？」

「……福音がまだガッティーノの沈められた海域にいる為、近づけず詳細な情報は分からないが――――」

「分からないが？」

鈴が千冬姉の言葉に食い入るように聞く、鈴も千夏が生きている事を信じているのか……

「ガッティーノのＩＳの反応、及び連絡は無し、さらに……福音がガッティーノを攻撃し、沈めた時のバイタルサインは脈拍あるいは心拍数、呼吸、血圧、体温の低下と停止が確認された……」

「それじゃ……」

鈴がその言葉を理解したのか、また泣きそうな顔をする。

「……よって私は、千夏・Ｎ・ガッティーノの死亡を……確定した…」

千冬姉は話すのが辛いのか、組んだ腕の拳を強く握りしめて、唇を噛んでいた。

「やっ…ぱり…千夏姉は…」

鈴は手で顔を覆う。俺は鈴に肩を抱いてあやす事しか出来なかった。

「……織斑先生」

「なんだ？」

「俺に……俺に出撃の許可を！」

「一夏……？」

「織斑…お前…」

「復讐の為じゃないです。俺は…やられっぱなしは趣味じゃないんです！」

「一夏……」

「……」

千冬姉は俺の目を見ていた。そして数秒立った時、千冬姉が言う。

「……残念だが、私にもう指揮権は無い」

「え？」

「どういう…事ですか？」

「それは――――――――」

千冬姉が応えようとすると、突然俺達の横にディスプレイが表示さ

れた。

「それは私が頼んだのだよ」

「え!?」

「な、何?」

「……」

千冬姉は苦虫を噛み潰したような顔をして、ディスプレイから顔をそむける。

どうしたんだ?いったい……

「え、えーと……」

「紹介が遅れたな。私は国防総省長官、ジム・ハウスマンだ」

ディスプレイに映る金髪の男性は自己紹介した。

「あ、はい、どうも……織斑一夏です」

「何自己紹介してんのよ……」

鈴は何時の間にやら泣きやんだのか、俺に肩を抱かれながら呆れている。

「いや、だって……」

「ほう…君があの男性ＩＳ操縦者か……」

ハウスマン長官が興味津津といった感じで俺を見る。

「ど、どうも……」

「それで……ハウスマン長官、何かご用でも？」

千冬姉はまるで敵でも見ているかの様な目で長官を見る。

「いやなに、確認の為に連絡をしたまでだよ」

「確認？」

俺はそう聞くと長官は話しだす、

「ああ、福音を純粋水爆で破壊する為のね」

「！？」

「え……破壊って水爆で！？」

俺と鈴は驚愕する。水爆って…水素爆弾の事か！？

そんな物を使ったら福音の操縦者はただじゃすまない！

「くっ！やはり納得できません！そんな物を使ったら操縦者どころか湾内の生態系にも被害が！」

「福音を止めなければ民間人にも被害が及ぶ可能性がある。避けねばならぬのだ」

「ですが！」

「これは決定なのだよ。ブリュンヒルデ」

「……」

千冬姉は悔しそうに顔を俯かせる。長官は話を戻し、俺達に話しかける。

「四時間後、ガレーナ基地からＩＳ『ＲＥＸ』が出撃される。巻き込まれたくなければ指示に従ってもらおう」

そう言って長官は通信を切る。俺は唖然としてそれを見ていたが、それってつまり？

「水爆を使ったら……千夏も……」

鈴は顔を青ざめさせる。、ってそれって千夏が生きてても助からねえじゃねえか！

「千冬姉！どういう事だよ！？」

「……アメリカは福音の存在自体を消す気だ」

「なんですって！？」

「それはついでしかない……奴が隠したい事は…」

千冬姉はそう言ってまた悔しそうに吐く、

「ガッティーノが福音に落とされた事実の隠ぺいだ……！」

「！、そんな……」

「ガッティーノは次期イタリア大統領になる娘だ……だからアメリカは自分達が作ったＩＳがガッティーノを殺害したのをイタリアに知られたくないのだろう」

「でも、そんなのＩＳ学園はどの国からも干渉しないんじゃ――――」

「すべてではない……ＩＳ学園は完璧じゃないんだ」

「そんな……それじゃあ千夏姉は！？」

「……」

「織斑先生！！」

「……すまない」

千冬姉はうなだれる様に鈴に謝る。

なんで…なんでこんな事に……

「――――――られるか……」

「ん？」

「一夏？……」

「見捨てられるか……！、福音もその操縦者も！何よりも千夏の生存を！」

俺は信じる！千夏が生きている事を、絶対に……！

「千冬姉……」

「……なんだ？」

「行かせてくれ……」

「一夏！？」

「失敗すれば福音もろとも吹き飛ばされるぞ？」

「失敗なんかしねえ……絶対に帰ってくる」

「一夏、危険すぎるわ！」

鈴は声をあげて俺を止める。鈴、わりぃ……

「だろうな……だけど――――――」

もし千夏が俺の立場なら……

「見て見ぬふりなんて出来ねえ！！……千夏はそう言うと思うぜ？」

「一夏……」

鈴は俺の言った言葉を聞いて少しポカンとしていたが、すぐに苦笑

いを浮かべて

「……はあ、たくアンタは……」

「わりい……千冬姉…」

「……一夏…」

「……ああ」

「死ぬなよ？」

「ああ、分かってる！」

俺はそう言って走り出そうとすると、

「待って一夏！あたしも行く！」

「わかった！」

「諸君！私達教師陣は専用機持ちのサポートだ！かかれ！」

「了解！」

「一夏、私は皆を呼びに行ってくる！」

「わかった！」

俺はまた走り出そうとしたら、

「織斑」

「はい？」

「……箒と少しだけでもいいから話してこい」

「え？あ、はい」

俺は出撃する前に、箒のところに行く。
そして……福音とのケジメを付ける！

視点・「？？？」

はあ、なんてこった……
俺はいまモーレツに困っている……
何故かと言うと……

（やっぱ小さい頃の箒に洗脳を施したのが仇に……）

洗脳の仕方を間違えたか？福音にあった時に発動する様にしたんだが……

一夏を落とせってやったのに何故千夏になる……

「う～ん、分からん……」

「……」

どうしようかのう……千夏があんな事になったからイタリアもうるせえし……

まあ、千夏の強化人間化が早まったから良しとするか……

（……はは、千夏は俺を褒めてくれるかな？守る力を与えた俺に……ん？）

俺がそう考え込んでいると、横にいる束が顔を伏せて今にも泣き出しそうにしている。

「どうしたんだ？束」

「……にっくん」

「なに？どうしたんだ？ほんと」

「箒ちゃんが……」

「箒？ああ、千夏を見捨てたってやつか……」

「……どうしてかな…箒ちゃんは…そんなひどい事する子じゃないのに……どうして…」

束は耐えられなくなったのか、涙を流しながら俺に抱きつく、
あーどうしよ。千夏の事や今後の事を考えると頭が痛くなる。

「あー、安心しろ。束、俺が何とかしてみるから、な？」

「ぐすっ……ほんと？」

「ああ、ほんとだ。何とかなるさ……」

なんとか…ねえ…どうしよ…イタリアの事は何とかなりそうだが、
箒は……やべぇ…

（溝は深そうだ……イタリアはどうするかねぇ……）

「どうするか……」

「グスッ…ううぅ…問題が消えればいいのに…」

「だな……（――――ん？問題を消す？）」

俺はある名案を思いつく、

（なんだ。簡単な事じゃねえか……）

俺は心の中でほくそ笑む、

（箒の犯した問題よりも大きい問題がイタリアで起これば良いんだ）

俺は束に見えない様ニヤリと笑う。

（千夏には悪いが――――――――――――）

俺は千夏に心の中で謝ると……

（――――――――――イタリア大統領には劇的な退場してもらおうかな……」

第四十九話「狂気」（後書き）

一夏「ケジメを付けにいく！」
作者「そんな事言う一夏さんマジ漢前！」
二夏「さてさてどうなるだろうねぇ……（まあ、俺の駒になってくれや、兄弟…」

第五十話「緑の悪夢、再び」（前書き）

０ｗ０「ザヨゴォォォォォォォ！！！！！！」
千夏「うおぉう！？ビックリした！なんだこいつ！？」
二夏「オンドゥル星人というアンノウンだ」
千夏「いや、訳わかんねえよ……」

第五十話「緑の悪夢、再び」

海上二百メートル。そこで静止していた『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』は、まるで胎児のような格好で蹲っている。
膝を抱くように丸めた体を、守る様に周りには緑色の粒子が漂っていた。

――――？

不意に、福音が顔を上げる。
次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部当たろうとした時、福音の周りに漂っていた粒子が集まり、
直撃を防ぎ大爆発を起こした。

「くっ！初弾を防がれた！？――――続けて砲撃を行う！」

五キロ離れた場所に浮かんでいるＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。

その装備は通常装備とは異なり、八十口径レールガン『ブリッツ』を二門左右それぞれの肩に装備している。さらに遠距離からの砲撃・狙撃に対する備えとして、四枚の物理シールドが左右と正面を守っていた。
これが、ラウラの本国から送られた砲撃戦パッケージ『パンツァー・カノニーア』を装備したシュヴァルツェア・レーゲンであった。

（敵機接近まで……四〇〇〇……三〇〇〇……くっ！予想より早い！）

あっという間に距離が一〇〇〇メートルを切り、福音がラウラへ迫る。
その間もずっと砲撃を行っているものの、福音は無数の盾に付いている砲口から放たれる粒子弾によって半数以上撃ち落としながらラウラへ接近していた。

「ちぃっ！」

砲戦使仕様はその反動と相殺の為に機動との両立が難しい。
対して、機動に特化した福音は三〇〇メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへ手を伸ばす。

――――――避けられない！

しかし、ラウラはニヤリと口元を歪めた。

「――――セシリア！！」

伸ばした腕が腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる。
青一色の機体――――――ブルーティアーズのステルスモードからの強襲だった。
強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備したセシリアは大型ＢＴレーザーライフル『スターダスト・シューター』でラウラに手を伸ばす福音の手を弾く。

『敵機Ｂを確認。排除行動へ移る』

「遅いよ」

セシリアの射撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う。
それは先刻の突撃時にセシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのシャルロットだった。
ショットガン二丁による接近射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩す。けれどそれも一瞬の事で、すぐさま三機目の敵機に対して（アンサラー《報復者》）による反撃を開始した。

「くっ！なんて威力なの！？『ガーデン・カーテン』でも耐えるのがやっとなんて！」
リヴァイヴ専用防御パッケージの実態、エネルギーシールドで辛くも遮る。
防御の間もシャルロットは得意の『高速切替（ラピッド・スイッチ）』によってアサルトカノンを呼び出し、何とかタイミングを計って反撃する。
加えて、高速機動射撃を行うセシリアと、距離を置いての砲撃を再開するラウラ。三方からの射撃に、福音はじわじわと消耗を始める。

『……優先順位を変更。現空城からの離脱を最優先に』

全方向に粒子弾を放った福音は、次の瞬間に全スラスターを開いて強行突破を測る。

「逃がさねぇっ！！」

海面が膨れ上がり、爆ぜる。
飛び出してきたのは純白の機体『白式』と、その背中に乗った『甲竜』であった。

「離脱される前にたたき落とす！！」

福音へと突撃する白式。その背中から飛び降りた鈴は、機能増幅パ

ッケージ『崩山』を戦闘状態に移行させる。
両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、増設された二つの砲口がその姿を現す。
計四門の衝撃砲が一斉に火を噴いた。

「！！」

肉薄していた白式は瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。しかしそれは何時もの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っている。しかも福音とも劣らない弾雨。増設された衝撃砲――言うなれば熱殻拡散衝撃砲と呼ぶべきものだった。

「やりましたの！？」

「――――――まだよ！」

鈴の増設された衝撃砲『崩山』の直撃を受けてなお、福音はその機能を停止させていなかった。

『アンサラー《報復者》最大稼働――――開始』

頭部に付いているすべての無数の長い板状の盾がクルリと周り、砲口を外側に向ける。――――刹那、緑色の粒子が爆ぜ、粒子弾の一斉射撃が始まる。

「くそっ！！」

「一夏！僕の後ろに！」

一夏はすぐさまシャルロットの後ろに回り、シャルロットは前方に

防御を集中した。

「これは流石にちょっと――――いや、かなりきつい！」

防御用パッケージであっても福音の異常過ぎる連射と威力を立て続けに受ける事はかなり危うかった。

そうこうしている間にも物理シールドが一枚破壊され、もう一枚の物理シールドも破壊されかける。

「ラウラ！セシリア！お願い！」

「言われずとも！」

「お任せになって！」

後退するシャルロットと入れ替わりにラウラとセシリアがそれぞれ左右から攻撃を始める。

セシリアは高機動を生かした移動射撃を、ラウラは砲戦使用による交互射撃を行う。

「足が止まればこっちのもんよ！」

そして直下からからの突撃。双天牙月による斬撃の後、至近距離からの拡散衝撃砲を浴びせる。――――狙いは、頭部に接続されたマルチスラスター（アンサラー《報復者》）。

「ぐうううぅっ！！」

粒子弾を全身に浴びながら、しかし鈴の斬撃は止まらない。

「鈴！止めろ！それ以上あの粒子弾にあたったら――――――――！」

「――――この程度……！」

一夏が鈴に叫ぶ、だが鈴は、瞳の確固たる決意を宿らせ斬撃と拡散衝撃砲をお見舞いする。

「――――――この程度…！、千夏姉の受けた痛みに比べれば！！」

鈴は叫びながらも攻撃を続け、互いに深いダメージを受けながらもついにその斬撃が福音の半分のアンサラーの片半数を奪った。

「ぐううぅ……！、ど、どうよ――――ぐっ！」

片側だけになりながら、それでも福音は一度崩した体勢をすぐに立て直し、鈴の左腕へと回し蹴りを叩き込む。脚部スラスターで加速されたそれは、一撃で鈴の腕部アーマーを破壊し、海へ墜とす。

「鈴！！よくも！――――――」

一夏は雪片を握りしめ、福音へ切りかかる。その急加速に一瞬反応を失った福音の、その右肩へと刃が食い込んだ。

「やったか――――――！！」

そう思った刹那、福音は信じられない事に雪片を左手のひらで握りしめる。

「くっ！？」

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるが、お構いなしに福音は左手を最大まで広げる。
刀に引っ張られ、一夏が雪片を使えない無防備な状態を晒す。そしてそこに、手の空いている右手を振りかぶる状態にした福音の右手に緑色の粒子が渦巻き始める。

「一夏逃げてぇ！」

鈴が叫ぶ、しかし、一夏は武器を手放さない。

（……ここで引いたら……）

福音の右手に緑色の光が溢れる。そして一夏は、自然に手の空いている左手を握りしめ、構える。
その時、一夏の左手の装甲が綺麗な緑色の粒子によって輝き、思いっきり福音に向けて打つ、

（漢が廃るんだよっ！！！！）

福音の拳と白式の拳がぶつかる。どす黒い緑色の粒子とまるでエメラルドに輝く粒子が衝突しあい。相殺し合う。

「貴様だけは俺の手で倒すっ！！！！」

一夏は叫んだ。それに応える様に左手に集まっていた粒子はより一層輝き、力を増して福音を押し通す。
その渾身の拳に福音は少しずつ押され始める。

（――――千夏……お前との思い出は数えるほどしかないのにお前を思い出させるものは……数え切れないほどある）

福音は一瞬驚き、大きく押され始めた。
一夏は無我夢中で拳を突き出し、前へ前へと突き動く、それは悲しみを押し殺すように……

（そしてなにより……なにより――お前の笑顔が忘れられない）

福音は負け時と腕に渦巻いている粒子の出力を上げ押し返そうとする。
だがそれでも、一夏の拳を止められず、後ろへ押し出された。

（遅いか……今頃になっていうのも。俺は……俺は――）

福音がとうとう耐えきれなくなり、一夏の粒子拳によって吹き飛ばされ、隙を見せる。

（俺は――お前が好きだった！　お前のことを大切に想っていた！）

一夏は雪片を両手で持つ、すると、左手に渦巻いていた粒子が雪片の方に流れはじめ、刀身は美しい緑色の光になる。そして一夏はそれを福音の残ったアンサラーに叩きこむ、

「千夏あああああああああぁっ！！！！！！！！！！」

一夏の雄叫びと主に強化された零落白夜がを放たれ、福音のアンサラーシステムはすべて落とされ、
福音は崩れる様に海面へと落ちていった。
雪片は、役目を果たした様に、刀身が普通のエネルギー刃に戻り、
左腕も元に戻った。

「はっ、はぁっ、はぁっ……千夏……」

「一夏……」

鈴は一夏の悲しみをいやす様に、身を寄せる。
一夏は鈴に二カッと笑いかけ、一夏は乱れた呼吸を整える。
そして一夏は福音の落ちた海面から旅館がある方向に目をやる。

「――――――、箒…来てはくれなかったか……」

一夏は寂しく、そして悲しそうにして言葉を吹いた。

俺は今は出撃前に、箒に会うよう千冬姉に言われて旅館に作られた牢屋の前に立っている。
牢屋のドアに付いている鉄格子が突いた覗き窓で中を見る。

「……」

（箒…なんであの時……千夏を……）

俺は、箒が千夏にした行為を理解出来なかった。

なんで……なんで千夏の手を離したんだ……！

「――――――――、箒」

「！！、……一夏？」

「ああ、俺だ……」

「……」

「なあ、箒……」

「……」

「どうして千夏の手を離したんだ？」

「……」

「箒…千夏がお前に何かしたのか？」

「……」

「応えてくれ！、箒！」

俺が声を荒げると、箒は一瞬ビクッとして少し俺の方に顔を向ける。

「――――――――――憎いか？」

「え？」

「私が憎いか？一夏……」

「俺は……」

「千夏……お前の好いている女を見殺しにした私が憎いか！？」

「ほ、箒？なんでそれを――――――」

「だから私は……あのような事を……」

「箒……」

箒が…泣いてる……どうして…俺が千夏を好きである事が関係しているのか？

「私は……千夏が羨ましかった…」

「羨ましかった？」

「千夏は何時もお前の隣にいて……お前は何時も千夏の側にいた…それが羨ましくて……」

「箒、俺はお前の側でも――――――」

「お前の心でさえ千夏がいた！」

「！」

「教えてくれ…一夏…千夏の…千夏の何処がいいんだ？」

「それは……」

千夏の……良い所……それは……

「――――――――他人じゃない気がしたから、かな……」

「え？」

箒は俺の言った事に不思議そうにしている。

「アイツは……千夏は俺に会う前から俺を知っている様な気がして…俺も、千夏がなんだが他人じゃない気がしたんだ。そして…気づいた時には惚れてた…」

「……」

「何と言うか、アイツには出会うべくして出会ったって思えるんだ」

「それが……千夏を好きになった理由か？」

「ああ、それに、アイツも可愛いところがあるんだぜ？」

俺はいつの間にか、千夏の自慢話を箒に聞かせていた。

箒は最初は不機嫌そうだったが、少し苦笑いをしながらも聞いている。

「それでな。アイツが作る料理は「一夏！」って鈴？」

俺は話している最中に鈴が近づいてくる。

「どうしたんだ？鈴、出撃の準備じゃ――――――」

「千冬さんがこれを渡しとけって――――」

「！、これって……」

「箒に渡すかはアンタが決めなさい……」

「……」

「じゃあ、あたしはいくから……遅れないでよ？」

「分かってる……先に行っててくれ……」

「うん」

そう言って鈴は元来た廊下を戻り、見えなくなった。

「……箒」

「なんだ？」

「これを……」

「！？、これって！」

俺が鈴から渡された物を箒に渡す、それは、この牢屋のカギと――
――――

「紅…椿……」

「千冬姉は多分…箒の事をまだ信じてくれてるんだ…」

千冬姉にとって、千夏がＩＳ学園で初めて出来た最初の友達だからであり、俺の…最初に出会った幼馴染だから……

「……」

「じゃあ、俺は行くな？」

「？、何処に？」

「福音を止めに行く」

「！？、無茶だ！あのＩＳはまともじゃない！下手したら――――――」

「死ぬだろうな」

「だったら――――――！」

「それでも、俺はやらなくちゃいけない。やらなければならないんだ……」

「一夏……」

「俺は福音も、その操縦者も……救って見せる……それが――――」

俺は一呼吸して、箒に聞かせる。

「――――――――――俺の強さだ」

「っ――――――……一夏」

「なんだ？」

「――――――死なないでくれ……」

「ああ、もちろんだ」

俺は箒に鍵と紅椿を渡してその場を後にする。

福音との戦いがこの先で待っている……負けられない！

（――――――箒、ワリィ……）

俺は心の中で箒に謝る。

（俺は……千夏のいない未来は考えられないんだ……）

何とか福音を止める事が出来た。
だが油断は出来ない……

「ラウラ、福音の反応は？」

「まだ海の中だが、嫌な予感がする」

「俺もだ」

俺とラウラが話していると、突如海面が強烈な光の玉によって吹きとんだ。

「！？」

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのようにへこんだままだった。
その中心、どす黒い緑色の粒子を全身に纏った「銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）」が自らを抱くかの様に蹲っている。

「これは……！？一体、何が起きているんだよ……？」

「！？、不味い！、これは――――――――「第二形態移行（セカンド・シフト）だ！」

ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかの様に福音が顔を向ける。
無機質なバイザーに覆われた顔からは何の表情も読み取れない。けれど、そこに確かな敵意を感じて俺たちのＩＳが操縦者に警鐘を鳴らす。
そして福音の周りを覆っていた粒子がどんどん集まりやがてそれは福音を飲み込んで大きくなっていく。
粒子が集まり一定以上に溜まると、それは形を成形していく。
それはまるで巨大な傘の様だった。

ブオオォォォォーーーーンッ……

「な、なに……あれ……？」

「……化物…」

福音は不気味な声を出して、光が収束していっている。

「一夏……」

「大丈夫だ……俺たちなら……」

俺はその先を言えなかった。自分でも分かる。

今の俺じゃ勝てないと……

（今の俺では、あの二次移行した福音は倒せない……千夏…俺を導いてくれ！）

俺はこの場いない千夏に願う。そして俺達は……悪夢と戦った……

…

第五十話「緑の悪夢、再び」（後書き）

何とか書けた……感想待ってマース。

第五十一話「落ちる白」（前書き）

真耶「あのーどうして篠ノ之さんに紅椿を？」
千冬「なに……少しでも仲の改善を、な……」
真耶「なるほど……でも問題になるのでは？」
千冬「まあな……だが、教師が生徒を支援するのは当然だろ？」
真耶「なるほど！確かに！」

第五十一話「落ちる白」

あたしは遠くから来る人影を見つずけて少し経ち、ようやくその人影があたしの目の前まで来た。
その人影はあたしに近ずき、肩を抱いてあたしを座らせた。そして気づく、あたしの体がさっきまでまったく動かなかったのに、今は動くようになっていた。

「――――――――あんたは……」

「久しいな。小娘…あの時以来か」

あの時……たしかあたしが無人ＩＳに落とされた時か……また変な夢を見るとは……

「あー確かに…見た顔だわ」

「ふん、忘れていたとは……ボケたか？」

「ボケてねえよ！？」

「まあ、そんな事はどうでもいい」

「言わせといて！？」

「黙れ空気、沈めるぞ？」

「ごめんなさい……」

「フン、素直でいい」

あたしの前に立っている男はふんぞり返り、あたしを見る。ちくしょう……

「なあ、聞いていいか？」

「なんだ？」

「あたしはなんでここに？」

「死んだからだ」

「ダイレクト！？」

おおい！？ちょっと待て！！死んだ？あたしが死んだ？いろんな意味でちょっと待て、

「し、死んだってなんで？な・ん・で！？」

「うるさい。私の知るところではない」

「そんなー！？」

絶望した！聞いた人に絶望した！！

「まあ、それは置いとく」

「置いとかないで！？大事な事だぞ！？」

「だからうるさい。ＡＭＳを逆流させるぞ？」

「ごめんなさい止めてください死んじゃいます……」

「フン……貴様は…このままでいいのか？」

「え？」

男の言った事にあたしは首をかしげる。

「このまま……仲間を置いて先にあの世に行くのか？」

「っ――――――――……それは…」

「どうなんだ？」

「……あたしは…嫌だ」

「ではどうする？」

「……生きたい……」

「……」

「まだ……死にたくない…」

あたしは自分が死んで、友達を置いて先に行ってしまった事に辛くて、目じりが熱くなり始める。

「皆を置いて……死にたくねえよぉ……！」

我慢できず、あたしは咳を切ったように泣きだす。男は無表情だけど、何処となく嬉しそうでもあった。

「ならば……行かなくてはな」

「グスッ……ふえ？」

「後を任せるぞ？テ…ミド…ル……」

「任されたよ…オッ…ダル……」

あたしは後ろから声が聞こえて振り向くと、そこには……

「何なんですの！？あれは！！」

「クソッ！私のブリッツが歯が立たないだと！？」

「それに福音の攻撃が激しすぎるよ！！」

今、俺達は第二形態移行をした福音との戦いに突入していた。

「あたしの衝撃砲も全然聞いて無いじゃない！！」

「諦めるな！アイツは人が作ったんだ！必ず勝機はある！」

俺は皆を励ましながらも、福音の攻撃と俺たちの届かない攻撃に焦り始める。

「この……だったら双天牙月で！」

そう言って鈴は牙月を構えて突撃する。

「鈴、待て！危険だ！！」

「うおりゃあああああ！！！！」

鈴が牙月をまったくその場から動かずただ攻撃をする福音へと切りかかる。だが……

ガギィィンッ！

「!?、牙月が届かない!?」

鈴の双天牙月の刃は福音の一メートル先で止められた。そして福音は周りの粒子を鈴の近くに収束し始める。

「!?、鈴!にげろおぉ!!!」

「クッ!?」

鈴はすぐさま福音から距離を置いたが、遅かった。

ズドオオオオオオンッ!!!

「きぁあああああああっ!!!!!!!」

「リーーーーーーーーンっ!!!!!

鈴は福音がまるで自爆した様な爆発に巻き込まれて吹き飛ばされる。

俺は落ちる鈴をキャッチした。

「鈴!しっかりしろ!鈴!?」

「う…あ…ぐうぅ……」

鈴は苦しそうに顔を歪めた。鈴の体はそこかしこに傷が出来ており、血がかなり出ていた。

「クソ！どうなってやがる！？シールドが有るはずなのになんでこんな大けがを！？」

「なんなんですのあれは！？福音が自爆？」

「いや、たかが一人仕留める為に自爆は有りえんだろ……だとしたら…」

「あれも…福音の攻撃なの？」

皆は福音の恐ろしさに恐怖する。あんな化物に勝てるのかと……

「一…夏……」

「！、鈴！大丈夫か！？」

「……取れなかった」

「え？」

「千夏姉の敵……取れなかったよぉ……！」

鈴はポロポロと涙を泣く。俺はそんな鈴を見て胸が苦しくなった。

「……シャル」

「なに？」

「鈴を頼む」

「……分かった…」

シャルに重傷の鈴を任せて俺は福音と向き合う。

「福音……」

救うとはいったが……おとしまえは付けさせてもらうぞ？

「ちょっと倒してもいいよな？答えは聞いてねえけど！」

俺は福音へと特攻する。そしてそれに続くようにしてセシリアとラウラがついて来てくれた。

「一人でやる気ですの？」

「私達も付き合おう！」

「サンキュー！行くぜ！」

そう言って俺達三人は特攻した。

ここは福音から少し離れた岸壁……そこにシャルと、そのシャルに抱かれた鈴がいる。

「シャル！あたしはまだ戦える！だから――――！」

「駄目だよ！鈴が福音に突撃した時、鈴のシールドが近づく事に減少してたんだよ！」

「だからって――――――」

「ゴメン鈴…今の鈴じゃ…アイツに勝てない」

「！！っ――――――――――……」

シャルの言葉に鈴は自分の弱さを痛感する。

「……なんで…なんであたしは……何時も肝心な時に……！」

「鈴……ここにいて…一夏なら必ず勝ってくれるよ」

「……」

「じゃあ、行くね」

そう言ってシャルはフワッと飛び一夏達が福音と戦っている場所に

戻って行った。

「……一夏…ゴメン…力になれなくて……！」

鈴はまたポロポロと泣きだし、顔を手で覆った……

「なんて威力だ……えぇ～い、アメリカのＩＳは化け物か！！」

一夏は愚痴りながらもそのぶっとい粒子砲を紙一重に避けていた。

「これじゃあ接近出来ない！ただでさえ近づくとシールドが消耗するのに！」

「遠距離からでの攻撃も効かない！どうすれば！」

「近づいても駄目…遠距離からの攻撃も無効化される……ほんとに化物ですわね…」

福音の攻撃とシールド無効化に一夏達は悪戦苦闘していた。

（……千夏……ワリィ……どうやら俺も…そっちに行く見てえだ…）

一夏は覚悟を決めセシリア達に話す。

「セシリア、ラウラ……アイツの注意をひきつけてくれ」

「どうする気ですの？」

「奴に接近戦を挑む…」

「無茶だ！アイツは近づくとシールドが！」

「分かってる……だがアイツのあの粒子シールドを貫通出来るのはこの雪片だけだ……」

そう言って一夏は雪片を強く握る。セシリアとラウラも一夏のただならない覚悟を感じ、一夏に従った。

「……わかった…だが死ぬなよ？」

「そうですわよ…千夏さんに教えて貰ったカツサンドを一夏さんに食べて貰わないといけませんしね」

「ああ、分かってる！セシリア、戻ったらご馳走して貰おう」

「はい♪」

一夏はセシリア達にオトリを任せ福音の頭上から離れた真上へと飛んでいく。

（……悪い。セシリア……千夏から習ったカツサンド…食いたかったよ…）

一夏はほんとに名残惜しそうにしながらも加速し、早くも福音から離れた頭上に到達そして雪片の零落白夜を発動させる。下ではセシリア達が福音の目を一夏から遠ざける為、二面攻撃を仕掛けていた。

「……行くぜ！」

一夏は加速と真下に落ちる引力で超加速し、福音へ特攻をかける。

「うおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

そして福音が気づいた時にはもう一夏は福音の目の前まで来ていた。

そして……

ギャリギャリギャリギャリッ！

甲高い音を立てて福音の粒子シールドと一夏の零落白夜が発動された雪片がぶつかる。

「打ち切れ《ぶちぎれ》えええええええええぇっ！！！！！！！！！」

一夏は渾身の力で雪片を前へ前へと押し込む、そしてどんどん粒子

シールドを削って福音に近ずいたが、

バキィィンッ！！

「！？、なん…だと！？」

雪片が、一夏の唯一の武器……雪片が折られた……

「そ、そんな……千冬姉の刀が…！？」

そして一夏は気づく、白式のエネルギーが底をついた事を……

「クソ！エネルギーが切れて雪片が！」

そう言ってる間も福音は一夏の周りに粒子を収束し始める。

「！？、ヤバい！」

一夏は福音から離れようとした。だが……遅かった。

ズドオオオオオオンッ！！！

またも福音の自爆に似た攻撃に一夏は呑みこまれる。

「！！、一夏さあああああんっ！！」

「一夏っ！？」

セシリアとラウラは福音の攻撃に当たった一夏は見て悲鳴を上げる。

（――――――――ちきしょう……千夏の敵も取れずに…逝っちまうのか？……）

一夏はそう考えてながら目をつむる。だが来るはずの痛みが来ない事に疑問を持ち、目を開けると……

「！？、――――――――――な、なんで……」

「う…あう…だい…じょう…ぶ…か？…一夏…」

「箒……！」

箒だった。箒は一夏を抱きしめる様にして一夏を福音の攻撃から守ったのだ。

だが箒はその攻撃をまともに受け、体中は傷だらけで血もかなり出

ており、鈴よりも重傷、
紅椿もボロボロに破壊していた。
一夏は箒の状態を見て放心する。

「なんで…俺を…」

「……守りたかったから…だ」

「え？」

「私は…千夏を見捨てた…私利私欲で…だから…せめて一夏だけは助けようと…盾になろうと…思ったのだ……グッ！」

「箒！」

一夏は咄嗟に箒を抱きとめる、一夏は箒の状態を見て脈拍を計り、かなり危険な状態だと分かった。

「クソッ！箒！しっかりしろ！」

「あ…う…」

箒は苦しそうに顔を歪める。その顔は徐々に顔を青くしていく。

「箒！クソッ！セシリア！箒を早く旅館に！」

「わ、分かりましたわ！」

セシリアは一夏が攻撃を食らったと箒が何故ここにいるのかで放心していたが、すぐに気を取り直し、

一夏から重傷の箒を頼まれる。

「セシリア……箒を頼む…」

「お任せになって！」

そう言ってセシリアはハイスピードで前線を離脱し、箒を安全なところまで連れて行く。

そして入れ違いでシャルが戻る。シャルはセシリアがいない事に疑問が出た。

「一夏、セシリアは？」

「……重傷の箒を担いで前線から離脱して貰った……」

「え！？箒がここに！？なんで？」

「その話は後だ……今は……」

一夏は今だ健在の福音を睨む、その目は怒りに燃えていた。

（福音……千夏や鈴だけじゃなく……箒まで……！）

一夏は幼馴染達を傷つけた福音を見ながら歯を食いしばる。一夏はすぐにでも福音のもとに行きたかったが……

（エネルギーが無い…雪片も……）

手元にあるポッキリと折れた雪片を悔しそうに見つめる一夏、

一夏は千夏の敵を取れなかった事と、千冬姉の刀を折ってしまった

事に苦悩する。

（――――――――いや、まて……まだ武器はある……！）

一夏は自分の両手を見て考える。

（あの時の感覚を掴めれば……アイツを倒せる……！）

あの時……福音の拳を相殺する為に無意識で出来た雪片意外の武器……

「あの攻撃が出来れば……奴を……！」

「？、一夏？」

「まだやれるかも知れない……」

「え？」

一夏は集中する。あの時の想いを思い出しながら、

（俺は負けない……もう仲間は殺させない！、答えろ！白式！！！！）

一夏の想いに応える様に白式の左腕から綺麗な緑色の粒子が渦巻いていく、

「！、綺麗……」

「なんだ…これは？」

「成功…した?…これなら!」

一夏は白式に残っているエネルギーをスラスター回し、福音へ特攻する。

「!?、一夏!!」

「どうするつもりだ!」

一夏はシャルとラウラの声の静止を聞かず、そのまま福音へ接近した。

「今度こそ当てる!、うおおおおおおおお!!!!」

一夏は行く、福音へ接近する。そして福音の粒子シールドと、白式の拳が……激突した。

「つ・ら・ぬ・けえええええええええええぇっ!!!!!!!」

福音の粒子シールドをと激しく削りながら前へ前へと一夏は進む、白式はその無理な突撃にところどころヒビが入り、悲鳴を上げる。

(耐えろ。白式!!お前の根性見せてくれ!!!!)

白式が一夏に応える様に最後の力を振り絞る。

「!、届いた!これで――――――――」

終わりだ。とそう思った一夏だったが……

ズンッ！

「えっ……？」

一夏は一瞬体に揺れを感じ、下を見てみると、

「なん…だよ……これ？」

福音からのびた右腕に緑色のブレードの様な物が出て、一夏の腹を刺し貫いていた。

「こんな…こんなの…有りかよ！…ゴフッ…」

一夏は吐血し、意識が朦朧とする。そして福音は一夏の首を掴んで腹からブレードを引き抜き、一夏を投げ捨てる。

「一夏さあああああんっ！！！！！」

「一夏ぁ！！」

「そんな……一夏かぁ！？」

セシリアにシャルにラウラは福音に刺され、海面へと落ちる一夏に声を荒げる。

（――――――ちきしょう……千夏の敵も取れずに…会いにいけねえよ……）

一夏は未練を残したまま……

ドボオオオオオォンッ！！

一夏は、千夏が眠る海中に没した……

「一夏あああああああああ！！！！！！！！」

一夏を想う仲間たちは、悲しみの悲鳴を上げた……

男が誰かの名前を呼ぶと、千夏の後ろにいた男が声を出して応える。
その容姿はさっき喋っていた男と顔が瓜二つで、違うのは黒いコートに赤いラインが入った服だった。

「――――あなたは？」

「私の事は今はどうでもいいさ。君は…生きたいかい？」

「え？あ…はい」

「そうか、ならば行かなくてはな。君の友達が待っているよ？」

「友…達……」

「ああ、では、行こうか……」

そう言ってその男は千夏に手を差し出す。そして千夏がその手を取ると急に視界がぼやけ始める。

「え？あ、あれ？急に意識が……」

「大丈夫だ。夢から覚めるだけだよ」

その声は千夏を安心させる為か、優しかった。

「貴方の…名前は？」

「私かい？私は――――――――」

千夏はその男の名を聞いたが、よく聞こえなかった。だが、千夏の心には確かに聞こえた。
そしてその名前を心に刻み、千夏が夢から覚める。

（なんか……ロマンチストな人に見えたな…）

そんな事を考えると……

「ああ、そうそう、君の仲間が一人落とされたからちょっと助けに行ってくれたまえ」

「――――――――え？」

私はその人の言われた事にキョトンとしたまま意識が無くなった。

第五十一話「落ちる白」（後書き）

千夏「どう思う？この展開」
一夏「どうって言われても……」
二夏「とりあえず、半端な終え方はしない様にしねえとな」
千夏・一夏「「だな」」

第五十二話「絆はここに、復活する白」（前書き）

一夏「なあ、作者よお」
作者「なんです？」
一夏「読者のタイトルを採用したはいいが違くないか？」
作者「ええ、少し本編が違いましたから」
一夏「なるほど……」

第五十二話「絆はここに、復活する白」

暗い闇の中。一夏は光一つ差し込まない道をひたすら歩き続けていた。
入口もない出口もない、自分がどこから歩き始めたのかも判らない。
心にぽっかり大きな穴が開いてしまったような――そんな喪失感を抱えながら、
少年はただ歩を進めていた。絶望に囚われた虚ろな瞳だけを宿して。
その時、不意に一夏の眼前で光が爆ぜた。散らばった光は再び一箇所に集まると、人型を形成する。
少しずつハッキリする輪郭。人型がその姿を明確なものにすればするほど、
虚ろだった一夏の瞳に光が戻っていく。そしてついに、人型がその真の姿を表した。
そこにいたのは、少年が愛してやまない人物。
しかし、その想いが一生届かないところへ行ってしまった人物……のはずだった。

「千夏……？」

確かめるように名を呼ぶ一夏に、人型――千夏は頷いた。
一夏には聞こえなかったが、あたし何でここにぃ？と間抜けなことを呟いている。

「千夏！」

一夏は駆け出した。
千夏の側まで走り寄ると、その体を力いっぱい抱きしめる。
ぽろぽろとその双眸からは大粒の涙が零れ落ちた。

「……ごめん。ごめんな……守れなくて……ごめんな……ごめん……な」

永遠と謝り続ける一夏に千夏は最初は驚いたが、仕方ないなぁと苦笑いを浮かべながら、あやす様に一夏に抱かれながら頭を撫でる。

「一夏…泣くなって……一夏の泣き顔は…見たくねえよ…」

笑えって、と千夏は言うが、一夏は延々と泣き続けながら千夏に謝っている。

とりあえず千夏は一夏に言いたい言葉を言う事にした。

「……一夏」

「ごめ…ん…ごめん…」

「ありがとう…」

「ごめ……え？」

「あたしの為に泣いてくれて……」

千夏の顔は、春の木漏れ日のように穏やかだった。

一夏に優しくお礼を言い、一夏は少しポカンとする。

そしてお礼を言った後、千夏は顔を引き締めて一夏をまっすぐ見る。

「一夏、あたし達はまだ死ねない。死ぬ訳にはいかないんだ」

「千夏……」

「鈴やセシリア、ラウラやシャル……そして…箒」

「箒……」

一夏は考える。どうして千夏はここまで優しくなれるんだと、自分を見捨てた人ですら救おうとするんだと……

「あたし達には……まだ守りたい人がまだいるんだから、一夏だって千冬さんを守りたいだろ？」

「！、……」

千夏は一夏を見つめ続ける。千夏に謝り続けていた一夏の瞳には、千夏が言った事で生きる活力と、確かな強さが息づいていた。

「……そうだな…千夏の言う通りだ。ここでくすぶっている訳にはいかない！」

一夏は千夏を離す。一夏の顔は、微笑んでいた。

「フッそれはよかった」

「千夏」

「ああ、……それじゃ、行こうか」

千夏は一夏に手を差し伸べる。一夏はその手をゆっくり取る。
その時、暗闇だった空間にヒビが入り、光が入ってくる。
そして闇の空間が完全に崩壊し、全てが光に包まれた……が！＜

カッ！

「あ、一夏、あたし少し遅れるから先に行っててくれ」

「――――――――――――――――――は？」

そう言って千夏は光に包まれ、一夏も光に飲まれながら意識が覚醒して行った。

「よくも一夏さんを！」

箒を安全な場所に移し、前線復帰したセシリアは、大型ＢＴレーザーライフル『スターダスト・シューター』が福音に向けて撃たれる。だが、福音の異常なまでの粒子シールドに阻まれ、攻撃が届かない。

「なんなんだアイツは！」

「あれってもうＩＳじゃないよ！」

専用機持ちの面々は文句を言いながらも攻撃をやめない。
皆、千夏も一夏を福音に落とされ、頭に血が上っていた。
その時、福音が攻撃を止めて、動き出す、

「！、福音が……」

「動き…出した？」

「いったい…何処へ……」

セシリア達は福音の行動疑問に思っていると、セシリアが福音の向かう方向に気付き、慌てる。

「！？、不味いですわ！福音の向かう方向には鈴さんと箒さんが！」

「なんだと！？」

「と、止めないと！」

三人はすぐに動き、鈴と箒のいる場所に向かくとしたが……

どどどどどどどどどどどっ！！！！！

福音から放たれた緑の粒子が発射された。その粒子は曲がりながらもセシリア達に向かう。
それはまるで、粒子のミサイルの様だった。

「クッ！邪魔をする気ですの！？」

「これじゃあ鈴達が！」

「鈴達までも手にかける気か！？」

セシリア達は福音の粒子ミサイルによって鈴達の救出に向かう事が出来ず、避けるだけで精いっぱいだった。

「大丈夫なの？アンタ……」

「……まあな」

あたしは不機嫌そうに見ながら大けがをして、地面に寝かされている箒に話しかける。

見た目はかなり重傷だけど、紅椿の止血でなんとか大丈夫見たい。

（結局一夏は箒に紅椿を返したのね……優しいんだかお人よしなんだか……）

一夏の事を考えて、あたしは少し顔を赤くする。

「……死にそこなったって感じね」

「死んで欲しかった……？」

箒顔を背け、寝ながらあたしの問いに応える。

「……死んだら千夏が悲しむ…それは嫌よ…」

「お前は何時も何時も千夏だな……」

「悪い？千夏を大事にして」

「いや……お前が羨ましいよ……」

「え？」

鈴は箒の言った言葉に疑問を持つ、

箒があたしを羨ましいって……

「…どたまでも打った？」

「かもな……自分がした事を今更後悔している……本当に私は…愚か者だ…」

「ほんとに今更ね……」

「うるさい……あいつら…大丈夫だろうか……」

「……分かんない…福音との攻撃で、あたしとアンタのハイパーセンサーとチャネルがイカれたんから…皆…大丈夫かな…」

あたし達は今皆がどういう戦況か分からず、心配で落ち着かなかった……

その時、突然声が聞こえた。

「――――――ん？何？」

「どうした？」

「今声が聞こえた様な――――――」

「――――――――――――――――――――！！」

「ほら、また！」

「ああ、たしか……に…」

箒が突然絶句した様な顔で上を見ている。
なんだろうと思ってあたしも上を見てみると、

「……嘘…なんで？」

「なんで……ここにアイツが！？」

そこには全身を粒子の傘で身を固める福音が、あたし達を見下ろしていた。

「――――――――鈴！箒！逃げてえええええええっ！」

「！、クソッ！」

箒は何とか立ちあがろうとするが、大けがのせいで体がまったく言う事を聞かない。
あたしは、目の前の悪魔に怯えて動く事が出来なかった。

「あ……ああ…い、嫌…」

「鈴！お前だけでも逃げろ！」

「む、むり…無理…よ…」

「鈴！クソッ！動け！」

箒は叫びながら懸命に体を動かそうとすると痛みが走るのだろうか、苦痛を浮かべている。
そして、福音は鈴達を傘の様な粒子の中へと招き入れ様とする。

「鈴さん！箒さん！ああもう！邪魔をしないで下さる！？」

「駄目だ！粒子ミサイルの弾幕が濃くて近ずけない！」

「鈴！箒！逃げて！早く！」

皆があたし達に向かって必死に叫ぶ、あたしは最初は怖かったけど思い出した。

「――――――――ざけんじゃないわよ……」

「動…鈴？……」

「千夏がこいつにやられて……まだぶん殴り足りない奴と一緒に死ぬなんてゴメンよ！！」

あたしはところどころ欠けた双天牙月を握りしめ、福音を睨む、怯えてなんかいられないのよ！あたしは！

「ぐっ……うぅっ！」

あたしは傷だらけの体に鞭打って立たせ、福音の前に立ちふさがる。

「な、なにをする気だ！？鈴！」

「アンタを……千夏の墓標の前で謝らせるまで……死なせる訳にはいかないのよ！」

「！、鈴……」

「一応言っとくけど勘違いしないでよ……まだアンタを許した訳じゃあないんだから……」

福音はどんどんあたし達を粒子の傘の中へと包み込む様にしていく。

（……アハハハハ、……強がりは言って見たものの…やっぱり怖いわね…」

目の前の強大な敵に足はガタガタと震えだす、

（なんでか一夏もいないし、どうなってんのよ。まったく……）

この場にいない幼馴染に文句を言いながらも福音からは目を離さない。

（一夏に想いを伝えられなかったなぁ……）

あたしは一夏への想いを名残惜しむ、

（あたしは……死ぬのかな……こんなとこで……）

「鈴！クソ！頼む！紅椿！動いてくれ！）

（ううぅ……やっぱり……）

「鈴さん！箒さん！」

「鈴！箒！」

「逃げてぇ！！」

「……やっぱり……死ぬのは怖いよ…！……一夏…千夏姉……！」

あたしは覚悟を決める様に目を閉じる。これから来る痛みに身を強張らせた。だけど、その覚悟は無駄になってしまった。

ドバアアアアアアアアアアアァンッ！！！！！

「「「「「！？」」」」」

突如、大きな波の音が聞こえてあたしは信じられない物を見た。福音が、海面から出てきた白い何か”吹っ飛ばされたのだ”。その白い物体はＩＳと同じ大きさのなのに、粒子によって巨大化した福音をいとも簡単に吹き飛ばしたのだ。これはあたしも皆も驚いた。

そして海面の水しぶきが収まり、その白い物体の正体が明らかになる。
あたしの視線……目の前であたし達を守る様にして福音に立ちはだかる。白く、輝きを放つ機体がある。
その機体は白くて妖艶なまでの美しい機体で、その背中には羽根の様で、裏側には片側７つずつ計１４も用意された三角形の装甲が着いていた。そして真正面で見ていたセシリアとラウラ、シャルの驚いた声でその機体を操っている人物が分かった。

「！、ご無事だったのですね！」

「……ふん、やはり教官の弟だな。お前は……」

「あ…ああ！」

「……フッ……来るのが遅いぞ…馬鹿者…」

「ほんとに……遅いわよ……バカ…」

アイツが……アイツが助けにてくれた！

「「「「「一夏！」」」」」

「待たせたな！」

進化した白式……第二形態・雪羅を纏った一夏だった。

第五十二話「絆はここに、復活する白」（後書き）

千夏「あれ？あたしの出番は？」
作者「次からです」
千夏「ちょ、おま！全国のあたしのファンが待ってんだぞ！？」
作者「それはちうちゃんのほうでは？」
千夏「ぐっ！顔が似てるからじゃあ駄目なのか……！」
作者「まあまあ、次で二次形態したちうちゃんが出れますから――――」
千夏「ちうちゃん言うなーーーーーーー！！」

第五十三話「覚醒した白の力、動き出すＯＲＣＡ」（前書き）

作者「あの漢に燃えない漢はいない！」
千夏「だな。あたしもニ〇ニ〇でよく見たわ……」
一夏「確か俺達と同い年だよな…（なんか負けた気が…）」
千夏「一夏もあんな漢にならないかな……」
一夏「！？（そ、それは今の俺は……漢じゃないって事か！？）」
ズーン

第五十三話「覚醒した白の力、動き出すＯＲＣＡ」

「さあ行くぜ福音！俺は最初から最後までクライマックスだぜ！」

俺はふっとばされた福音を見据える。そして吹っ飛ばされた福音は体勢を立て直し、俺へ向けて粒子弾を放った。

「食らうかよ！雪羅！」

――――雪羅、シールドモードへ切り替え。粒子エネルギーでの相殺開始。

キンッ！という甲高い音を鳴らして、左腕の雪羅が変形する。それから緑色に輝く光の輪が広がって、福音の弾雨を消していく。

そう、これはつまり、粒子、エネルギーを無効化する零落白夜のシールド。

当然エネルギー消耗は激しいはずなのだが、通常エネルギーの他に、ある粒子をエネルギーに変換して攻撃、防御、機動に回す事が出来る様になった。

「うおおおっ！」

形を変え、強化されたスラスターが飛行形態となる。胸部を中心に腕を前に、足を後ろに移動させ、羽根の裏側から片側７つずつ計１４も用意された三角形の装甲を開閉、黒いバーニアノズルがせり上る。

そしてそのバーニア全てが同時に火を噴き、駆け抜ける。これが第二次形態した白式・雪羅は、粒子エネルギーによって長時間の瞬間加速が可能になった。

福音は白式のハイスピードに翻弄され、接近を許した。

『状況変化。最大攻撃力をしようする』

福音の機械音声がそう告げると、粒子エネルギーの繭にくるまれた状態へと変わった。

――――不味い！またあの攻撃か！

俺の読みが最悪な事に的中した。

粒子で出来た傘が光輝き、収束し始める。あれを放たれたら皆が危ない！

（まだ鈴や箒が近くに！守りきれるか！？）

すぐさま仲間の盾に走ろうとするが、皆が大声で叫ぶ、

「一夏！鈴達は僕たちが助けたから！」

「一夏さんは全力前回で戦って下さいまし！」

「鈴と箒の事は任せろ！行け！一夏！」

「皆……わかった！」

仲間を信じる。今の俺にはそれしかない。だったら何処までも信じ切ってやる。

俺は右手に雪片を展開するが、ある事に気づいて慌てる

「――――――――しまったぁ！折れてたのすっかり忘れてた！？」

アホな事に俺は前に福音に雪片を根元からポッキリと折られていた

のをすっかり忘れていた。
そしてその声が皆に聞こえてしまったのか……

「何忘れてますの！？一夏さん！」

「そんなボケはいらないよぉ！」

「戦場で武器の故障は命に関わるぞ！」

「あんたバカァ！？」

「何をやってるんだお前は……」

鈴や箒にまで言われた。ううぅ…俺のせいじゃないのに……

「や、ヤバい、どうしよう……雪羅だけでやれるか？」

悩んでいると福音がチャージを終えたのか、粒子がより一層輝き始める。

「！？、き、緊急回避！」

俺はすぐに瞬間加速で福音から離れる。その瞬間、福音が緑の粒子を爆発的に弾けて、周りを覆う。

「おわあああああああああっ！？」

「一夏！？」

俺はまた余波で吹き飛ばされた。

そしてすぐに体勢を立て直し、福音を睨む、

「クッソォ！、どうすりゃ……！？」

視点・「？？？」

「……復活したか…あの男性ＩＳ操縦者は……」

一夏と福音から数千キロ離れた海域で、二人の戦いを見ている二人の人物がいた。

一人はまるで銀色の重装甲で身を固めた黒髪の女性と、見た目からしてステイシスよりも細い装甲を纏う少女だ。その装甲は飛行特化した姿となっている。

「その様ですね。千夏お嬢様のご友人……なかなかのお強さです」

「ああ、かなりの機動力だな。ありゃ」

二人は白式の機動力と一夏の強さに驚いていた。

「さすがはブリュンヒルデの弟ですね……」

「ああ、だがそれだけであの強さはあり得ねえだろ」

「やはりあの男はお嬢様を？」

「だろうな。エンリコの旦那に聞いたがあの男かなりお嬢にご執心らしい」

「ですが、千夏お嬢様はもう……」

そういって軽量装甲を身に纏う少女は悲しそうにして俯く、
重装甲を想わせる巨大な鎧を身に纏う一夏達と同年代だと思われる女性は、そうだな……と言って苦しそうに苦笑いする。

「……今、千夏お嬢様の事を考えるのは止めましょう」

「そうだな…任務に集中しねえと……それと、アスピーデ」

「なんでしょう？」

「耐えろよ？あの女に手を出したら私達が罰せられる。ただでさえ日本領域を侵して侵入してるんだ。殺るのは抑えろよ？」

「……分かってます…分かってますとも銀翁…大統領の命が無ければフラジールで瞬殺したいですよ……なければ……」

「あー……とりあえず耐えてくれ。バレたらあの女に制裁どころじゃなくなるからな」

「……分かりました。耐えます。お嬢様を見捨てた女は、まだ……」

「だめだこりゃ……完全に暗黒面に入ってるよ……」

銀翁と呼ばれた女性はやれやれと首を振り、アスピーデと呼ばれた少女は氷笑を浮かべてニタ笑う、

（お嬢……私はお嬢が死ぬとは思えない……生きてるって分かるぜ？…何故か分からねえけど……）

銀翁は何故か千夏が生きていると確信している。アスピーデはまだケタケタと笑っていた。
正直いって怖い。

（さて、織斑千冬の弟はどう出るかな？）

銀翁は遠くで福音に挑み続けている一夏を見続ける。それはまるで何かを待ち、期待しているかの様な目立った……

視点・「二夏」

「とうとう出たか……織斑一夏…」

「……」

俺は一夏の復活を見る。まあ、雪片が折れた事は予想外だが……まあ、千夏が何とかするだろう。

「――――――――――ん？どうした？束」

俺の隣でガタガタ震えている。俺はどうしたと問いかけると束は涙目ながらに俺の方へ振り向く。

「――――箒ちゃんが……箒ちゃんが……どうして……どうして…」

「――――ああ、箒の事か……」

「なんで…かな…箒ちゃんがなんで…あんなに傷つくのかな……」

束は耐えきれなくなったのか、涙を流す、うわぁ……俺でも昔捨てた罪悪感が蘇ってくる。

大統領遣る前に箒を何とかしねえと束が再起不能なりそうだな……

しかたねえ、

「束……」

「うぅ…グスッ……な、に？」

う……原作では見ない涙顔……何これ、可愛い――――――じゃなくて、何か言わねえとほんとにヤバいな……

「大丈夫だ。俺達ならなんとかなるだろ？」

「どうやって……」

「そりゃあ……まあ、何とかな…」

「にっくん何時も他人事見たいに言うんだね……」

束は悲しそうに俺を見る。止めてくれ……マジで耐えきれなくなる……なにに耐えられなくなるんだ？

「とりあえず、お前がＩＳコアでも技術でもイタリアにくれてやればいいんじゃねえか？」

「いいかもしれないけど……ちーちゃんは？」

「待て、私に言い考えがある」＜コンボイ風

「え？えっと、何かな？」

千冬の独断行動について束は聞いてきた。

俺は自信満々で言う。まあ、お約束の展開だがな。

「それはな――――――――――」

視点・「凰・鈴音」

まったく…復活してそうそうあんなボケかますなんて、よほど余裕なのかしら？

千夏姉が死んじゃって、箒との仲も最悪になっちゃったし……

「あー！もう、いらつく！」

「ちょ！鈴？あまりジタバタしないで」

「あ、ごめん……」

忘れてた。あたし福音の攻撃でかなりやられたんだっけ……

「……いらつくのは分かるけど、あれが一夏だもん」

「そうだけど……」

なんなのよ…あの元気っぷりは……まるで迷子になってやっと母親に会えた子供の様じゃない……

「ほんとにもう……訳が分からないわよ…」

「あははは、そうだね」

シャルは苦笑いしながらもかなり嬉しそうにしている。
そりゃあ一夏が復活したんだから嬉しいに決まってるけど……

「千夏がいなくなったのに…あの喜び様はいったい……」

「そうだね……一夏、どうしてあんなに生き生きと――――――!、不味い!?」

「へ?」

あたしが声を出す瞬間、シャルは動き、その場から逃げるその直後緑の粒子があたし達のいた場所を通過した。

「危なかった……」

「ほ、ほんとね……一夏!もっと遠くでやりなさいよ!」

無茶言うな!と一夏は戦いながらもこちらの問いに応える。

ほんとに余裕ね……

「でもなんか一夏へんじゃない？」

「え？何時もの事じゃない？」

何をいまさら…と付けくわえるとシャルは横に首を振って否定する。

「ううん。それはそうなんだけど……」

「肯定しちゃうのね……」

シャル、アンタ案外酷いわね……

「あ、えっとそう言う事じゃなくてね？なんか一夏は何かを待っている様に見えるんだよ」

「何かを待ってる？」

「うん、そういう風に見えるんだ」

「ふーん……」

一夏が何かをまっている？秘策でもあるのかしら？

それとも……

「――――――――誰かを待っている？」

あたしは一夏が何を待っているのか考えるとふとある人物が脳裏に浮かぶ、

「まさか……一夏、アンタ……」

「鈴？」

あたしはその考えをしていると一夏を素通りした福音があたし達の方へ向かってきた。

アイツ！あたしらから遣ろうっての！？

「ふ、福音が！？」

「また！？おとなしく一夏に落とされなさいよ！」

そう愚痴ってると福音はどんどん加速してあたし達に接近し、拳を構える。

あの構えって……！

「あれは…千夏を殺した技……！」

「くっ！早すぎて避けられない！」

シャルはあたしを抱いたままだからスピードが思う様に出せないでいた。

あたしが怪我さえしなければ……！

「鈴！シャル！くそおおおおっ！」

「鈴さん！シャルさん！」

「駄目だ。早すぎる！」

皆の声が聞こえる。もう駄目だ……あたしも…千夏姉のところに…

（――――――助けて！……千夏姉……）

不意に千夏姉の言った言葉が蘇る。

――――いいか？鈴、奇跡ってのは起こらないから奇跡、起こるから奇跡、起こすから奇跡っていうんだぞ？

そんな千夏姉の言葉が脳裏に浮かんであたしは……

（奇跡が起こるなら……千夏姉を…千夏姉を返して！）

あたしは祈りながら目をつむって千夏姉を思う、そして福音の拳はあたし達に……直撃はしなかった。

「――――――待ってたぜ。この瞬間を！！！！」

ドボオオオオオオオオオンッ！！！

「!、やっと来たか!遅刻だぜ?」

また急に海面を割って出てきた物体があたし達を攻撃する瞬間前に福音を二度吹っ飛ばした。そしてそれはクルクルと回りながら水面に着地する。その姿を皆が分かると、驚きの声が上がる。

「!、あれは!?」

夜の月に黒光りする漆黒の装甲を身に纏う女性……

「あの人……」

髪は本来結ばれていたが、今はおろしその茶髪は風に靡いて神秘的だった。

「どうして……」

その黒いボディーで異様なところは足が逆に曲がっており、生身の部分は正座している状態で機械足は二か所が曲がる様になっている特殊な逆足関節だった。

見間違うはずがない……あたしと、一夏の大切な人……あたしは気づけば大粒の涙を目に溜めて大切な人の名を大声で呼んだ。

「千夏…千夏…姉…千夏姉、千夏姉、千夏姉ーーーー!!!!」

その声に気づき首だけを後ろに向かせたあの人はニヤリと笑いながら応える。

――――――――あいよ……」

第五十三話「覚醒した白の力、動き出すＯＲＣＡ」（後書き）

千夏「タイトルを参考させていただきました！ありがとうございます！」

一夏「これからも！」

作者「見ていただけると！」

鈴「嬉しいです！」

束「見ないと……少し、頭冷やそうか」

一同「怖！！？？」

第五十四話「悪夢の終わり……」（前書き）

作者「いや～やっと福音が倒せたよ」
千夏「おい、前書きに書いていいのか？」
作者「見どころは福音だけではないですからね。大丈夫かと」
千夏「ほんとかよ……」
作者「ええ、そうですとも、ねえ？一夏さん」
一夏「あ、ああ……そうだな…」顔真っ赤
千夏「？」

第五十四話「悪夢の終わり……」

漆黒の装甲を身に纏い、現れたのは福音に落とされ、海面へと水没させられた千夏だった。

「”奇跡（きせき）”を超えて、俺、参上！！」

そんな決め台詞を言い、全員に無事である事を知らせた。

「千夏姉……！」

「わあ！？り、鈴！落ち着いて、落ちちゃう！」

鈴は身を乗り出し、精一杯千夏に手を伸ばす、それを見た千夏は少し苦笑いしながらもシャルに抱かれている鈴に近ずいて頭を撫でる。

「鈴…ゴメンな。心配かけて……」

「千夏姉…また消えちゃったりしないよね？」

「安心しろ。あたしはまだ皆といたいからな」

「っ――――――――――千夏姉！」

「うわっと……」

鈴は千夏に抱きついた。その存在を確かめる様に、力いっぱい抱きしめる。

「千夏姉！…千夏姉…千夏姉ぇ……」

「鈴……」

千夏は抱きしめてきた鈴を抱きしめ返す、
大切に扱うように、そして愛おしく抱きしめる。

「千夏……生きてたんだね…ほんとに…よかった…」

「シャル……心配をかけた…」

「いいよ…それと、ゴメン…鈴に怪我させちゃって…」

「鈴は代表候補生だ。覚悟はあるさ」

「でも……」

「いいんだ…シャルや…皆があたしがいない間、鈴や一夏を守ってくれただろう？」

「でも…でも、ほとんど一夏が戦ってくれたから皆無事だったんだ…僕は…」

「ストップ…今はアイツを解放しねえと」

「アイツ？」

千夏はシャルから福音へ視線を向ける。

「……あいつは苦しんでいる…したくも無い事を無理やりさせられているんだ……助けねえと！」

「……わかった…鈴の事は任せて、一夏の元に行ってあげて」

「了解した」

千夏はそう言って未だ千夏の胸で泣きじゃくる鈴にそっと言葉をかけた

「――――――――さて、鈴エネルギーは補充したぞ」

「ぐすっ……千夏姉？」

「鈴……」

「んぅ？……」

「…行ってきます……」

「っ――――……うん、行ってらっしゃい……千夏姉」

「おう」

そう言って千夏は鈴を離してシャルに任せて、一夏の元へと戻る。

「千夏姉！」

「お？」

「……頑張って！」

鈴は右手でサムズアップし、千夏は嬉しそうにしてサムズアップしかえす、

「ああ！頑張ってくる！」

千夏は鈴に応え、一夏の元へ行く、その目は、決意に燃えていた。

視点・「織斑一夏」

俺は今、狂いそうなほどに喜んでいた。

「千夏が…千夏はやっぱり生きていてくれた……！」

俺は近づいてくる千夏を食い入るように見る。

「よう一夏、待たせたな」

「……」

「一夏？」

「っ――――――――千夏！」

「へ？、ふわ！？」

俺は千夏を力いっぱい抱きしめた。もう離したくない……この温もりだけは……！

「い、一夏！？どうした？てか少し痛いって――――――」

「千夏……ああ…千夏が生きてる…ここに…いる……」

「だ、だから一夏…痛いって…それに、恥ずかしいから――――――」

「……う、ぐす…ほんとに…本当に…生きてて…良かった…」

「一夏……」

千夏は俺が千夏を心配したのが痛いくらいわかったのだろうか、俺の背中に手をまわして抱きしめてくれた。

「一夏…ゴメンな？心配かけて…悲しませて…」

千夏はそう言って俺の頭を撫でる。

ああ……千夏が俺の頭を撫でている……千夏は……ここに存在して…ちゃんと生きてる……！

「いいんだ…千夏が生きてさえいれば…俺は…」

「ありがと……一夏…」

千夏も自分を大事にしてくれている事を凄く嬉しいのか、俺を強く抱きしめた。

「――――――――、さーて一夏、やろうぜ？」

「――――――――そう…だな…やってやろう！」

「そうこなくっちゃ！」

俺を千夏は離れる。少し名残惜しいが、やらなきゃいけない事がある。

「福音、お前に恨みは……ある様で無いが…」

「俺たちの二次移行したＩＳの……」

「「的になって貰うぜ！」」

千夏は新しいライフル、「マーヴェ」とレーザーバズーカを構え、俺は雪片と背中のブースターの横に搭載された拡散ミサイルを展開する。

「てか一夏、さっきまで戦っていたんだよな？」

「ん？ああ、そうだが？」

「そのミサイル……つかった痕跡が無いんだが？」

「……忘れてた」

「忘れてたんかい……」

千夏はジト目で一夏を見る。その目に耐えられないのか、俺は目をそらした。

「さ、さあ行くぞ！アイツを何とかしねえと！」

「逃げたな」

「う！う、うるさい！行くぞ！」

「あ、ちょ！」

そう言って俺は福音に接近し、ミサイルを放つ、そのミサイルは福音を追いかけその近くまで行くとそのミサイルは分裂して多数の小型ミサイルになる。そのミサイルに福音は避け切れず命中し、爆発した。

「あーれま、なかなかやるじゃん」

そう言って千夏も福音に接近する。

「オカズは残してくれよ？一夏！」

千夏はライフル「マーヴェ」を構えてミサイルに当たって出た黒煙から出る瞬間に撃つ、

それに福音は体勢を崩し、その瞬間俺が雪羅のクローモードで切り

かかる。

「うおおおおっ！」

白式の雪羅が福音のアンサラーを切り裂き、右半分を落としたが、福音の再生力はそれをいともたやすく修復、形成し直す。

「クソ！やっぱり雪片じゃなきゃ駄目か！！」

「じゃあ使えばいいだろ！？」

「折られちまったんだよ！！」

「折られただぁ！？何やってんだよ！！」

「仕方ねえだろ！！千夏の事で頭が――――――――――！」

「あぁぁ！？あたしがなんだって！？」

「あ、いや……何でも無いです…」

「？、……ちぃ！どうすれば！？」

零落白夜が折られた事に焦る千夏と千夏に怒鳴られ縮む俺は、何とか打開策を見出す為に頭をフル回転させたが、まったく思いつかなかった。

「あー！もうどうすんだよ！？つうか折られてんじゃねえよ！一夏！」

「な!?お、折れたのは千夏がいなかったせいだろ!?」

「なんであたしのせいになるんだよ!千冬さん見たいに雪片使いこなせばよかったろ!」

「俺と千冬姉が姉弟だけど千冬姉に見たいに成れるとは限らないだろ!?」

「だからって少しは雪片に気持ちを込めてだなぁ!」

「俺は何時だって雪片に真心を君に並みに込めてるわ!」

俺達は何故か痴話喧嘩が勃発、福音そっちのけで言い争いしていた。
さっきまでムードは何処行ったんだが……
そんなこんなでほっとかれている福音はそんな事をお構いなしに腕に粒子を展開してチャージし始める。
そしてチャージが終わると福音は俺たちに接近戦を持ちこむ、
俺はまだ気づかず、千夏も気づいていなくてまだ喧嘩していた。
そして福音が俺達の目の前までくると、俺と千夏が気づき拳を同時に振りかぶる。

「「じゃますんじゃねえ!」」

ババキィッ!!

福音は俺達のクロスアッパーが決まり高速回転しながら飛ばされた。
いいセンスだ……
そんな二人を暖かくも冷や汗をかきながら専用機のメンバーが見て言た。

「お、お二人も…なかなかコンビネーション…」

「僕……二人が殴る瞬間…見えなかった…」

「あれは教官の弟だけでは話がつかんぞ……」

「どんだけ…仲がいいのよ…」

「喧嘩するほど仲が良いと言うが……あれは次元を超えている…」

皆が俺達を見ていると、俺と千夏は喧嘩するのを止めて福音に集中する。

「……一夏、言いたい事はあるがそれは後回しだ」

「ああ、そうだな……さっさと片付けよう」

千夏は「マーヴェ」を、俺は雪羅を福音へ向け、睨む、

「さて、向けたはいいがどうする?雪片がなきゃ倒せないぜ……ありゃ」

「だな……千夏」

「なに?」

「時間を稼いでくれ……」

「策があるの？」

「ああ、確証はないけどな」

「……わかった。あたしが福音を引き付ける」

「頼むぜ。千夏」

「任された」

そう言って千夏は背中のアンロックユニットを展開、ＰＭミサイルと二次移行で手に入れたプラズマキャノン、「トレゾア」を展開して福音に向ける。

「行ってくる……」

「ああ、気をつけろよ？」

「おう！」

千夏は福音へ向かう、そして俺は折れた雪片を右手で持つ、

「雪片…無茶させてすまなかったな…今度は…ちゃんと振るわせてやる……」

その言葉に応えるかの様に粒子が俺の手をたどる様に雪片に集まっていった。

視点・「千夏・Ｎ・ガッティーノ」

一夏が何やら秘策があると言ってはいたが……

「大丈夫なのか？一夏は……アイツ少し抜けているとこがあるからな～……」

あたしはそう思いながらも一夏の時間稼ぎに集中し、福音へ向けて総攻撃をかける。

だが福音は実弾を通常シールドで、レーザーを粒子シールドで弾き、一切攻撃が届かない。

「これで倒せないって、コイツほんとにＩＳか？別の物に見えてくる……」

まあ元から気づいてはいたが……

一夏はまだかなぁ……――――――、とっ！

「ふっ！はっ！とおっ！」

あたしは福音の攻撃を軽やかに避ける。
この二次移行し、名を変えたＩＳ、「アンサング」は前のステイシスより高機動では無いが、
それでも回避力はあまり損なっていなかった。

（それに、こっちは装甲や粒子シールドがあるから被弾しても前に見たいに大けがは減るから皆に心配かけずに済みそうだ」

あたしはそう考えていると、あたしの後ろからまばゆい程の緑の光があたし福音とを照らす、

「！？、な、なんだ！？」

あたしは振り向くと、一夏が折れた雪片を天高く突き上げる様にして伸ばす、

「あれは……」

そしてあたしは驚愕する。雪片が…新たに形を変えた。

視点・「織斑千冬」

「……織斑…それに…ガッティーノ…」

私は目を疑った。福音に腹をさされ、落とされた一夏と、バイタルサインが途絶え死亡が確認された筈の千夏が生きていたのだから、

「織斑先生！…織斑君が！……ガッティーノさんも！」

山田君は泣きながら画面を食い見る様に見る。
その顔はかなり嬉しそうに笑い、二人の生存を喜ぶ、

「そうだな…生きていた…」

私は顔に出さない様にして喜ぶ、あとは福音を何とか止めれば、

「！、お、織斑先生！織斑君が！」

「どうした！？山田先生！」

「お、織斑君が！織斑君の手に持っている雪片が！」

「何？」

山田君の見ているディスプレイを私は見る。
そこには、緑の粒子が雪片に集まり、形を生成しているのが見える。

「折れたはずの雪片が……形を変える？」

そして雪片は形を生成し終えて、雪片に光が収束して消える。
そこには新たに形を変え、より洗練された雪片が握られていた。
その刀は刀身は白く、刃の部分は緑に輝いていた。

「そんな…あり得ません！雪片が直ったどころか色と形までも変えて強化されるなんて！」

「あり得るのか……こんなＩＳが！」

私と山田君は驚く事しか出来なかった。
その時、作戦室に長距離回線が届いた。

「！、なんだ？いったい誰から……」

私は回線を繋ぎ、出てみると……

「！？、貴方は……」

ディスプレイに映し出された人物に私は驚いた。それもそうだ。何せその人物はアメリカの……

雪片が形態を変え、生成をし終えて光が消えるとそこには宝剣と言うに相応しい美しい刀が一夏に握られていた。その刀は柄はガンタイプで、トリガーが付いている。まるで撃つ為でもある様に、そして刀身は白く、刃は緑に輝いていた。

「雪片…ありがとな。また俺と一緒に切り開こうぜ！」

新たな雪片を手にして駆ける一夏に千夏は近づいてくる。

「一夏！」

「千夏、待たせたな」

「いいってそんな。それに……」

「？、それに？」

「その…か、格好いい…ぞ」

千夏は言うのが恥ずかしいのか少しモジモジしていた。

「あ、ああ、サンキューな……（な、なんだよ千夏…急に可愛くなりやがって……）」

一夏は少し困った様に嬉しそうに笑う。それを見た千夏も釣られたのか笑っていた。

「じゃあ行こうか！全部まとめて終わらせに！」

「おうっ！」

二人は駆け抜け、福音へと接近し千夏が援護、一夏が福音に近ずき、新たな雪片で零落白夜を発動させる。

「行くぜ福音！！うおおおおおおおおおおっ！！！！」

「いっけえっ！一夏あああああっ！！」

白式の零落白夜が福音の粒子シールドに当たる。
双方が火花を散らしながらお互いを削り合っていた。

「くおおおおおおっ！！」

一夏は少し押されていた。だが、

「一夏さん！頑張ってください！」

「！、セシリア？」

「行け！一夏！お前の力を私達に見せてくれ！」

「ラウラ……！」

「僕たちが見守ってる！頑張って！」

「シャル！」

「一夏！アンタ負けたら招致しないんだから！」

「お前の……本当の力を見せてみろ！！」

「鈴！箒！……」

一夏は皆に励まされ、力を増すそしてどんどん福音のシールドを抜けていき、
到達寸前まで来た。

「これで…！」

一夏は勝利を確信しただが……

キュウウウゥンッ……

「！？、何だ！！」

急に雪片の輝きが消えていく。一夏は訳が分からなかったが、
白式のパラメータを見ると……

「――――――しまったぁ！？エネルギーが切れかかってる！！」

バカな事に一夏は福音に雪羅やミサイルの生成をやってしまったせ

いかエネルギーを大量に使ってしまっていたらしい。
そして粒子エネルギーは通常エネルギーがあってこそ使える物で、
無からは粒子エネルギーは生成出来ないと言う欠点があった。そしてまたそれが聞こえたのか……

「また何やってますの!?一夏さん!!」

「せっかく応援したのに!!」

「お前はふざけているのか!?」

「アンタほんとにバカァ!?」

「もう言う気力も無い……」

と散々に言われ、一夏は落ち込む、

(俺のせいじゃ……いや、俺のせいか……)

そう自己嫌悪に陥っていると、

「……一夏」

「!?、な、なんだ?」

一夏は福音と競り合っているのに横眼で千夏を見る。

「そう言うの…あたしは嫌いだな…」

ドンガラガッシャーンッ！

一夏の頭に雷が落ちた様な衝撃が襲う、
そして目を虚ろにさせ、少し震えていた。

「……はは、千夏に…千夏に嫌われた…」

福音に負けるより千夏の言葉に衝撃を受け心が負けそうになる一夏だった。
そして福音はそれを見逃す筈もなく、どんどん押し返す、

「――――――――!?、クソ！押される！？」

「一夏！」

千夏は気を取り直し、負けそうな一夏を見て戸惑う、

「どうしよう…一夏が負ける…どうすれば…！」

千夏は頭をフル回転させて考える。
だがいい案は浮かばず、次第に焦りは大きくなった。

「――――――あたしじゃ……一夏を守れないの？」

千夏は一夏を助けられない事に悔いた。

「一夏を守りたい……一夏を助けたい…！」

千夏は願う。強く願った。

（あたしは…あたしは一夏の力に成りたい！」

千夏強く想い、その願いに応えるかの様に、アンサングの機体から緑の粒子に混じって白銀の粒子が溢れだす。

「これって……！？」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギー効率が急激に良くなっていき、
アンサングの抱える燃費が零になった。

――――――――『一騎当千』、発動、機体エネルギーの最適化……完了。

項目に書かれているのはワンオフ・アビリティーの文字だった。

（一夏の…一夏の力になってくれるの？アンサング……）

――――――――ＯＲＣＡの戦士の為に、君と戦い抜こう……

そんな声が聞こえた気がした千夏は、身を引き締め、一夏を見る。

（一夏……今行くからな…）

そう言って千夏は一夏の元へ行く、

「ぜらあああああっ！！」

一夏が根性で粘っているが、どんどん福音におされていき、体力も限界に近ずづいてきた。

「駄目だ……もう……！！！」

一夏が諦めかけた瞬間、後ろから何かに抱きしめられる感覚がした。

「！！、千夏！？」

「一夏！あたしと…コイツの力を受け取れ！」

千夏がそう言った瞬間、全身に電流の様な衝撃と炎の様な熱が走り、一度視界が大きく揺れた。

「な、なんだこれ……力が漲ってくる！？これは！！」

「…無理、させてるよね」

「千夏？」

「この戦いが終わったら…」

「……」

「生きて…帰ろう…”ＩＳ学園に”」

「……ああ！」

千夏の言葉に答え、一夏は千夏から貰った力で福音を押していく。

（――――そうだ…俺たちは生きて帰る！俺の後ろには愛した女がいるんだ！）

その時、一夏の雪片が光だしてその実体剣は消えてそこから大きな緑に光輝く刀身が出現する。

その光り輝く刀身は一夏達よりも大きく、斬馬刀の様な大きさだった。

「俺は……生きるッ！」

一夏は、千夏のワンオフ・アビリティーのエネルギー効率上昇で雪片に輝きが戻る。

それは、エネルギーの流れを良くし、小さなエネルギーを大きなエネルギーに変える

千夏の力だった。

「生きて……ッ！」

一夏は万全の力と思いを込めて福音に進化した雪片を叩き込む、そして福音の粒子シールドは破壊され、一夏の斬撃が決まり、福音の装甲が砕け散った。

「千夏と添い遂げるッ！！！」

砕かれた福音は機能を停止し、アーマーを失ってスーツだけの状態になった操縦者が海へと堕ちていく。

一夏と千夏は慣れない力で自身の体力が限界に近いのか、動けなか

った。

「しまっ――――――――！」

「――――――まったく、お前はツメが甘いな。嫁よ」

ラウラが海面接触ギリギリで操縦者をキャッチした。
同じく、シャルとセシリア、鈴に箒はかなりやられたが無事の様に見えた。

「終わったな」

「ああ、そうだな…やっと終わった……」

そう二人は言い。ふうっと息を吐いた。
そして一夏は行き成り千夏を真正面に引っ張り、前から抱きつく、

「え！？あ、ちょ、一夏！？」

「わりぃ……少しだけ…こうさせてくれ…」

「あ…うん…わかった…」

千夏は少し恥ずかしそうになってはいたが、まんざらでもなさそうにされるがままに抱きしめられていた。そんな二人を、美しい日の出が温かく迎えていた……しかし

「一夏！千夏！来て！鈴が！」

「え！？」

「!、鈴がどうした!?」

一夏と千夏はシャルの慌てッぷりにただ事ではないと思い、すぐに二人は離れてシャルと鈴の元に向かう。そこには、

「!?、鈴!!!」

「どうした!鈴!?しっかりしろ!!」

「う…ううぅ…ごほっ」

「!?、鈴!?鈴!!」

そこには顔を青くし、苦しそうに息をして吐血をした鈴だった……

第五十四話「悪夢の終わり……」（後書き）

千夏「へえ、これが見どころねえ……よし、殺そう」
作者「ま、まままままってください！！あんだけ鈴が近くにいたんだからコジマ汚染が！」
千夏「一夏、手伝って……」
一夏「おう、任された」
作者「ま、待ってください！一夏さん！あ、あのこ、告白シー「チェェストオオオオオオオッ！！！！！！！」少し顔が赤い
作者「ぎゃあああああああああ！！！！！！！？？？

第五十五話「奇跡の名の元に……」（前書き）

千夏「クローズβ開始！いえぇーい！」
一夏「今回の新作はかなり期待大って聞いたぞ？」
千夏「ああ！一番あたしを熱くさせるのはやっぱチーム戦だろ？」
一夏「だな。俺達見たいにいい連携が出来ればいいな」
千夏「だな……てっ作者？どうした？」
作者「……」ズーン……
一夏「ほっといてやれ。参加出来なかったんだとよ……」
千夏「そうか……」
作者「友達がいれば……友達がいれば……！」
一夏・千夏「「駄目だこりゃ…」」

第五十五話「奇跡の名の元に……」

福音を倒し、皆でＩＳ学園に帰れる……
そう思っていた。そう思っていたのに……

「鈴！鈴、お願いだから目を開けてくれ……！」

「はぁ…はぁ……はぁ…」

あたしの胸元でどんどん命が消えていく。
必死に呼びかけても、鈴は目を閉じたまま息を弱くしていった。

「鈴！しっかりして！」

「鈴さん！鈴さん！」

「くそっ！衛生兵はまだか！？」

「鈴！おい、目を開けろよ！応えてくれ！」

皆が必死に呼びかけたが、鈴は応えてくれない。
どうして……どうしてこんな……

「どうなってるの？……どうして…鈴が…」

「――――――――！、この症状ってもしかして……」

「一夏？何知ってるのか？…鈴に何があったんだ！？」

「……多分…鈴は千夏が前に怪我した時の粒子による感染が原因だ…その症状に似ている…」

「！、じゃあ、対処法はあるんだな！？」

「ああ……」

あたしは喜ぶ、でも一夏が言った言葉でまた絶望が生まれた。

「でも…」

「でもって…なんだよ？」

「今ここに…ワクチンは無い」

「だ、だったらすぐに旅館に行って――――――」

「無いんだ…」

「え――――」

「もう無いんだ…千夏が使ったのしかなかったんだ！」

「！？、な、なんで無いんだよ！？予備は！？」

「……千冬姉が言うには…あのワクチンは貰い物で…千夏の分しかなかった…」

「そんな…あたしが…あたしが怪我をしたせいで…」

「！、違う！あれはもともとＩＳ学園に無い物で――――――」

「あたしが怪我をしたから無くなっちまったんだろ！？」

「っ――――――それは……」

一夏は言葉を詰まらせる……

あたしが…あたしが無茶なんてしなければ……！

「やっぱりあたしが悪いんだ……こんな事なら……鈴がこんな事になるなら……」

あたしは自分のせいで大切な妹分を失うと言う絶望に苛まれて泣きながら思ってもいない事吐く、

「あたしなんて……あの時ひと思いに死んでいれば――――――」

「――――――――ふざ…けるな……」

「え……？」

あたしの隣から、苦しそうにも声を吐きだし、何かに耐える様にして二本脚で踏ん張って立っている

箒が言った。

「お前が死んだとしても……あの化物相手に私達は勝てなかっただ

ろう……お前がいなければ…全員死んでいた……」

「で、でも…一夏がいるから――――――――」

「バカかお前は？……一夏の強さは…お前が生み出した物だ……！」

「箒……？」

「ほ、箒？いったい何を？」

一夏は箒の言った言葉に少し赤くなっていた。
どういう事だ？

「……私は…一夏が好きだった……」

「え！？」

「ほ、箒？」

「箒さん……」

「箒、お前……」

「い、言っちゃった……」

皆が驚いた声を出す、あたしだってそうだ。
あの箒が、一夏の前で告白するなんて……

「だが一夏は……一夏の心はもう…アイツに向いていた……」

「ほ、箒…なんでそれを……」

一夏はさらに顔を真っ赤にさせてアタフタしてる。

「だから私は…お前を妬んだろうな…」

「え？あたしを？」

訳が分からない……なんであたしが箒に落とされた事と一夏が誰を好きなのかが関係するんだ？

「……千夏、お前は生きなければならない……一夏の力になるって決めただろ……」

「！、そ、それは……」

「お前が悲しんでいる時、お前を心配しない奴がいないか？お前が苦しんでいる時助けようとしない仲間がいないとでも？お前が死んだ時、悲しんでいない友達が……いると思わないのか？」

「……」

あたしは、今苦しそうに息をしている鈴を見て、その後にセシリア、ラウラ、シャルと箒、そして……

「……」

「千夏……」

あたしの肩に手を置いて悲しそうに、そして苦しそうな目であたし

を心配している一夏がそこにいた。

「千夏…そんな…そんな悲しい事を言わないでくれ……お前がいなかったら…俺は弱いままだった……俺だけじゃない。皆…千夏に生きててほしいって思ってるんだ……だから…そんな悲しい事を言わないでくれ！」

「一…夏……」

あたしは目からポロポロと涙を流す、あたしには……

「あた…しは……鈴が死ぬなんて…嫌だ…皆で…帰りたい！」

「ああ……」

「助けて…鈴を…助けて……」

「……任せろ……」

一夏はそう言うと、鈴の胸元に手を置き、目を閉じる。

「一夏？」

「皆助けるさ、何時だって…どんな時だって…！」

その時、一夏の白式の装甲が開き、その開いた部分から、今まで見た綺麗な粒子が流れ出たが、
それは前やさっき見た、粒子とは違いとても綺麗で……暖かった……

「なんですの……これは…」

「綺麗……まるで雪見たい…」

「この粒子…何故だ…とても温かい…」

皆は一夏から出て、空中に散布された輝く粒子に魅了された。
そして一夏は言葉を発する。

「――――――――、浄化システム…発動…」

一夏の言葉に応え、白式は……奇跡を起こす。

――――――――――――――――――――了解、タバネ粒子解放……

……

――――――――――――――――――――コジマ粒子の除去、及び浄化を開始します。

その機械音声が流れた後に、輝く粒子は全てを包み込んだ……

視点・「ミシェル・ネオニダス」

「やっぱりお嬢は生きてたか！さすが旅団長だぜ！」

「ええ…ええ！…生きてて…生きててくれました…お姉さま……」

アスピーデは目をグシグシこすりながらお嬢の生還を喜んでいた。

「だが、ありゃなんだ？アメリカのＩＳを倒した後、急に光の粒子に包まれて分かんなくなったぞ？」

「そう…ですね…ですが」

「ん？」

「大丈夫…だと思います…だってあの光は、暖かいですから……」

「……そうだな…」

「はい……」

私達は遠い所から見守る。

私達は気持ちの良い帰還できそうだ。

「だが、問題は残ってる」

「……ええ、例の女ですね」

「ああ、お嬢なら全力でアイツを助けるだろうな……」

「ですが……」

「ああ、エンリコの旦那でも、あれは許されないだろ……」

「千夏お嬢様の御心のままに、というのは私達は望んでいるのですが……」

「マフィアの抗争に巻き込まれた私を助けてくれたお嬢の為に強力したいが……」

「ですね……私の友達になってくださいました千夏お嬢様の為に、微力ながらご協力したいのは山々ですが……」

私達は考えているのが同じなのか、溜息を吐き、問題を口にする。

「「あの出鱈目大統領には勝てない……」」

私達は肩を落としながらその事だけをこころ残りにしていた……

視点・「織神二夏」

「ほう……あの機能を発動させたか…」

あいつ……俺が思っているよりも強くなっている……

「雪の閃光（スノー・グリント）……奴にはその名が相応しいな……」

「そうだね……ほんとに綺麗…」

鈴に怪我は予想外だが、ここまで行くとなると……

「……俺も覚悟を決めねばな…」

「にっくん？」

「いや、なんでもないさ……」

千夏のＩＳ……「アンサング」……束は黒百合と呼んでいるが……あの機体のワンオフ・アビリティーを発動させるか……なかなかどうして…

「やはり千夏はすごいな……理由を付けて呼んだかいがある……あいつならば…俺を…」

「にっくん？何を言ってるの？」

「束、可愛いよっていったのさ」

「にゃあぁ！？に、にっくん！？き、急にそんな事を言われたら束さん困っちゃうよ！？」

そう言いながらクネクネと体を揺らす束に俺は少し苦笑いをする。

さて……

「……デモンストレーションは終わった……一旦浜辺に帰るぞ」

「に、にっくんがどうしてもって言うなら――――――てっなに？わああぁ！？」

俺は束を抱き上げてアレサを展開、そのまま千夏達の逆方向へと飛ぶ、

「に、にっくん……行き成りはビックリするよ…」

ぷくーっと頬を吹くらます束に俺は悪かったと言って飛びつづける。

（今回はいろいろとイレギュラーはあったが……第一段階は終了した……千夏…イタリアで待ってるぜ？」

俺は心の中で再開約束し、束を乗せて離れた。何故か分からんが束が顔を赤くして俯いていたが…風か？

数分間、白式が粒子を散布続け、ようやく光が収束し始める。

「――――――――、……ど、どうなったんだ？」

千夏があたりを見回して確認するが、何かが変わった様子は見受けられなかった。

そしてラウラが驚いた声で皆に告げる。

「――――――――!?、こ、これは!?」

「どうしましたの?ラウラさん」

「この周辺を汚染していた粒子が……消えた」

「え!?」

「ほ、本当ですの!?」

「ど、どう言う事?」

皆が驚愕していると、千夏の胸元から声が聞こえた。

「――――――んうぅ……」

「!?、……鈴?」

千夏は恐る恐る胸元にいる鈴を見る。
その顔は生気に満ち溢れている顔があり、鈴の怪我が全てふさがっていた。

「……千夏…姉…?」

「鈴?平気……なのか?」

「え?平気って――――――――――」

「っ――――――鈴!!!」

千夏は思いっきり鈴を抱きしめる。
もう離さない…そんな思いを込めて……

「鈴…鈴…鈴ぅ……」

「ち、千夏姉？どうしたの？ていうか痛いよ…千夏姉…」

「よかった…よかったよぉ……」

千夏は大泣きしながら鈴を優しく撫で、頬ずりする。
その光景を見ていた専用機持ちは……

「よ、よかったですわ……」

「うん…本当に…良かった」

「そうだな……」

「……」

皆、鈴が無事である事に喜びを噛みしめていた。

「……良かった……俺は…皆を守れた…願いが叶った……」

「……グスッ……一夏が…助けてくれたのか…？」

「……さあな…奇跡が起こったんだろうな……」

一夏はそう言うとフラフラしだして、目も少し眠そうだった。
そして一夏は崩れ落ち、千夏の方へ倒れこんだ。

「ちょ！一夏!?こっちはまずい――――――わあっ!?」

「なにゃあ!?」

一夏は千夏の肩に寄り添うようにして倒れた。

千夏はビックリしたが、自分の肩でスヤスヤ寝てる一夏を見て、クスリと笑い、仕方ないと言って、されるがままになる。

鈴も少し驚いたが、あの戦いの苦労が溜まっていたと思い、そのまま一夏の寝顔を観察していた。

千夏は自分に倒れこんだ一夏に自分の全ての想いを言葉にして言った。

――――――――――――――――――、一夏、聞こえる?……ありがとう」

第五十五話「奇跡の名の元に……」（後書き）

ミシェル「ども～！作者に書いてもらったミシェル・ネオニダスだ！」

アスピーデ「こんばんわ。アスピーデ・アスピナです。そしてさようなら」

ミシェル「いやまてまて！行き成り帰るな！」

アスピーデ「いえ、作者が一日で書きあげたから眠いらしいので早く帰らないと…」

ミシェル「え！？マジで？」

アスピーデ「はい、その様です。では……」

ミシェル「あ、ちょ……マジで帰っちまった……え～と、私達の設定公開はまた後でという事で……バイチャ！」

第五十六話「偽りと真実……」（前書き）

し、シリアスから……シリアスから抜け出せない！感想まってます

第五十六話「偽りと真実……」

福音に打ち勝ち、皆が喜んでいるとシャルがあっと声を出し顔を青くする。

「そ、そうだ！空爆！まだそれが残ってたんだ！」

「空爆？」

「そ、そうでしたわ……ですけど…」

「水爆を積んだＩＳのステルスの影も見えないわね……いったい」

皆が不思議がったり慌てたりしていると、オープンチャネルに連絡が入る。

『ガッティーノ、聞こえるか？』

「織斑先生！」

『無事な様だな。ガッティーノ……』

「ご心配おかけしました……」

『なに、無事ならそれでいいさ』

千冬が千夏の無事を確認していると、シャルが千冬に質問する。

「織斑先生、あのＩＳによる空爆は？」

『それなんだが国防省長官はたった今、逮捕された。退任だ』

「逮捕？」

セシリアが不思議そうに問いかける。

『アメリカ大統領から連絡があった』

行き成り大統領から連絡が来たという事実に皆は驚いていた。

『今回の軍事ＩＳの演習、新型兵装の試験、そして核搭載ＩＳの出撃……全て、国防省長官の独断で行われた』

「これが…独断？」

千冬の言った事に千夏と皆は驚きを隠せなかった。

「あの、空爆や核の投下どうなったんですか？」

『攻撃命令は解除、ＲＥＸ二機は基地に帰還した。そして再び作戦司令権限は私に戻った』

「な、なるほど……」

千夏は顔を引きつらせていた。あと少し福音を倒すのが遅かったら全員あの世行きだったかもしれないのだから、

『政府（ワシントン）は秘密を守る為に核を使うほど愚かでは無い』

「実際飛ばしましたから怪しい物ですけどね……」

皆は鈴の言った事に苦笑いを浮かべていた。

『とにかく、危機は去った……よく…頑張った』

「……頑張ってくれたのは一夏です。あたしは何もしてませんよ」

『だとしても、だ……』

千冬と千夏は少しニヤリとしながら笑う。二人の顔はとても穏やかだった。

『……千夏…私の判断ミスで怪我をさせてしまった…すまない』

「織斑先生、いいんです」

『だが……』

「皆の気持ちを……再確認できましたから、それに……」

千夏は箒の方を見る。少し悲しそうな顔をした後、再び千冬に話す。

「これは、あたしが箒の事を考えなかったあたしが悪かったんですから……」

『……そうか』

「はい」

二人の話が一段落すると、鈴が千冬に話す。

「あの、織斑先生」

『なんだ？鳳』

「そっちは大丈夫なんですか？こちらも独断で動いちゃって……」

『保険は用意してある。今回が国防省長官の独断と言う愚行とお前の福音に水没させられた事実を隠ぺいしようとした事実があるからこちらはまだ有利さ。長官との会話も録音してあるしな』

「そうですか……（なんて手際がいいんだろう。千冬さんって……）」

「まあ、もしもの時はあたしも協力しますよ。落とされた本人なんですから！」

『フッその時は宜しく頼む。さて、戻って来てくれ作戦は終了した』

「了解しました。織斑先生」

『旅館でまっている。ではな』

そう言って千冬はチャネルと切る。

「……なんかすげー大きな話になっちまったな…」

「そうだね。まさか大統領が知らなかったなんて……」

「まったくね。もう少しで水餃子になるとこだったわ……」

「水爆なだけにな」

鈴の言った事に皆は笑う。そして皆は旅館へと帰還した。

「よ、よかったですぅ…ほんとに、ほんとにぃ……」

「あ、あのほんとにご迷惑おかけしましたから、泣きやんでください……」

旅館に戻った後千夏は真耶に泣きつかれ、千夏は困っていた。
ここまで泣かれると、仕方ないとは言え、罪悪感がる千夏だった。

「だって…だって私の生徒に何かあったらと思うと……私は…」

「す、すいません…（てか、あたしって一回…いや、二回死んでんだっけ…？）」

「山田先生、それ以上泣くと収集が付きません」

「ぐすっ…す、すみません…ガッティーノさんが生きていたのが凄く嬉しくてつい……」

「ほ、本当にご心配おかけしました……」

千夏は本当に申し訳なさそうにしていた。断じて抱きしめられた時に摩耶の胸の感触は楽しんでいない。

断じて、

「――――――篠ノ之」

「はい……」

千冬は箒を呼ぶ、その声に少し震え、千冬の方へ向く。

「――――――――――、よく頑張った……」

「え？」

「これで許されはしないが……いい方へ導いたのはお前だ。篠ノ之」

「……ありがとうございます」

箒は千冬に、静かに頭を深く下げた。皆も何かしらの想いを胸に抱きながらそれを見ていた。

「そ、それじゃあ一度休憩をしてから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身を見せてくださいね――――――あっ！だ、男女別ですよ！わかってますか、織斑君！？」

当たり前の事を言う真耶に一夏は少しグッタリとする。

「そんじゃあ行こうか？一夏」

「へ？え、あ、え？」

そう言って千夏は一夏の手を取って旅館の中へ行こうとする。

「ちょ！千夏さんまさかそこまで進んでましたの！？」

「そんなあ！もう僕たちの入り込む隙間も無いなんて！」

「まあ、予想はしてたけどね……」

「……はあぁ…」

皆が皆、思い思いの事を口にしていた。一夏は顔を赤くして口をパクパクしていた。

千夏は相変わらず訳分からんと首をかしげていたが……

「と、とにかく！わかりましたね？織斑君！」

「は、はい」

「？、何なんだ一体……」

そんなこんなで診断は進み、それを終えると皆は旅館の部屋に戻っていった。

（――――――――ありがとう…アンサング、一夏を……皆の…
力になってくれて…）

視点・「織斑一夏」

俺達は今、旅館で食事を取っている。女子の一団がシャルに何が起きたかを聞いていた。
そして俺は……

「千夏、ほら口開けろって」

「い、一夏…あたしは自分で――――」

「何言ってんだよ。千夏は診断でもかなり過労が出てたんだぜ？それに寝ちまった俺を運んでくれたから疲れているはずだし、それに俺が千夏にしてやりたいから……」

最後の言葉は小さくなってしまった。
聞かれてないだろうか……

「そ、それはそうだけど、一夏の方も重傷なんだからな？」

「わかってるさ。まずは千夏の方が優先だよ」

「……あ、ありがとう」

「いいってそれじゃ――――――はい、あ～ん」

「あ、あ～ん……」

千夏は俺が箸で差し出した具を食べる。
また千夏にこうやって出来ると思うと嬉しくてたまらない。

「上手いか？」

「……うん、美味しい」

「それはよかった」

千夏は顔を赤くしながらコクコクと頷く、
その仕草が無償に愛おしくて、俺は笑っていた。

「……一夏も」

「え？」

千夏はお揉むろに自分の箸を取って具を掴み、
俺の口元まで運んだ。

「はい」

「……えっと？」

「一夏も」

「……食えと？」

「そ、だから……あ～ん」

「――――――あ、あ～ん」

俺は千夏が箸で掴んだ具を食べる。
かなり恥ずかしかったが、千夏に食べさせてくれた事でかなり嬉しくてされるがままだった。

「……美味しいか？」

「……凄く、美味しい…です」

「そう、よかった」

千夏は俺ににっこりとほほ笑み、俺は……凄く嬉しかった。
この笑顔を独り占めしていいのだろうかとさえ思う。

「……」

「……これが浮気か…嫁よ…」

「戻って来てそうそうこれか…」

「……」

「いいなぁ…千夏姉」

そんな俺達の光景を見ていた専用機持ち一同は少し羨ましくも微笑んでいた。

若干睨んでいる奴もいたが……な。

視点・「千夏・N・ガッティーノ」

ざあ……。ざあん……

「……どうしよう…海に入るのが怖くなっちゃった……」

あたしは食事の後、軽い休憩を取ってから水着に着替えて夜の海に入ろうとしたが、何故か足がすくみ入れないでいた。それは何故か？

「うう…福音に水没させられたからか？トラウマなのか？これが…
…」

一夏に呼び出されて来てみれば一夏は来ておらずまっていた。

「あー入れないからつまんねー。だれかいないかなー」

こんな真夜中に人が来るはずもなくましてや千冬さんに許可をもらえるなんてあたしと一夏ぐらいだ。てか……

「なーんで千冬さんは許可したんだ？頼んでも無いのに……」

何故だろう？何かあるのか？
あたしは不思議がっていると……

「――――――よう、千夏」

「一夏か？遅い…ぞ…」

あたしが後ろを振り向いて見てみると、確かに一夏だった。そう、一夏に似た人物だった。

「……二夏…」

「大けがしたって聞いたぜ？大丈夫なのか？」

「どうしてそれを……」

「俺に不可能はねえ」

「あっそ」

あたしは立ちあがり二夏を警戒しながら後ずさる。

「ん？、どうした千夏、そんな警戒する様な目をして」

「自分の胸に聞いてみろ」

あたしがそう言うと二夏は胸に手を当て考えるそぶりをする。
数秒たつと二夏はポンッと手を叩いた。

「あーあれか、すまんな少し積極的すぎたか？」

「積極的って……」

「まあ、そう邪険にしないでくれ。俺が悪かった」

「……まあ、いいけど…」

あたしは岸壁に座りなおし、夜の海を眺める。
二夏もあたしの隣で腰を下ろして一緒に眺めた。

「なあ、二夏……」

「なんだ？」

「どうして、福音はあんな……」

「原作にはない装備だった…か？」

あたしはコクリと頷く。
二夏はやれやれとした感じで首を振る。
「そりゃあオメー千夏が原作に介入したからだろ？」
「え――――――」
「だってそうだろ？原作じゃあよくわからんがイタリアの代表候補生はいなかったんだぜ？」
「そ、それは確かに……」
「つまりだ。千夏が原作に触れた事でイレギュラーが生まれたって事だよ」
二夏はニヤリと笑い、あたしは二夏が言った説明で自分がやってきた事を思いなおしてみる。
「あたしが…介入したから…狂った…？」
「かもな」
「多分な」
「あたしが一夏達の側にいたから……イレギュラーが出てきた…？」
「あたしのせいで…箒があんな事をしてしまった……？」
「可能性はあるな」

「皆…皆……あたしのせい？」

「ありえる話かもな」

心が…黒い感情に支配されていく……皆…あたしのせいで…鈴も…箒も…一夏も傷つけた？

「あ、あ…あたしの…せいで…」

「まだ戻せるかも知れねえぞ？」

「え？」

「まだ…間に合うかもしれない…て、いったんだ」

二夏の言った言葉に、あたしは食いつく、これ以上皆が傷つくなんて…見たくない！

「二夏！教えてくれ！どうすれば！？」

あたしは二夏を方へと顔を向ける。二夏はあたしに微笑みながら言葉をかける。

「それはな……」

「それは？」

――――――――――一夏達から離れる事だ」

「え――――――――……」

「千夏が離れればこれ以上原作は崩れない……元凶がいなくなれば元通りって訳さ」

「あたしが……皆と離れる…」

「ま！今すぐとは言わねえよ。じっくり…考えるんだな。安心しろ。千夏が皆から離れる時は、俺がお前の面倒を見てやるよ」

「……」

「フッ…じゃあな」

二夏はそう言ってあたしから離れ、どこかへ去っていく。
あたしはそれをただ見ている事しかしなかった。

「あたしが……いなくなれば…皆を危険な目にあわせなかった?」

そんな暗い感情に押しつぶされそうになっていると誰かが声をかけて来た。

「千夏、悪い!遅くなっちまって」

「一…夏……」

一夏が二夏と入れ替えある様にして現れた。その姿水着だ。

「て、どうした?暗い顔をして…何かあったか?」

「……ううん、なんでも…なんでもないんだ…なんでも」

「?、そうか…」

一夏はあたしの隣に座る。あたしは…一夏を見る事が出来なかった。ただ、頭を垂ている事しか出来ない……

「あ、あのさ。千夏」

「……なに」

「――――つ、月が綺麗だな!」

「……そうだね。綺麗…」

あたしは極力一夏を見ない様にして月を見る。

今宵は満月で、雲一つないから夜なのに明るい。

「……一夏」

「ん？なんだ？」

「……あたし、夏休みにイタリアに戻るんだ」

「え？」

「自分のＩＳとかの報告もしないといけないからな……」

そう言ってあたしは自分のＩＳ待機状態である黒いガントレットを撫でる。

あたしのＩＳが二次移行して名と姿を変えた事で待機状態も変化した見たいだ。

「そういえば、千夏のＩＳの待機状態って前は伊達眼鏡だったよな？」

「ああ、なんでかしらないが、こっちも変わった見たいだ」

「――――――お、お揃いだな…」

「え？」

「ほら、俺もガントレットだし、白いけど…」

同じく右手に付いている白式の待機状態をあたしに見える様にして差し出す。

あたしも同じようにして自分の手に付いているアンサングの待機状態を見せる。

「……そうだな…御揃いだ…」

「ああ、お揃いだ……」

一夏は嬉しそうにしてはにかんでいたがあたしは一夏に言われた言葉で喜ぶ事が出来なかった。

「……なあ、一夏、ここへあたしを呼んだんだ?何か様があってが呼んだんだろ?」

「あ……えっと…そのお…」

「?、言いにくい事?」

「その…だな…えっと…」

「……はあぁ…何時もハッキリしないと時があるな。一夏って……」

「うっ……すまん」

「そんなんだから…皆だって…」

「え?」

「あ、……なんでもない」

最低だ。あたしは……人のせいにしようとしてた……

やっぱり…あたしは……
そう思っていると一夏が何やら決心した様にして握り拳を作っていた。

「千夏！」

「え？なに？どうし――――――――――」

あたしは一夏にどうしたか聞こうといたが聞けなかった。だって……

「……」

「……」

あたしの唇を、一夏の唇が塞いでたんだから……

ここは断崖絶壁、そこに足をプラプラさせながらただ海を眺めている人物がいた。

「……」

篠ノ之束、箒に紅椿を私、そしてその事を後悔している様に顔を暗くしていた。
そこへ一人の女性がやってくる。

「どうした?束、お前がそんな暗い顔をするなんて……」

「……やあ、ちーちゃん」

「おう」

千冬は束の元気の無さに驚いていたが、あの時の事を思い出して束に声をかける。

「……今日は散々だったな」

「そうだね…箒ちゃんが他人にあんな事をするなんて思わなかったよ……」

「そうだな……どこで間違えたのか…」

二人は少し顔を曇らせ、何がいけなかったのか……そんな事を考えていた。

「箒ちゃんに…紅椿を渡すのは早かったかな?」

「それはわからん……何処でどうすればいいかなんて、未来でも見れない限り無理さ」

「そうだね……ちうちゃんは大丈夫だった」

「ああ、かすり傷一つない。奇跡としか言いようがないな」

「そっか……ちゃんと機能してんだね。ちうちゃんのＩＳ」

「なにか知っているのか？」

「ちうちゃんが無事なのは医療用ナノマシンを改造した強化人間を生み出す為の機能だよ」

「なんだと……？」

千冬は強化人間と言う単語に引っ掛かる。

「それのおかげでちうちゃんは助かったんだよ。でも……」

「でも……なんだ？」

「もうちうちゃんは……人間に戻れない」

「！、どういう…事だ？」

千冬は自分の耳を疑った。

まさか束がそういう機能を仕掛けたのではないだろうか考えたのだ。

「まあ、それは私がやった事じゃないんだけどね……」

「ではだれが……」

「ねえ、ちーちゃん……」

「……なんだ？」

「今の世界……楽しい？」

「……」

千冬は束の言った真実を考えて、言葉を出した……

第五十六話「偽りと真実……」（後書き）

さてどうするか……少しはラヴコメ入れたけど……どうすれば！

第五十七話「片思いな両想い」（前書き）

千夏「ふぅ～なんか疲れた……」
作者「大丈夫ですか？」
千夏「大丈夫な訳あるか、胸に風穴開けられたんだぞ？」
作者「え？マジッすか？ちょっと見せて――――」
千夏「見たら風穴開けるわよ？」
作者「す、すいません。ごめんなさい。だからその二丁拳銃下ろしてください…」

第五十七話「片思いな両想い」

二夏の襲来と一夏の告白が過ぎ、千夏達は帰りのバスに乗って高速道路を走っていた。
走り出す前に福音の操縦者と名乗る女性――――ナターシャ・ファイルスが来て一夏の頬にキスした時は専用機持ちのボトルアタックが炸裂した。何故か千夏もそれに参戦していたが……
そんなこんなで騒動は終わり、クラスの皆は疲れたのか眠っている者がほとんどだった。
その中で疲れを見せず、バスの中から景色を見ている人物がいた。

「……」

千夏だ。千夏は一番後ろの席でスヤスヤ寝ている鈴を膝で寝かしながら見ている。
後ろの席は五人座れる席で、鈴を寝かすにはちょうどいいと千夏は考えたのだ。
千冬に無理言って鈴を自分と同じバスに乗せられたのは千夏が千冬のお気に入りである事が大きい。
さらにあの事件もあってか、前よりも千冬は千夏に甘くなっていた。
一夏の扱いはさらに厳しくなったが……

「……あのさ」

「……何？」

「その……」

「……早く言って」

「……怒ってるか？」

「何に……？」

「そのぉ……」

「……早く言って…男らしくない」

「ぐっ……」

千夏に男らしくないと言われへコむ一夏、鈴が千夏の膝を占領してるせいで千夏の隣の席に座れないと言う事もあって少し羨ましくもあり焦っていた。

「……海岸での事なんだが…」

「……」

「い、行き成りは……いや…だったか？」

「……」

千夏は少し顔を赤くして景色を見るのをやめ、膝に頭を乗せて寝ている鈴の頭を撫でる。

「……んぅ…スゥ……スゥ……」

鈴は気持ち良さそうに顔を穏やかにさせて寝ていた。それを見た千夏は嬉しそうにして撫で続ける。

「ち、千夏……」

「静かに……鈴が起きちまうよ……織斑」

グサァッ！と一夏の胸に何かが突き刺さる音が聞こえる。名字で呼ばれたのがそんなにきたらしい。

一夏ズーンと頭を下げた……白式よりも真っ白になりかけている。

――――――燃え尽きたよ…真っ白にな…

「ち、千夏？……やっぱり、怒ってるのか？」

「……」

千夏は、海岸での出来事を思い返した。

回想中

千夏は海岸で一夏に呼び出され、自分の唇に一夏の唇が押し当てられていた。

「……」

「……」

千夏は自分の状況を理解出来ず、ただ目を見開いて目をつむり自分にキスしている一夏を見ていた。
その間、数秒……一夏がやっと千夏から唇を離して離れる。その顔は真っ赤だった。

「……千夏」

ビクッと千夏は体を震わせ、一夏を見る。その目は怯えた様なそんな目をしていた。

「俺は……千夏が……」

「一……夏…？」

「俺は……世界で一番……千夏を…愛しています…」

「っ――――――――――――――――……」

千夏は何も言わない。いや、言えなかった。
自分にとってそんな事をあり得ないと思ったからだ。

（い、一夏があたしに……こ、これって…よくに言う…プロポーズ!?）

あり得ないと自分に言い聞かせ、自分を落ち着かせて一夏に話しかける。

「い、一夏……あの、そ、それって……なんで…あたし…なんだ？」

「俺はもう…千夏しか見えない。聞こえない……愛せないんだ……」

「ちょっと待て、一夏がそんな臭いセリフ吐くようなキャラだっけ？」

千夏は原作と今の一夏を比べる。

（――――――――――、うん、コイツ（一夏）は偽物だ！）

千夏はそう決めつけて一夏の頬をつねる。

「ムグッ！？チ、チヒャ？ナ。ナニフォスル？」

「お前は偽物だ！一夏があたしを好きだなんてあり得ねえだろ！」

「オ、オチヒュケ！オフェハホォンモノダ！」

「嘘つけ！あんなくせぇ台詞、一夏が吐くか！ギップリャー！」

「ダカラオフィツケ～！」

千夏は一夏の頬を常上げる。一夏は痛いのか千夏の両手を掴んで抵抗する。

「離せ、偽物～！」

「だから落ち着けって！本物だ！」

「クケ――――――――――！！」

「お前は鳥か！」

今も偽物だと信じる千夏に一夏は少しイラつく。

「あー！もう！おとなしくしろ！」

そう言って一夏は千夏の両脇に手を回し持ちあげる。

鍛え上げられ、無駄な脂肪が無い千夏は一夏にとって軽すぎる。愛は重いが……

「離せー！下ろせー！ヘタレー！」

「ヘタレは余計だ！」

バタバタと暴れる千夏に、コイツは駄々をこねる子供か！と内心呆れていたが、

同時に愛しさも見えてくる。その時、千夏の足が一夏の顎にクリーンヒットした。

「グフッ！？」

「離せ！ってえ？」

一夏はバランスを崩し、千夏と共に……

アボーンッ！（マテ

夜の海に没した。

「――――――ブハァ！…あ、あぶねぇ。深くなかったらどっかにぶつけてたな……」

一夏達の堕ちたところは深く、一夏が千夏を庇う様にして抱きしめていた為、怪我はなかった。

「千夏もだいじょぅ――――――、千夏？」

「……ふぇ……ふっくぅ……うぅ……」

一夏は千夏の様子がおかしい事に気づく、

「お、おい千夏！平気か！？どこかぶつけたのか？」

「あ……う…」

一夏は千夏がどこかにぶつけたと思い、すぐに千夏を抱いたまま海面から上がった。

「千夏、大丈夫か？何処をぶつけた？」

「……」

千夏は何も言わず、ただ一夏に抱きついたままだった。
一夏は困って千夏の肩に手を置いて優しく問いかける。

「千夏、安心しろ。もう大丈夫だから、な？」

「……ほ」

「ん？」

「ほんと……？」

（グハァ！！？？な、涙目＆上目ずかい！お、おちｑあｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐｌ！！？？）

一夏が壊れた。

「あ、ああ…安心しろ」

「……うん」

（行き成りは反側だぜ……千夏）

とりあえず平常心を保ち、千夏に何故あんなに怖がっていたのか聞く。

「千夏…どうしてあんな……怖がってたんだ？」

「そ、それは……」

千夏はまた海に落ちた事を思い出したのか、また一夏の胸に顔を埋めた。

「……千夏、安心しろ……だから」

「……海が…怖かった…」

「海が怖い？」

「福音に落とされた後……塩水が傷に凄く染みて…痛くて…それで…冷たくて…」

「うん」

「どんどん……感覚がなくなって…痛みも…無くなって…怖くなって…」

「そうか……（――――トラウマってやつか……）」

「それで……海が怖くなって…」

「もういい……ごめん…俺のせいで…」

「え……？」

「俺が弱かったから……俺がちゃんと戦ってれば…千夏は…」

一夏は自分のせいだと言い。己を責める。

「ち、違う……一夏は何も悪くない！…悪いのはあたしで、考えなしに皆と関わったから――――――！！」

「え？」

「あ……えっと…皆に気持ちを考えなかったら…」

「……そうか…でも、やっぱり俺のせいだ…」

「一夏……」

「昔は男が女を守るって決まりだからな。今も……俺はそう考える」

「でも、今は女が……」

「俺には…皆を守る力がある……」

「一夏？」

「だから…今度こそ。お前を守る……絶対にだ！」

「……一夏…」

千夏は心が温かくなっていった。そして同時に、大切な幼馴染の為にも自分は離れるべきだと考え始める。

「千夏……だから…俺の側にいてくれ…近くで守らせてくれ…」

「一…夏…」

離れたくない。一緒にいたいと、千夏がそう思っても二夏の言葉が頭をよぎる。

（――――――――――――――、千夏が一夏達から離れる事だ……）

その言葉が千夏の心を突き刺す……一夏の想いは嬉しい。だが自分が皆の元にいれば必ず不幸になる。

そしていずれ……自分のせいで皆の命がと……

「あたしは……あたしは……」

「千夏、無理に言わなくてもいい……ゆっくり考えてくれ。俺は…待ってる」

「一夏……」

未だ一夏に抱かれている千夏は涙を目に溜めて一夏を見る。その目に宿るは希望か絶望か……

そしてそんなラヴシーンをしていると……

「――――――ちょっと押さないでよ！」

「仕方ないだろ。隠れている岩が小さいのだ」

「だからってこれは狭すぎですわ！」

「ちょ！僕が出ちゃう！見えちゃう！」

そんな岩場の影から見ている四人組みがいた。
鈴とラウラ、セシリアとシャルが見ていた。
ちなみに箒は部屋で療養中である。そして皆耐えきれなくなり、

「「「「うわぁ！」」」」

ドドンッ！

皆は前のめりに倒れ、姿を現す。

「へ？」

「え？」

二人が間の抜けた声を上げて音がした方へ向く。それを見た千夏は
……

「な、なななな何してるんだお前ら！」

「な、なんでお前らが？」

千夏は今の光景を見られたのか、恥ずかしかったらしく。
慌てふためいていた。そして……悲劇は起こる。

ズルッ！

「あ！」

「へ？」

千夏は足を滑らせ、倒れそうになる。
それを見た一夏は千夏が倒れる前に受け止めようとしたが……

ズルッ！

「え？」

「ちょ！、お前もかよ！」

そして二人は一緒に倒れた。

バシャンッ！

千夏を押し倒す形で一夏は千夏に覆いかぶさる様にして倒れた。そして……

ムムニュンッ！

「あ」

「へ？」

千夏の胸を一夏が押し倒しながら――――――――――両胸を揉んでいた。そりゃもう鷲掴みで、

「……一夏」

「――――――――ハッ！な、なんだ？」

一夏は千夏の冷えた声で呼ばれ、震えあがりながらも応える。これも訓練の成果か……

千夏は右手アンサングの装甲を展開する。それを見た一夏は顔を青くして弁解し始める。

「――――――このっ……」

「ち、千夏！待て！誤解だ！ワザとじゃ！？」

「ぶぁぁぁかあああああああ――――――――！！！！」

ドゴォーーーーーーーンッ！！！！

「ぐはあぁぁぁーーー！！？？」

千夏の右腕のＩＳ展開状態のアッパーが決まった。
一夏は暗い海に堕ちて没した。
この時初めて、千夏は一夏に暴力をふるった……一夏は自業自得なのでＯＫである。いやＫＯか……
そして……

「行き成りどころか毎日あると思うのは何故だ？」

「すみませんごめんなさい許して下さい……」

今に至る……前の千夏なら普通に許していたが、あの告白の件で一夏に遠慮が無くなったのだ。
いいのか悪いのか分からんが……

「千夏、ほんとに許してくれ……俺が悪かったから……」

「……はぁ～…」

千夏は深いため息を吐くと鈴を膝から下ろし抱き上げ、自分は席の真ん中に座って膝に鈴を乗せ直す。

そしてそれを見ていた一夏にそっぽを向きながらも残っている片足をポンポン叩く。

「――――――――え？何？」

「……膝枕」

「え――――」

「寝ないの？」

横眼でチラチラ見ながら言う千夏、その顔は若干赤かった。

「あ、ああ…ありがと」

「おう……」

一夏は恐る恐る千夏の膝に寝る。

（――――久しぶりだな……これも…）

一夏は愛おしそうにして千夏の膝に顔をスリスリしていた。

「んぅ…んあぁ…い、一夏…あまり動くな。くすぐったい……」

「わ、わりぃ……」

千夏は少し顔を赤くしながらも鈴と一夏の頭を撫でながら優しい目で見る。

「――――――――一夏……」

「ん？」

「まだ……答えは出せない…」

「……そうか」

「だけど……」

千夏は深呼吸するように息を整え、言葉を発する。

「必ず、答えは出すから……」

「……分かった…待ってる…」

一夏は嬉しそうにして笑った後、瞳を閉じて千夏の膝で寝る。

少し経つと一夏から寝息が聞こえて来て千夏は微笑みながら鈴と一夏の頭を再度撫でた。

（……ふぅ…一夏にコクられるとは……いやはや、どうしたもんか……）

千夏は一夏の告白に困っている。それは……

（元男のあたしにどうしろっちゅうねん……）

である。千夏の限りなく少ない男の精神が問題だった。

（これじゃあ一夏がゲイヴンに……いや、今のあたしは女だったか……）

あ”一と声をだして悩む千夏、どうすればいいかと考えていると、二人の寝顔が目に入る。

（……ま、いっか……今は新しい人生だし、覚悟の一つや二つ決めねえと……）

千夏は両手でガッツポーズをして決意する。

（……一夏……ゴメンな…ほんとの事を言えなくて…）

千夏は心の中で詫びる。

（あたし、もう心臓の音、聞こえないけど……本当は…あの時、ドキドキしてたんだぞ？）

自分がもう半分人間ではない事に顔を悲しませる。

（ゴメンな……一夏…想いに応えられなくて……）

千夏はこの先の事考え、苦しくても一夏達なら大丈夫だと、一夏は強くなったと自分に言い聞かせる。

（だから……）

千夏は愛おしそうに一夏の頭を撫でて小さい声で言う。

「あたしより……いい人と結ばれて……幸せになってくれ……一夏」

その声が聞こえたのか、寝ている一夏の顔が少し歪んだ事に千夏は気づかなかった……

第五十七話「片思いな両想い」（後書き）

作者「ＡＣ５……やりたかった……」
千夏「今更だな……」
一夏「まったくだ」
作者「あ”一早くやりてぇ～……」
千夏・一夏「「製品版もやれるか怪しい物だな……（売り切れている可能性があるし……」」

第五十八話「君と向かえる朝」（前書き）

一夏「千夏！海が駄目なら川行こうぜ？バーベキューだ！」
千夏「そ、そうだな……（それが最後の思い出…かな）」
鈴「あたしも行くー！」
シャル「ぼ、僕も！」
ラウラ「私も行くぞ！」
箒（私は止めとくか……）

作者「箒さんがいないと誰が暴走止めるんですか？特にシャルとラウラの……」

第五十八話「君と向かえる朝」

八月、ＩＳ学園は少し遅めの夏休みに入り、世界中からやって来た学園生徒は現在ほぼ半分が帰省中だ。
俺は純粋日本人なので日本にあるＩＳ学園の寮にいる。いずれは千夏の父親に会いにイタリアへ行くかもしれんが……

「……うん、いい朝だ」

そう言って夏の朝を迎えて俺は、起き上がって隣のベットに寝ている幼馴染のところに行き、
そのベットにかけてから起こした。

「おーい、起きろ。朝だぞ？」

「くかー…すうぅ……」

「……」

起こそうとしたが相手は夢の中にどっぷり入っているのか起きない。

「朝だぞー。起きろー」

「むにゅぅ……すぅ…くぅ……」

「駄目だ。起きない……」

俺はとりあえずゆする。

「早く起きろって、朝だぜ？」

「……うんぅ……すぅ…」

ゆさゆさと揺らすが本人はなかなか起きない。しかたない。

「……千夏、起きてくれ…」

「……ううんぅ……ほえ？一夏？」

「ああ、そうだ」

俺は千夏の頬に手を添えながら応える。これをやると大抵は起きてくれる。

千夏は寝ていたので状況が曖昧だったが、

少し経ってから俺に微笑んで気持ちよさそうに目を染めた後に瞳を閉じる。

「おい、千夏。朝だから起きないと駄目だぞ」

「もう…少し…」

また寝たいらしいな……昨日はあまり食べて無いせいか俺はお腹がすいている。

千夏と朝食食べたいんだけどな……仕方ない。

「じゃあ、俺は千夏を置いて鈴と朝食でも取りに行くかな？」

「え――――……」

俺がそう言うと千夏は少し顔を悲しませて俺を見る。ううぅ……少し罪悪感が…

「どうする？」

「……起きる」

「無理しなくてもいいぞ？」

「……起きる～…」

「そうか」

俺は起き上がった千夏の頭を撫でてから離れ、自分のスペースに行って着替え始める。

隣から音がして千夏も着替え始めた見たいだ。だが……

「――――――――、わあぁ！？」

ドンッ！

すっ転んだな。これは……

音から判断して尻もちだろうなぁ。と俺は考えている。

「いっつぅ……」

「大丈夫かー？」

「な、なんとか……」

千夏は無事見たいだな。俺は自分の着替えを済ませ、あとは千夏を待つだけだ。

説明するのが遅かったが何故千夏が俺と同じ部屋だと言うと箒が申し出たからだ。

あの一件で、俺と箒の間には少し亀裂と言う物がある。それもあってか少し気まずい。

箒は、自分は千夏と入れ替えてくれ千冬姉に言った時は何事かと思ったが、千夏と一緒の部屋になれたのは不幸中の幸い？て、奴なのかもしれない。

「ふう……」

「終わったか？」

「ああ、着替えた」

千夏は何時もの髪型ではなく下ろした状態にしている。今はもう量子感染が完治した為、ケモミミじゃないのは寂しいが、千夏が健康な体になったので良しとする。前に上げたケモミミの傷を隠すリボンはＩＳの待機状態である『アンサング』くくり付けてある。俺は少しリボンに付いた血が気になったから新しいのを買ってやるっていったが千夏が、これは一夏から貰った物だから大切にしたいと言っていたのでそのままにしている。

「じゃあ行こうぜ」

俺はそう言って千夏の手を取り部屋のドアから廊下に出ようとする

と、

「あ……」

「ん？どうした？」

「えっと……手…」

「……嫌だったか？」

「あ…そう言うんじゃないんだ…」

「じゃあ？」

千夏はモジモジしながら言葉を選んでいる。正直萌える。

「……は、恥ずかしい…」

「？、何時も手を繋いでたろ？」

「そ、そうだけど…」

「ふむ……まあいいんじゃねえか。行こうぜ」

「あ……」

俺は手を握ったまま千夏を連れて部屋から出る。
何人かのクラスメイトが羨ましそうに見ていたが、なんだろう？
とりあえず千夏を連れて俺は食堂に向かった。

視点・「千夏・N・ガッティーノ」

あたしは一夏に連れられて食堂に向かっているのだが……

「……♪……？」

「……」

今のあたしは顔を赤くしているだろう。だって一夏に手を握られて歩いているわけだから、

「……♪……？」

「アウアウ……」

一夏は歌を口ずさみながらご機嫌で歩いている。

あたしが恥ずかしがっていると言うのに！前ならこの程度で恥ずか

しがらなかったのに……なんでだ？
それに…一夏に言わないといけない事もあるのだが、切りだせない
……

「お、見えてきた」

「そ、そうか……」

一夏は少し小走りになりあたしも必然的に小走りになる。
……一夏の…一夏と離れるのは…いや…だけど…

「い、一夏、そんな急がなくても……」

「腹減ってるんだ。千夏だって減ってるだろ？」

「そ、そりゃあ……」

「大食らいだからな？」ニヤリ

「な！い、一夏！」

「はは、悪い悪い」

こんな楽しそうにしている一夏にそんな事言えねえよ……
一夏はそう言ってあたしをからかう。なんか一夏……自然体だなぁ。
前はどこか危うい感じがしてたんだけど……てかからかうな！

「行こうぜ」

「ちょ！一夏、早いって！」

そうしてあたし達は食堂に入り、食堂にいた鈴やラウラにシャルと一緒に食事をした。
一夏と手を繋いでいるのを見られてギャーギャー騒がれた事は言うまでもない。
本当に……離れたくない居場所だ。

食事を終え、一夏達は自分たちの部屋に戻る。
鈴は食事を終えた後千夏と一夏の部屋に一緒に戻った。
そして鈴は……

「うにゅぅ……」

「よしよし良い子良い子」

「なんか鈴が猫に見えるんだが……」

「猫～猫～」

「うにゃぁ……」

千夏は鈴の顎をコリコリすると鈴は気持ち良さそうにしている。
その横で何故か鈴を膝枕している千夏の肩に寄り添うように一夏が

その光景を見ていた。

「――――、一夏」

「なんだ？」

「なんで……肩に手を？」

「……何となく」

「……何となく、ね……」

「うにゅぅ……」

鈴は相変わらず和む様な声を出していた。

千夏は一夏に寄り添う状態が恥ずかしいのか顔を赤らめる。

「……千夏」

「な、なに？」

一夏は千夏の名を呼び、どんどん顔を千夏の顔に近づける。

千夏は何かを察して止めようとする。

「い、一夏、あ、あの…鈴もいるし…まだ、あたしは答えを――――」

「もっと俺を知ってから答えをだして欲しいんだ……」

「だ、だから、あの……（な、なんか一夏が積極的なってるような

……）」

一夏の顔がどんどん近づき、テンぱる千夏の顔を自分の方に迎せる。

「千夏……」

「い、一夏……（ま、まて！一夏の好意は嬉しいがあたしは元男で――――――！）」

千夏も雰囲気におされ、自らも一夏の顔に近付く。

そして……二人の距離は――――――――――――――――――――――――重ならなかった……

ドゴオォォォォォンッ！！！

「うおっ！？」

「なあぁぁっ！？」

「うにゃあぁっ！？」

突然ドアが吹っ飛び、驚きの声を上げる二人と一匹？

哀れ吹っ飛ばされたドアは一点が凄くへコンでいて何かとっつかれ

た様な破損状態だった。
それを見た二人と一匹？は誰が吹っ飛ばしたのがすぐに分かった。

「「「――――――――し、シールド・ピアース……」」」

その直後、部屋の外から声が聞こえた。

「千夏！ずるいよ！」

「三人で何をやっている！？」

「すまん。千夏……止めたんだが…」

そこには千夏に定義する左腕をＩＳ展開してシールドパージして盾殺しを出しているシャルとラウラ、そして申し訳なさそうにしている箒がいた。ちなみにセシリアは御家の仕事があって母国に帰国中。

「お、お前ら！何ダイナミックエントリーしてるんだよ！？」

「するならせめてステルスエントリーしてくれ！」

「あたしの癒しの空間を壊すなー！！」

と、千夏達が抗議するが……

「一夏も一夏だよ！何鈴がいるのにそんな大胆な事を！」

「そうだぞ。嫁よ！何故我々よばん！」

「ほんとにすまん……止めたんだ。私は……」

シャルは破廉恥だよ！と付けくわえ、ラウラは本妻は私だ！と訳分からん事を言っていた。
箒は相変わらず謝っていた。箒が普通に生徒としていられるのは千夏のおかげてもあるが、
イタリアはアメリカへの責任追及やイタリアの技術が使われたと言う問題追及。さらに国防省長官による独断演習もあって箒の件は後回しにして貰っていた。千夏は親父さんの説得に苦労したと後から聞く。

「あー……箒、仕方ねえよ。活力あふれる乙女は誰にも止められん。止められんのは千冬姉さんさんぐらいだし……」

「し、しかしだな。私は千夏を――――――」

「ストップ……それ以上言わないでくれ」

「し、しかし！」

「あたしがいいって言ってんだ。それで良いだろ？（それに…あたしは皆から離れるから、一夏には箒が必要だ……時間がたてば一夏も昔の様に箒との仲を取り戻してくれるだろう…）」

「……」

「まあ、箒の件については……あたしが母国でなんとかするから、な？」

「……わかった」

「うん、よろしい（さて、箒が納得する罰を与えないといけないんだよな～。デコピンにするか？いや、原作と違って事が事だし……どうしよう……）」

千夏と箒が責任について話し合っていると一夏が、

「ち、千夏助けてくれ！シャルとラウラに連携が激しくて突破されちまう！」

「そんなもんタバネ粒子つかえよ」

「威力が強すぎるわ！」

「加減出来るだろ？」

「一日や二日ではい、上手に焼けました！見たいに出来たら苦労せんわ！」

「あーわかったわかった……シャル、ラウラ？」

「何かな？千夏……」

「なんだ？千夏……」

二人は笑っていたが目が笑って無い。箒は福音戦の事を思い出しているのか壁の隅っこで暗い影を背負ってブツブツ言っている。

（こ、こえー！なんだよこいつら！？マジで怖いぞ！？）

二人の笑顔に押され気味だったが、気を取り直して切り札をだす。

「良い子にしないと千冬姉さんが来るぞ？」

「うぐっ……」

「そ、それは……」

二人の表情が引きつる。相当怖いらしい。千夏はからかうのが面白そうと思い。

「千冬姉さ～ん。シャルとラウラがいじめる～」

「ちょ！？止めてよ！」

「待て！それは本当に洒落にならないかも――――――」

ラウラが言葉を紡ぐ途中で……

ドゴオォォォォンッ！！！

突然ドアの隣の壁が爆散する。そこに現れたのは……

「大丈夫か！ガッティーノ！？」

「ほんとに来ちゃったーーーーーー！！？？」

「だから止めてって言ったのにー！！」

「本当に洒落にならんぞー！！」

「一夏、あたし眠いよ」

「あ、ああ、そうだな……とりあえず、鈴の部屋に避難しよう」

「……そうね。アンタが来ればティナも喜ぶわ……」

爆散した壁から二人は千夏達を尻眼に抜け出した。

そこでは二体のＩＳ相手に一方的な怒涛の攻撃をする千冬とオドオドオロオロしている千夏だけが残った……

視点・「織神二夏」

俺は少し遠出した後に束のところに戻った。

「ふうぅ……疲れた…やっぱ本場のコジマはきついなー……」

「あ、お帰り。何処言ってたの？」

「変態の集う場所」

「へ？へ、変態？」

「そ、変態」

「だ、大丈夫だったの？」

束は少し心配そうにして二夏に近寄る。

「安心しろ。ほとんどは束の同類の奴らだったからな」

「ちょ！束さんは変態じゃないよ！？」

「変態と言う紳士か？」

「そっちも違うよ！？」

「変態じゃない束は束じゃない！」

「私の存在意義って変態しかないの！？」

「イエェスッ！！」

「酷い！酷いよ。にっくん！束さん泣いちゃうよ！？」

「あ、泣くところは可愛いからプラスな」

「嬉しいけど嬉しくなーい！！」

束はオヨヨと泣き真似をし、二夏はさもその光景を見てニヤニヤしていた。性格ワリィな……

「ＨＡ、ＨＡ、ＨＡ。まあそう落ち込むな。冗談だ冗談」

「グスッ……ほんと？」

「ああ、……半分」

「半分！？」

「さて、束とも遊んだし仕事しますかねぇ」

「にっくん！半分って！？半分って何！？」

二夏は束の言葉をなんのそのと無視して持ってきたデータを機械に入れる。

「ちょっとにっくん！て、それなに？」

「んんー？まあ、ちょっとな」

「教えてくれないの？」

束はまた二夏が一人で何かやっているのか教えてくれないのか少し不機嫌だ。

「あーえーとだな。まあ人格データだ」

「人格データ？」

「ああ、そうだ」

「ふーん。誰の？」

「山猫共のデータさ」

「山猫？」

束は訳が分からなかったが二夏はお構いなしにそのデータをあるＩＳ達に入力する。

「――――――――――よおぉし！これで完了」

「ねえにっくん……」

「なんだ？」

「こんなにいっぱいの無人ＩＳに……何を入力したの？」

「何かって？それはな……」

二夏はニタァと笑い。束の問いかけに応える。
その笑いは悪魔の様で、本当に楽しんでいる様な顔だった。

「本場のリンクス達の人格データを入れたのさ。こいつは強いぞ？」

第五十八話「君と向かえる朝」（後書き）

束「ねえ、この回で私達出てよかったの？」
二夏「俺は空気を読まない男だ。誰の指図も受けん！」
束「でもちうちゃんのお願いは？」
二夏「全力でお受けいたします！」
束「あ、そうなんだ……（むー、束さんのお願いも聞いてくれても良いのに！）

第五十九話「早すぎる第二ラウンド」（前書き）

千夏「マジではえぇよ！早すぎる！」
一夏「クーガーの兄貴じゃねえんだから死に急ぐことはないだろ！？」
作者「ええやん！いいやん！さっさとカタぁつけても！」
千夏・一夏「良くない！」
千夏「あたしの学園生活が！（鈴とのニャンニャンが！）
一夏「俺のスクールライフが！（千夏とのイチャイチャが！）
作者（――――――このバカップルをコロヌてぇ……）

第五十九話「早すぎる第二ラウンド」

行き成りだがあたしは今、夏休みを利用して自分の母国、イタリアへ帰国途中している。
それは何故かと言うと、父から電話があり、二次移行してアンサングの機体データのサンプリングをしたいと言うことらしい。まあ、あたしも父と直接話して箒の件について決着付けねえといけねえしな。
ここまでは予定通りだった。だったんだ……

「いや～、俺海外旅行なんて初めてですよ！」

「そうなんですか？それは良い初体験ですね♪」

「……はあ」

何故か一夏と山田先生が一緒に飛行機に乗っていた。一夏はあたしがイタリアに帰ると言うとイタリアに興味があると言って付いて来たのだ流石にそれは駄目かと思ったらそれを聞いていた千冬さんが、行っても良いんじゃないか？、と言ってしまったのである。ちなみに鈴は御留守番だ。
流石に連れていけん。だだこねてたけど……

「一夏…静かに」

「あ、ああ、わりぃ…」

あたしの少し冷めた声で一夏は少しどもりながら静かになった。

「いいじゃないですか、私達以外誰も乗っていませんし、と言うより貸し切り？」

「まあ、そうなんですけどね……」

山田先生の応えに、あたしは頷きながら応える。先生は何故いるかと言うと引率と言う物らしい。

まあ学生二人だけの旅など千冬姉さんでも許さんだろうしな。説明が遅れたが何故あたしが千冬さんの事を姉さんと呼んでいるのかと言うと千冬さんが呼んでいいと言ったからである。詳しくは分からんが……

「早く着ねえかな～」

「子供じゃないんだからはしゃぐなって……」

「イタリアですかー、ヴェネチア…ローマ…楽しみです！」

「そっちもか……」

二人揃って子供みたいに、いや、子供か……一人は今も昔も子供体系の人がいるけど……

（まったく…これじゃあ覚悟決めて皆と離れた意味ないじゃん…）

はあっとあたしはため息を吐く、そんなこんなで飛行機はイタリアへ向けて飛び続けた。

てか本当に一夏についてケジメ付けないと……

数日前、ここは首都ローマ。
その上空にポツンと黒い影がある。

「とうとうこの時が来たか……」

酩酊こと、アレサに乗る二夏だった。その顔は待ち望んでいたおもちゃがやっと届いたかのような子供の顔だった。

「――――――諸君」

二夏がそう言うとブゥンッと音を立てて空中ディスプレイが浮かび上がる。
そのディスプレイに浮かんでいるのはどれも黒い人影が写っている。

「織神二夏だ」

そう二夏は自分の名を宣言し、話し出す。

「クローズ・プランを開始、イタリア主要基地に対し、ＩＳによる同時襲撃をかける」

二夏がディスプレイの向こう側に対して指示を出している。その声はどこか楽しそうであった。

「同時にイタリアの通信を妨害、イタリア国内における全て情報を制限する。外に何一つ漏らさない様にしてくれ……現地マフィアとギャングと協力して事に当たってくれ。他は……どうでもいいか、俺は客の出迎えを待つだけだ。最悪最低の過激派勢力…リリアナのお披露目だ。諸君、派手に移行」

そう言った後に通信が切れ、二夏はフウッ息を吐く。

「――――――――いや、これ俺のキャラじゃねえな……」

今更である。

「まったくだな。おい」

「ん？」

後ろから声をかけられ、振りむくと、

「お前か…オールドクイーン」

「おうよ」

緑色のＩＳを装着する女性が二夏の後ろにいた。そのＩＳは珍しい逆足関節をした脚部をしている物だった。

「どうだ？リザの乗り心地は」

「最高よ。何故か分からないけれど、これこそが私の愛機だと言えるぐらいだね……」

その女性、オールドクイーンと呼ばれた者は口元をニヤリとさせて応える。

「それはよかった（そりゃあそうだろ。何せ元になった人物と性別は違えど同じだからな……）」

「ところで――――――」

「ん？」

「お嬢が帰ってくるって本当かい？」

「ああ、アンサングのデータのサンプルが欲しいんだろうよ」

「なるほどね。久しぶりに旅団長に会えるたぁな……」

「……言っとくが犯らせんぞ？お前の相手は首輪付きだ」

「わぁーてるよ。二夏の旦那、お嬢に手は出さねえって……」

オールドクイーンは心底残念そうにして溜息を吐く、

「ふん、さて……国家解体戦争の……始まりだ」

そう言って二夏はフゥーハハハハハッ！と笑い、次々に都市から出ている黒煙を眺めていた。が！

ズルッ！

「オフゥッ！？」

「あ？」

二夏は高笑いしながら見下すように顔を上げていたせいかグルンと機体が回転して逆さまになる。

「お、おこへー！おこへー！」

「……何処の野菜ヤローだよ……」

頭に手を置いてヤレヤレとしながらその光景を見るオルクインだった。（略

「おこへー！おこへー！」

――――――何時まで続けてんだこいつは……

数日後、千夏と一夏、あと真耶はイタリア空港、ローマ・フィウミチーノ空港に到着していた

「ん～！着いた！」

「着きましたね！」

「だからはしゃがないでください……」

ハアァと千夏はため息を吐いて此処、
ローマ・フィウミチーノ空港に着陸した飛行機の搭乗口から出る三人、

（旅行と間違えて――――いや、旅行もかねてるか……）

またもハアッとため息を吐く千夏だった。

「千夏、どうしたんだ？元気ないぞ？」

「そうですよ。せっかく故郷に戻って来たんですから！」

「あははは…そうっすね…（人の気も知らないで～！）」

千夏はある意味追い詰められていた。
一夏の告白と箒の件について話し合わねばならないからだ。そして、

（――――――二夏の言った事も……ある意味では正しいんだよな…）

千夏は今その事ばかりを考えていた。
神だからこそ信用できる言葉でもあり、同時に信じたくもなかった。

（どうしよう…マジどうしよう）

またもため息を吐いて落ち込む千夏だった。そして空港ターミナルへはしゃぎながら先に行っていた一夏と真耶に追いつく、だが千夏は二人が立ち止まり不思議そうにしている姿に疑問を持つ、

「？、どうした？」

「あ、千夏」

「いえ、ターミナルが……」

「？、空港ターミナルがどうかしたんですか？」

千夏も気になってターミナルの方を見てみると何時も人がいるはずのロビーが、

「だれも…いない？」

「どういう事だ？」

「空港まで私達の貸し切りって事ですか？」

「いや、そんな事言って無かった――――――」

その時、千夏のいるフロアー二回に何かが投げ込まれた。

カランッカランッコロコロコロッ……プシューーーーーー！

「「「！？」」」

その投げ込まれた物は缶の形をしていて上に付いた穴から息よいよく煙が噴射する。これは――――――

「！、スモークか！」

「え！？なんだこれ！？」

「な、なんで！ケホッケホッ！」

真耶と一夏は混乱し、千夏は状況を冷静にみる。

（マフィアかギャングか？いや違う……あいつらはこんな高度な真似はしない…だとすると――――」

とその時、一階のターミナルに武装した集団が現れこちらに近ずいてくる。

「ずいぶんと手荒い歓迎だな……」

「千夏…これはいったい！」

「話すのは後だ。一夏、雪片のライフルモードは？」

「使えるけど、いいのか？国外だぞ？」

「緊急事態だ、仕方ねえよ。それに……」

ガチャッ！と右腕だけをＩＳ展開し、その腕にレーザーバズーカを構える。

「ウチの友達や先生にてぇだしたんだ。ＶＯＢに括り付けてぶっ飛ばすだけじゃ気が収まらねえよ」

「――――――それもそうだな」

そう言って一夏も同じようにして雪片を展開、ソードモードからライフルモードに変える。

「ふ、二人とも！？あ、相手は生身の人間ですよ！？」

と、慌てる様に二人を止めようとする真耶、しかし一夏と千夏は問題ないと言った。

「非殺傷があるから大丈夫っすよ」

「てか便利だな。おい」

「で、でも今は逃げた方が「ズドンッ！」きゃあ！？」

正体不明の部隊から銃撃が始まった。

千夏は頭を屈め、一夏は真耶の頭を下げさせる。

「逃げられたらいいんですけど……」

「この弾幕じゃあ……」

相手はかなりの人数で何十人もいた。

「とりあえず、行くか？」

「だな。さっさと千夏の親父さんに合わないと」

「そうだな。連絡出来ればいいんだが……」

「？、どうした？」

「妨害電波だ。通信が出来ない」

「と、なると――――――」

「援軍は期待できそうにないなこりゃ……」

千夏はまた溜息を吐いて項垂れる。いろんな事で頭を悩ませている千夏にとってはこの状況はかなり応えていた。そんな千夏を一夏はまあまあとポンポン頭を叩いて慰める。

真耶は未だに頭を抱えて伏せていた。

「ふう、行くか……一夏、山田先生を頼む」

「分かった。粒子で保護する。この（雪花）は片手でも扱えるから平気だろう」

「す、すみません…こ、腰が……」

「年ですか？」

「違います！！」

「てか山田先生の来た意味って……」

「はうっ！？」

一夏に痛い所を突かれ、頭をガクッとさせる真耶、ＩＳ無しではあの孔明のはわわ軍師でしかない。

「とりあえず――――――――行くぜ！」

「おう！」

「え、ちょ、ここ二階ってきぁあああああああ！！？？」

千夏は二階から飛び降り、一夏は真耶を抱えて飛び降りた。

「「ふんど！」」

ドンッ！ピキピキッ

「はうっ！？」

真耶が変な声を出しながら二人は一階に着地した。千夏は――――

――

ダバーーーーーー……

「うお!?千夏、なんで泣いてんだ!?」

「いや、何でも無いんだ…なんでも…」

「そ、そうか……」

一夏は泣いている千夏に心配したが本人が何でも無いと言っているので検索しな事にした。

（なんか…聞いちゃいけない事の様だしな。うん……）

「きゅうううううぅ……」

摩耶は未だに目を回していた。

（――――――――――太っちまった……）

前ならあまり気にしなかった事だけにショックは軽くすんでいた。
かも……
そして千夏達の反撃は……開始された。

第五十九話「早すぎる第二ラウンド」（後書き）

二夏「早くもパックス・エコノミカってか？」
オルクイン「早すぎだろ……」
二夏「だな。作者め。焦ったか……」
オルクイン「ま、私に出番があったから良しとするけど……どう動くのかしら？」
二夏「まずは……人狼にでも当たらせるさ」
オルクイン「人狼？ああ、砂漠の狼の事ね」
二夏「織斑一夏……どう切り抜ける……」

第六十話「ＩＳクライシス」（前書き）

千夏「ところで他のメンツは？」
メルツェル「ほかの地域にいる敵と交戦中だ」
一夏「ここだけじゃなく他も襲撃を！？」
アスピーデ「ご安心を千夏お姉さまと一夏さまがいればすぐに鎮圧できましょう」
作者「あーそれ無理、千夏にはオペレーター役だから」
皆「「「「え……？」」」」

第六十話「ＩＳクライシス」

ここはあたし達がいる空港は……戦場の最前線に成りつつあった……

「まて、話し合おう。君たちの要件を聞こうじゃないか」

「そんな事を言っても聞いて貰えなさそうなんですけど！？」

「シェルショックで頭がやられたのか！？」

失敬な……あたしの精神（へんたい）はやられてないぞ？

パラララッ！ドンッ！ドンッ！ズキュウゥゥゥンッ！！

最後の一発はあたしの頭をかすめた。特Ａ級スナイパーでもいんのかよ！

「頭が、頭が剥げちまう！？」

「安心しろ。二三本髪の毛が持っていかれただけだ」

そんな事を言いながらあたし達は弾幕をすり抜けて細い廊下へ走りこむ、

後ろから複数の走る足音が聞こえて来て。

「一夏！」

「おう！」

二人は小さくジャンプした後、後ろにいる敵に対して、

「撃つべし！」

「ハッ！」

バババババシュウウウウンッ！！

「グッ！？」

「ガッ！」

「ギャッ！」

あたしと一夏のエネルギー弾（非殺傷）が敵に当たり、倒れる。
だがそれでも数は減らない。

「あーくそ、なんであたしがこんな事に……」

「それは連中に言ってくれ」

「もう帰りたいですぅ……」

あ、ヤベ、先生が泣きだした。

「――――――千夏、山田先生を頼む」

「！、……一人でやる気？」

「まあな」

「でも一――――――」

あたしが声を出そうとすると一夏があたしの唇に人差し指を押しつけて言う。

「俺を誰だと思ってんだよ。あの千冬姉の弟だぜ？」

「っ一一一一一一一わかった。怪我はすんなよ？」

「元より承知だ」

あたしはシクシク泣いている山田先生を預かりその場を後にした。

そして一夏は別の廊下を行って敵を引き付ける。

（死ぬなよ。一夏……いや、ＩＳ持ってる奴が死ぬわけないか……）

人の事は言え無いが……

視点・「織斑一夏」

俺はかっこよく千夏にオトリになると宣言したんだが……

「なぜ俺がこんな目に会うのママン、何も悪いことしないのに皆が俺を狙うよママン！！」

敵の弾幕が激しく、逃げるのに精いっぱいだった。ちくせう……

「ーーーーてかフランセ語で泣きいれているバヤイじゃないよなあ……」

俺は千夏と山田先生を逃がす為、一人オトリとなって敵を引き付ける。

「堕ちろ！」

俺の雪片、ライフルモード「雪花」が火を吹く、

「グハッ！」

だが撃っても撃っても切りがない。これじゃあ雪片のエネルギーが持たないな……

タバネ粒子のエネルギーを使うと殺しかねないので、今はカットしている。

こんなもんＩＳ戦意外に使う訳にはいかない。

「千夏達が逃げるまで時間を稼ぐ！」

それまで持ってくれよ…雪片…

パラララッ！

「うおっ！？」

俺の横を銃弾がかすめる。ちきしょう！やる気満々かよ！

「不幸だーーーーー！！！」

そう言って俺は走り敵を吹き続けると……

バシュウゥンッ！

「ガハッ！」

「！？」

横から青白い光の玉が飛んできて敵を打ち抜く、これは！

「千夏か！？」

「おうよ！！」

千夏が俺の左の廊下から現れ俺を援護してくれた。てか！

「千夏！山田先生は！？」

「置いてきた」

「なんでだ！？」

千夏が山田先生をこんな危ない場所においてくるなんて……

「大丈夫だ。抜かりはない」

「え？」

「山田先生を抱えて走っている途中にな」

「ああ」

「ダンボールがあったんだ」

「は？ダンボール？」

「そうだ。ダンボールだ」

訳が分からん……なぜそこでダンボール…？

「そのダンボールに入れて隠してきた」

ちょ！それだけじゃ不味いんじゃ！？

「い、いいのかそれで！？ダンボールなんかじゃすぐに――――！」

「この愚か者が！！」

「！？」

千夏が急に声を張り上げる。あ、あれ？俺何か怒る様な事を言ったか？

「ダンボール箱は敵の目を欺く最高の偽装と言える。潜入任務（スニーキングミッション）の必需品だ！」

「そ、そうなのか？」

「勿論だ！ダンボール箱に命を救われたという工作員は古来より数知れない」

「その工作員って……ダンボールを使ってきたのか？」

「当たり前だ！ダンボール箱をいかに使いこなすかが任務の成否を決定するといっても過言ではないだろう」

「……」

「ただし、いかにダンボール箱といえど素材は紙だ。手荒い扱いをするとすぐ駄目になる。

とにかくダンボール箱は大事に使え。丁寧に扱えばダンボール箱も

きっと一夏に応えてくれる。
真心をこめて使うんだ！必要なのはダンボール箱に対する愛情。粗略な扱いは許さんからな。いいな？」

「お、おう……」

何故か千夏の後ろから髭の親父が浮き出ていたが……スタンド？

「もう少しダンボールの事で熱く語りたいが、無粋な事にそうも言ってられねえな」

「あ、ああ、行くぞ」

「おう」

俺を千夏は敵に反撃しようとするが、妙な事に気づいた。

「――――――銃弾が……」

「飛んでこない？」

俺たちが不思議がっていると白式の集音マイクが敵の声を拾う。

（――――――例の兵器を使用します）

（ザッ――――――許可する）

その声と共に何か機械音の様な物が流れ始める。
そしてそれは唐突に迫る。

「なんだー？あれ！？」

「……虫？」

向こう側に見える兵士の横を通り過ぎる様に虫の大軍が走り、俺たちの方へと向かってくる。

「こ、こっちに来る！？」

「！、逃げるぞ！」

そう言って俺と一夏は奥にある扉まで走り開けようとするが、

「！、あ、開かない！？」

「い、一夏ぁ！もうそこまで！？」

千夏が少し涙目で俺に言う。分かってる。俺だってこえぇよ……その時、突然扉が開く。

「こっちだ！」

「「！！」」

俺達はドアを開けた人物を確認せずすぐさまに入る。その後扉を開けた人物は鍵をかけた。

その人物は少しこげ茶色の髪をした女性で、千夏や俺と同い年ぐらいか？

服装は……うん、完全武装だ。

「あ、あんたは……」

「！、メルツェル！」

「久しいな。千夏、会うのはお前が学園に言った時以来か？」

千夏が声を上げながらその人物に近づく、知り合いか？

「悪いが話は走りながらな？行くぞ！」

そう言ってメルツェルと言う女性は俺達を連れて走る。

「自分はイタリア空軍のメルツェル大尉だ。千夏たちの出迎えと護衛を任されていたんだが……」

パンッパンッ！

「グフッ…」

メルツェル大尉が話をしている最中に敵が来て大尉が応戦し倒す。

「救出に変更になった」

「な、なるほど……」

「助かったよ。メルツェル」

「お安い御用さ……アスピーデ嬢！次の行き先は？」

（次の角を左です）

急にオープンチャネルで声がして俺は驚き、千夏は何故か笑顔になる。

「アーデ！」

（はい！お久しぶりです。旅団長）

声から察して俺達より小さい子の声だ。またまた知り合いか？

「紹介が遅れたな。彼女はアスピーデ中尉だ」

（初めまして織斑一夏様、アスピーデ・アスピナです。管制機で貴方方をサポートしています）

俺はチャネルから聞こえる自己紹介にどもりながら応える。

「え、あ、はい！お、織斑一夏です！」

「一夏、テンパリ過ぎ」

「う、すまん」

俺は少し恥ずかしくなって顔を赤くする。うぅ…チャネルの向こうからクスクス聞こえる……

と、思い出した。

「ち、千夏…山田先生は――――」

（ご心配なく、すでにハリが救出しました）

「ハリも来てくれてたのか……」

「ああ、ハリの仕事の早さは神業だからな」

また俺の知らない名前が出た。友達多いな、千夏……

「ところでメルツェル」

「なんだ？」

「さっきの虫見たいな物って……」

「ああ、あれは我が軍が開発した極秘兵器、通称ＡＭＩＤＡだ」

ん？メルツェルさんってあの虫の事を知ってるのか？

「ＡＭＩＤＡ？」

「ああ、それが盗まれて自分が追っていたんだが、まさかここで使われるとは…と見えてきた」

メルツェルさんが話しているとヘリポートにつく、そこにはダンボールに入れられ目を回している山田先生と赤い真紅のＩＳスーツを着た女性がヘリに乗っていた。その真紅の女性はＩＳスーツの上から重装備のタクティカルベストを着ている。……いいセンスだ。しかもハイレグ

「……」ジトォーーー

「うん？どうした千夏？そんな俺を見つｍ「フン！」（ゲシッ！）ゴハァッ！？」

け、蹴られた！？な、何故に！？

「知らん！」

「お、おい…」

「おい、痴話喧嘩なら後にしてくれ。さっさと脱出する」

俺達はメルツェルさんに急がされ、ヘリに乗った。……ハアァ…とんだ旅行になってしまった…

視点・「織神二夏」

「旧世代のＡＭＩＤＡから逃げおおせたか……やるな、千夏」

俺は兵士たちの肩に搭載されたカメラで戦闘の一部始終を見る。

「ふむ、このＡＭＩＤＡと言う物はＩＳに使えそうだな……」

俺は少し使い道を考えていると、俺の横にディスプレイが現れて、それに移っている兵士が俺に話しかけた。

（申し訳ございません……ミスタ・ジョシュア、目標を逃がしてしまいました）

申し訳なさそうに言う兵士に俺は気さくに話す。

「構わんよ。元より逃がさなければ作戦は進まんからな」

（そ、そうですか……）

「そこの空港にもう用はない。引きあげてくれ」

（了解しました）

ブウンッと音を立ててディスプレイが消える。

「……ふむ、千夏達が逃げ込む場所はと……」

俺は千夏のアンサングに前からとり付けといた発信機をたどり行路を確認する。

「ふむふむ、この先は確か……イタリア残存部隊がいる研究所だな。確か名は……」

俺は考え込むようにして思い出す。するとやっと思い出せた。

「ああ、思い出した確かーーーーーーー」

俺はにやりと笑って研究所の名を言う。

ーーーーーーーーーーアナトリア研究所」

オマケ・「その頃、妹と侍は……」

「その……なんだ…元気を出せ…」

「……」あむあむっ

今箒と鈴は千夏と入れ替えた部屋、つまり今は箒の部屋となっている元千夏部屋で何故か鈴が箒の部屋に島をしている。いなり寿司を食べながら

「……」

「返事無しか……重傷だな。これは……」

箒も少し困ったようにいなり寿司を食べる。……待て、それは私のおいなりさんだ。

「……箒はいいの？」

「うん？」

「箒は……一夏が千夏姉とくっ付いていいの？」

「どうだろうな……」

箒は少し複雑な気分だった。何故あの時、あんな行動を取ってしまったのか……

自分が分からなくなる。

「本当の私は、何処へ行ってしまったんだろうな……」

「箒……」

その後は二人は沈黙し、何も言えなかった。すると……

「……ん？」

「どうしたのよ?」

「電話だ」

箒はポケットから携帯を取り出し誰から来たのかを確かめる。

「!?、この…番号は……」

「?」

箒は驚きを隠せずに画面を見つめていた。その相手は……

さらにオマケ・「織斑一夏の憂鬱」

ここは一夏と千夏の部屋、そこに大きなカバンに荷物を詰める一夏と千夏

「ふう、こんな感じかな？」

「ああ、だいたい入れ終わったぜ」

二人は身支度を終えてカバンを持とうとする。すると千夏が……

グッ

「あれ？」

グッグッ

「あ、あれ？」

グッグッグッ！

「お、重い？」

「どうした？千夏」

「いや、なんかカバンが凄く重くて……」

千夏はいったんカバンから手を離してジッパーを開けて中身を確認すると……

ジィーーーーー

締め直す。

「一夏、どうやらあたしは目をやられたらしい」

「安心しろ。俺もそうだ」

「そっか～あはははははっ！」

そして千夏はまたカバンを開ける。

「千夏姉、酷いよ」

「なんでいんのおぉぉぉぉぉぉぉっ！！？？」

千夏は素早く鈴をカバンからだしてダッシュで部屋を出ようとするが、

ガシッ！

「やー！千夏姉あたしもー！」

「無茶言うな！おとなしくしてなさい！」

「やー！」

「やー！じゃねえぇぇぇっ！！！！」

「……まるで親子だ」

まったくである。

「やー！」

「ぬおおおおおおおおっ！！！！！」

賑やかな短いオマケでした♪

第六十話「ＩＳクライシス」（後書き）

鈴「千夏姉に置いてかれたぁ……」
箒「まさかあの人から電話が来るなんて……」
ラウラ「というか！」
シャル「私達の！」
蘭「出番は！？」
セシリア「わたくしは実家や国の都合でいた仕方ありませんけど、これは……」
作者「うん、まあ……かなり後ですね……皆さんは…まあオマケで出せるようでしたら出します。はい」
弾「ほんとかねぇ……」

第六十一話「最速の女」（前書き）

ハリ「いや～出番がやっときたましたねぇメルウェルさん」
メルツェル「メルツェルだ。いったいなんどいったらわかる?」
ハリ「まあまあ名前は命の後に大切な――――」
メルツェル「名前は自分にとって大切だ」
ハリ「そうっすか……」
メルツェル「……（オチが無い！）」

第六十一話「最速の女」

あたし達は空港から脱出し、ヘリでアナトリア研究所へ向かっていた。

「死ぬかと思った……」

「まあ対人戦なんて一夏には初めてだよな～」

「うぅ…イタリア怖いです」

いや、ほんとはもっと平和なんだぞ？イタリアは……

「すみません。山田先生非常時でなければいろんなイタリアの良い所を案内出来たんですが……」

メルツェルが申し訳なさそうに山田先生に謝罪する。

「あ、いえ！だ、大丈夫です！とってもエキサイティングでしたし！」

「漏らしてたのに？」

そう言ってあたしが山田先生を茶化す、

「も、漏らしてません！何を言ってるんですか千夏さん！！」

「すんません」

「山田先生…漏らしてたんだ…」

一夏は山田先生を抱っこしたのを思い出し先生から離れる。

「違うんです！織斑君！私は漏らして無いんです！」

必死に誤解を解こうとする山田先生に一夏は冗談ですと言って宥める。

山田先生は顔を膨らませて拗ねてしまった。

「ククククッ…面白い先生ですね。メルウェル」

「だな。千夏がＩＳ学園に行ってよかった。それとメルツェルだ」

ハリとメルツェルはその光景をほほえましそうに見る。

「――――――ふう、メルツェル、ハリ…助けてくれてありがとな」

「構わんさ。自分がやりたいようにやっただけだ」

「私もです。旅団長を助けるのが我らＯＲＣＡ旅団の戦士の役目です」

二人は千夏に笑いかけながら胸を張って応える。

「いや、ほんと助かったよ」

「だからいいって」

「そうですよ。私達は当然の事をしたまでで――」

ハリが言葉を続けたその時、

ドゴォーンッ！

「うわぁ！？」

「きゃあぁ！？」

「な、なんだ！？」

「どうした！ハリ！？」

「ちぃッ！」

千夏達は驚き、ハリは舌打ちする。

「追手だ！」

千夏達はその言葉でヘリの横から後ろを見る。そこには……

「な、なんですかあれは！？」

「全身装甲（フルスキン）のＩＳ！？」

「違う！あれは――――ノーマルだ！」

あたし達を追ってきた敵は、我がイタリア軍でＡＭＩＤＡと同じく

極秘に作られた旧世代の兵器を改良して作られた対ＩＳ用強化骨格ノーマルだった。そのノーマルは飛行型で今にもヘリとの距離を縮めてくる。

「まだ追ってくるか……！」

「ど、どうするんだ！？」

「――――――やるしかないだろ……」

そう言ってあたしはＩＳを展開準備させる。

一夏はあたしの戦闘準備を見て同じ様に展開準備する。

「ふむ、自分も参戦しよう。ハリ、山田先生を連れて逃げてくれ」

「わかりました」

「そ、そんな！私も――――――！」

山田先生も残ると言おうとする。あたしは……

「山田先生は行ってください。あたし達が食いとめます」

「で、でも……」

「山田先生」

「お、織斑君……」

「信じてください。自分の生徒を……」

「そうですよ。先生、あたし達は先生のおかげで強くなったんすから！」

「っ――――……怪我はしないでくださいね…？」

山田先生は嬉しい様な悲しい様な顔であたし達に言う。

「それは……」

「する訳ないですよ」

あははは―と一夏と笑い、ヘリの出口へ向く。

「行こうぜ？」

「おう」

そう言ってあたし達はヘリから飛び降りた。

「スターズ１！出るぞ！」

「ライトニング１！出ます！」

う～ん一夏、ネタが分かってるじゃないか！

そう思いつつＩＳを展開するのだった。

視点・「山田真耶」

「大丈夫でしょうか……」

「大丈夫ですよ。あの二人なら、片方はアドリア海のエースでもう片方はジークｈ……」

ハリさんが言葉を続けようとすると突然ヘリに初撃がくる。

「きゃあぁ！？」

「クッ！まだ狙ってたか！？」

私とハリさんの乗っているヘリに必要以上に攻撃を仕掛けてくるロボットに私はなすすべもなく悲鳴を上げるしかなかった。

「うう…なんの為の引率だったんですか私はぁ……」

私は自分の不甲斐なさに落ち込む、

「しかたないですよ。真御（まお）さん」

「真耶です！」

「失礼、とそんな事言ってる場合じゃないですね……」

そう言ってる間にどんどんヘリへの攻撃が増してきて私は……

「ううぅ！このヘリじゃ遅過ぎて攻撃から逃げられません！」

それがいけなかったのでしょう……この後、あんな地獄を味わうなんて……

「……遅い？」ピクッ

「へ？」

「私が遅い？」

「あ、あのハリさん？」

「私が遅い？私がスロウリィ？」

「え、えっとハリさんの事では無くてですね……」

なんだがハリさんがとても怖い顔をしています。わ、私何かイケない事を！？

「ふ、ふふふ……」

「は、ハリさん？」

「私の単一仕様能力（ワン・オフ・アビリティー）の名は……」

ハリさんがそう言うと頭と胴体だけにＩＳが展開される。
それは千夏さんのバイザーに似た複数のモノアイで構成された特殊バイザー、
と言うかこの年で単一仕様能力を！？
私が驚いているとヘリのローターが止まり、変形する。
二つの羽が斜めになってまるで飛行機の様な翼になる。
そいてヘリが全体の色が赤くなって行って……

「へ？」

「ラディカル・グットスピィドォ！！！！」

ハリさんがそう言った直後、私は急激なＧに襲われました。

「私は何でも早く走らせることが、出来ま～すぅ！」

「きゃあああああああぁっ！？」

「はははははっ！うぉらぁ！」

私がＧに襲われているとハリさんが私に問いかけてきました。

「この世の理はすなわち速さだと思いませんか？　物事を早く成し遂げればその分時間が有効につかえます。　遅いことなら誰でも出来る！　２０年かければ馬鹿でも傑作小説が書ける！　有能なのは月刊漫画家より週刊漫画家！　週刊よりも日刊です！　つまり速さ

こそ有能なのだ！　文化の基本法則ぅ！　そして私の持論ですぅ～！」

そう私に問いかけてきましたが、私はそれどころではなく……

「す、スピード！スピード落としてくださ～～～～～いぃ！！！」

ですが虚しくもその要求にはハリさんは応えてくれずまた速度が上がりました。

ううぅ…吐きそうです…

ですがそれはすぐに終わりを迎えました。なぜならもう目的地のアドリア海に着いた様です。

私の横で操縦席に座るハリさんは……

「あぁ・・・・・・2分20秒・・・・・・また2秒、世界を縮めた」

なぜか感動していました。私には少し理解できません……

「さあ、着きましたよ！真御さん」

「ま、真耶ですぅ……！」

「あ、真御さん、どうやら私達に気づいて連絡入れず浮上してくれたみたいですね」

「だ、だから一一一一え？浮上って……」

私が不思議がっているとハリさんが海面を指差しています。

私はその指の方向を見てみると……

「な、なななんですかあれはぁ！？」

「驚いたでしょう？研究所は土地にあるのではなく……」

私は改めて千夏さんの母国の凄さを体感しました……

ここは真耶とハリが逃げた空域、そこには……

「どっからでも湧いてきやがる！」

「メルツェル！下がって！」

「俺も援護する！」

複数だったノーマルがどんどん多くなり、十数機へと増えていた。

「何故、テロリストがこんなにも武力を持っている!?」

自国の秘密兵器まで!と愚痴を言っていると分析を終えたアスピーデが連絡する。

(分析の結果、テロリストはイタリア軍一個中隊に匹敵する戦力を保有しています!)

「な!そんなに!?」

「一介のテロにしちゃあ過激すぎるぞ!?」

(事実です。こんな事…あり得ません!…!、ミサイル来ます!」

「ちぃ!」

「このぉ!」

「堕ちろ!」

千夏達は撃ち続けているが一向に減らない敵に疲れを見せ始める。

その時、敵の銃弾が千夏へ直撃する。

「きゃあぁ!?」

「!、千夏!!」

「!?、クソ!こんな時に!」

一夏は千夏に攻撃が直撃した事で少し慌て、メルツェルは後ろから

攻撃が来て千夏を援護できなかった。

「やろうぅ！！」

一夏は単独で敵の中隊へ突撃していく。

「バカ！戻れ！」

「一夏待って！危険だ！」

「うおおおおおおおっ！！！」

一夏は頭に血が上り、冷静さをかいていた。

「一夏駄目！もどってぇ！」

「ええい！戦場を知らない奴が！」

千夏とメルツェルは援護したいが対ＩＳ用ミサイルの直撃を受け、身動きが取れない千夏と敵の砲火から千夏を守るメルツェルには出来なかった。その時、緑色の爆発が敵の中心で起きてテロリストの兵器を殲滅した。その余波でまたもや一夏はあ”～と声を上げて吹っ飛ばされた。

「！、今の光って！」

千夏は前に戦った福音を思い出して少し顔をこわばらせる。一方メルツェルは……

「やっと来たか！」

そう言うと突然オープン・チャネルで千夏にとって懐かしい声が響く、

「わりぃメルツェル！私しかこれなかったが戦力にはなるぜ！」

チャネルからの声と同時にまた緑色の爆発が起きて敵は一掃される。

「その声……ミシェルか！？」

「おうよ！お嬢、久しぶりだな？（ま、私は一度あってはいるんだがな……）」

「銀翁！」

「分かってる！月輪！敵を殲滅する！」

そう言ってミシェルは再度アサルトアーマーを展開、敵を消し済みにする。

「すげぇ！あれが最新型か！」

「ああ、テンペスタを超える性能だ……」

二人はミシェルのＩＳを見て性能の高さに驚いていた。
ちなみに、ミシェルがここにこれたのは旅団に戻って来たある女性のおかげでもあるのだが、
千夏達はまだ知らない。その時、メルツェルがある事に気づく、

「――――――――ん？」

「どうした？メルツェル」

「ミスタ一夏はどうした？」

「え？一夏は……ハッ！」

千夏はハッとしてあたりを見渡す、すると……

「ギャーーーーー！？一夏ーーーーーー！？」

千夏は一夏を見つけたのはよかったが……

「……」プカァー

海面にポツンと土左衛門が浮かんでいた。一夏だ。

千夏はすぐさま一夏の側へ飛んでいき、その体を抱きかかえる。

「一夏！しっかりしろ！一夏！」

「……」

「一夏！おい！返事をしてくれ！」

「……我が…」

「我が？」

「…我が人生に一片の悔い無し！……ガクッ」

「一夏あああああああああああっ！！！！」

千夏はパニくり、メルツェルはその光景を見て、

「千夏……成長したな…」

メルツェルは千夏の心の変わりようを純粋に喜んでいた。

（……バカバッカです…）

アスピーデ嬢は一夏のニヤケ顔を見て目撃していたので一夏の野望を察知して愚痴をこぼす、

その後、ミシェルが敵を殲滅、一同はアナトリアへと向かった。

そしてアスピーデから一夏の野望を聞き、一夏は千夏にシバかれた。

頬にビンタ付きだったのは言うまでも無い。

「一夏ぁ！あたしの答えを聞かずにいかないでぇ！！」

『あ……幸せ…』

もうどうしようも無い男である……

第六十一話「最速の女」（後書き）

千夏「一夏……」

一夏「ち、千夏！待ってくれ！ほんの出来心なんだ！」

千夏「……」

一夏「千夏？」

千夏「…一夏…」

一夏「な、なんだ？」

千夏「トキメイテ氏ね！」

一夏「ちょ！？コジキャはまず――ジュッ！」

作者・二夏「……自業自得だ」

第六十二話「グラマラスヴァオー？」（前書き）

千夏「なあ、良いのか？」
二夏「何が？」
千夏「あの兄妹が来て大丈夫なのか？」
二夏「大丈夫じゃね？出番出てるし、あいつらも文句ねえだろ」
千夏「はあ……で？二人の役割は？」
二夏「兄は前戦で、妹は……お前の補助？」
千夏「ちょっとまて、アイツは戦えるのか？」
二夏「漢と漢が背中合わせで戦う模写を作って見たいと言う作者の要望だ」
千夏「また作者か…まったくネタ出し過ぎって言われたのに、懲りない奴だ」
二夏「頭悪いんだから仕方ねえよ」
千夏「だな。頭悪いし」

作者「……泣いていいかな？」

第六十二話「グラマラスヴァオー？」

「でけぇ！これって本当に潜水艦なのか！？」

「そうだ。トルコと共同開発した超大型潜水艦『アナトリアだ』」

「本当にデカイですね。私、最初に見た時は島が浮上したのかと思いました」

だろうな…こんな大きな物を作るとは……ウチの技術者たちは……やり過ぎだ…

「私も見るのは初めて何ですが、いやはや大物ですねこれは……」

ハリが感想深く言う。まあ確かにでかい…ＩＳを何十…てかウチの祖国にそんなＩＳ多くないし、意味あんのか？

「早くブリッジに行こう。船長が待っている」

「だな」

「あ～俺はもうちょっと～」

「いいから行く！」

「はいはい」

一夏はそう言って残念そうに言ってアナトリアのＩＳ格納庫から出

る。
この潜水艦、アナトリアは5年前から計画された物らしい。最初に名前を付けられたのはアー…アーセ…アーセナ……なんだっけ？アーセナ何とかって名前だったんだよな最初は、

「む、着いたぞ」

メルツェルがブリッジに着いた事を知らせ、皆は気を引き締める。
そしてプシューと音を立てて扉が開かれる。

「――――――お？おー！来たか！」

そこにいたのは船長服を着こなす、

「……ヴァオーじゃん」

「おお！旅団長！無事だったか！」

「モニターで見てたろ……」

「あっはっはっはっはっ！そうだったな！」

この無駄に豪快に声のデカイ年上の女性は、カルナ・ルテリア・ヴァオー、メルツェルに見出され、
旅団の切りこみ隊長になった女性である。

「おお？こいつが例のブリュンヒルデの弟か！」

「ど、どうも……」

一夏も声の大きさに驚いているのか若干ドモる。そして

ムギュッ！

「へブッ！？」

「なぁ！？」

ヴぁオーは急に一夏にヘッドロックをかまして自分の胸に押し当てる。

「はっはっはっはっは！良い面構えだな！さすがあの人の弟だ！」

「ムグゥ！モゴッ！」

「ちょ！ヴァオー離れろ！」

「いいじゃねえか！旅団長！スキンシップだスキンシップ！」

「やかましい！さっさと離れろ！」

あたしは一夏の腕を掴んでヴァオーから離そうとするが……

「おいおい！後も少しだけいいじゃねえか！」

「はーなーれーろー！」

「むが！？むごっ！？」

一夏は何故かさらに顔を赤くしてもがいている。
まさか一夏！ヴァオーの胸で窒息し始めてる！？

「いい加減離せ！ヴァオー！」

「ははははっは！まあまあモチツケ！」

「落ち着けるかー！」

必死にヴァオーから離そうとするがまったくビクともしない。
不味い！一夏が苦しすぎて鼻血も出て来てる！？

「一夏！しっかりしろ！一夏！」

「……俺…死んでもいい…」

「一夏ーーーーーー！！」

あたしは青くなったり赤くなったりする一夏を助けるべくヴァオーの胸に挑んだ。結果は……聞かないでくれ……

視点・「？？？」

ここはイタリアのナポリ……「ナポリを見てから死ね」と言う名言？がある美しい海が広がる港である。そこに……

「何故俺がこうなる……」

「どうすんのよこれ～……」

俺は隣にいる妹と共に、何故か日本の町中にある屋台でイタリア旅行券を当ててイタリアに言ったのは良いのだが……

「なんだよこれ！？イタリアは戦時中なのか！？聞いてねえよー！！」

「ちょ！？バカ兄貴！声が大きい！」

ゲシッ！

「あいたっ！？」

俺は妹に蹴られ、蹲る。

「イタリアと敵対しているテロリストに見つかったらどうするの！？」

妹が俺に小声で話す、そうだった……見つかったら妹は……

「いや、妹は何もされないな。きっと……」

「どういう意味だゴルァァ！！」

「ちょ！声大きいって！」

妹の声が大きいと言って落ち着かせる。

「もう～……一夏さんと千夏さんがイタリアに言ったって聞いて都合よくイタリア旅行券が当たったのにこんなんじゃ一夏さんと楽しめないよ～……」

妹は地面にへたりこみ愚痴を言う。そういや一夏、千夏にコクったっていったがどうなったんだ？

ちなみにとなりでへたり込んでいる妹にまだ言って無い。いったら多分…いや、俺に確実に理不尽な暴力が襲ってる事は間違いない。

「はあ……一夏…何処にいんだよ……」

俺は親友の名を呼んでそう吐くしかなかった……

ここは首都ローマ、そこにまだあの男がいた。

「あっれぇー？なんであの兄妹がいんの？」

これもブレイクした結果か？と考えている。二夏がいた。

「どうするか……」

二夏は考える。その時、わずかに心が揺れる。

「――――――――千夏達に教えてやるか……」

二夏はすぐさま通信を入れる。

「――――――――オルクイン」

（二夏か、どうした？）

「ナポリにいる民間人を千夏のところに連れて行ってくれ」

（お嬢のところに？民間人はコロニーに押し込むんじゃなかったの

か？）

「いや、千夏の日本の知り合いだ」

（お嬢の知り合い？）

「ああ、だからまずナポリに行って兄妹を回収後、千夏達と合流しろ」

（アイサー、分かったよ二夏）

「……ジョシュアと呼べ」

（あいよ。ジョシュア・オブライエン……）

そう言ってオルクインは通信を切り、二夏は静かに瞳を閉じる。

（はは、……何やってんだ？俺……）

二夏は自分のやった行いに疑問に思う。

「前の俺なら…ほっといたんだがな……これも千夏の……」

千夏の名前を出てくると首を振って打ち消す、

（止めよう。今は日本とアメリカへの取引を進めなくては……）

二夏は何かしらの策を講じる。

（束のお願いもたまには叶えなくてはな……まだやってもらわ無く

てはいけない事もある……）

二夏はアレサを機動させ浮遊する。

（さて、そろそろ千夏達はスコッシッチ通りでアマジーグを迎え撃っているはずだ……勝てるか？データとは言え…本場のリンクスに勝てるか？一夏……）

二夏はそれが気になってしょうがなかった。

（さて…ＢＦＦ社の部隊に行くか……確かクイーンランスはティレリア海で航行中だったな…合流しよう……）

そう言って二夏はアレサを操り、普通のＩＳにはあり得ないスピードで飛行した。

第六十二話「グラマラスヴァオー？」（後書き）

ヴァオー「おー！私がタイトルに入ってるぞ！」
一夏「よ、良かったですね。ヴァオーさん……」
カルナ「カルナでいいぞー！一夏！」
一夏「あ、はい」

千夏「……何？この危機感……」
ハリ「声の大きい女ですね～。千孤さん」
千夏「千夏だ！なんだよチコって！？」
ハリ「失礼、噛みました」
千夏「噛んでねえだろぜったい！！」

第六十三話「強敵」（前書き）

テロ・エコノミカ……
イタリアで起きた国家解体戦争から始める反体制勢力による全体管理、
資源の節度ある分配、突如イタリアを襲った反体制は資源と市場を独占し、
イタリア国民はコロニーに押し込まれ、糧食を得る為だけの労働に従事していた。
大統領の行方不明と圧倒的な敵との力の差……孫が連れて来たあの男、ブリュンヒルデの弟と試験機であったＩＳ機体、大統領の不在で我がイタリアの闘気は薄れ、
今や国家の再建は絶望的だった……私は、あの男を利用し…その為に孫娘を利用した……男性ＩＳ操縦者、政治的利用価値しかない、非力なＩＳ……
この時はまだ、誰もがそう思っていた……私を含めて……

エミール・ガッティーノ

第六十三話「強敵」

俺は今、イタリアのスコッシッチ通りにてＩＳ、白式を展開して待機していた。

（一夏？聞こえる？）

「良好だ」

（敵が来る前に作戦のお浚いをするぞ）

「頼む」

（各地に散ったカラビニエリの情報で得て提案された今回の任務はマグリブファミリーの陸送部隊を襲撃し、同ファミリーのイレギュラーＩＳ、砂漠の狼こと、アマジーグの機体を破壊する。アマジーグは各地の反体制勢力から英雄と称えられるほどの相手だ。まともに戦えばリスクが大きすぎる……奴のＩＳ、バルバロイは軽量機体だ。機体本体の防御力は決して高くない。だから機動前に一気に叩いてくれ）

「ああ、分かった」

（ん……目標を確認）

プライベート・チャネルから千夏の作戦のお浚いが終わり、俺は白式を機動させスコッシッチ通りを低飛行する。

（輸送車両による陸送中）

真ん前から来るぞと千夏は付けくわえ、俺は武装を展開する。

（一夏、焦らずに目標を引き付けて、奇襲して）

「了解……」

千夏の声は若干緊張していたが、

「安心しろ千夏」

（一夏……）

「俺なら…やれる…」

（……うん…一夏、この作戦はイタリアに散り散りになっているイタリア軍の闘気を上げる重要なミッションだ。気を引きしめて……）

「了解だ。ノック一本で勝って見せるさ」

（フフッ……無理はしないでな？）

「ああ」

俺は千夏の緊張を解し、来るべき敵に身構える。

（目標、作戦エリア内……）

唐突だが、俺は少しだけここに来た理由を思い出していた……

「千夏ぁ～……許してくれぇ～……」

「あたしがあんだけ心配してたのに……しらん！」

「そんなぁ……」

俺はアナトリア研究所にてヴァオーさんの猛烈な歓迎の後、千夏の説教が待っていた。

「前はこんな奴じゃなかったに……まったく！」

「いやそれは千夏にあってからで……」

「あたしのせいって言いたいのか？」

ギロッと千夏に睨まれ、俺は小さくなった。マ○オ

「……ほんとに」

「え？」

「ほんとに……心配したんだぞ…」

「千夏…」

「あたしが落とされた後に一夏も福音で落とされて怪我をしたって聞いた時も……ほんとに…心配で…」

「……」

千夏は俺に顔をそむけて見えない様がその顔は悲しみに満ちている事を痛いほどわかった。

「だから……」

「……悪かった」

ギュッ

「あ……」

俺が千夏を後ろから抱き締めると千夏は驚く、

「い、一夏……」

「もうああいう事はしねえよ……な？」

「……ほんとだな？」

「約束する」

「なら……良い…」

千夏は俺に体を預けると瞳を閉じる。

「……一夏」

「ん？」

「ゴメン…とんだ旅行になっちまった…」

「いいって、山田先生も言ったようにエキサイティングでよかったぞ？」

「……一夏も漏らしたの？」

「ちげえよ！」

俺が否定すると千夏は冗談冗談と言って笑う、男が漏らす訳にはいかねえだろ……

「一夏」

「ん？なんだ」

「……一夏は…ＩＳ学園に山田先生と戻ってくれ」

「え……？」

千夏は行き成り俺にそう言った。

「これは……あたしの国の戦いだから……」

「千夏……」

「ここはＩＳ学園じゃない……もう死人もでてる……下手すれば一夏だって……あそこで…」

千夏は俺が味方の余波で堕ちた事に福音でのトラウマがよみがえったらしい。

まいったな。ふざけるべきではなかった……

「だから一夏は、皆の所に一一一一一」

「その話し待って貰いたい」

千夏の言葉を遮る様に廊下の奥から人が来た。

「え？」

「あ、お…おじい様……」

お、おじい様？

「彼はこのイタリアに必要だ」

「で、ですが……」

「千夏」

「っ――……」

千夏の名前呼んだその……おじい様？と言う人は千夏を睨んで黙らせる。て、

「あ、あの…貴方は？」

「申し遅れた。私はそこにいる娘の祖父、エミール・ガッティーノだ」

お、叔父か！

「あ、えっと織斑一夏です」

「ああ、知っている……織斑君、単刀直入に頼みがある」

「え？」

「お、おじい様！」

「黙ってなさい……」

そう祖父に言われ、千夏は口を閉じる。え？この人って結構偉いの？

「……織斑君、君に……君にこの事態を打開する切り札になって欲しい」

「え？」

「おじい様それは！」

千夏がまた言うとまたちち千夏の祖父は千夏を睨んで黙らせた。こえぇ～……

「織斑君、私は強制はしない。だが……」

千夏の祖父は言葉を区切り、息を吹いて言葉を出す。

「私の孫娘が最前戦で戦う事になる……」

「な！！」

「……」

俺は驚く、千夏が最前戦で戦う？あの兵器に？千夏はまだ福音でのダメージが残っているかも知れないのに！

「ど、どうしてですか！？」

俺は聞き返すすると祖父は言う。

「孫はその年でＯＲＣＡ旅団を率いる才女だ。イタリアを守る為、戦いに身を置くのは当たり前だ」

「で、でも！」

「私とて大事にな後継ぎを死ぬかもしれない前戦にだすのは心苦し

い……だが」

またも千夏の祖父は言葉を区切る。

「君がいれば問題ない。違うかね？」

「！」

俺はいれば？俺がいれば千夏を戦わせずに済む？

その時、祖父が小声で俺に話しかける。

『イタリアにいるテロリストを全て排除したあかつきには……』

「？」

『娘を自由にしてやっても良いぞ？そのまま日本に永住させても良い……』

「！？」

千夏を自由に？それは……！

保父はニヤリと笑う、千夏が大統領にならずに、ずっと日本で暮らせる……

千夏と……ずっと一緒にいられる……俺は……

「……やります」

「む？」

「い、一夏？」

「俺が……千夏の代わりに……戦います」

「ほう……」

「い、一夏!?」

「千夏は十分戦った……だから、今度は俺の番なんだ!」

「一夏……」

「フッ……そうか…」

保父は嬉しそうにして俺の意思を聞いた。

「作戦はすぐに行う……体を休めといてくれ」

そう言って千夏の祖父は歩いてきた投下に戻り、見えなくなった。

「……なんで…」

「え?」

「なんで……承諾したんだ…」

「……千夏を守りたい…千夏が守りたい物全てを守りたい」

「……」

千夏は顔を上げて俺を見る。それは、複雑な表情していた。

「千夏…今だけは……俺にお前を守らせてくれ……」

「……」

千夏はまた顔を下げて何かに耐える様にして拳を震わせていた。俺にはそれが辛かった。だけど……

（もう守られるだけの関係はイヤなんだ……！）

俺は守る…全てを！守りぬいて見せる！……姉ちゃんの名にかけて！

俺はあの時の話と決意を胸に今戦場にいた。どちらかが死ぬ本当の……その時、

（！、バルバロイ、既に起動している！）

「！？」

俺はすぐに臨戦態勢をとり、事態を把握する。

（そんな…気づかれていた！？）

千夏はカラビニエリの情報が外れた事に驚く、

（何故！？）

「クッ！やるしかない！」

（お願い、生き残って！）

千夏の悲痛な思いが伝わってくる。もちろんだ。

（生きてかえる！また皆と学園生活を送る為に！）

俺は敵のＩＳ、バルバロイへと突撃をする。その時チャネルから千夏とは違う声が聞こえてきた。

（奇襲か……）

「！？」

突然、チャネルから通信がくる。

（無駄な策だったな…不意打ちとは犬に相応しい所業だ……）

チャネルから聞こえる声には、ただならぬ怒りが見え隠れしている。

「敵か！？」

（容赦せん……行くぞ！）

「！、来る！」

（一夏！気を付けて！相手はただものじゃないぞ！）

「わかってる！アナトリア１、エンゲージ！」

（了解、無事の帰還を……！）

俺は敵のＩＳ、バルバロイへと接近して雪羅をクローモードにして攻撃する。

「うおらあああああああっ！！！」

（甘い！）

だが相手はそれを交わし近距離からのショットガンを浴びせようとする。

「クソッ！雪羅！」

俺は雪羅のクローモード解除し、粒子シールドへ変える。

バアァンッ！

「グウゥッ！」

俺は何とか耐えて距離を取り、雪片をライフルモードに変形させて狙い撃つ、

「堕ちろ！」

バシュウゥンッ！

（くっ！？）

当たった！？行ける！

俺は即座に雪羅を荷電粒子砲に変え、充電を開始する。

「これで！」

（消えろ！）

即座に相手は肩に付いたミサイルポッドを展開して発射する。くっ！避けられない！？

なら！

「撃ち落とす！」

俺は発射ミサイルに対し、荷電粒子砲をぶっ放す、撃ち落とされたミサイルは黒煙を上げて爆散した。

「あっぶねぇ……」

（一夏！生きてるか！？）

「ああ、何とか……」

（よかった……ミサイルが一夏に当たったかと思ったぞ……）

「大丈夫だ俺は――――――」

（なるほど、理に適った動きだ……ブリュンヒルデの弟、侮れんな）

突然敵の声が聞こえる。

「聞かせてくれ…アンタは何でイタリアを……」

（……）

バルバロイの問いはない。

「答えろ！なんで千夏の故郷を！」

（っ――――消えろ！）

「！」

突然武器を俺に向けて撃ち、俺は即座に粒子シールドを展開する。

（消えろ、消えろ、消えろ！）

「つぅっ！止めろ！」

だが敵の猛攻は続く、クソ、なんて強さだ！

「……覚悟を決めるか…」

敵に情けをかければこっちが堕ちる。

「やるしか……ないんだ！」

俺も相手、バルバロイに銃を向ける。

（千夏の為なら……俺は……！）

そして俺の指は引き金を引いた……

第六十三話「強敵」（後書き）

千夏「行き成り本場のリンクス相手かよ……」
一夏「手ごわいな……」
メルツェル「すまない……自分も出撃したかったのだが……」
ハリ「私はティレリア海の正体不明の艦隊を調査しないといけませんしね……」
アスピーデ「私はまだ管制機にいますから……」
ヴァオー「私は船長だ！」
千夏「あれ？オルクインは？」
戦士達一同「「「「知らん（な（ないです（！（ませんね～）」」」」
一夏「千夏の旅団って……」
千夏「……結構自由だったりする……」

行き成りプロフィーーーーーーーーーーー……再編集！（前書き）

千夏「ほんとに行き成りだな……」
一夏「そうだな」
真夏「まったくや」
千夏「うお！？なんだこのちっこいのは！？」
真夏「ちっこいやない！真夏や！巨乳！」
千夏「な！？誰が巨乳だ！」
真夏「やかましい！その胸でいっちゃん誘惑してたんやろ！いっちゃんを返して！」
千夏「知るか！」

一夏（……ああ、二作品目のキャラか……まなちゃん…）

行き成りプロフィーーーーーーーーーーー……再編集！

第４世代型ＩＳ、二次移行（セカンドシフト）「アンサング」束は黒百合（クロユリ）と呼んでいる。

篠ノ之博士がオーメルに潜伏し、神と共に作り上げた第四世代型ＩＳぶっちゃけ外見は、ＡＣＦＡのアンサングをＩＳ風にした機体

束粒子を搭載したＩＳで、シールドエネルギーは現在のＩＳよりも格段に多く、白式（びゃくしき）、赤椿（あかつばき）とは逆のコンセプトで作られ、

長時間の戦闘に対応した仕様になっている。

武装は大口径突撃ライフル「マーヴ」、ハイレーザーバズーカ「雪花（せつか）・ファブラム？」、

左腕装着型の大型レーザーブレード「雪崩（なだれ）・アスカロン」

強化型ＰＭ粒子ミサイルと大出力のプラズマキャノン「トレゾア」を兼ね備える

展開装甲の機能は、束粒子を使用しており

攻撃、防御、起動のあらゆる状況に即応することが可能

ＩＳスーツも変わり、赤と黒を基準にした服で、

ＩＳ学園の標準スーツに近い形であり、起動時には、スーツに描かれたライン上の絵が緑色に輝いている。

古代技術製のようなＩＳスーツです

待機状態は、黒いガントレットになった。

束粒子

篠ノ之博士が新発見した物質を用いた技術

発見当初は、有害物質だったが篠ノ之博士が、有害性を中和する装置を開発し

ＩＳのエネルギー源として使用を可能とした

使用方法は、、プライマルアーマー、オーバードブーストなど、アンサング《黒百合》の機能に利用されている。

プライマルアーマー（ＰＡ）はＩＳ周辺に束粒子を安定還流させる事で一種のバリアとするものであり、ほとんどの攻撃を無力化することが可能となっている。ただし貫通性の高い火器や雪片のような兵器に対しては比較的効果が薄い。安定還流させている束粒子を攻撃に転用するアサルトアーマー（ＡＡ）も使う。

「一騎当千（いっきとうせん）」
黒百合の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）で、使用時には、ＩＳ全体から放出される白銀色の粒子によって機体が銀色に輝き、自身と味方のＩＳの性能、武装の威力までも極限に上げる事が出来る。

人物紹介

「メルツェル・ラッシュ」階級は大尉
千夏の旅団、ＯＲＣＡ旅団では千夏の右腕努めている千夏の良き理解者である。
普段はイタリア空軍で勤務していおり、イタリアの戦闘機ならなんでも乗れる腕前をもっている。
ちなみにプライベートでは千夏にメルと言う愛称で呼ばれている。
千夏と出会ったのは千夏が空軍の基地へ行った時にメルツェルと出会い、その後何度も話し戦友の仲になった。
使用ＩＳ機体は「オープニング」ＧＡ社から福音での件でブンど…では無く技術を貰いやっと完成したメルツェル専用機体である。イメージはタイムクライシスのラッシュ大尉とＡＣｆｏｒ　Ａｎｓｗｅｒのメルツェル

「カルナ・ルテリア・ヴァオー」メルツェルに見出され、旅団の切りこみ隊長になった女性で階級はアナトリア船長代行、とにかく胸がデカく気に入った者ならば何処でも過激なスキンシップを強行す

る女性である。母親と離れていた時は母親代わりにもなった良い人である。彼女もＩＳ、専用機を持っており
千夏がまだ専用機を持ってない時に何時もＩＳ戦の相手をして鍛えていた。得意な事はプロレス
使用機体は「グレディッツィア」、重火力をコンセプトにして作られたガトリングモンスターである。
人物イメージはＡＣｆｏｒ　Ａｎｓｗｅｒのヴァオー

「ハリ・ストル・クーガー」階級は少尉でヘリコプター操縦者もある。
彼女はスピード狂でよく人の名前を間違える癖がある。
メルツェルとは少し違うがスピードが出る乗り物なら何でも乗りこなす腕前がある。
名前を間違えてよく怒られるがどこか憎めない女性である。
使用機体は「クラースナヤ」ハリが独自で改良して早さを追求したトンデモＩＳである。マジで早い、
人物イメージはスクライドのクーガーの兄貴とＡＣｆｏｒ　Ａｎｓｗｅｒのハリである。

「ミシェル・ネオニダス」階級は中尉、旅団の中で制圧力を誇る機体、「月輪」を操る新型専用機を持つ女性である。千夏がイタリアへ訪れた時に偶然出会った元マフィアの子でその親が入っていたマフィアが壊滅、行き場を失った所を千夏の父であるジョルジョに拾われ以後、千夏の護衛をしていた。
ＩＳの適性が高かったこともあり新型専用機との相性もよかったので彼女は軍の中で地位を確立している。前に千夏の父が自分の父親のファミリーを壊滅に追い込んだ事を知った時は少し自暴自棄になったが、千夏と触れあった事で和解、千夏の父親の事を本当の父の様に接した。戦闘では銀翁と呼ばれている。機体が銀色だから？
使用機体は「月輪」、イタリアトーラス社のＩＳであり、マフィア

を止めて技術者となった父親が作り上げた新型傑作変態機である。
試験段階だったアサルトアーマーを安定した威力を見せ付けた。
怪談だが、何故この機体がイグニッションプランに出ず、テンペスタで参加したと言うと危なすぎると言う事である。それに軍の女性でもあの超重量級の機体を操る事が出来ず開発が難航した時ミシェルが現れてその機体を自在に操って見せた事に変態共が感激して以後、ミシェルの専用機に成った。
人物イメージはＡＣｆｏｒ　Ａｎｓｗｅｒのネオニダス

「アスピーデ・アスピナ」階級は無しではあるが千夏の秘書的存在である。
もともとはアスピナ機関の令嬢で箱入り娘である。父親は過度保護でアスピーデをベランダと庭意外で外に出した事が無いほどのバカ親を炸裂させていたが、それじゃ外の世界が分からないと言って少～し千夏がＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩで解決、以後は千夏が側でアスピーデの面倒していた事から姉と呼ばれ千夏はアーデと呼んでいる。
使用機体は「フラジール」アーデの要望により生まれた問題機体で、本人は千夏の速度に追いつきたいと言う要望で変態共によって作られたＩＳ。、機体は千夏のステイシスを遥かに超える軽量機体でもう裸同然と言っても良いほどの装甲の薄さだ。だが逆に火力に関しては定評があり背中に装備された八問もの機銃が搭載されおり、連射ならヴァオーの火力を超えている。
人物イメージはＡＣｆｏｒ　Ａｎｓｗｅｒの逆流する人です。

「オールドクイーン」名前不詳、年齢不詳の謎起き女性、階級は一応メルツェル同じ、
旅団ではムードメーカーと言う事もあり、結構人気がある。女尊非男の世の中になっても普通に接していることから人気も高い、メルツェルも認めているが、どこか腑に落ちない点があり、少し警戒している。

愛称はオルクイン、
使用機体「リザ」、千夏と同じく逆足関節を持つ珍しいＩＳである。
どこから入手したかは誰にも話しておらず、イタリア軍に入ると言っているのでその事は不問にされている。人物イメージはＡＣｆｏｒ　Ａｎｓｗｅｒのオールドキング

「ジョシュア・オブライエン」本名・織神二夏？
作者が作り上げたウザ王、とりあえず何がしたいか分からずトチ狂った行動がこの頃目立ってくる変態、
千夏に対して過剰なまでの気持ちを持っており、何かと千夏と一緒にいようとする。
その度に本家とケンカが絶えないのだが……本性は神であり千夏を転生させた本人である。
最初は部下の不手際で前世の千夏を死なせてしまい。新たな世界へと送ったが、他の転生者には見せない物を見出し、側でそれを見てみたいと思い自らも世界へと降り立った。
使用機体は「アレサ」↓「ホワイト・グリント」
最初は束と二夏で作ったプロトタイプで後から二夏自身で作ったＩＳに乗っている。
人物イメージはＡＣ４のジョシュア・Ｏ・ブライエン？だ。

こんなところでしょうか……

行き成りプロフィーーーーーーーーーーー……再編集！（後書き）

千夏「一夏…どういう事だ？」
一夏「お、落ち着け千夏！あの子は作者の別作品のキャラで！」
千夏「あんな小さい子に何をしたアアアアアアアアッ！！！」
一夏「違うんだあああああああああっ！！！」

真夏「なんやどエライ仲ええなぁ…羨ましいわ」

第六十四話「救援」（前書き）

書けた……感想まってます。

第六十四話「救援」

（理に叶った動きと言ったが……間違いだったか？）

「クソッ！」

俺はムソネのスコッシッチ通りからコーネロ山の麓での山岳戦に突入していた。

（情報に偽りがあったみたいだな…）

「うるせぇ！」

俺は雪羅で敵、バルバロイへ狙いを定める。
だが相手は感づいて回避行動へ移った。

（貴様では俺には勝てない！）

「やってみなきゃ分からない！」

だが事実、俺はおされ始めていた。クソッ！動きが読めない！！

（堕ちろ）

「！？」

ドンッ　ダダダダッ！

「グウゥ！！」

バルバロイからのショットガンとライフルの砲火が俺を襲う、

『なんなんだコイツ！今までで戦った相手とは比べ物にならない！！』

俺は必至に避けて隙を窺うが、敵は早く、そして強かった。

（足掻くな、運命を受け入れろ）

「運命で人生決められてたまるか！」

こちらも反撃しても相手にはぜんぜん当たらなかった。その時、千夏からチャネルが入る。

（一夏！相手が悪過ぎる！逃げるんだ！）

「！、奴は俺が倒す！」

「今は無理だ！だから早く逃げ――――――」

「黙ってろ！！」

「！？、い、一夏……？」

クソ！どうすりゃ！？

（！、そこ！！）

「!?しまーーーー」

敵は近距離からのミサイルを発射した。俺は避ける事が出来ず、

ドドドドドドドオォーンッ!!!!!

「ぐあああああぁ!!!」

ミサイルの嵐を食らって俺はコーネロ山に堕ちた。

ガガガガガガガッ!!!!

「ぐうううううっ!!!」

俺は不時着した。くぅ…いてぇ……

（……一…!…一夏…!大…夫…!?）

千夏からのチャネルからの声が聞こえてくるが痛みのせいで少し意識が薄れてよく聞こえない。

「な、なんなんだよ……コイツは!」

（……）

奴は俺の真上で堕ちた俺を見下すように見る。そして……

（……終わりだ）

「く……」

俺は痛む体にムチ打って経たせるが言う事を聞かない。

『畜生……』

俺は敵を睨みながらも立とうとするが、それでも体は起き上がらない。

「終わり…かよ…」

（一夏！お願いだから逃げてぇ！！」

千夏の声が急に鮮明に聞こえる。あー…千夏に怒鳴っちまった…

「わりぃ……お前と…一緒に…」

（一夏！？）

日本に帰りたかったな……

俺は目をつむる……チャネルから千夏の声が聞こえながら俺は……

（こちらホワイトグリント……ＩＳ操縦者、ジョシュア・オブライエンだ）

「！！」

（なんだ……？）

相手の後ろからキラリと光る物が見える。それは……

（救援に向かう。持ち応えてくれ）

その通信が聞こえ、俺は……

『……まだ、やれる…！』

俺は必至に起き上がり、敵を見据える。

（一夏……！）

「さっきの通信が本当なら……持ち応えて見せる！」

俺は手に力を入れ、雪片を握り、戦いを再開した……

視点・「織神二夏」

「おーやだやだ、見てらんないじゃないの」

やはりアイツには荷が重かったか……そりゃそうか、

「新米とプロじゃ勝負になる訳ないか……」

まあいい……作戦通りに手助けしてやるよ。一夏……

「ホワイト・グリント、新兵を援護しに行く！」

俺はオーバーブーストを発動させ、バルバロイへ接近戦へ持ち込む、

（！？、貴様は！？）

「悪いなアマジーグ……こっちでも倒れておいてくれ」

そう言って俺はブレードを展開してバルバロイの両手の武器を切り裂く、

「はあぁっ！！」

（クッ！？）

奴はすぐに破壊された武器を捨てて背中のミサイルを展開するが……

「待ってたぜ？」

俺はライフルでミサイルポッドの開いた部分に狙いを定め……

ドンッ！

弾丸は吸い込まれるようにしてミサイルハッチの中の弾頭に当たり、

ドガアアアァンッ！！！！

（がああああああっ！！！！）

ミサイルポッドは爆散、バルバロイは武装の全てを失った。

「す、すげぇ……」

（……この声って……）

一夏と千夏が何か行っているようだが、そろそろティロ・フィナーレだぜ？

「堕ちろ！」

ズバンッ！

バルバロイは見事に真っ二つにされてコーネロ山に堕ちるその上半身が一夏の近くに堕ちた。

「うわ！あぶね！」

一夏は近くに堕ちた事に驚いていた。そしてバルバロイの人格データのアマジーグは……

（……ギ…ガ……）

「え？」

（…貴様は……）

「……」

（……その力で…貴様は何を守る……？）ジジッ…ボンッ！

そう言ってアマジーグの人格データの機械は音を立てて壊れた。それを見つめる一夏は、

「……守る者は…もう決まってる…」

「……フン」

言うようになったもんだ……原作とはかけ離れた漢になったな。一夏……さて

「この先も、奴は戦い続けられるか？」

俺は、アイツの成長にどこか楽しみを覚えていた。

「……千夏意外に俺が興味を持つとは…な」

だが気分はいい。

「さて…千夏にでも会いに行くかな?」

俺は千夏に連絡する為、チャネルを開く、こうして一夏のデビュー戦は散々な物に成ったが……

まあ…良い経験に成っただろう。

『千夏が俺だと分かった顔が楽しみだ』

そう考えながら俺はこちらを警戒しながら見つめる千夏に見惚れていた……

第六十四話「救援」（後書き）

二夏「やはり一夏にはまだ早かったか……」

千夏「無茶させすぎだ……」

一夏「……一人でもやれた…」

千夏「一夏……」

二夏（ふむ、まだまだ子供だな。コイツ……」

第六十五話「強気な一夏？」（前書き）

千夏「アマジーグはずっと、本隊と独立して行動を取っていたそうだぞ。味方を汚染させない様に……」

一夏「……そうか」

千夏「英雄…か、最初から全てを受けれていたのかも知れないな」

千夏「今は…ゆっくり休んでくれ。一夏」

一夏「ああ、そうさせてもらうよ」

第六十五話「強気な一夏？」

俺はアマジーグとの戦いが終わり、アーセナルへ帰還して休息を得ていたのだが……

「なあ千夏、この戦争が終わったらさ俺ＩＳ学園に行って見たいんだ」

「へ？あ…そ、そうなのか…」

「だからさ、ＩＳ学園に行った時に学園を案内して欲しいんだ」

「そ、そうか別にいいぞ？」

「ああ、約束だ」

「……」

こいつはなんなんだ！？俺と瓜二つの顔をして千夏と話をする奴は！？

それに千夏に学園の案内？コイツも戦争が終わったら学園に来る気か！？

「そ、それよりも二ｋ－－－－－－－」

「シッ…」

「！？」

千夏はコイツに何か言おうしたら…ひ、人差し指で千夏の唇に触れやがった！

「！？え、あ、えっと……」

「ジョシュアだ」

「え？」

「今の俺はジョシュア・オブライエンだ…千夏」

「あ……うん、わかった…ジョシュア」

「それでいい」

そう言ってジョシュアが千夏の頭を撫でる。お、俺の特権を！？

「……あのさ」

「あ？」

「一夏？」

「ジョシュアと千夏ってどういう関係だ？」

俺は千夏に問う、なんだか俺よりも親しい様な関係なんだが……

「ああ、それは一一一一一」

「それは？」

「前世の関係だ」

は？コイツは何を言っている……

「簡単に言えばお前よりも長い付き合いだって事だよ一夏君？」

「な……」

お、俺よりも！？

「ど、どういう事だ？千夏」

「ああ……そうだな…なんて説明すれば…」

「？」

「まあつまりはコイツとは赤ん坊の頃からの付き合いってわけさ」

「な、なななな…！」

「あってるだろ？千夏……」

「ええと…まああってるの…かな？」

あ、赤ん坊の頃からだと！？

「ま！千夏にとってはファーストな幼馴染って感じだ」

「お、俺はお前を知らないぞ！？千夏からもジョシュアの話なんて

……」

「喋らなかっただけさ…俺と千夏の関係は秘密なのさ」

そう言ってジョシュアは千夏の肩に手を置いて抱き寄せる。

「じょ、ジョシュア……？」

「なんだ？」

「いや、えっと…何を？」

「何って…千夏を抱き寄せているだけだぞ？」

「それもあるけど…なんで抱き寄せるんだ？」

千夏の顔が若干赤い、こ、コイツはいったい！？

「まあいい、一夏にもちゃんと説明しないとな」

「説明って……」

ジョシュアは行き成り千夏の顔に自分の顔を近づけて、

「ーーーーーーーーー」

「！、……わかった。父さんにはそう伝えとく」

「宜しく頼むぜ？千夏……」

そう言ってから千夏のおでこにキスをするジョシュア……お、俺もやっことねえのに！！

「な！？何をする！？」

「良いじゃないか…一夏に一人占めはさせたくないもんでね」

「り、理由になって一一一一一一」

「じゃあ俺はアスピナの人と話があるから…またな。千夏」

そう言いながらジョシュアはアスピナ研究員がいるブリーフィングルームへ走っていった。

俺はとにかくあのジョシュアと千夏の関係が気になって仕方がなく、千夏に聞く。

「おい千夏、あのジョシュアって誰なんだ！？しかも男性ＩＳ操縦者だぞ！？」

「えーとだな…短く説明すると、ジョシュアはアスピナの傭兵でこのイタリアで起きてる戦争を止める為に来てくれたらしい……」

「らしいって……」

「だ、だって…ジョシュアはあたしを守りに来たって事だけしか話さないから……」

「守るって…それは俺の役目一一一一一一」

俺が千夏に言おうとしたその時、

「お嬢！久しぶりだな！」

「ん？おおー！オルクインじゃん！久しぶり」

「ああ」

急に現れて来たのは何と言うかヴァオーさんとは違う意味で豪快そうな人が千夏に声をかけて来た。

「と、邪魔だったか？」

「ううん全然！それよりも何時戻ったんだ？リザの調整は終わったのか？」

「ああ、他国のＩＳを使うのは初めてだがこのリザは私に馴染む…何故だか凄く馴染んでくれてな。気分が良い」

「そっか、それは良かった……」

「あーそうだ。それよりも懐かしい顔がお待ちだぜ？」

「懐かしい顔？」

「ああ、おーいこ…ち……だ？」

俺達はオルクインさんが向いている方向へ目を向けると……

「ーーーーーー誰もいないね」

「ーーーーー誰もいないな」

「あ、あれ？さっきまでいたんだけどね？」

何故疑問形？

「あーもしかしたら迷ったかも知れないなぁ…あの兄妹」

迷う？ああ…ここは結構広いからなぁ……

「ごめんお嬢、すぐに探してくる！」

そう言ってオルクインさんは走って行ってしまう。

「なんだったんだ？」

「さあ……」

俺達はとりあえず後でここで待っていれば良いと思いその場を後にした。

視点・「織神二夏」偽名ジョシュア・オブライエン

「さーてと、あの鈍感主人公との顔合わせも済ませたし、どうすっかな～」

俺はアスピナの人に呼ばれていたが、面倒なのでスルーした。

「ふむ、また一夏を揺さぶって見ようかねぇ…」

ふっふっふっ……戦闘時の一夏はかなり焦っていて、千夏に怒鳴ってたしなぁ

「ま、俺はそんな事はしねぇし、このイタリアで千夏と一夏の関係は……お？」

俺があるいている真ん前から誰かがあるいて来た。

「んー？あれは……アスピナの姫君じゃん」

「ん？ジョシュアさんですか…ご無沙汰してます」

そう言ってスカートを手でつまみ上げてお辞儀をするアスピーデ・アスピナ嬢

う～んゴスロリか～軍事の際に着る管制官の制服もなかなか様に成ってるんだよな～両方千夏に着せて見たい物だ。

「ああ、戻ったのか？」

「はい、後にまたお姉さまと一緒に管制機で飛び立ちますが、それ

までは休むよう言われてます」

「そうか……”アーデ”も大変だな。こんな戦争に巻き込まれて」

「っ――――――いえ、祖国を守るのは私達ＯＲＣＡの役目ですので…」

「他国派遣武装ＩＳ旅団…他国からはＯＲＣＡ旅団と呼ばれている…か、他国派遣なのに本来の役目をする前に戦う事になるとはな……」

「ＯＲＣＡは万能部隊なんです。名前ではそうですが自国の為に戦う事も想定されています」

「そうかい」

「はい、では私は仕事がありますのでこれで……」

「ああ、頑張ってくれ」

「それでは…それと」

「ん？…「ジャキッ！」…お？」

アーデは急に俺に銃を向けて来た。

「そのばら撒き機て何しようっての？」

「……アーデはお姉さまが付けてくれたお名前…」

「は？」

「我が機関の傭兵だろうと、ＯＲＣＡ旅団一同と一夏お兄様意外が呼んでいい名では無い！」

……ああ…そう言う事か、

「なに？まだ信用されてないって訳？」

「当たり前だ…機関の名簿にお前の名前などなかった！」

「そりゃそうだ。新しく入ったからな」

「……」

「まあカリカリすんなって、お前の言うお兄様の恩人だぜ？」

「！……クッ」

アスピナ嬢は武器を解除してそそくさと立ち去った。

「ハッ……ＯＲＣＡの女は気が強いねぇ」

面白い……千夏の周りの女子は良い女すぎるぜ……

「ま、一番は千夏だけどな！」

俺はそう言ってその場を後にする。その後、アスピナの研究員が怒鳴っていたが俺は寝た。グースカ

視点・「千夏・N・ガッティーノ」

あたしと一夏はアマジーグ操るバルバロイに苦戦を強いられた時、颯爽と現れた二夏……ジョシュアに着いて考えていた。

（アイツ…なんで今になって現れたんだ？）

行き成り現れて前に襲われ？かけた事をスッカリ忘れていたが……

（う～ん、なんでアイツもあたしを守りたがるんだろうねぇ……）

もしかして……二夏も一夏と同じくあたしを？

（い、いやいやいや！そんなはずはない…アイツは俺が元男だと知ってるはずだ……）

それともそう言う趣味なのか？あたしは急に背筋が凍る感覚がして

身震いする。

「おい千夏聞いて…どうした？急に体を震わせて……」

「へ！？あ、な…なんでもないぞ！？」

「そうか？体調が悪いなら直ぐに言えよ？」

「うん…ありがとう」

「いいって、千夏に何かあったら大変だからな」

一夏はあたしの頭を撫でる。何故か前よりも強く撫でてるような…

……

「ちょ！一夏！撫でるの強すぎ！」

「悪い、でもアイツの感触を消す為だ」

「か、感触？」

「気にするな。もう終わった」

そう言って一夏は頭から手を離す、あたしはボサボサになった髪を整える。

「もう……」

「悪い…で、アイツの事なんだけど」

「え？さっき話したろ？」

「……俺は千夏が話すまで知らなかった。誰なんだ？ジョシュアって……それに俺と同じ顔だし」

「だぁかぁらぁ！ジョシュアは…えっと～…ほ、ほら！幼馴染だ！幼馴染！一夏と同じで一一一一」

「アイツと一緒にするな！」

「！」ビクッ

「あ……すまん」

「……一夏、どうしたんだ？戦闘でも怒鳴ってたし……」

あたしは一夏に何かあったかと思って心配した。

「……俺は勝てなかった」

「え？」

「あのアマジーグに勝てなかった……それどころか同じ男に！」

「一夏……」

「俺は…千夏を守るって決めたんだ……なのに！」

「一夏……」

……バカだなぁ。

「一夏……」

「千夏……」

あたしは久しぶりに一夏の頭を撫でた様な気がする。この頃してなかったなー……

「千夏？」

「一夏は強くなれるよ。あたしが保障する」

「え？」

「一夏には白式って言う相棒がいるだろ？それに一夏はあのブリュンヒルデ、千冬さ…姉さんの弟なんだからさ……」

「でも……俺は…」

ああもうまたか……

「強くなれ」

「？」

「悩みも、弱音も吹き飛ばすくらい強くなれ、己が覚悟と得た力…そして絆で障害をねじ伏せろ……」

「……」

「泣いてもいい…転んでもいい…また笑って、立ちあがれ…一夏」

あたしはそう一夏に言うと一夏は頭を伏せた。あ、あれ？あたし言う事間違えたか！？

「千夏……」

「な、何？」

一夏はガバッと顔を上げる。その顔にはさっきまで見せた暗く辛そうな顔は何処にもなく、
ニカッと笑う一夏の顔があった。

「ワリィな！クヨクヨする俺なんて俺らしくないよな」

「あ、ああ！それでいい（ふう…よかった。言う事あってて…）」

「千夏……」

「ん？なんｄーーーーーー」

あたしは喋れなかった。否…喋れない様に何かで口を塞がれていた。

「……」

「……！？」

バッとあたしは一夏から離れる。多分あたしの顔は真っ赤になっているだろう。

「あ……あ…あ…」パクパク…

「……じゃ、じゃあ俺はあの弾達のとこに戻るから……じゃあな」

そう言って顔真っ赤な一夏はあたしとは反対側へと走り出し、すぐに見えなくなった。

「……恥ずかしいなら……するな…バカ」

あたしはそう言って一夏の反対の廊下へと歩くその足取りは軽かった……

「向こうだ！向こうに赤髪の男女がいたぞ！」

「早く見つけろ！侵入者かもしれんぞ！」

「このアーセナルに侵入するとは……命知らずめ！」

男達のどなり声がところかしこで響く、それは何故か？

「お、お兄ぃ……」

「あ、安心しろ…俺が守ってやる…」

そう言いながらも足はガクガクな我らが一夏の親友事、五反田弾とその妹蘭がオルクインに保護されてここへきたのだが、はぐれて侵入者が扱いされていた。

「だ、大丈夫だ。この千夏から貰った折り畳み式ラァブダンボールがあれば安心だ」

「ほ、ほんとに？」

「……」

「なんで黙るの？」

「……気にするな」

「気になるよ！？」

「シィッ！声が大きい！」

俺達は二人でラブダンボールに隠れてやり過ごす。

「あ～もうオルクインさん、早く助けてよ～」

「早く見つけてくれないと俺達どうにかなっちまう……」

早く見つけてくれと願う二人だが……

「あっれ～？何処いったんだ？弾達は……」

ラブダンボールの横を通り過ぎるオルクイン、ここでダンボールの偽装性が仇になった瞬間だった……

第六十五話「強気な一夏？」（後書き）

二夏「アスピナの時々見せる気の強さ…千夏譲りだな」
束　「そうだね～ちうちゃんはどこか箒ちゃんと同じに見えるよ」
二夏「ああ、そうだな…あの胸は千夏に匹敵する」
束「胸の話になってる！？」

第六十六話「都市部同時奪還作戦」（前書き）

感想マッテマ～ス。

第六十六話「都市部同時奪還作戦」

俺達は味方のノーマル部隊の上陸を支援してアドリア海に面している都市部、ペスカーラの町を奪還する為出撃している。

『作戦を説明します。織斑君はアドリア海に浮かぶアナトリアから襲撃し、都市部ペスカーラを奪還する為味方であるノーマル部隊のペスカーラ上陸を援護してください。同時にペスカーラを占領している旧マグリブファミリーのもう一人のイレギュラーＩＳ、アシュート＝ミニアを撃波し、ペスカーラの町を奪還してください…あと――――』

「あの…山田先生？」

『はい？なんですか？』

俺は通信越しにいる山田先生に問いた。

「どうして山田先生がオペレーターを？」

『え？えっと…不満……ですか？』

「ああ！いえ！そうじゃないです。前は千夏が俺のオペレーターだったので…」

『あ、そう言う事ですか、ガッティーノさんはジョシュアさんのアルバアドリアティーカの奪還でオペレーターをしていますよ。織斑君と同じ任務ですね！』

「ジョシュアの!?」

『ひゃあ!?ど、どうしました?』

「あ…いえ、その……」

な、なんで千夏がアイツのオペレーターを!?
俺は何故か俺のオペレーターをする山田先生に聞く、

「な、なんで千夏がジョシュアのオペレーターを?」

『えーとってですね。ガッティーノさんが言うにはジョシュアさんに頼まれてだそうです』

「頼まれてッて…」

なんで千夏はアイツの?

『ジョシュアさんの任務は単独での都市部奪還ですから、ジョシュアさん任務達成率を上げる為に仲の良いガッティーノさんが選ばれたと言うか、ジョシュアさんが進言したんですけどね」

「あの野郎……」

仲が良いのは俺だって同じだぞ!?しかも俺と違って単独で任務に!?
千夏の反応から見るにしてもアイツとは久しぶりに会った感じだし…、
それに千夏からアイツの事なんて全然聞いてないし、てか本当にアイツは千夏の幼馴z…知り合いなのか?

『あのー…織斑君？』

「え？あ、はいなんですか？」

『あの何か考えことですか？先生聞きますよ？』

「えーと……なんで山田先生がオペレーターを？」

『それはですね。どうもオペレーターが不足してるんですよ…それに旅団の皆さんも別の任務へ出撃してますし、アナトリアを守る方へも戦力を分けなきゃ行けないんです。それで私が暇だ…じゃなくて私が適任だと言われて急遽私が織斑君のオペレーターをする事になったんです！』

「なるほど……」

何か引っかかる単語があったが、それなら仕方ない。

「山田先生は大丈夫ですか？実戦ですけど……」

『……少し…不安です…これは実戦で、人の命をかける戦いですから…』

「そう…ですね…」

俺は改めて本当の戦場にいる事再確認した。

あの時は、ただ千夏の為にと戦う事を選んだ……

『織斑君は…怖くないんですか？』

山田先生が俺に問いかける。俺は……

「怖いです。凄く…最初の任務は、敵ＩＳを倒す事だけでしたから…俺の命に関わる事だけだったから…」

『織斑君……』

「怖いけど、逃げられない…一度言った事は曲げられない。元より…」

千夏の守りたい者……全てを守る！そう決めたから！

「守りますよ。全部…必ず！」

『……はい！微力ながら全力で織斑君をサポートします！』

山田先生は大きな声で答える。俺はその声に押されるようにアナトリアのカタパルトへと脚部固定する。

「山田先生、任務の続きを」

『分かりました！』

俺は気を取り直して山田先生の説明を聞いた。

『アシュートミニアの単体の戦闘能力ではアマジーグ及ばないものと考えられますが、ペスカーラには敵の友軍が確認されています。注意してください』

「了解」

『以上、作戦の確認を終了します……慎重に行動してくださいね？』

「了解！」

俺は海の向こうに見える町、ペスカーラを奪還する為、カタパルトから飛び立つ、その後ろには自分達の祖国を取り戻す為、イタリアノーマル部隊が俺の後についてくる。

（次は必ず倒して見せる……！）

俺は前の戦いでジョシュアに助けられてからテロリスト打倒へ燃える。千夏に負ける所なんて見せられない！

「絶対に勝つ！」

俺はそう意気込み、白式を高機動モードへと変える…

こうして都市部ペスカーラ上陸作戦が開始された……

アルバアドリアティーカ上空……

「千夏、都市部の状況は？」

『都市部の被害はほとんどないけどこれから起こす戦闘で被害が出るかもしれないそれに敵には多数の敵特殊飛行ノーマルが配備されているし、長距離レーザー砲が配備されている……奴らこっち町に被害出したくない事をかんずいてるな…』

「なに…町には被害を出さないさ。奴らだけを駆逐する」

『無茶を言うな。歩兵だけでも二百いるぞ？』

「関係ないさ。千夏に仇なす輩は全部消すさ…」

『っ一一一一一一一…あたしの事はいい。降伏する敵には手を出すなよ…』

「それは残念だ」

今ここはアルバアドリアティーカの海面上空当たりである。
そこでは千夏とジョシュアが都市部の状況を確認していた。

『……二夏、これは訓練じゃない。それになんで二夏がここにいるんだ？説明してくれ…』

「俺はただ千夏を一一一一」

『そうじゃない！』

千夏は怒鳴る。その声は若干苛立ちが見えた。

『この世界…ＩＳの世界は狂ってる……あの無人ＩＳも、ラウラのあのＩＳに積まれていたシステムも……そして福音…なんでこうもイレギュラーが多いんだ…二夏……』

「……それは前にも話したはずだ」

『だからって…これは多すぎる！』

千夏は悲痛に言う、千夏は国やこれから事……そして一夏について心身ともに疲弊していた。

「なら、俺に付いてくればいい…そうすれば、奴らはこれから原作通りの道を歩める事を約束出来るぞ？」

『それは……』

「フッ、まあいい……まだ時間はある。この国を取り戻した時にでも考えとけ、いいな？」

二夏は千夏に言い聞かせる様に千夏に言いかける。
その顔は千夏にしか見せない微笑みの顔だった。

『……わかっ…た』

「……作戦を開始する」

そう言って二夏は上空から急降下して戦場に飛び込む、その姿…まさに白い閃光、

「サポート頼むぜ。千夏」

『了解…敵はＩＳを所持してるから気を付ける様に……』

「千夏の心遣い感謝する」

言い忘れただけなんだけどなと付け加え二夏のサポートを開始する千夏、

こうして、同時都市部奪還作戦が開始された……

ここはペスカーラのビルが並ぶ一角に、ビルの屋上に待機するＩＳがいた。

「テキ…キタ……」

そのＩＳは、足が完全な戦車タイプの重装甲ＩＳだった。方にはグレネード砲を搭載しており、火力があるのが伺える。

「アテル…」

そのＩＳに乗る者はそう言って武装を展開する。
それと同時に彼を支援するノーマル部隊が海の方へと進軍する。

「ファーティマノ……ゴカゴヲ……」

そう言った後ビルから飛び降りた。一夏が今回戦う相手も苦戦は強いられる相手だった。

『ノーマル部隊、浜辺への展開、完了しました！』

「ゴクロウ……」

友軍の兵士から報告が来てそれに応えるＩＳ操縦者、自らも海へと進軍する。

「……カタキ…ウツ…アマジーグ……」

友の名を呼ぶＩＳ乗りは静かに進軍していった……

遅れたがアナトリア内部にて廊下あたりのロッカーに五反田兄弟がオルクインによって発見された。
二人はオルクインに見つけて貰った事を心から喜んだと言う。

「姉さーん！」

「オルクインさ～ん！」

「あ～うん、悪かった…なんでここまで見つかったのか知りたいがとにかく悪かった」

「姉さ”あ”あ”あ”あ”ぁ”ん”！」

「オルクインさ”あ”あ”あ”あ”あ”ん”！」

「あ～泣くな泣くな…な？（こ、こえぇ～……）」

二人の面倒に悪戦苦闘するオールドクイーンだった。

第六十六話「都市部同時奪還作戦」（後書き）

千夏「この回ってブリーフィング見たいだな」
一夏「ジョシュアの野郎ジョシュアの野郎ジョシュアの野郎ジョシュアの野郎ジョシュアの野郎ジョシュアの野郎ジョシュアの野郎……」
千夏「こえぇよ！？どうした！？」
真耶「あ、あはははは…そうとうガッティーノさんをジョシュアさんに取られた事が悔しいようですね」
一夏「チキショー！！！！！」

ここに来て行き成り番外編！（前書き）

ヤベ、性格が違うかも……

ここに来て行き成り番外編！

「一夏～起きなさいよ～」

翌日鼻っ柱を叩く感触で目が覚めた。
やめろ、俺の腹時計によると今は7時05分のはず
学園の飯の用意が6時半から、開始が7時半
そんな時間に起こすとは何事だ。
無視してヒュノプスの導きに任せて夢の世界にレッツゴーする。

「聞こえないの～？」

今度は鼻の穴を引っ張り出した。馬鹿めその程度、中学の旅行で弾にやられたわ
無視してより深い導きに25分だけ身を任せる。

「鈴、そういうときは……ごにょごにょ」

誰かは知らんが説得してくれたらしい、安心して僅かなまどろみ時間を再開する。
この時間の至福は邪魔させん。

カチャカチャ……

カチャカチャと音が下からした！！
ヘイゴッド冷静に状況を把握しようぜ。
朝、下　、金属音　＝　ベルト
なにさらしとるんじゃあ！
確実に犯人を把握し今後近寄らないようにしなくては

決意も新たに目を覚ました俺の前にいたのは俺の幼馴染こと鈴と千夏だった。
なんということだ。いきなり好きな女に逆セクハラとは
バッチコーイ、
バキッ！
「いってぇ！？」
「今千夏で変な事考えてたでしょ？」
ゴゴゴッ…と黒きオーラを纏って千夏を守る様に抱きついている。
己鈴…俺じゃあ平気で出来無い事をする。変われ、今すぐ変われ、
そして千夏、そんな可愛く首をかしげないでくれ。可愛いいじゃないか……
「ほれ、一夏も早く起きろ。食堂が一夏の披露場になっちまうぞ？」
「もうそんなにジロジロ見られるほどでもないと思うけど？」
確かにもうウーパールーパーの気分はゴメンだ、さっさと起きよう。
「どっこらせっと……」
「もう早く起きなさーーーーーーー！！？？」
「ん？どうした。り…ん…」
「あ？どうした鈴、そんな顔を赤くして……」

鈴は何故か口をパクパクさせて俺を見る。正確には俺の下を見ていた。
千夏も目を見開いて俺の下を見る。
なんだ?どうした?まさかこの年でおねしょしちまったか……?

「い――――――」

「ん?」

「いやあああああああああああああぁっ!!!!!」

バキィッ!!!!

「コースクリュウゥ!?」

腰と回転の入ったパンチで俺はベットの反対側へと殴り飛ばされる。
何故に?何故俺は鈴に吹っ飛ばされる?てか!

「何しやがる鈴!!!」

「黙れ!変態!痴漢!女の敵!千夏に近づくな!汚れる!」

ヒデェ……なんで俺がそこまで……

「あ~えっと…一夏、大丈夫?」

あ~俺の女神だけは見捨てなかった…お前だけだよ千夏…俺を癒してくれるのは……

今なら即効でお助け　女神事務所からの電話も切って見せるね。

「その……」

顔を赤くして頭をポリポリかきながら言いにくそうにして千夏は俺から視線をそらす、
何？俺何かした？朝から何かやらかしちまったか！？
そう思ってると鈴に思いっきり抱きつかれている千夏が意を決したように俺へと視線を戻した。
な、なんだ？何か俺に言うのか？まさか鈴がいるのに告白！？

「良い物をおもちで……」

「へ？」

俺は分からず素っ頓狂な声を上げる。
言った後に顔をそらしてハアッと溜息を吐いていた。
いったい何がいいものなんだ？
そう言えば千夏達は俺の下を見てたな……ん？下？

「俺の下に何…か…」

おｋわかった。状況把握…完全に俺の失態
千夏が言いにくそうにしてたのはこれのせいか、

「自重してくれよ。俺の息子……」

そう言った瞬間、竜砲の砲音が俺の部屋で鳴り響いたのは言うまでも無い。

「ほんっとデリカシー無いんだからこの男は！」

「勝手に部屋入ってる奴に言われたくない！」

「えっと…ゴメン」

「ああ、いや！千夏に言った訳じゃないんだ！千夏なら何時でもどこでも二十四時間回転中だ！」

「呼ぶ客を選ぶな！」

そんな会話をしながら廊下を歩いて鈴と千夏と一緒に食堂へ行くスケさんカクさん御一行、
俺はさっきの事を思い出して千夏に謝る。

「えっと、千夏…さっきは……その…」

「い、いいって…気にしてないから」

それは俺が男として扱われてないと？

「千夏行こう？こんな変態相手にすると食欲失せるよ？」

「いい加減勘弁してくれ！」

反省してるっちゅうのに！
コイツは俺で遊びたいのか？そうなのか！？

白い悪魔も引く魔神だぜ……

「また失礼な事を考えてない？」

「そんな事は無いぞ？」

「一夏、顔に書いてるぞ」

俺は喋る事に顔に出てるのか？それを利用して千夏に想いが伝わらないのか俺の顔……

と、言ってる間に食堂に着く、

「着いた見たいだな。行こうぜ？」

「千夏は何頼むの？」

「無論おばさんに自前に注文しといたＡＨマフィンとハッシュドポテトＰＰサイズ」

「でけぇよ！？」

てかなんだＡＨって何！？アー○ズフ○ート級か！？

鈴はそれ聞いて祖も当然か言う様に注文に行く。

なんだ？俺がおかしいのか？俺が可笑しいのか！？

「ほら一夏、ボ～としてないでさっさと行くぞ」

俺は千夏に引きずられ、セシリア達と一緒の席で千夏が注文してくれたサバ定食を食す、

あ、このサバ美味い……

視点・「篠ノ之箒」

朝のホームルームが終わり、授業を終えて私は今皆で食事を取っている。
あの事件があったと言うのに千夏は私と普段通りに接してくれて感謝しているのだが……

「……」

何でアンタがここにいんのよと言う目でこちらを睨む鈴に私の精神は擦り減らされていた。
困ってはいるが自分がしてしまった罪で睨まれているのだ、甘んじて受けよう。

「こおら」

「フガフガ」

千夏が行き成り鈴の鼻をつまんでいた。

「あんまり箒を睨むな」

「でも……」

「過ぎた事をいちいち根に持ってたら駄目だっつうの」

「う～……」

そう千夏に言われた鈴はとりあえず睨むの止めて私に殺気だけを飛ばす様にした。

いや、それも止めて欲しい所なんだが……

「止めろって」

ポコッ

「あうぅ……」

「殺気も禁止覇気も禁止あとオーラも禁止だ」

「ううぅ……！」

千夏に怒られた鈴は少し拗ねたようにして食事を再開する。

それを見てヤレヤレと首を振って私に視線を注ぐ千夏に私は内心ビクりと震える。

「わりいな。悪気はないんだが……」

「い、いやいいんだ…自分がしでかした事だ…」

「気にする事じゃねえってどこかで間違えただけだしさ」

「そう…なのだろうか…」

私は心の内で聞こえたあの声に従ってしまって千夏を……

「こおら」

「！、ふ、ふが！？」

千夏は行き成り私の鼻をつまんだ。な、何をする！？

「あんまり思い悩むな。潰れちまうぞ？」

「だが……」

「そうだぜ箒」

千夏の言葉に賛同するように一夏が私に言う。

「どこかで間違えた。それは人間によく…いや今回よくあったらたまったもんじゃないが……」

「フォローしてんの？」

「してるって…それで千夏も許してるんだ。間違いを次に生かせばいいだけさ箒」

「一夏……」

私は一夏を見る。一夏は千夏と関わってからほんとに変わった。
それも一人の男として、

「まあこの話は終わりだ。一夏、頼んだもん作っといたぞ」

「待ってましたあああああぁっ！！！！」

「な、何！？」

「きゃあ！？」

「な、何事だ嫁よ！？」

「行き成り叫ぶな！」

訂正、私の目は曇っていたようだ……
シャルは驚き体をビクンとさせ、セシリアは一夏の声に驚き自作のサンドイッチを落としそうになり、
ラウラは何事かとナイフを手にかけて臨戦態勢に入り、そして鈴は…一夏の頭をはたいていた。

「そ、そんなに喜ぶ事？」

千夏が顔を引くつかせて包みに入った弁当を一夏に差し出す様に固まっていた。
まあ一夏の喜び様は分かる気がする。それは何故か？

「このＩＳ学園に在住して早半年……」

「い、一夏？」

「いままでで一度も……」

「い、一度も？」

「千夏の弁当を食った事が無い！！」

……確かに、一夏が千夏の弁当を食べた事が無い。
と言うか何故今まで食べなかったんだ？
ああ、そうか…怪我してたんだったな……

「そ、そうか…そうだった様な…？」

「千夏、食べていいか？」

一夏は真剣な表情で千夏の顔がくっつきそうなほどに詰め寄る。
それを見た鈴達は……

「そんなに待ち望んでたんだ……」

「わたくしが作った時は普通でしたのに……」

「何故千夏のはそこまで喜ばれる……！」

「あ、あたしも良い？千夏姉」

何をいまさら……そしてちゃっかりおこぼれにあり付く鈴、

一夏がここまで執着するとはな……

「あ、ああいいぞ。鈴はあたしのと一夏ので分けてやるよ」

「ほんと？やた♪」

「あ！俺の弁当だぞ！」

「ケチくさいわねぇ！ケチくさい男は女に嫌われるわよ？」

「ぐっ！？」

そう言われ何も言えなくなる一夏、その本人の前じゃ言い訳も出来ないようだな……

「鈴？そう言わないの」

「え～……」

「いいから、ほらタッパに分けるから貸して」

「は～い」

そう言ってタッパの蓋を千夏に渡して千夏の手料理をわくわくしながら待っている鈴と少し納得のいかない一夏がそれを見て口を尖らせていた。お前は子供か……

「ほれ出来たぞ」

「頂きま～す！」

「ちょっと待て！俺が先だろ！？」

「女尊男非」

「ここにそれを持ち込んでんじゃねえ！」

「一夏、ちゃんと待たないとお預けだぞ？」

「ぐうぅ……わかった…」

立ちあがりかけた一夏は姿勢をただして千夏に手渡せれた弁当を受け取る。

「ついにこの日が来た…やっと食べられる！」

「そこまで言うか……」

少し呆れてしまうぞ…一夏、

「ほい」

「ん？」

「だからほい」

行き成り私の目の前にサイコロステーキを差し出す千夏、な、なんだ？

「箒の分」

「え？」

「本業に味見の採点をってね」

千夏は私に笑いかけながら自分が作った料理を私に渡してくる。

「いや、だが……」

「自分の分は大丈夫だ。あたしの弁当はここにある」

そう言ってドスンと千夏の目の前に五重箱が置かれた。

「「「「「多いよ！！？？」」」」」

「あたしの胃袋は、ビックバン！」

「ブラックホール超えちゃってるよ！？」

「どれだけ食べれるんですの！？」

「あり得ないぞ！？」

「どうなってんだ千夏の胃袋は！？」

「す、凄いな…千夏は」

「おうよ。だから箒も気にせず食べてくれ」

そう言ってニカっと私に笑いかけてくれた千夏に、私はほんとに大

変な事をしたと言う気持ちでいっぱいだった。

「ほらほら冷めちまうぜ？さっさと食べてくれ」

「あ、ああ！頂こう」

千夏にせかされ、私は千夏の料理を口に運ぶ、

「ーーーーー！、これは……」

「速攻で分かったか、で？」

「ソースに使ってるのは…リンゴだな？」

「正解だ。さすがだなシェフ」

「褒めても何も出ないぞ？」

「それは残念」

私と千夏は笑いあい、私も千夏に自分の弁当を振る舞った。私はまたこう言う仲に戻れた事をほんとに嬉しかった。もう傷つけない…裏切らない。千夏の為に今この力を注ごう…私はそう決意した。

ここは千夏の部屋でもあり一夏の部屋でもある。
あの事件で箒が一夏との同部屋が分かれ、箒は千夏の一人部屋に移った。そして今繰り広げられているのは……

「おらおらー！ここはあたしと千夏の独壇場よ！」

「ぎゃー！タップ！タップ！」

「何人の部屋プロレスやってんの……」

鈴が一夏にコブラツイストをしている光景を呆れてはいるが微笑ましく見る千夏がそこにいた。

「鈴、折れない程度にしろよ」

「大丈夫！断絶だけで済ますから！」

「そっちが重傷だろ！？」

「うっさい！」

「ちょ！止め――――あ”っーーーーーーーー！！！！」

「ほんとに仲がいいなお前ら」

幼馴染同士のじゃれあいを見つめつつコスタリカコーヒーを飲む千

夏、

「ん～美味い！やっぱりコーヒーはコスタリカコーヒーに限る」

そう言ってグビッと飲み、千夏は福音事件でちょろまかしたＧＡ社のデータを見ていた。

（このガトリングはヴァオーが欲しがりそうだな……あ、この高性能ミサイルも……）

「ち、千夏！助けーーーーー」

「言わせるか！」

「ぎゃーーーーーーー！！！」

（そういや…福音のデータもあったけど…）

千夏は福音のデータも言えば貰えたはずだったが、

（ブルっ…止めよう…あれは作ったちゃいけない物だ……）

千夏は福音に殺されかけた事を思い出し、身を震わせる。

（福音の操縦者もあの装備を見て涙流してたしな～）

あんな変態装備をウチの子に！っと言って千冬に泣きながら愚痴っていたナターシャ・ファイルス、

（ま！こんだけありゃ旅団の装備も充実するだろ）

そう思いまたコーヒーを口にする千夏、その顔は微笑んでいた。

「ま、マジ助けーーーーーー」

「フィニッシュ！」

「いぃぎゃあああああああああっ！！？？」

「あーもううるせえなぁ……」

ゆっくりコーヒー飲めないだろと怒る千夏、
その後、一夏は二人がかりで大技繰り出され、倒れ伏したと言う…
…合唱！

ここに来て行き成り番外編！（後書き）

箒「千夏！お前を守らせてくれ！」

千夏「え？あ、えええぇ！？（こ、これは一夏と同じ……まさかレズに！？）」

作者「普通に守りたいだけでは？」

番外編？！……だ！（前書き）

千夏「くだらねぇ……」
一夏「前書きでそれか！？」
千夏「シリアス抜いて見たはいいがこれって……」
一夏「そう言うな。書かないよりましだ」

作者「二人の評価が痛い……」

番外編？！……だ！

今日は第三アリーナで専用機組によるバトルロワイヤル……では無く何故かあたしと一夏対箒、鈴、セシリアとラウラにシャルと言う模擬戦が行われていた。何これ？なんてイジメ？

「当たりなさい！」

「無茶言うな！」

鈴は一夏を必要以上に狙い……

「そこ！」

「うお！？」

「当たってください！」

「無理！」

「私が停止させる！」

「捕まるか！」

「切る！」

「守るって言ってませんでした！？」

何故かあたしは怒涛の追い込みをかけられていた。箒は少し抑え目

だがな……

「なんで？なんであたしが四人に狙われる！？」

「訓練ですわ」

「リンチだろ！？」

「違うよ。千夏ならこのくらいどうって事無いと思ってるから」

「過大評価し過ぎだ！」

「問題は無いだろ？」

「大ありだ！」

「すまん千夏…私は止めたんだが……」

うん、分かってる。箒がそんな子じゃない事ぐらいわかってる……
だけどさ、

「思いっきり直撃コース狙ってない？」

「……気のせいだ」

うおおおい！？今の沈黙はなんだ！？
そう言ってる間にもあたしは壁際まで追い込まれた。

「行き成りピンチ！？」

あたしが壁際で驚いているとセシリア達の声が聞こえる。

「ブルーティアーズ！」

「盾殺し《シールド・ピアース》！」

「次弾装填！」

「雨月……」

箒も撃つ気満々って……

「箒！？なんで！？」

「す、すまない…後ろの三人が…な」

おk、なるほどつまりは福音事件の事で少～し言いくるめられたのね……

恐ろしい子達！！あ、ヤバ来る！？

チュドーンッ……

四人からの集中攻撃があたしに降り注いだ。

「当たりまして！？」

「だと思う」

「だが相手は千夏だ。それにただのＩＳでも無いから案外平気かもな」

「ああ…千夏…」

箒一人は申し訳なさそうだった…だがあたしは……

「ふぅー…間にあった」

「へ？」

「なんと……」

「！、ここにいるって事は…鈴が……」

「無事か……」

セシリア達は少し驚いていたが、予想はしていたらしい。
土煙が晴れてあたしが目を開けるとそこには、

「鈴がかなり粘ったから遅れちまった。平気か？千夏」

「い、一夏？」

一夏はあたしを抱きかかえていた。何これ？デジャビュを感じるぞ。
あたしが混乱していると一夏はあたしを下ろしてセシリア達に向いて問う。

「なあ、なんでこんな模擬戦になったんだ？てかなんで俺達だけで相手する事に？」

「そ、それは……」

「一夏が千夏ばっかりに……」

「構っているからだ！」

「私は止めたんだぞ？一夏…」

約一名は弁解する。あ、シールド削られた鈴を見に行かないと……

「一夏、あたしは鈴のところに行くから、その……」

「わかった。後は任せろセシリア達と少し”お話”したら俺も行く」

「わかった」

あたしは一夏にセシリア達を任せて鈴の所へ飛んでいく。

一夏があたしを見送った後、セシリア達に向き直り、

「さて、お前ら…」

「な、なんですの？」

「少し、冷やそうか？」

そう一夏の声が聞こえた直後、あたしの後ろでアサルトアーマーが機動した様な音が聞こえた様な気がしたが、とりあえず鈴が心配なのでスルーした。

「鈴、大事ないか～？」

「あー！もうなんなのよ一夏のあの機動は！ぜんぜん追いつかないわよ！」

そりゃあーたＩＳの理論をぶっ飛んだ設計だもん。赤い彗星も真っ青な性能だし

「て、千夏姉セシリア達は？」

「……聞くな」

「……うん」

あたし達は向こうで緑色の地獄絵図を遠い目で見ながらボーとしていた。

アーとかごめんなさ～……とか聞こえていた事は知らない。

ここは教室、あたし達が朝の模擬戦を終えて教室に来た時に模擬戦をしていたセシリアとシャルとラウラと箒はと言うと

ぐてぇー……

「うわぁ……」

「なんじゃこりゃ……」

「少し冷やし過ぎたか……」

一組に遊びに来ている鈴とあたしは上手な緑焼きになっている四人を見て引きつった。

「一夏、気のせいだと思うんだが四人とも妙に緑色に変色してないか？」

と言うか箒は完全に緑だ。ツインテールにしたら有名な歌姫に成りかねない。

「大丈夫だ。毒性は無いしそれに直ぐに戻るだろ？」

「だろって……もう四人とも別人になりかけているんだが……」

「あたしもあれを食らってたら完全にアレよね……」

うん、ちっちゃい歌姫に成っていた事だろう。

それはそうと……

「なんであたし二人で鈴達を相手にしてたんだっけ？」

「そういやそうだよな……なんでだ？」

「え？え～とぉ……」

鈴が言い淀む、んぅ～？言えない事か？

「どうしたんだ？鈴」

「言いずらい事なのか？」

「……千夏姉が」

あたしが…なんだって？

鈴は手をモジモジさせながらもこちらチラチラと見る。

何この可愛い生き物…食べたくなるんですけど、

「構ってくれないから……」

「はい？」

「だ、だから…千夏姉がこの頃構ってくれないからで…あんな、意地悪…を」

いやあれはもうリンチだからな？

なるほどそう言う事か……カッ！

「鈴ー！」

「へ？わきゃぁ！？」

あたしは鈴に思いっきり抱きついて頭を撫で回しては自分の体に密着させる。

「おーよしよしわるかったなー鈴、次の休みには二人でどこか出かけよう！」

「ほんと？」

「おう、新しい洋服も買いにでもいくか？」

「行く！」

よしよし愛い奴め、そう思いながらさらに頭を撫で回すあたしだった。

「ーーーーーーーあれ？次の日曜って俺と出かけるんじゃ？」

一夏の約束を忘れてしまってもいたあたしだった。

視点・「セシリア・オルコット」

クッ、油断しましたわ！
まさか一夏さんがあの様な全方位攻撃を備えているとは！
それ直撃してしまったわたくしの髪はブロンドから明るいグリーンに変わり果ててしまって……

（こ、これはちゃんと戻るんでしょうか！？）

わたくしは机に頭を垂らして髪を撫でる。髪は見事にグリーン一触、
母から頂いた美しい髪は何処へやら、
それに何故かはわかりませんが妙にゴワゴワして……

（こ、これでは落ち着きませんわ！）

じ、授業をする時はどうすれば……
わたくしはこうなった元凶を睨む、

キッ！

ビクッ！

「んあ？どうした一夏？体をビクつかせて」

「い、いや…なんでも」

千夏さんは鈴さんを胸の中へ押し込む様に撫でながら一夏さんに声をかけている。

というか、臨海学校から帰ってからまた大きくなってません？

（クッ！やはり殿方は大きい方がいいんですの！？）

わたくしだって千夏さんほどでは無いですが大きい方ですわよ！？

「はぁ…どうして一夏さんは千夏さんを……」

こう言ってはなんですが、千夏さんを最初に見た時はどこかお堅い感じの女性でしたのに、

いざいざ話してみると……何と言うか男の人が好きそうな事をいろいろとしていた人でしたわね……

（まさか元は男だったり……）

まさかそんなことありえませんわね……何せＩＳは－－－－－－－

「女性しか動かせない…いえ一夏さんは例外でしたわね」

となると、千夏さんは……

（……男の娘？）

いやいや、そんな事あり得ませんは……
大浴場で千夏さんを見た時はその……つ、ついてませんでしたし……

「その代わり胸は歳を考えてい無い様な大きさでしたが……」

神様…あなたは本当に不平等な事します……

「チェルシーに頼んで何かいい案があるか聞いてみましょうか……」

わたくしは本国へ帰るついでに幼馴染のメイドへ聞いて見る事にした。

「人は！平等ではない・・・！！」

「ちょ！？にっくんどうしたの？巻き毛皇帝の言葉なんか吹いて…

…」

「いや、なんか言いたくなっただけだ」

そんな事を言いながら邪神こと織神二夏は束と何故か手を繋いでイタリアを歩いていた。

「そっか～あ！あそこに美味しそうなジェラートが！」

「お、おい引っ張るな！」

二夏は束に引っ張られながらフィレンツェで店を開いているジェラート店へと足を運ぶ、
そして二人はジェラートを頼んだ。

「美味し～！」

「三段重ねって…腹を壊すぞ？」

「だいじょーブイッ！そうなったらにっくんが束さんをお姫様抱っこで……きゃ？」

やらんぞ？とニ夏は言うが束はジェラートに夢中なのか聞いていない。

（はぁ…計画の為の偵察なのになんでイタリアの観光をしてるんだ？俺は……）

溜息を吐きながらもまんざらでもない二夏は今は束とイタリアのを楽しんでも良いかと思っていた。

「さて今度は何処へ行く？」

「他も行っていいの！？」

束が何故か驚いて目をキラキラさせている事に二夏は分からなかったが喜んでいるようなので後回しにする。

「あ、ああ良いぞ？何処へ行きたい」

「え、えっとねぇえっとねぇ……」

束は口に手を当てて考える。その仕草に可愛いと思ったのは二夏だけの秘密である。

（ーーーーーーコイツが俺の本性しったらどうなるかねぇ……）

嫌いにはなるだろうなぁと考える二夏、だがもう関わってしまった以上後戻りは出来ない。

（最初は部下のせいにして誤魔化したが……いやはや…人ってのはどうして…）

こうまで面白いのか、と思う、

「おい束、早く決めないと帰っちまうぞ？」

「えぇ！？待って待って！す、直ぐに考えるから！！」

そう言ってう～んと唸る束に俺は苦笑いしながらフィレンツェの町

を束と歩く。

「じ、じゃあ！真実の口って物を見たい！」

「はいはい、了解」

束は行き先を二夏に言って手を繋いで歩く、彼らの旅行は続く。イタリアが戦場に成るまで……

ヒデェ　オマケ「インフィニット・ストラトス　リターンズ！」

「今日は自分の名前を反対から呼んで見よう！」

「偉くテンション高いな？」

「まあな。ではあたしから行くぞ！……かち！」

「かち…かち…価値？」

「あたしは価値ある女だ！」

「意味わかんねえよ！」

「次は鈴な」

「へ！？えっと～……鈴音だから…んいんり？」

「んーなんか響きがウィンリィに似てるな」

「聞き間違いじゃね？」

「次は箒！」

「う、うむ……きうほ？」

「あんまり面白くねえな……」

「う、うるさい！」

「次は……セシリア！」

「わたくしですか！？、えっと……ありしせ…」

「アリシア！？」

「最後はアじゃないだろ？」

「惜しいねぇ！」

「次！シャル！」

「う、うん……るやし？」

「もやし？」

「違うよ！？」

「次行こう！次！」

「では私だな」

「スルーで」

「何故だ！？」

「だって下から読んでもラウラじゃん」

「……確かに」

「とりあえず膝をついているラウラは後で励ますとして……次は…一夏！」

「よし、俺は……かちい、か？」

「家畜？」

「断じて違う！」

「一夏さんが家畜……良い」

「「「「セシリア！？」」」」

「とりあえずあんま面白いとこは無かったな……」

「だな。次に期待しよう」

「イボンコペッタンコは出来なんだ……」

「それやりたかっただけなんだな」

オワレ

番外編？！……だ！（後書き）

千夏「一夏が白い悪魔に！？」
一夏「あははははっ何言ってるんだ？千夏、俺は元から白いぜ？」
千夏「確かに」
一夏「それに俺は剣士だぜ？接近専門だ」
千夏「二次移行してからは雪片にすら遠距離攻撃機能が付いちまったけどな」
一夏「……確かに」

作者「もう普通にオールラウンドタイプですねぇ。一夏さんは……」

第六十七話「戦場の現実」（前書き）

一夏「とうとう来たか……」
千夏「だな……」
二夏「てか最新おそ！」

作者「だって…真夏ちゃんを書くのが楽しいんだもん！」
真夏「そう言うてくれはるんわは嬉しいんやけどこっちの最新を待ってる人の事も考えなアカンよ？」

第六十七話「戦場の現実」

「都市部まで二百！高機動モード解除！……アナトリア１エンゲージ！」

（り、了解！ご武運を！）

都市部ペスカーラへ単独で向かい港に展開している敵部隊、敵ノーマル部隊の殲滅に取りかかった。

「切り開く！」

俺は雪片を展開し敵を三体同時に切り裂く、敵はバチリと火花を散らした後に爆散した。

「先生！味方の上陸時間は？」

（や、約三分です！）

『三分、か…三分で港の敵を出来る限り…いや、全滅させる！』

「敵をすべて撃波します！」

（な！？む、無茶です！歩兵だけでも百は一一一一一！）

「構いません！先生、敵情報の位置を！」

（わ、分かりました……）

山田先生はそう言って白式に敵位置のデータを転送した。
俺はそれを見て撃波する敵を選び、最短距離で殲滅する。

「行くぞ！白式！！」

俺はブースターを吹かして都市部中央の敵へ突撃する。
そしてすれ違いざまに敵を切り裂き、敵ノーマルを殲滅して行った。
残り時間後二分三十六秒でケリを付け、敵の親玉であるＩＳを倒す！！！

（前の戦いではアイツに助けられちまったが、今度はもう！）

「遅れはしない！」

ザンッ！

また俺は目の前にいるノーマルの腹部を雪片で刺し貫く、
敵はまたバチバチと音を立てて崩れた。俺はそれ見てまた次の敵へと向かう。

「次！……ーーーーーーーーーー！？」

俺はゾクッと背中に走る違和感を覚え、その場で急速上昇する。

ドオオオォンッ！！！

その刹那、俺のいた場所は大爆発を起こして地面とビルを抉った。

「なんだ!?」

（この爆発は……!、敵ＩＳです!）

「来たか!!」

俺は待ってましたと言わんばかりに雪羅を充電する。

（相手は実弾オンリーです。粒子シールドで防ぎながら戦ってください）

「了解!」

俺は撃ってきた方向へと飛び相手を見つける。
すると相手もこちらの接近に気付いたのか、タンク型だってのに近づいてきやがった。

『至近距離で戦うつもりか?』

俺はそう考えていると相手は背中に装備されている大砲を展開、俺へと照準を合わせる。

「大振りな攻撃が当たるか!」

俺は狙いを定め、撃ってきた相手の砲撃を避けて接近戦を挑み実体剣の雪片で相手を切った。だが……

ガキイイイィンッ!!

「んなっ！？」

弾かれた！？俺の放った斬撃は弾かれ多少の傷を付けるだけに終わった。

すると相手は左手の手甲に装備された小型グレネード砲を至近距離にいる俺へ向けた。

（織斑君避けて！！）

「マズッ！！」

だが時すでに遅し、俺は放たれた砲弾と共に吹き飛ばされ、地面を削りながら滑って行った。

「ぐあああああああっ！！！！」

（織斑君！？）

（――――――――マタ、アテル……）

！？、敵ＩＳに乗っている奴の声か！！

「やろう……」

（織斑君！！大丈夫ですか！？）

「何とか…平気です」

くそう…油断した、まさか雪片を弾くなんて……

『粒子ブレードでヤルしか無い……！』

俺は雪片の零落白夜、粒子斬撃に切り替えを準備した。

「今度こそ……切る！」

俺は雪片を頭上に上げて突撃する。対する相手もイグニッションブーストらしき物を使ってこちらに行きよいよく突っ込んできた。

「うおおおおおおっ！！」

そして両者は衝突した……

「！？、……何？今の感覚……」

「うん？どうした？」

「……いや、何でもない」

「そうか」

千夏とジョシュアはすでに都市部を制圧し、敵ＩＳ「クリティーク」を撃波した所だった。
ジョシュアが来た事で待機していたノーマル部隊とイタリア歩兵大隊が海から上陸し、都市部を奪還していく。

「な…ぜ…」

「んあ？」

「何故だ…ジョシュア…話が「ドンッ！」グ…ガ…」

ボンッと大きい音を立ててＩＳコアに銃弾を撃ち込んだジョシュア、音を聞いて慌てて振り向いた千夏が何事かと聞く、

「な、なんだ？どうした！？」

「いや…まだ動けてた様でな、反撃をしようとしてたから仕方なく…な」

「そ、そうか…無事ならいい」

「お？心配してくれたのか？」

「違うわ！」

はいはいとジョシュアが言ってモニター越しにギャーギャー喚く千夏を涼しい顔で見るジョシュア、

「さて…アイツはもう終わったかな？」

「アイツ？……ああ一夏、まだ交戦中だそろそろ本部から援軍要請がジョシュアに来ると思うぞ？」

「やれやれ、お子様の面倒を見るのも一苦労だな……」

「一夏はお子様じゃあないぞ？アイツだってやる時はーーーーーー」

「何時もやる時はやって貰わないと困る」

「う……」

「何時までも仲良し子よしじゃあ……お前が死ぬ」

「そんな事……」

「あるから何時も怪我してんだろ？」

「……い、言い返せない」

千夏の悔しそうな顔を見てニヤッ笑うジョシュアに千夏はグヌヌと唸る。

「そう唸るな、可愛い顔が台無しだぜ？」

「喧しい！一夏の顔して恥ずかしい台詞を言うな！」

「アイツだってこの頃言ってそうだが？」

「ううぅ……！」

またも言い返せなかった千夏は唸る。それをはっはっはっはともっさんの如く笑うジョシュアだった。

「さて……言ってやりますか」

「……」

「……怒ったか？」

千夏は顔を逸らして目を細めながら不機嫌になる。

「別に……」

「そうかい……ま、仕方ねえか」

少しからかいすぎたか？と思うジョシュアだったがその時千夏が声を出す、

「……一夏」

「え？」

「一夏を……頼む」

少し顔を赤くしながらも眼だけは二夏であるジョシュアを見ていた。

「……了解、お姫様」

「頼む、後次からお姫様言ったらシバくからな」

「あいよ」

そう言って颯爽とペスカーラへと向かうジョシュア、その飛び取りはどこか嬉しそうだった。

ジョシュアの援護が一夏を援護する事になった同時刻、

「ハア……ハア……」

一夏は頭から血を流して息を荒くし、敵ＩＳ「アシュートミニア」を睨む、

『ちきしょう……何とかあの大口径の大砲を切り落としたがまだ腕のグレネードが残ってる……』

一夏はあの突撃で相手の肩に付いていた大砲を切断したが、右手のバズーカでダメージを負った。

「というか、バズーカ一発でシールド貫通って反側だろ……」

相手のアシュートミニアのＩＳは高威力と防御面に特化している。

一夏は高機動でのかく乱をやり続けたが、遠距離からの攻撃では雪羅や雪片のライフルモードでは大きいダメージを与えられなかった。

「さてどうするか……アサルトアーマーを使うか？、いや…あれは諸刃の剣だ不用意に使えない」

一夏はアサルトアーマーを使おうとしたが止めた。もし倒しきれなかった場合粒子シールドと一緒に通常シールドも使えなくなるからだ。

「……特攻でも掛けてみるか……」

一夏は即座に雪片の零落白夜に刃を地面に水平な状態で相手へと向ける。

「久しぶりに出すぜ……この技を！」

一夏の声に応える様に白式の変形スラスターの形が代わり飛行機の様に羽を伸ばす、

そしてスラスターにはエネルギーが溜まって行くように緑の粒子が集まって行く、

『足をバネにし……姿勢を低く……』

（お、織斑君何を！？）

一夏は真耶の声が聞こえたが今は集中している為後にし、ビキビキと右手の血管が浮き出てくる。
極限まで腕に力を貯め終えて真耶に言う。

「必殺技ですよ……行くぞぉ！！」

ドオォンッ！！！！

もの凄い音を立てて一夏がいた場所にクレーター出来あがり、一夏はすでに相手の距離の半分まで接近していた。

「打ちぬけえええええええええええっ！！！！」

一夏は叫ぶ、そして相手のアシュートミニアが攻撃しようとしたがすでに百メートルを切っていた。
そして……

「うおらぁっ！！！！」

ズンッ！！

アシュートミニアの機体が一瞬揺れて固まる。
そして次第にガタガタと震えだす。

「ファ……ファーティマ…」

そう言い残してカメラアイの光が消えて行き、やがてガクンと腕を垂らして停止した。

「……ハ、ハハハハ…勝った…」

一夏は雪片を引き抜いて相手から離れる。
その顔はやり遂げた顔をしていた。

「俺でも……倒せた！」

一夏は少し笑っていた。

「これで…この国を…千夏を……」

とその時、後ろからＩＳ程ではないが一夏に対して突っ込んでくる影が現れる。

「！？、クソ！」

一夏は振り向き様に雪片を相手向けて突く、

「はあっ！」

ザンッ！！

一夏に突っ込んできたのは味方のノーマル部隊が上陸し勝ち目が無いと悟って撤退していた敵ノーマルだった。一夏はノーマルの機体

から雪片を抜いた。そしてノーマルは崩れ倒れる。

「……ふう…危なかった」

『まったくですよ！！！』

「うお！？」

一夏は行き成り声が聞こえてビックリする。

『ホントに心配したんですからね先生は！なんですかアレは！？特攻じゃないですか！！』

「そういや山田先生がオペだったな……」

『な！？まさか忘れてたんですか！？』

「……そんな事無いですよ？」

『なんですかその間！？』

向こうのモニター内でワンワン言う真耶に少し憂鬱になる一夏だった。

「……はあ、結局上陸部隊の到着前に片付かなかった…」

『当たり前です！プロでも難しいのに織斑君に、ましてや初めて実戦でこれだけ出来れば上出来なんですよ！』

「褒めてるか怒ってるのか分からない……」

その後もギャーギャー言う一夏は首を鳴らして後は上陸部隊に任せようとしたが、

「ん？なんだ…こ……れ…」

『織斑君？』

一夏は雪片に付いていた何かに目を奪われた。

「……嘘…だろ？」

『織斑君、どうしたんですか？』

真耶が心配そうに一夏に問いかけるが一夏は聞いてはおらず、雪片に付いた赤いドロドロの液体から目を離せなかった。

「む、無人機じゃ…なかった…のかよ……」

一夏は慌てて自分が倒したノーマルを見て見ると……

「嘘だ……」

ノーマルからは刺されて漏れ出たオイルと一緒に、

「俺は…まさか……人を…」

『織斑君？どうしたんですか！？返事をしてください！！』

「俺は…俺は…」

一夏はブルブルと震えながら雪片を手から離して顔を覆う。

『織斑君しっかりしてください！……！、バイタルサインに異常が！』

真耶は一夏のバイタルサインで精神負荷を受けていると言う異常が表示された。

『織斑君！しっかりしてください！織斑君！！……一夏君！！！』

「俺は……！」

一夏は膝をついてその場で蹲り体はガタガタと震えていた。

「人を…殺しちまった……！」

顔を上げた一夏は声を上げて悲痛な叫びを上げた。

その後、上陸部隊が一夏を見つけた時には目を虚ろにしてただ座っている一夏が発見された……

「壊れたか……」

『一夏……』

救援に来たジョシュアと千夏が見た物は血だまりの中で叫ぶ一夏の姿だった。

「やはりあの男にはまだ早過ぎたか……エミールめ、トラウマ植えつけてどうする…」

『……』

「とりあえずはアイツが敵ＩＳを倒した事は良しとしよう。だがあれではもう戦場には出せねえな」

『返す…』

「あ？」

『一夏は……日本に帰らせる』

「アイツが認めればな」

『無理にでも帰らせる……元々これはあたしと国の問題だ……本当なら、一夏は前戦に出す前に帰らせた筈だったんだ……なのに』

千夏はモニター越しで頭を垂れる。その手は震えていた。

「……それは後にしよう…一夏と後の事後処理は上陸部隊に任して俺は帰還する」

『わかった……』

そう言って千夏は通信を切り、椅子に力無く腰掛ける。

「一夏……ゴメンな」

目を手で覆う千夏の頬には一筋の涙が光っていた……

第六十七話「戦場の現実」（後書き）

一夏は若くして戦場に赴き、そして一を……感想まってます。

第六十八話「戦争に陰謀は付き物？」（前書き）

マグリブファミリーは壊滅され、都市部ペスカーラの奪還は成功した。
あの男、世界で初めて男性ＩＳ操縦者として注目を浴びた男の戦場は兵士の闘気を上げ、次々と都市や町を奪還の手助けになった。
だがあの男を利用する事は今は出来ない、奴にとって初めて自分で敵を殺めてしまったのだから……
だが……それでも私は止まる訳にはいかない、国の為にこれからが大詰めなのだから……

エミール・ガッティーノ

第六十八話「戦争に陰謀は付き物？」

都市部ペスカーラを解放し、その町に軍部の設立と囚われていたイタリア市民の解放に成功したあたし達は一時一夏を回収してアナトリアに戻ったのだが、

「先生、一夏の容態は？」

「精神に異常をきたしてます。あの歳で人を殺めたのですから、無理はないかと……」

「そう…ですか……」

一夏が倒した敵ノーマルは無人ノーマルを操っていた大将の様だった。それなら恩賞を与えられて喜ぶべきなのだが……

『一夏が人殺して喜ぶ様な人じゃ無い…自分を責めてしまう……』

一夏を戦場に出すべきではなかった、あたしの失態だ……

「とりあえず、安静にすれば目を覚まします。出来るだけ刺激を与えない様にしてください、彼は心身共に疲弊してます」

「分かりました」

軍医が去ってあたしは目の前に眠る一夏に目を戻す、

「一夏……」

「……！……っ…」

一夏は顔を苦しそうに浮かべて医療室のベットに寝ている、
あの時の事を思い出しているのだろう。

「……」

あたしは無言で一夏の手を握る、そして優しく声をかけてあやすように名前を呼ぶ、

「一夏、平気だ…一夏のやった事は誰も責めないから、苦しまないでくれ…」

「！、……スゥ……」

そう問いかける内に一夏の呼吸は安定して行く、これで少しは楽になったろう、
あたしがそうやって手を握り続けると、医療室の扉が行きよいよく開けられ外から大声か聞こえた。

「おい！！一夏が倒れたって本当「フンッ！」ゴハァ！？」ドゴッ！

とりあえず騒音を止める為近くに置いてあったお見舞いの果物を投げる。

「ちょ！バカ兄貴！！病室では「ギロッ！」ヒッ……」

お騒がせ兄妹が来た事により一夏は一瞬顔を歪めた。
まったく…こいつらは……

「蘭…お前が静かにしないでどうする？」

「す、すすすみません……一夏さんが倒れたって聞いていても立ってもいられなくて…」

「す、すまん……俺も気が動転して…」

一夏を心配してくれるのはありがたいが病人に迷惑かけたらいかんだろ？

「……まあいい、上がってくれ、一夏は寝ているけど静かにな？」

「は、はい」

「邪魔する」

そう言って静かに扉を閉めてコソコソと一夏のベットに来る二人、いや、そこまでしなくても……

「一夏さん…大丈夫なんですか？」

「心身共に疲弊してる…それに、あの作戦で…」

「そうか……一夏、一線越えたんだな」

弾達も聞いたのか……

「……一夏は恩賞を受けるだけの事をした…だけど……」

「アイツの事だ…恩賞どころか謝罪するぞきっと…」

「だな……」

ほんと……優しい男だよ、一夏は……悲しすぎるくらい…

「じゃあ、あたしは報告とか事後処理とかあるから、後を頼めるか？」

「ああ、任せろ」

「任せてください」

「頼む」

あたしが席をはずそうとしたが、一夏があたしの手を握ったまま離さない。

「……どうしよう」

「もう少し握っててやれよ。俺から言っとくから」

「あー、うんわかった」

そう言ってあたしは席に座り直した。だが……

フニュ

「へ？」

「な！」

「ふぇ！？」

一夏が突然握っていない手であたしの太ももを掴み……

フニフニフニ…

一夏は撫でては揉みを繰り返して感触を確かめるように触る。

「ちょ、おま…止め！ひぅ！」

「こ、こいつ……」

「い、一夏さん…そんな」

な、なななー！？

「お、お前は…ーーーーーー！」

人が心配してやってんのに！てか精神に異常きたしてるんだよな！？
なんであたしの太ももこねくり回してんだ！！
あたしは腕を振り上げプルプルさせていると一夏が寝返って顔をにへらと緩む、
こ、この男は……！！

「うう～ん……」

「お？起きたか？」

「い、一夏さん…そんな事をしては！」

そして一夏は少し触った後に一言言った。

「最高…」

「死ね」

ドゲシッ！

「ゴフッ！！」

一夏に脳天直撃死神チョップを食らわせた。一夏はまた深い眠りについた。

「い、一夏さん！？」

「い、いいのか？」

「……もう行く」

そう言って席を外し、白眼を向いている一夏を放置した。

その光景を唖然とした後に弾と蘭は苦笑いして、

「起きた時が地獄だな、一夏……」

「自業自得な気がする……」

とりあえずあたしは一夏が平気そうなので放置する事にした。もう知らん、

視点・「織神二夏」ジョシュア・O・ブライエン

『おのれ変態一夏…羨ま、じゃなくて俺に変われやコラ』

俺は二人の騒動を盗み聞きしていた。べ、別に羨ましいとかでは無いぞ?ぜったい、

「たく、千夏は一夏にご執心だなおい……」

アイツ起きてもピンピンしてそうだな、まあ千夏の前ではやせ我慢してそうだが……

「さて……オルクイン」

「なんだ？趣味の悪い行事は終わったか？」

失礼な……これは千夏が変態《一夏》の魔の手から守ろうとしただけだぜ？

「人聞きの悪い事を言うな、ただ必要な事をしたまでだ」

「必要な事、ねえ……」

「まあいい、例の兵器……あのGは？」

「G言うな！ホントにそう見えちまうだろ！」

そんときはホイホイさんに頼めよ、もしくはコンバットさん、

「……あと残ってる試作兵器は自然保護区に設立してある秘密研究所だけだ」

「そうか……」

とりあえずはあの男の言うとおりに出来たが……

『アイツめ…母国に打撃を与えてどうするつもりだ？』

普通守ろうとするはずなんだが、ボケたか？

「まあいい、利用出来るなら利用するまでだ」

「ん？何がだ？」

「なんでもない」

第二ラウンドは何時でも始められる……一夏、

『早く再帰しないと、千夏を貰っちまうぜ？』

クックッと俺は笑い、その場を後にする、その姿を見たオールドクイーンは少し気味悪そうにしていたが

「あの男とは正反対だな、ホント……」

「あ？なんだって？」

「なんでもない」

「そうか…行くぞ」

「あいよ」

そう言ってオルクインは俺の隣に来て歩く、あ、弾と蘭の配置はどうしよう？忘れてた……

ここはアナトリアにある一室、そこに老人がいた……

「イタリアも良い感じに劣勢なったな」

その老人は心の中でほくそ笑む、

「国の疲弊、破壊への復興は経済発展の土壌になる、そうなれば我がイタリアの発展は目まぐるしい物になる」

老人はフフと笑った後にその部屋にあるソファーへ腰掛ける。

「あの男に言う事は信用ならんが信頼は出来そうだ……」

『千夏を差し出せば国はより一層強固になり、アイツも国に尽くすと宣言してるからまあいいだろう』

老人は目を閉じる。

「息子よ…お前の娘は私が思った以上に使える人材だぞ?」

オマケ・「久しぶりにケモ耳出そうと思う」

ここは一夏と千夏の寮の部屋、そこでは一人と一匹がいた。

「いや～何時触っても良い毛触りだ」

「い、一夏…さ、触り、過ぎ……」

「いいじゃねえか、修学旅行の時に頑張ったんだ、俺へのご褒美だ」

「だからってなんであたしが～……」

千夏は一夏にこねくり回されていた。
一夏のお願い、もといおねだりに負けて弄られていた。

「う、あう…一夏くすぐったいての…」

「あともうちょっと……付け根触っていいか？」

「そ、それだけはやめてくれ……」

「よし触ろう」

「なんで!?否定したよな!?」

「嫌よ嫌よも良いの内」

「違うからな!そう言う意味で言ったんじゃ――――あ、駄目そんな所……」

一夏はふにふにと千夏の尻尾の付け根を触り、千夏はその度にビクッと身を震わせ経たりこむ、

「だ…駄目だっても、もう……!」

「こ、これは…良い物だ!」

「よ、よくねえよぉ……」

千夏は声を出さない様に口を押さえて耐えていた。その時、

ドゴオォンッ!!!

「うおぉ!?なんだ!?」

「へぅ?」

行き成りドアをぶち破り中に入って来たのは……

「一夏あああああああああっ！！！！何さらしとるんじゃあああああああああっ！！！！！」

「げぇ！張飛！！」

「り、鈴……！」

ドアをぶち破って入って来たのはＩＳを展開した鈴だった。
千夏は神の思し召しの如く、鈴を見る、

「あたしも混ぜて！」

訂正、地獄へ誘う悪魔（メフィスト）だった。
千夏は直ぐに顔を青くしてプルプル震える、

「……解せぬ」

「は？」

「はひ？」

「千夏のケモ耳と尻尾は俺だけの物だ、誰にもやらん」

一夏の言った言葉に目をパチクリさせた後、鈴の目からハイライトが消える。

「へーそう…なら一一一一」

ジャキンと双天牙月を連結して今も尻尾を撫でている一夏へと向ける。

「欲しい物は奪うまで！」

「俺に勝てると思ってるのか？」

「代表候補生を舐めるな！」

鈴は一夏に突撃し、また一夏も右手にＩＳを展開して斬撃を逸らす、

「千夏は渡さん！」

「癒しは共有する物よ！」

部屋の中で激しい戦闘が繰り広げる中、千夏は肌蹴た制服を直してそそくさと部屋を出る。

『なんか一夏…あたしにコクってから妙に積極的になった様な……』

一夏の気持ちは分かるだがどうしてもこの後の事や自分の前世で心があやふやになってしまう千夏だった。

「……とりあえず箒の部屋に避難だな」

そう言って千夏は戦場から離脱、一夏と鈴は放っておく事にした。
長引きそうであれば千冬を呼ぶ事も検討しようと考える。

『はあ…なんか昔のほうがよかった様な気がする……』

千夏の気苦労は続く……

第六十八話「戦争に陰謀は付き物？」（後書き）

千夏「心配して損をしたぞあたしは……」

弾「てか一夏って前よりも一一一一一」

蘭「へ、変態になってしまった様な……」

作者「漢は皆狼なんです。はい」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6631s/

ＩＳサードな幼馴染？

2011年9月30日23時04分発行